

# 段上遺跡第13次発掘調査報告書

2003. 3

東大阪市教育委員会

# 段上遺跡第13次発掘調査報告書

2003. 3

東大阪市教育委員会



調査地遠景（西から）



3・4号墳出土埴輪

## 例 言

- 1 本書は、主要地方道大阪東大阪線道路改良事業に伴う段上遺跡第13次発掘調査の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、大阪府八尾土木事務所の依頼を受けて、東大阪市教育委員会文化財課が実施した。
- 3 調査にかかる費用は大阪府八尾土木事務所が負担・用意した。
- 4 現地の調査は平成13年7月30日から平成14年3月1日まで、遺物整理は平成14年4月1日から平成15年3月31日まで実施した。
- 5 調査及び整理は才原金弘・木村健明・福島正和を担当として実施した。
- 6 本書の執筆は、第1章を才原、1)の弥生時代以降の土器を横原美智子、他を木村が行った。
- 7 遺構実測図の水準高は、T.P.値を用いた。
- 8 遺構写真は木村・福島が撮影し、遺物写真は株式会社コミュニカに委託の上、撮影した。
- 9 現地の上色および土器の色調は、農林水産省農林水産技術事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』(2000年版)に準拠した。
- 10 基準杭・調査杭の打設は(有)西田測量設計に、空中写真測量は株式会社アコードにそれぞれ委託の上実施した。
- 11 現地調査および報告書作成にかかる遺物整理には、下記の方々の参加を得た。  
泊清 治郎・吉岡 彰典・松井 章子・辰巳 友邦・宮浦 和也・藤本 留美  
北野 行信・上本 洋・大畑 洋忠・西川美奈子・八田美代子・西村 慶子  
大久 知子・奥山太佳子・酒井 祐介・池西 啓子・広瀬 八朗・泉 英機  
吉田 茂・堂阪 加奈・中野 智香・中谷 染香

## 目 次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	2
1. 地理的環境	2
2. 歴史的環境	2
第3章 調査の方法	5
第4章 調査の成果	6
1. 層序	6
2. 遺構	11
1) A区の遺構	11
2) B区の遺構	34
3. 出土遺物	43
1) 土器	43
2) 埴輪	117
3) 石器	127
第5章 自然遺物	132
1. 段上遺跡第13次調査出土倒木の樹種	132
2. 貯蔵穴1出土種実類の調査結果	133
第6章 調査成果の検討	135
1. 既往の調査と周辺遺跡の概要	135
2. 段上古墳群について	142
3. 弥生時代後期の溝(溝100)について	146
4. 縄文時代貯蔵穴について	151
第7章 まとめ	154

## 挿 図 目 次

第1図 調査区位置図	1
第2図 周辺遺跡分布図	3
第3図 地区剖面図	5
第4図 断面模式図	7
第5図 南壁断面実測図(1)	8
第6図 南壁断面実測図(2)	9
第7図 西壁断面実測図	10
第8図 第1面平面実測図	11
第9図 第1面溝群分類図	12
第10図 第2面平面実測図	13
第11図 溝59~61、溝57・61断面、溝83遺物出土状況実測図	14
第12図 土坑1遺物出土状況・断面実測図	14
第13図 第3面平面実測図	15
第14図 3号墳遺物出土状況・断面実測図	16
第15図 4号墳遺物出土状況・断面実測図	17
第16図 第4面平面実測図	18

第17図	溝100・102交差状況推定復元図	19
第18図	溝100上層遺物出土状況実測図	20
第19図	溝100下層遺物出土状況・断面実測図	21
第20図	溝101・105断面、ピット22遺物出土状況・断面実測図	22
第21図	第5面平面実測図	23
第22図	溝110・114・土坑20断面実測図	24
第23図	土坑14遺物出土状況・断面実測図	24
第24図	竪穴住居跡1平・断面実測図	25
第25図	第8面平面・自然流路断面実測図	26
第26図	第9面土器集中部上層・下層遺物出土状況実測図	27
第27図	第10面河川1・2平面実測図	28
第28図	河川1断面実測図	29
第29図	第11面平面・河川3断面実測図	30
第30図	第12面平面実測図	31
第31図	貯蔵穴1出土状況・断面実測図	32
第32図	貯蔵穴2平面・断面実測図	33
第33図	土坑30遺物出土状況実測図	33
第34図	B区第1面平面実測図	35
第35図	溝3遺物出土状況・断面、溝100断面実測図	35
第36図	溝100上層遺物出土状況実測図	36
第37図	溝100下層遺物出土状況実測図	37
第38図	B区第2・第3面平面実測図	38
第39図	第12面上坑30・34、貯蔵穴1出土土器実測図	43
第40図	第12面河川4、第11面河川3出土土器実測図	44
第41図	第10面河川1出土土器実測図	46
第42図	第9面上器集中部出土土器実測図(1)	47
第43図	第9面上器集中部出土土器実測図(2)	48
第44図	第8面自然流路出土土器実測図	49
第45図	第14・15層出土土器実測図	50
第46図	第10～13層出土土器実測図	52
第47図	第7～9層、第5面出土土器実測図	54
第48図	側溝出土土器実測図	55
第49図	第5面土坑14出土土器実測図	57
第50図	第5面竪穴住居跡1出土土器実測図	59
第51図	第5面土坑3・4・17、ピット16・132、溝107・110出土土器実測図	60
第52図	第4面溝100出土土器実測図(1)	63
第53図	第4面溝100出土土器実測図(2)	65
第54図	第4面溝100出土土器実測図(3)	67
第55図	第4面溝100出土土器実測図(4)	69
第56図	第4面溝100出土土器実測図(5)	71
第57図	第4面溝100出土土器実測図(6)	73
第58図	第4面溝100出土土器実測図(7)	75
第59図	第4面溝100出土土器実測図(8)	77
第60図	第4面溝100出土土器実測図(9)	79
第61図	第4面溝100出土土器実測図(10)	81

第62図	B区溝100出土土器実測図(1)	82
第63図	B区溝100出土土器実測図(2)	83
第64図	B区溝100出土土器実測図(3)	84
第65図	B区溝100出土土器実測図(4)	85
第66図	B区溝100出土土器実測図(5)	88
第67図	第4面溝100絵画文・記号文のある土器拓影(1)	90
第68図	第4面溝100絵画文・記号文のある土器拓影(2)	91
第69図	第4面溝102出土土器実測図	93
第70図	第4面溝101・105、ビット22・31・119・129出土土器実測図	95
第71図	第3面3・4号墳周溝出土土器実測図	98
第72図	第2面上坑1、溝61出土土器実測図	100
第73図	第2面溝83出土土器実測図	103
第74図	第2面溝57・75・83・89出土土器実測図	105
第75図	第1面上出土土器実測図	107
第76図	第2・3層出土土器実測図	108
第77図	第4～6層出土土器実測図	110
第78図	攪乱出土土器実測図	111
第79図	側溝・攪乱出土土器実測図(1)	113
第80図	側溝・攪乱出土土器実測図(2)	115
第81図	B区側溝・攪乱出土土器実測図	116
第82図	3号墳出土埴輪実測図(1)	118
第83図	3号墳出土埴輪実測図(2)	119
第84図	3号墳出土埴輪実測図(3)	120
第85図	4号墳出土埴輪実測図	122
第86図	溝83出土埴輪実測図	123
第87図	溝83他出土埴輪実測図	124
第88図	包含層出土埴輪実測図	125
第89図	縄文時代石器実測図	127
第90図	弥生時代石器実測図(1)	128
第91図	弥生時代石器実測図(2)	130
第92図	古墳時代以降石器実測図	131
第93図	段上遺跡遺構変遷図	136
第94図	段上遺跡周辺調査地点図	137
第95図	周辺遺跡調査地点図	138
第96図	段上遺跡検出古墳(1～4号墳)位置関係図	142
第97図	古墳関係須恵器集成図	143
第98図	埴輪分布状況図	144
第99図	円筒埴輪口縁分類図	144
第100図	溝100全体図	147
第101図	溝100復元想定図	148
第102図	非牛駒生産産胎土の土器集成図	149
第103図	縄文時代検出遺構位置図	151

## 表 目 次

第1表	遺構観察表	39~42
第2表	崧種同定表	132
第3表	検出された植物一覧	133
第4表	種実同定結果	134
第5表	周辺遺跡の調査歴	139~141
第6表	埴輪口縁形態の割合	145
第7表	溝100出土土器種類組成割合	150
第8表	溝100出土土器種別割合	150
第9表	貯蔵穴1種子類出土層位表	152
第10表	大阪府下検出貯蔵穴一覧	152

## 図 版 目 次

図版1	遺構	1. 第1面全景(西から)
		2. 第2面全景(西から)
図版2	遺構	1. 第2面上坑1遺物出土状況(東から)
		2. 第2面溝83内遺物出土状況(北から)
		3. 第2面溝83完掘状況(西から)
図版3	遺構	1. 第3面全景(西から)
		2. 第3面4号埴輪輸出状況(南から)
		3. 第3面4号埴輪周溝断面(西から)
図版4	遺構	1. 第3面4号埴輪主体部(東から)
		2. 第3面3号埴輪輸出状況(南から)
		3. 第3面3号埴輪輸出状況(北から)
		4. 第3面3号埴輪輸出状況(西から)
		5. 第3面3号埴輪輸出状況(西から)
		6. 第3面3号埴輪輸出状況(南から)
		7. 第3層須恵器出土状況(南から)
図版5	遺構	1. 第4面全景(真上から)
		2. 第4面ビット22遺物出土状況(東から)
		3. 第4面溝100断面(東から)
図版6	遺構	1. 第4面溝100上層遺物出土状況(南から)
		2. 第4面溝100中層遺物出土状況(西から)
		3. 第4面溝100中層遺物出土状況(西から)
図版7	遺構	1. 第4面溝100上層遺物出土状況(南から)
		2. 第4面溝100上層遺物出土状況(南から)
		3. 第4面溝100上層遺物出土状況(東から)
		4. 第4面溝100中層遺物出土状況(南から)
		5. 第4面溝100中層遺物出土状況(東から)
図版8	遺構	1. 第5面全景(真上から)
		2. 第5面土坑14遺物出土状況(西から)
		3. 第5面土坑14断面(西から)
		4. 第5面上坑20断面(西から)
		5. 第5面溝110断面(北から)

- 図版9 遺構 1. 第5面竪穴住居跡1完掘状況(西から)  
2. 第8面自然流路完掘状況(南から)  
3. 第8面自然流路断面(南から)  
4. 第9面土器集中部上層(北から)  
5. 第9面土器集中部下層(南から)
- 図版10 遺構 1. 第10面河川1完掘状況(南から)  
2. 第10面河川1南壁(北から)  
3. 第10面河川1北壁(南から)
- 図版11 遺構 1. 第11面倒木検出状況(東から・12面での状況)  
2. 第12面全景(西から)  
3. 第12面土坑群・貯蔵穴2検出状況(北から)
- 図版12 遺構 1. 第12面貯蔵穴1底面ドングリ出土状況(北から)  
2. 第12面貯蔵穴1完掘状況(北から)  
3. 第12面貯蔵穴1・河川5検出状況(南から)  
4. 第12面貯蔵穴1断面(北から)  
5. 第12面貯蔵穴2断面(西から)
- 図版13 遺構 1. 西壁断面 1~5層  
2. 西壁断面 6~11層  
3. 西壁断面 11~13層
- 図版14 遺構 1. 南壁断面 11~13層  
2. 南壁断面 河川2部分  
3. 南壁断面 河川4部分
- 図版15 遺構 1. B区北側第1面東半全景(東から)  
2. B区北側第1面西半全景(西から)  
3. B区第1面溝100上層遺物出土状況(北から)
- 図版16 遺構 1. B区第1面溝100上層遺物出土状況(北から)  
2. B区第1面溝100中層遺物出土状況(東から)  
3. B区第1面溝100中層遺物出土状況(北から)
- 図版17 遺構) 1. B区第1面溝100断面(東から)  
2. B区第1面溝3遺物出土状況(東から)  
3. B区第1面溝3断面(東から)
- 図版18 遺構 1. B区北側第2面東半全景(東から)  
2. B区北側第2面西半全景(西から)  
3. B区北側第3面東半全景(東から)
- 図版19 遺構 1. B区南側第1面全景(北から)  
2. B区南側第2面全景(北から)  
3. B区南側第3面全景(北から)
- 図版20 遺物 第12面河川4出土縄文土器 深鉢、第9面土器集中部出土縄文土器 深鉢・浅鉢
- 図版21 遺物 1. 第12面土坑30出土縄文土器 深鉢  
2. 第12面貯蔵穴1出土縄文土器 浅鉢・深鉢、土坑34出土縄文土器 深鉢
- 図版22 遺物 1. 第12面河川4出土縄文土器 深鉢  
2. 第12面河川4出土縄文土器 深鉢・浅鉢
- 図版23 遺物 1. 第11面河川3出土縄文土器 深鉢、第10面河川1出土縄文土器 深鉢  
2. 第10面河川1出土縄文土器 深鉢
- 図版24 遺物 1. 第9面土器集中部出土縄文土器 深鉢

		2. 第9面土器集中部出土縄文土器 深鉢
図版25	遺物	1. 第9面土器集中部出土縄文土器 深鉢 2. 第9面土器集中部出土縄文土器 深鉢・浅鉢
図版26	遺物	1. 第9面土器集中部出土縄文土器 底部 2. 第9面上土器集中部出土縄文土器 深鉢・浅鉢、第8面自然流路出土縄文土器 深鉢
図版27	遺物	1. 第15層出土縄文土器 深鉢・浅鉢 2. 第15層出土縄文土器 深鉢・浅鉢
図版28	遺物	1. 第15層出土縄文土器 深鉢 2. 第14層出土縄文土器 浅鉢・底部・注口土器
図版29	遺物	1. 第12層出土縄文土器 深鉢 2. 第12層出土縄文土器 深鉢・ミニチュア土器・底部
図版30	遺物	1. 第13層出土縄文土器 深鉢、第11層出土縄文土器 深鉢、第10層出土縄文土器 深鉢・浅鉢 2. 第9層出土縄文土器 深鉢・底部、第8層出土縄文土器 深鉢・底部、第5面出土縄文土器 深鉢
図版31	遺物	1. 側溝出土縄文土器 深鉢 2. 側溝出土縄文土器 深鉢・底部
図版32	遺物	第5面土坑14出土弥生土器 壺、竪穴住居跡1出土弥生土器 高坏、溝110出土弥生土器 高坏
図版33	遺物	1. 第5面土坑14出土弥生土器 壺・甕底部・甕蓋 2. 第5面土坑14出土弥生土器 壺・甕
図版34	遺物	1. 第5面竪穴住居跡1出土弥生土器 壺・鉢・甕底部・壺底部 2. 第5面土坑20出土弥生土器 壺・甕・甕底部
図版35	遺物	1. 第5面土坑4出土弥生土器 壺・甕 2. 第5面土坑3出土弥生土器 壺、土坑17出土弥生土器 甕、P132出土弥生土器 鉢、溝107出土弥生土器 甕、溝110出土弥生土器 甕底部
図版36	遺物	第4面溝100出土弥生土器 広口壺
図版37	遺物	1. 第4面溝100出土弥生土器 広口壺 2. 第4面溝100出土弥生土器 広口壺
図版38	遺物	1. 第4面溝100出土弥生土器 広口壺 2. 第4面溝100出土弥生土器 長頸壺
図版39	遺物	第4面溝100出土弥生土器 長頸壺
図版40	遺物	第4面溝100出土弥生土器 長頸壺
図版41	遺物	第4面溝100出土弥生土器 長頸壺・壺体部
図版42	遺物	1. 第4面溝100出土弥生土器 広口壺・台付短頸壺 2. 第4面溝100出土弥生土器 短頸壺
図版43	遺物	1. 第4面溝100出土弥生土器 広口壺・壺体部・甕蓋・壺蓋 2. 第4面溝100出土弥生土器 小型甕・中小型甕
図版44	遺物	第4面溝100出土弥生土器 小型甕・中小型甕
図版45	遺物	第4面溝100出土弥生土器 小型甕・中小型甕
図版46	遺物	1. 第4面溝100出土弥生土器 中小型甕 2. 第4面溝100出土弥生土器 小型甕・中小型甕
図版47	遺物	1. 第4面溝100出土弥生土器 小型甕・中小型甕 2. 第4面溝100出土弥生土器 小型甕・中小型甕

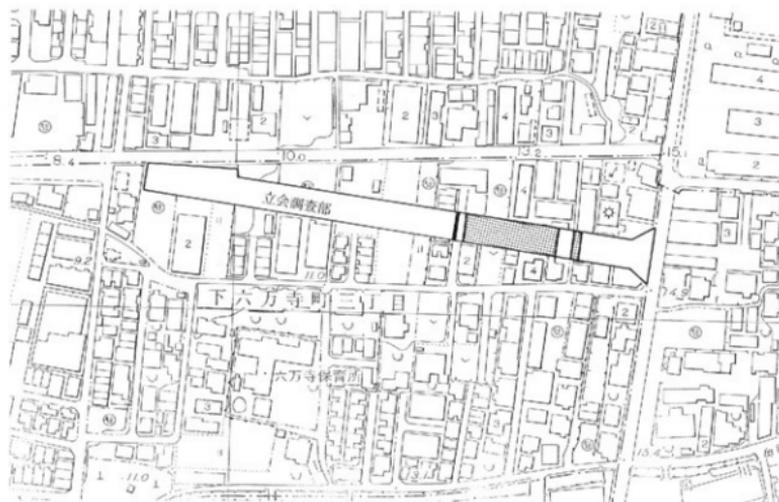
- 図版48 遺物 1. 第4面溝100出土弥生土器 中小型甕・大型甕  
2. 第4面溝100出土弥生土器 小型甕・中小型甕
- 図版49 遺物 第4面溝100出土弥生土器 高坏・器台・ミニチュア高坏・高坏脚台
- 図版50 遺物 1. 第4面溝100出土弥生土器 高坏  
2. 第4面溝100出土弥生土器 高坏
- 図版51 遺物 1. 第4面溝100出土弥生土器 高坏  
2. 第4面溝100出土弥生土器 器台
- 図版52 遺物 1. 第4面溝100出土弥生土器 高坏脚台  
2. 第4面溝100出土弥生土器 高坏脚台
- 図版53 遺物 第4面溝100出土弥生土器 鉢・ミニチュア鉢
- 図版54 遺物 第4面溝100出土弥生土器 鉢
- 図版55 遺物 第4面溝100出土弥生土器 鉢・ミニチュア鉢
- 図版56 遺物 1. 第4面溝100出土弥生土器 鉢  
2. 第4面溝100出土弥生土器 鉢・用途不明土器
- 図版57 遺物 1. 第4面溝100出土弥生土器 広口壺  
2. 第4面溝100出土弥生土器 広口壺
- 図版58 遺物 第4面溝100出土弥生土器 広口壺・長頸壺
- 図版59 遺物 第4面溝100出土弥生土器 長頸壺
- 図版60 遺物 1. 第4面溝100出土弥生土器 広口壺・長頸壺・短頸壺  
2. 第4面溝100出土弥生土器 小型甕・中型甕
- 図版61 遺物 1. 第4面溝100出土弥生土器 小型甕・中型甕  
2. B区溝100出土弥生土器 鉢・器台
- 図版62 遺物 B区溝100出土弥生土器 中型甕
- 図版63 遺物 B区溝100出土弥生土器 小型甕・中型甕・鉢
- 図版64 遺物 B区溝100出土弥生土器 器台・高坏・高坏脚台
- 図版65 遺物 1. B区溝100出土弥生土器 器台・高坏  
2. B区溝100出土弥生土器 高坏・高坏脚台
- 図版66 遺物 第4面溝100出土弥生土器 記号文
- 図版67 遺物 第4面溝100出土弥生土器 記号文
- 図版68 遺物 第4面溝102出土土師器 二重口縁壺・壺・弥生土器 広口壺・短頸壺
- 図版69 遺物 1. 第4面溝102出土土師器 甕・壺  
2. 第4面溝102出土弥生土器 壺・鉢・甕底部
- 図版70 遺物 1. 第4面溝102出土弥生土器 高坏・器台  
2. 第4面溝105出土弥生土器 広口壺・器台・高坏・壺蓋
- 図版71 遺物 1. 第4面溝105出土弥生土器 中型甕  
2. 第4面溝105出土弥生土器 壺底部・甕底部
- 図版72 遺物 1. 第4面溝101出土弥生土器 広口壺・小型甕・中型甕  
2. 第4面溝101出土弥生土器 器台・脚台・壺蓋・甕底部
- 図版73 遺物 1. 第4面ビット22・119・出土弥生土器 広口壺・鉢・第3面3号墳周溝出土須惠器 器台  
2. 第4面ビット31・119・129出土弥生土器 長頸壺・甕底部
- 図版74 遺物 1. 第3面3号墳周溝出土弥生土器 広口壺・中型甕・大型甕・鉢  
2. 第3面4号墳周溝出土弥生土器 大型甕・甕底部
- 図版75 遺物 1. 第2面土坑1出土土師器 杯・椀

2. 第2面土坑1出土土師器 甕・製塩土器・把手、須惠器 杯身
- 図版76 遺物 1. 第2面溝61出土土師器 杯・甕・製塩土器  
2. 第2面溝61出土須惠器 杯蓋・杯身・壺底部
- 図版77 遺物 1. 第2面溝61出土弥生土器 広口壺・中小型甕・高杯  
2. 第2面溝83出土土師器 杯身・皿
- 図版78 遺物 1. 第2面溝83出土土師器 甕・鉢・把手・壺・羽釜  
2. 第2面溝83出土須惠器 杯蓋・杯身
- 図版79 遺物 1. 第2面溝83出土須惠器 甕・壺  
2. 第2面溝83出土須惠器 杯蓋・高杯脚部・台付甕
- 図版80 遺物 1. 第2面溝83出土弥生土器 広口壺・直口壺・短頸壺・鉢・小型甕・中型甕・大型甕・器台  
2. 第2面溝89出土土師器 杯・甕・羽釜・把手
- 図版81 遺物 1. 第2面溝89出土須惠器 杯蓋・杯身・壺頸部  
2. 第2面溝75出土弥生土器 広口壺・器台・鉢・土師器 羽釜
- 図版82 遺物 1. 第2面溝57出土土師器 皿・杯身・甕・羽釜・把手、須惠器 杯身  
2. 第1面出土瓦器 椀、溝10出土瓦器 椀、溝17出土須惠器 握鉢、溝24出土土師器 皿、溝43出土瓦器 椀、第2層出土瓦器 椀、精査時出土瓦器 椀・皿、磁器 青磁皿
- 図版83 遺物 1. 第2層出土土師器 椀・把手・甕、須惠器 杯蓋・杯身、弥生土器 鉢  
2. 第3層土師器 甕・壺、須惠器 壺・高杯
- 図版84 遺物 第2面土坑1出土土師器 杯、溝83出土須惠器 杯身、第3層出土須惠器 提瓶・壺、第6層出土弥生土器 鉢、壺底部、攪乱出土弥生土器 広口壺
- 図版85 遺物 1. 第3層弥生土器 器台・中型甕・大型甕・広口壺  
2. 第5層出土土師器 甕、紡錘車、弥生土器 高杯脚台・広口壺・中型甕
- 図版86 遺物 1. 第4層出土須惠器 高杯脚台、弥生土器 把手付鉢・広口壺  
2. 第6層出土弥生土器 中型甕・壺底部・甕底部
- 図版87 遺物 1. 側溝・攪乱出土弥生土器 壺蓋・甕蓋  
2. 攪乱出土弥生土器 甕・ミニチュア高杯
- 図版88 遺物 1. 側溝・攪乱出土弥生土器 広口壺  
2. 側溝・攪乱出土弥生土器 中型甕
- 図版89 遺物 1. 側溝・攪乱出土弥生土器 中型甕・大型甕  
2. 側溝・攪乱出土弥生土器 鉢
- 図版90 遺物 1. 側溝・攪乱出土弥生土器 器台・甕底部  
2. 側溝・攪乱出土弥生土器 甕底部
- 図版91 遺物 1. 側溝・攪乱出土土師器 杯・皿・甕・羽釜  
2. 側溝・攪乱出土製塩土器・糶・土錘
- 図版92 遺物 1. 側溝・攪乱出土須惠器 杯蓋・杯身  
2. 側溝・攪乱出土須惠器 壺底部
- 図版93 遺物 1. B区側溝・攪乱出土弥生土器 壺・甕  
2. B区側溝・攪乱出土弥生土器 壺・甕・高杯
- 図版94 遺物 3号墳出土埴輪 円筒埴輪
- 図版95 遺物 3号墳出土埴輪 円筒埴輪・朝顔型埴輪
- 図版96 遺物 4号墳出土埴輪 円筒埴輪
- 図版97 遺物 3・4号墳出土埴輪 透かし孔
- 図版98 遺物 1. 3号墳出土埴輪 円筒埴輪

2. 3号墳出土埴輪 朝顔型埴輪
- 図版99 遺物 1. 溝83出土埴輪 円筒埴輪・朝顔型埴輪  
2. 溝83出土埴輪 円筒埴輪
- 図版100 遺物 1. 溝83出土埴輪 円筒埴輪  
2. 溝83他出土埴輪 形象埴輪
- 図版101 遺物 1. その他溝出土埴輪 円筒埴輪  
2. 包含層出土埴輪 円筒埴輪
- 図版102 遺物 1. 包含層出土埴輪 円筒埴輪・朝顔型埴輪  
2. 包含層出土埴輪 円筒埴輪・朝顔型埴輪
- 図版103 遺物 1. 縄文時代石器 石皿・石斧・剥片  
2. 同裏面
- 図版104 遺物 1. 弥生時代石器 石鏃・石錐  
2. 同裏面
- 図版105 遺物 1. 弥生時代石器 石槍・石小刀  
2. 同裏面
- 図版106 遺物 1. 弥生時代石器 剥片  
2. 同裏面
- 図版107 遺物 1. 弥生時代石器 石核  
2. 同裏面
- 図版108 遺物 1. 弥生時代石器 石斧・石庖丁・大型石庖丁  
2. 同裏面
- 図版109 遺物 弥生～古墳時代以降石器 不明石器・砥石・紡錘車
- 図版110 遺物 樹種顕微鏡写真・種実

## 第1章 調査に至る経過

国道170号線(外環状線)六万寺交差点東側から府道枚方富田林泉佐野線へ至る間で新道路の主要地方道大阪東大阪線建設工事が計画された。この段階で、大阪府教育委員会により路線内で試掘調査が実施され縄文～古墳時代の遺物が確認された。工事予定地は周知の段上遺跡の範囲に当たり、大阪府八尾土木事務所と東大阪市教育委員会とは取扱いの協議を重ねた。先の試掘では湧水が激しく現地地表下-1.5m以下については未調査であった。このため以深部の遺物包含状態についてデータを得るため、平成6年2月～3月に(財)東大阪市文化財協会の担当で再度試掘調査が実施された(第2次調査)。その結果、トレンチの深奥部で縄文時代の遺構が検出され、現地地表下-4～5mまでが調査の対象とされた。発掘調査は路線の西側から進められ、平成6年8月～平成7年3月まで第3次調査、平成7年9月～平成8年2月まで第4次調査が(財)東大阪市文化財協会の担当で実施された。発掘調査は東側へ進む予定であったが、大阪府から用地買収の事業を優先する旨の方針が出され、その後発掘調査は一時中断した。平成12年5月、用地買収が終了し、東側の未調査部分について埋蔵文化財発掘の通知が大阪府八尾土木事務所から提出された。発掘調査の実施については合意に達していたが、路線の東端近くでは地山層が地表下浅く検出されることが予想された。そこで、調査の掘削深度のデータを得る目的で、平成12年6月に試掘調査を東大阪市教育委員会の担当によって4ヶ所の地点で実施した。調査の結果、未調査部分のうち東側5分の3ほどが地表下-1.2mまで(浅掘り部)、西側5分の2ほどが地表下-4.5mまで(深掘り部)の調査掘削が必要であると結論を得た。発掘調査は2ヶ年の予定で行なわれることになり、平成12年10月～13年3月に第12次調査が実施された。なお、第12次調査地内には里道があり電柱他の支障物の撤去に時間を費やすことが判明したため、里道部分は翌年度に調査を行なうことになった。本年度の第13次調査は西側部と里道部であり、平成13年7月30日から平成14年3月1日まで実施した。



第1図 調査区位置図

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 1. 地理的環境

東大阪市は大阪府の中ほどに位置し、東は生駒山地を挟んで奈良県生駒市、西は大阪市、南は八尾市、北は大東市と接している。大阪府と奈良県の県境であり市域の東端である生駒山地は大阪府側の傾斜がきつく、奈良県側は比較的緩やかである。山地の最高峰である生駒山は標高642.3mを測る。生駒山地を水源とする小河川は急傾斜を一気に下るため流れが速い。縄文時代は生駒山地西麓には海が広がっていたが、現在では扇状地が広がっている。これは小河川が海に流れ込む時に起こった急速な堆積作用の結果である。現在はいずれの小河川も河内平野の東端を南北に流れる恩智川に流れ込んでいる。恩智川は北流して寝屋川と合流し、更に淀川を經由して大阪湾に流れ込む。

段上遺跡は生駒山地を水源とする小河川のうち鳴川によって形成された扇状地上に位置している。現在の標高はT.P. 8～15mである。

### 2. 歴史的環境

周辺は人が活動するのに適していたようで多くの遺跡が存在している。以下、段上遺跡周辺を中心として概観しておく。特に断らない限りは東大阪市内に所在する遺跡である。

**旧石器時代** 千手寺山遺跡、芝坊主山遺跡、鬼虎川遺跡などからナイフ形石器、翼状剥片などの石器が出土している。遺構は検出されていない。

**縄文時代** 草創期の有舌尖頭器が草香山遺跡で出土し、早期には神並遺跡などで押型文土器が出土している。段上遺跡周辺では後期の竪穴住居跡や配石遺構などが検出された縄手遺跡、晩期の竪穴住居跡が検出され土偶などの土製品が多量に出土した馬場川遺跡などがある。その他に日下遺跡では後期の竪穴住居跡や晩期の環状墓地及び貝塚などが検出され、墓からは人骨も出土している。鬼塚遺跡では、晩期の再葬墓が検出され、また縄文時代晩期末の土器と弥生時代前期の土器が共存して出土している。

当時の環境の変遷を示すものとしては鬼虎川遺跡、榎附遺跡で検出された海蝕崖や日下遺跡宮ノ下遺跡、森の宮遺跡(大阪市)などに形成された貝塚などがある。

**弥生時代** 前期は山智遺跡、若江北遺跡、中垣内遺跡(大東市・東大阪市)、鬼塚遺跡などで集落が検出されているが、段上遺跡周辺では希薄である。

中期は鬼虎川遺跡、西ノ辻遺跡、鬼塚遺跡、瓜生堂遺跡、亀井遺跡(八尾市)などで大規模な集落が形成されている。従来、段上遺跡周辺は分布の希薄な地域であったが、第3・4・13次調査では住居跡が検出され、規模は不明ながら集落の存在が確認された。

後期は中期の大規模集落が縮小していく。一方段上遺跡とそれに接する各遺跡内では土器が出土する地点が多数確認されている。特に第12・13次で検出した溝(溝100)からは多量の土器が出土している。

中期末～後期にかけては西日本一帯の丘陵や山腹にいわゆる高地性集落がつけられており、生駒山地では中期末の山畑遺跡、後期の岩滝山遺跡などが存在する。

**古墳時代** 古墳時代初頭には平野部では加美遺跡(大阪市)・久宝寺遺跡(東大阪市・八尾市)中田遺跡(八尾市)などの大規模な集落が形成されている。段上遺跡周辺では馬場川遺跡、北島池遺跡、五合田遺跡などで遺物が確認されている。中期には山麓から平野部にかけての場所に古墳が築造されていた。これらの古墳の多くは現在では墳丘を削平されるなどして地表にその姿を確認することはできなくなっている。しかし近年の発掘調査によってその存在が確認されてきている。縄手遺跡で検出された



- |              |             |              |            |
|--------------|-------------|--------------|------------|
| 1. 甘下遺跡      | 31. 慈光寺跡    | 61. 龜山遺跡     | 91. 匠師庵寺跡跡 |
| 2. 石塚寺跡・馬海遺跡 | 32. 北寺跡・慈覺寺 | 62. 北畠教遺跡    | 92. 丹波北道跡  |
| 3. 芝ノ丘遺跡     | 33. 神樂寺跡    | 63. 海船川遺跡    | 93. 上小阪遺跡  |
| 4. 玉笠寺山遺跡    | 34. 芝雲弁遺跡群  | 64. 口毛田遺跡    | 94. 洲上小阪遺跡 |
| 5. 芝坊土庫遺跡    | 35. 都保遺跡    | 65. 百代遺跡     | 95. 小阪江邊跡  |
| 6. 新泉遺跡      | 36. 理直遺跡    | 66. 花輪冥道跡    | 96. 海樂庵寺跡跡 |
| 7. 北島遺跡      | 37. 河内今井    | 67. 高島・福万寺遺跡 | 97. 山吹遺跡   |
| 8. 辻子谷遺跡     | 38. 水尾氏館跡   | 68. 西の山遺跡    | 98. 安永東遺跡  |
| 9. 伏通寺遺跡     | 39. 五葉山古墳群  | 69. 飛音寺遺跡    | 99. 天竺遺跡   |
| 10. 極楽遺跡     | 40. 客坊山遺跡群  | 70. 花洲山遺跡    | 100. 徳覺遺跡  |
| 11. 千手寺山遺跡   | 41. 山邊古墳群   | 71. 染谷寺遺跡    | 101. 宗可遺跡  |
| 12. 蓮子寺古墳群   | 42. 山崎遺跡    | 72. 大竹尚遺跡    | 102. 雲孫遺跡  |
| 13. 河山遺跡     | 43. 市村遺跡    | 73. 心合町古墳    | 103. 華嚴寺遺跡 |
| 14. 興法寺跡     | 44. 壺立遺跡    | 74. 大竹遺跡     | 104. 八尾寺内町 |
| 15. 三輪尾山遺跡   | 45. 花柳山古墳群  | 75. 太陽月遺跡    | 105. 久安寺遺跡 |
| 16. 白水千坊     | 46. 五葉山古墳群  | 76. 水越遺跡     |            |
| 17. 神皇古墳群    | 47. 住牛御金屋跡  | 77. 萬安古墳群    |            |
| 18. 正興寺山遺跡   | 48. 若山遺跡    | 78. 比高野山遺跡   |            |
| 19. 岩宮古遺跡    | 49. 淨土寺古剎群  | 79. 輪崎跡與倉街道  |            |
| 20. 神皇遺跡     | 50. 淨土寺群    | 80. 吉田遺跡     |            |
| 21. 船占墳群     | 51. 板野古墳群   | 81. 飯江寺跡     |            |
| 22. 西ノ辻遺跡    | 52. 平泉遺跡    | 82. 船場遺跡     |            |
| 23. 藤田寺跡     | 53. 貝毛遺跡    | 83. 丸藤遺跡     |            |
| 24. 竜宮遺跡     | 54. 萩山古墳    | 84. 小津遺跡     |            |
| 25. 東澤川遺跡    | 55. 上六万寺遺跡  | 85. 藤家遺跡     |            |
| 26. 水北遺跡     | 56. 綱手遺跡    | 86. 雲輪破跡     |            |
| 27. 藤田山古墳群   | 57. 五百田遺跡   | 87. 西宮田遺跡    |            |
| 28. 乃木入山古墳群  | 58. 陵土遺跡    | 88. 若松遺跡     |            |
| 29. 藤原寺古墳群   | 59. 北船場遺跡   | 89. 長生堂遺跡    |            |
| 30. 神降御祭所遺跡  | 60. 下六万寺遺跡  | 90. 赤江遺跡     |            |

第2圖 周辺遺跡分布圖

市内最古の古墳である4世紀末のえのき塚古墳を初めとして植附遺跡、皿池遺跡、半堂遺跡、段上遺跡などで削平された古墳の存在が確認されている。また、朝鮮半島から移動してきた人々に関わりと考えられる韓式土器が市内各所から出土している。

山畑古墳群では竪穴住居跡が確認され(第20次)、池島・福万寺遺跡では滑石製玉類の生産を行っていた集落が営まれていた。下六万寺遺跡では滑石製模造品が多数採集されている。

後期には山腹に山畑古墳群・花草山古墳群・五里山古墳群(東大阪市)、高安古墳群(八尾市)など多くの古墳群が築造された。山畑古墳群では副葬品として納められた馬具が多く出土しており、馬を飼育していた馬飼部を率いる百済系の渡来氏族(河内首)によって築造されたと考えられている。

古代 段上遺跡の東端には河内国を縦貫する唯一の南北道である東高野街道(現在の旧大阪外環状線)が通っている。街道沿いに位置する市尻遺跡では奈良時代の側溝を持つ南北道路が検出され、前身となる道路は奈良時代には存在したと考えられている。

東大阪市は河内国の中でもいわゆる中河内に位置するが、「延喜式」によると若江・河内・高安・大黒・渋川・志紀の6郡によって構成される。市域の東部は河内郡に属し、英多・新居・櫻井・大宅・豊浦・額田・大戸の7郷からなっていた。段上遺跡周辺は櫻井郷に属するものと思われる。

西ノ辻遺跡や鬼塚遺跡では集落が検出されており、墨書土器なども出土している。またこの時期には各地で寺院が建立されるが、周辺では河内寺、法通寺、額田寺、石凝寺などが建立されている。

中世 西ノ辻遺跡、植附遺跡、水走遺跡、若江遺跡、若江北遺跡などに集落が存在したことが確認されている。水走遺跡は五条町に館を構えていた中河内の有力土豪であった水走氏によって開発されその所領となっていたことが『水走文書』に見える。客坊庵寺は平安時代後期に創建された寺で軒丸瓦に文字を刻んだものが出土しており、和泉の瓦工人の名前と年号が刻まれている。周辺は応仁の乱の河内での戦場となったようで、興福寺大乗院の記録である『大乗院寺社雑事記』に客坊城や往生院城などが見える。段上遺跡においては集落に伴うような遺構は見つかっておらず、主に耕作地として使われていたようである。若江遺跡は若江城の所在した地点であるが、若江城は14世紀末に河内国守護所として畠山氏によって築かれたもので、のち三好義隆が城主として入ったが天正元年(1573)に織田信長に滅ぼされ、天正8年(1580)まで大坂本願寺攻めに使用された後、廃城となっている。

近世 近世の調査事例は少なく、中世から一帯を支配していた水走氏の居館跡である水走氏館跡で庭園などの遺構が検出され、若江遺跡では下水道事業に伴って旧若江村内の調査が行われている。また鬼虎川遺跡では掘り上げ田の調査が行われている。

#### 参考文献

- 枚岡市役所 1965.3 『枚岡市史 第二巻 別編』
- 枚岡市役所 1966.3 『枚岡市史 第三巻 史料編(一)』
- 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1987.3 『河内平野遺跡群の動態1』
- 東大阪市教育委員会 2001.3 『東大阪市の古墳(改訂版)』わが街再発見』

### 第3章 調査の方法

今回対象となる調査区は東西36m、南北12mの調査区及び、平成12年度(以下12次調査)に地下埋設物等の関係で未調査であった早道部分(東西幅5.5m)であり、総面積は465㎡である。

調査においては西側の調査区をA区、東側の調査区をB区と呼称した。

地区別は国土座標軸(第VI座標系)に基づいて作成した5m四方の地区割を使用し(第3図)、出土した遺物の取り上げは基本的にこの地区割りを基に行っている。また12次調査において検出され、今回続きが検出された溝100の遺物出土状況平面図作成及び取り上げには基本となる5m区画内を1m区画に細分したものをを使用した(第3図左側)。ただしB区では調査区が狭いこと後に記すように3カ所に分断されたことから地区割りではなく分断された調査区ごとに取り上げている。

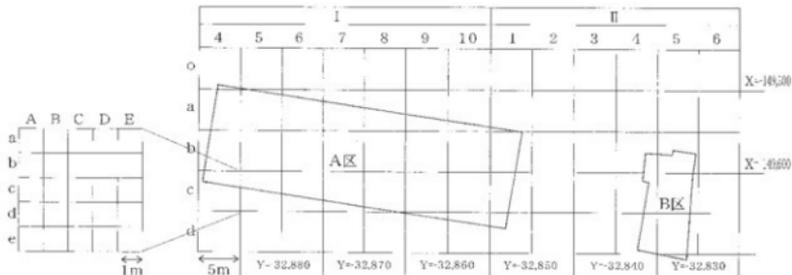
A区の調査にあたっては周囲が住宅地であること、現地表面から4.5mの深さまで調査することから、調査区の周囲に土留めの鋼矢板をめぐらした。盛土および旧耕土を機械で掘削し、それ以下は人力で層位ごとに掘削した。また鋼矢板の保持のため人力掘削途中で鉄骨切梁を2段設置した。

遺構の平面実測は平板測量とラジコンヘリによる空中写真測量とを行い1/20、1/50、1/100のスケールで図化を行った。

B区の調査は地下埋設物及び電柱の移設の後に行った。現地表下1.5mまでの掘削であったので鋼矢板は打設していない。またA区と併行して調査を行ったので、A区の掘削土を場外に搬出する通路を確保するために南北に分割し、北側から先に調査を行った。更にB区内に存在する下水管およびガス管を移設することができなかったため、北側は2カ所に分断された。

A区とB区の遺構番号は通し番号にすると煩雑になるおそれがあるため、明らかに同一遺構である溝100以外は新たに1番から振っている。

調査途中で第4次調査地との境界になっている道路が電線埋設工事によって、長さ15m、幅0.8m、深さ1.8mに渡って掘削されることとなったので、それに伴う立会調査(計3日間)も合わせて行っている。遺構は確認することはできなかったが埴輪、須恵器、石器などの遺物が出土している。



第3図 地区割図

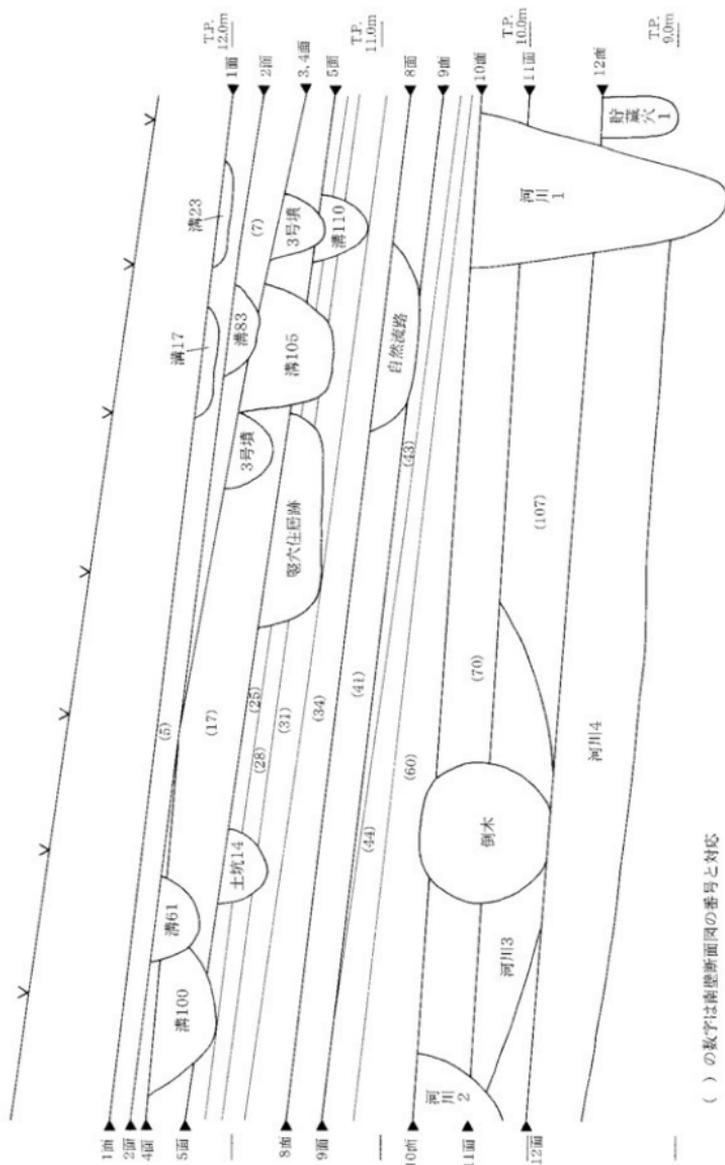
## 第4章 調査の成果

### 1. 層序

調査地は東から西へと緩やかに傾斜する地形である。そのため上層の堆積状況もそれに沿っている。また層の厚さは東が薄く西に向かって厚くなっていく。遺構面との対応関係は第5面までは第1層の下が第1面、第2層の下が第2面・・・というように機械的に層名をつけている。断面図では第4層が抜けているが、これは壁面が崩落したためと第3面と第4面が実際にはほぼ同一レベルでの検出となったためである。第5面以下では逆に土質が変化しても遺構面としては認識できなかった所もあるで而と層との番号に対応関係は存在しなくなっている。また面の番号においても報告書作成段階で内容を検討した結果、第6・7面は第5面に合成したため欠番となっている。

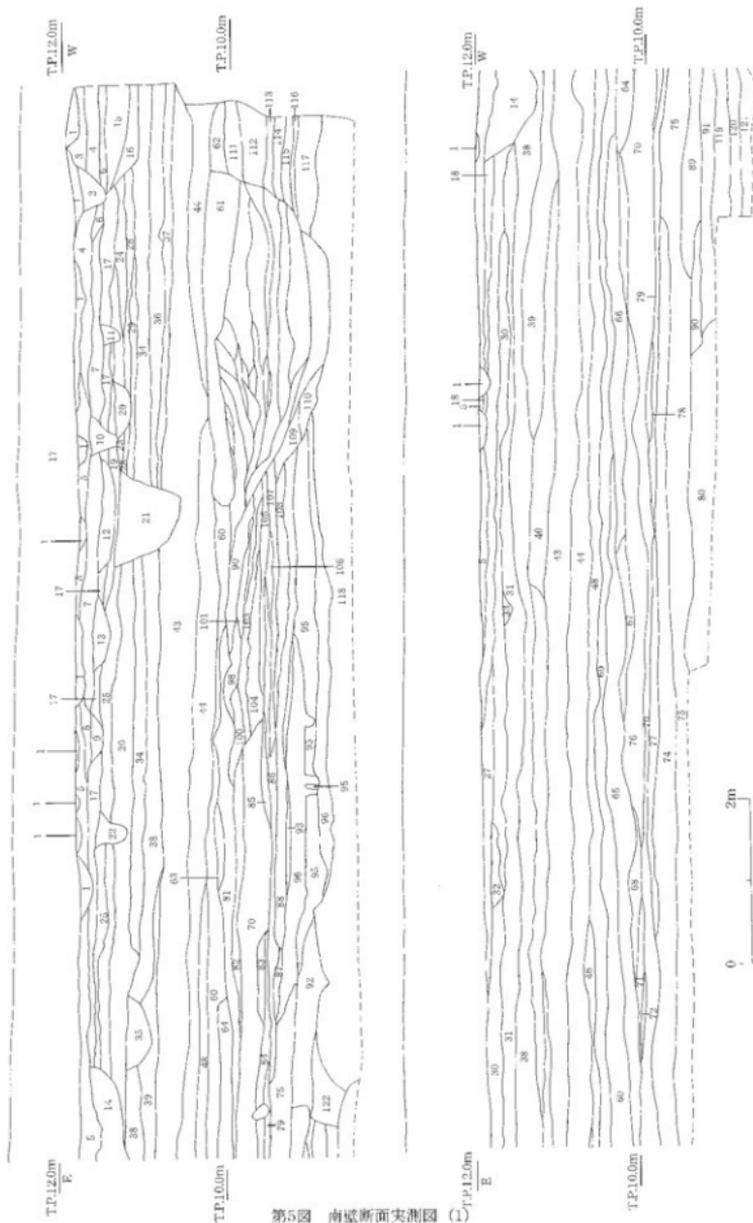
以下の第1層や第2層といった表現は断面図（第5～7図）の土色注記部分に記した層名と共通するものである。図中の番号は注記と対応させるための番号であり層名ではないことをこたわっておく。また層の厚さは西壁での計測であり基本的に一番分厚い部分での計測値である

- 第1層 現代の盛土および耕土層であり、機械掘削で除去した。機械掘削終了後の面を精査して検出した面が第1面である。層厚およそ70cm。
- 第2層 第2面上層。黄灰色シルト主体。層厚10～20cm。弥生時代中期～古代の遺物を含む。
- 第3層 第3面上層であるが、調査区の西半分のみが存在する。下而から古墳を検出した。弥生時代中期～古墳時代後期の遺物を含む。黄灰色シルト主体。層厚10～20cm。
- 第4層 第4面上層であるが上記のとおり図面上には存在していない。弥生時代中期～古墳時代前期の遺物を含む。
- 第5層 第5面上層。灰黄色シルト主体でやしまりの悪い層である。弥生時代中期の遺物を含む。層厚20cm。
- 第6層 シルト混じりの粗粒砂。層厚10～15cm。6面・7層には遺物はほとんど含まれていない。
- 第7層 灰黄褐色シルト層主体。縄文時代晩期の上器を極少量含む。層厚10～15cm。
- 第8層 灰色～黒褐色シルト層主体。縄文時代晩期の土器少量含む。層厚12～25cm。
- 第9層 第8面上層。灰色粗粒砂主体。自然流路内に縄文時代晩期の上器少量含む。層厚10～25cm。
- 第10層 灰色砂層主体。縄文時代晩期の上器含む。層厚10～45cm。
- 第11層 非常に粘性の強い黒色粘土で層厚20～30cm。湿地状の水の動きが少ないような環境のもとに堆積したと考えられる。東端でまとまって縄文時代晩期の上器が出土しているが(第9面)、それ以外の地点では遺物はほとんど出土していない。
- 第12層 第11層にやや砂粒がふくまれているもの。肉眼だけでは区別をつけにくい。縄文時代後期の上器を含む。層厚15～30cm。
- 第13層 第10面上層。シルト～微粒砂主体。縄文時代後期の上器を含む。層厚25～45cm。
- 第14層 第11面上層。灰オリブ色の砂層主体。縄文時代後期の上器を含む。層厚25～40cm。
- 第15層 第15層 第12面上層。灰色粗粒砂主体。縄文時代後期の上器を含む。層厚10～15cm。



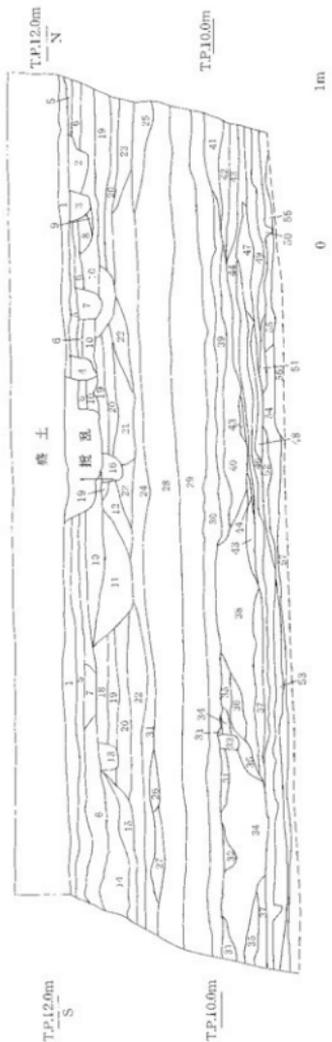
第4図 断面模式図

( ) の数字は南壁断面図の番号と対応



第5圖 南京断面实测圖





- |                             |  |                             |
|-----------------------------|--|-----------------------------|
| 1. 灰褐色 (10YR4/2) シルト        | 26. 暗オリーブ灰色 (5G5/4/1) 腐葉土-粗粒砂          | 51. 灰白色 (5Y7/2) 粗粒砂         |
| 2. 黒褐色 (2.5Y3/2) シルト        | 27. 暗オリーブ灰色 (5G7/4/1) 粗粒砂              | 52. 灰色 (5Y4/1) 粘土           |
| 3. 黒褐色 (10YR3/2) シルト        | 28. 灰色 (10Y4/1) 粗粒砂                    | 53. オリーブ灰色 (5Y3/1) 粗粒砂混じり粘土 |
| 4. 黒褐色 (10YR3/2) シルト        | 29. 灰色 (7.5Y4/1) 粘土                    | 54. 黒褐色 (10YR4/1) 粗粒砂混じり粘土  |
| 5. 暗灰色 (2.5Y4/2) 粗粒砂混じりシルト  | 30. 灰色 (7.5Y4/1) 粘土 (作量の砂を含有)          | 55. 黒褐色 (2.5Y4/1) 粗粒砂混じりシルト |
| 6. 暗灰色 (2.5Y3/2) シルト        | 31. 暗オリーブ灰色 (5G9/4/1) シルト              | 56. 黒褐色 (2.5Y4/2) 粘土        |
| 7. 黒褐色 (10YR3/2) シルト        | 32. 灰色 (7.5Y2/1) 粘土                    | 57. 暗灰色 (2.5Y4/2) 粗粒砂混じり粘土  |
| 8. 暗灰色 (2.5Y3/2) シルト        | 33. 暗オリーブ灰色 (5G5/4/1) シルト              |                             |
| 9. 暗灰色 (2.5Y4/1) 粗粒砂混じりシルト  | 34. 暗オリーブ灰色 (2.5G7/4/1) 粗粒砂-礫 (径5cm以下) |                             |
| 10. 黒褐色 (10YR3/2) 粗粒砂混じりシルト | 35. 暗オリーブ灰色 (5G5/4/1) シルト              |                             |
| 11. 暗灰色 (2.5Y4/1) 粗粒砂混じりシルト | 36. 暗褐色 (10G5/4/1) 粗粒砂-礫               |                             |
| 12. 暗灰色 (2.5Y4/1) 粗粒砂混じりシルト | 37. 暗褐色 (7.5Y7/1) 粗粒砂-礫                |                             |
| 13. 暗灰色 (2.5Y3/1) 粗粒砂       | 38. 暗褐色 (10G7/4/1) 粗粒砂-礫               |                             |
| 14. 暗オリーブ灰色 (5Y2/2) 粗粒砂     | 39. オリーブ灰色 (5G3/5/1) 粗粒砂               |                             |
| 15. 灰色 (2.5Y2/1) 粘土         | 40. 暗オリーブ灰色 (5G7/4/1) 粗粒砂              |                             |
| 16. 暗褐色 (2.5Y3/1) 粗粒シルト     | 41. 暗灰色 (10Y5/1) シルト                   |                             |
| 17. 暗褐色 (10YR3/2) 粗粒砂混じりシルト | 42. 暗オリーブ灰色 (2.5G7/4/1) 粗粒砂            |                             |
| 18. 暗褐色 (10YR3/2) シルト       | 43. オリーブ灰色 (2.5G7/5/1) シルト             |                             |
| 19. 暗褐色 (10YR3/2) シルト       | 44. 暗オリーブ灰色 (2.5G7/4/1) シルト            |                             |
| 20. 暗褐色 (10YR3/2) シルト       | 45. 灰色 (5Y4/1) 粗粒砂混じりシルト               |                             |
| 21. 灰色 (7.5Y6/1) 粗粒砂混じりシルト  | 46. 灰色 (7.5Y5/1) 粗粒砂混じりシルト             |                             |
| 22. 灰色 (7.5Y7/1) 粗粒砂混じりシルト  | 47. 灰色 (2.5Y5/1) 粗粒砂                   |                             |
| 23. オリーブ灰色 (10Y3/1) シルト     | 48. 灰色 (10Y6/2/1) シルト                  |                             |
| 24. 灰色 (10Y4/1) シルト         | 49. 暗オリーブ灰色 (5G5/4/1) 粗粒砂              |                             |
| 25. オリーブ灰色 (10Y3/2) シルト     | 50. オリーブ灰色 (5Y3/1) 粘土                  |                             |

第7図 西壁断面実測図

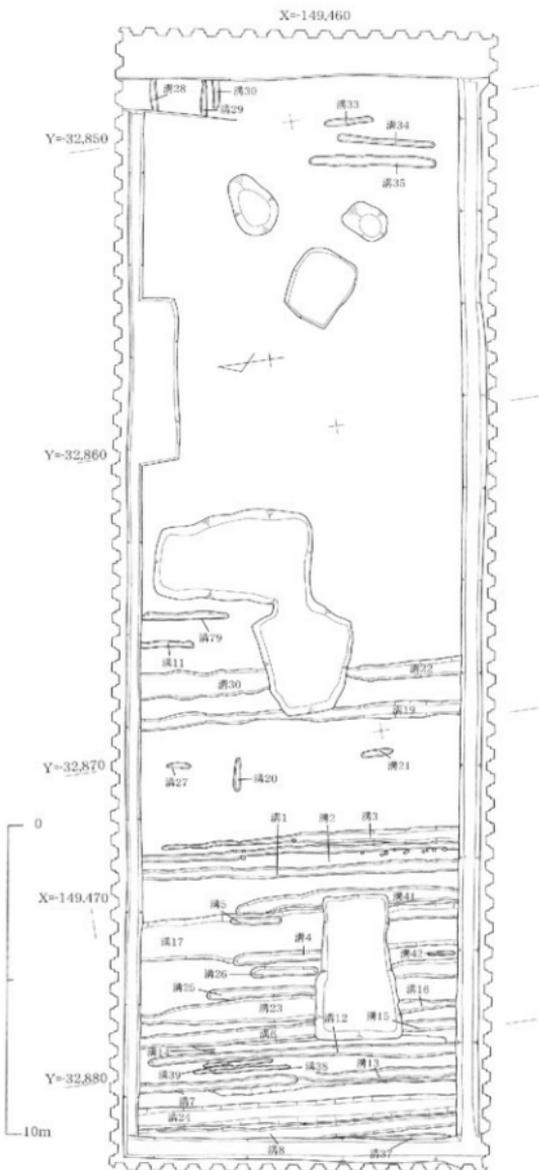
## 2. 遺構

### 1) A区の遺構

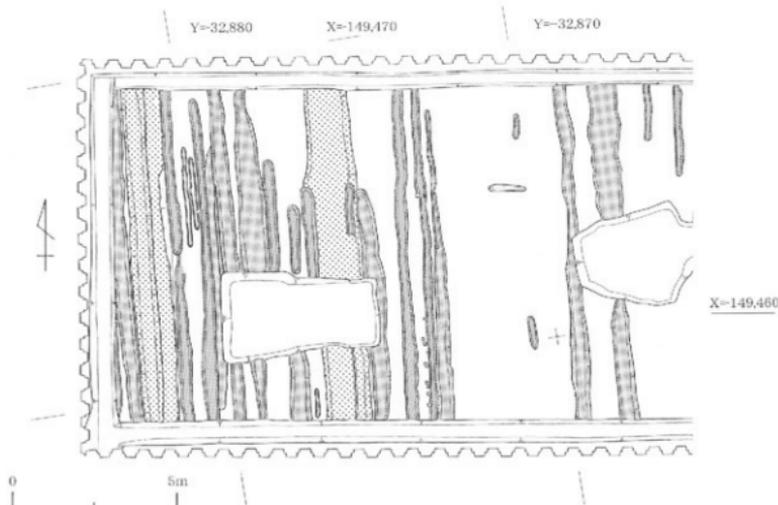
#### 第1面(中世)(第8図)

多数の溝を検出した。南北方向のもの33条と東西方向の短いもの4条であり耕作に伴ういわゆる鋤溝であると考え。溝が調査区西側に集中して検出されているのは、調査区中ほどから東側にかけては元の地形が高かったため削平されてしまったためと思われる。

南北方向のものはほとんどが調査区内で完結することなく調査区外へ伸びているため全長は不明である。幅も複雑に切り合っているため定かではないが、広いもの(溝17や溝24など)は120~150cmを測り、他は30~60cmを測るものが多い。そして、その幅の違いや重複関係などから4~5時期に分けることができる(第9図)。まず最も古いものは溝17、溝24などの幅広の溝で、次が幅50cm程度の溝6や溝8など、更に幅30cm程度の溝1や溝7であると考える。幅が非常に狭く、長さも短い溝が(溝38など)残っているが、切り合い関係が存在しないため順番は不明である。溝の深さは溝24が20cmを測る以外は方向、幅に関係なく5~10cm程度の極浅い溝である。また溝1・2の間で検出されている杭列は時期の特定はで



第8図 第1面平面実測図



第9図 第1面溝群分類図

きないが、棚田もしくは段々畑に伴う段の位置を示すものと思われる。

溝からの出土遺物は大半が下層より巻き上げられたと考えられる弥生土器や須恵器などであったが、細片ながら中世期の遺物も少量出土している。溝10と溝13からは大和型瓦器椀(ⅢA期)、溝17からは東播系須恵器鉢(Ⅱ-2段階)が出土している。また溝23からは大和型と和泉型の瓦器椀が、溝24からは土師皿と和泉型瓦器椀が出土している。

また第2面で検出したものであるが調査区西側で南北方向の溝を6条検出しており、溝43から和泉型瓦器椀(Ⅲ-3～Ⅳ-1期)が出土していることや、これらの溝の下層に溝83が存在していることなどから中世の遺構が部分的に2面存在していたものと判断している。

いずれもおおむね12世紀末～13世紀初め頃のものであり、溝の年代もその辺りに求めることができるであろう。

#### 第2面(古代)(第10図)

溝・土坑・ピットを検出した。東西方向の溝を2条(溝56・81および溝57・61・83・89)検出した。溝56・81は途中で途切れた部分があるため別番号をつけているが元々は一続きのものであろう。どちらの溝も両端は調査区外へと続いている。溝83は第12次調査の溝99とつながるものと考えられるが、溝56・81の方は続きが検出されていない。一方西側の第4次調査ではどちらの溝も続きになるような遺構は検出されていない。

溝56・81はほぼ一直線に走っているが、溝57・61は、頻繁に流れる方向を変えている。まず調査区中ほどで合流して北に向きを変え(合流した地点からを便宜上溝83としている)、その後すぐに再び東西方向に向きを変え、調査区西端で2本に分岐する(溝83・89)。溝61の上面には平面図には載せていないが、第11図の断面図に示すように溝59・60が存在した。幅20～30cmの溝であり、第1面で検

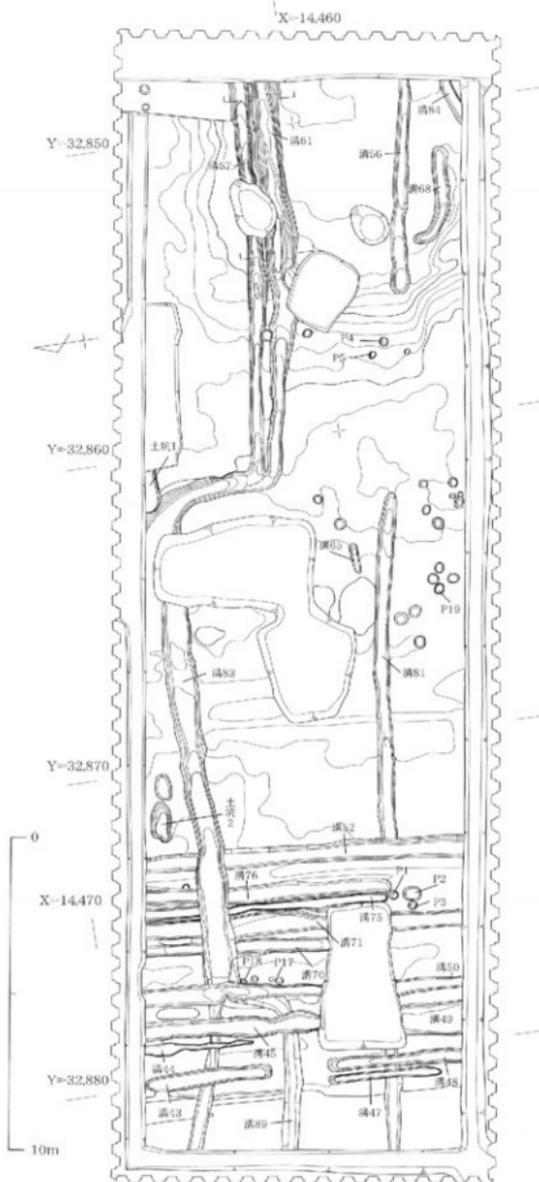
出したような東西方向の鋤溝である可能性も考えられる。遺物は特に出土していない。

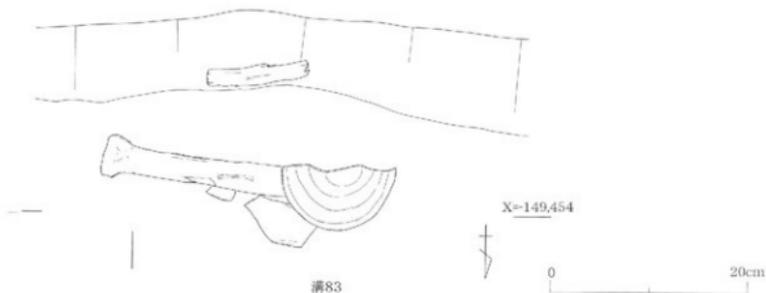
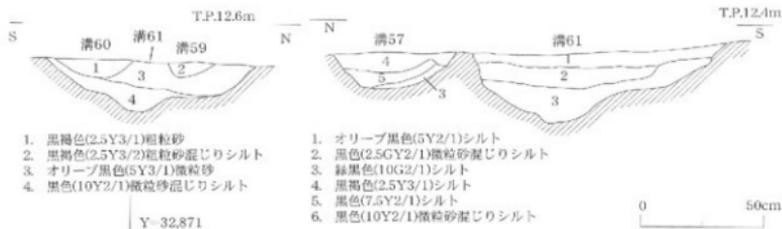
また後に各面の遺構の説明においても述べるが多数の遺構との切り合い関係が存在し、調査区東側では弥生時代後期(第4面)の溝100の北肩を、西側では3・4号墳の周溝(第3面)と弥生時代中期(第5面)の溝110・116・117を切っている。そのため溝の埋没時期と考えられる8世紀代の遺物のほかに弥生土器・須恵器・埴輪などが多数出土している。

このように、古い時代の遺構を結ぶように走る溝であることから、意図的に周囲より窪んでいた部分、もしくは一度掘られたことにより軟らかくなっていった部分を選んで掘ったものと思われる。

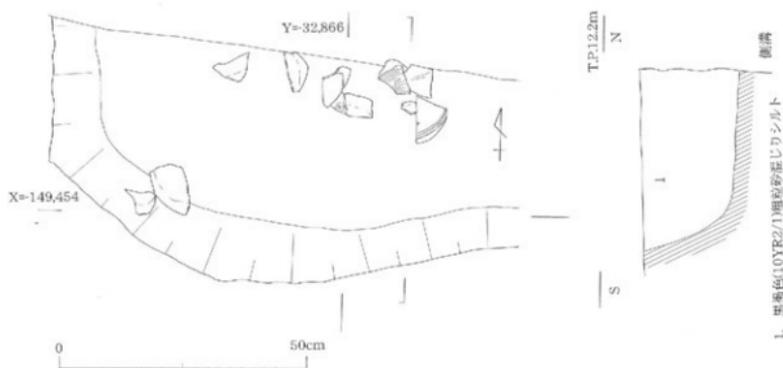
第11図および図版2の遺物出土状況図は須恵器杯の底部(第73図666)が骨(未鑑定)にかぶさっていた状況である。ただしこの状況が人為的な行為によるものかどうかは不明である。

なお溝83によって切られている南北方向の溝を5条検出している(溝52・70・71・75・76)が、溝75出土の羽釜から8世紀のものと考えられ、溝83との時期差はほとんど存在しないようである。このような溝はこの部分のみに存在していることが





第11図 溝59～61、溝57・61断面、溝83遺物出土状況実測図



第12図 土坑1遺物出土状況・断面実測図

ら第1面で検出したような助溝とは異なる性格のものであることも考えられる。土坑1(第12図)は北側を側溝によって切られているが、残存する規模は長辺130cm、短辺50cm、深さ20cmを測る。溝83を切っているが出土遺物にはほとんど時期差は認められない。須恵器杯、土師器皿などが出土している。出土遺物より8世紀後半のものと考えられる。

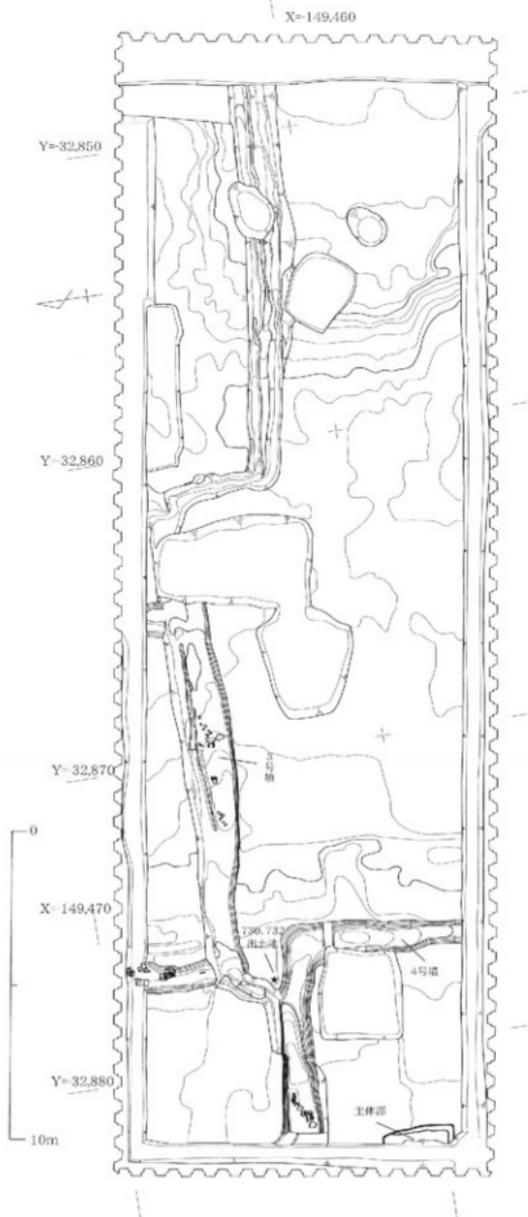
第3面(古墳時代)(第13図)

調査区の西側で古墳2基を検出した。第4次調査においても2基の古墳が見つかるため、今回検出分を3号墳、4号墳と呼称する(なお調査段階での名称はそれぞれ溝98・溝99である)。共に墳丘盛土を確認することはできなかった。4号墳主体部の残存状態からするとかなり削平を受けているのであろう。

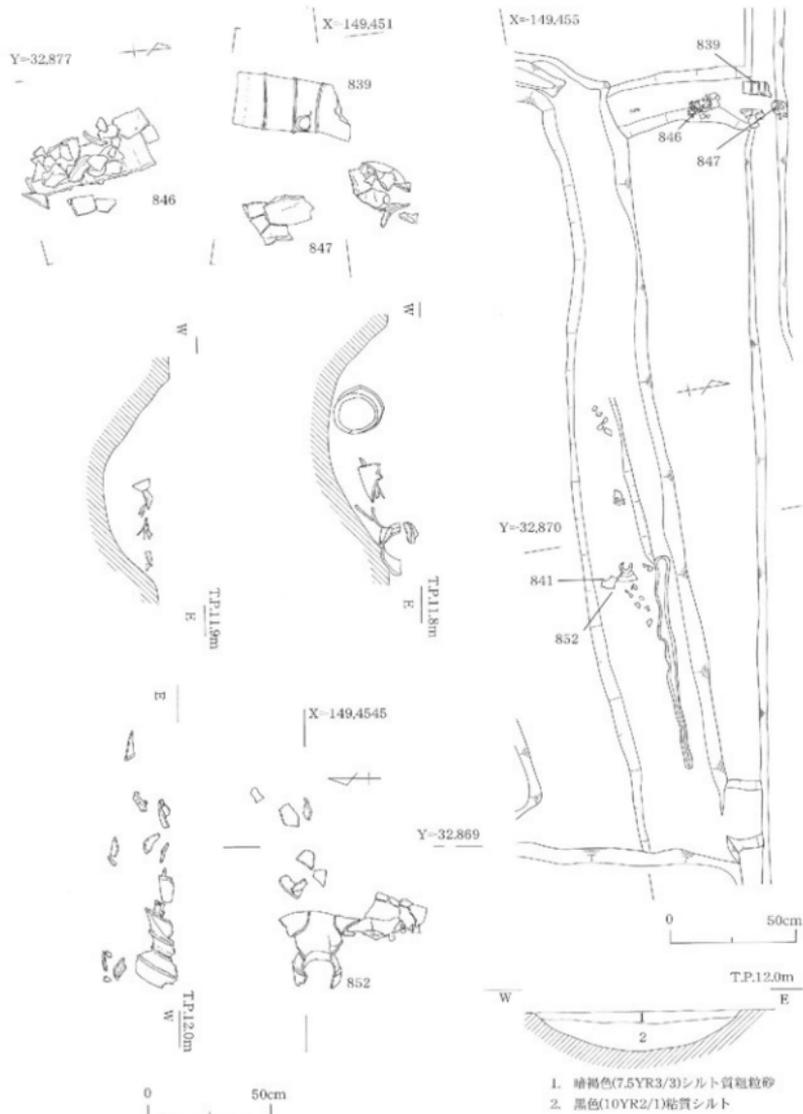
3号墳(第14図) 周溝を検出したが大半は調査区外に広がる。完全に検出したのは南側の一辺のみであり長さ13mを測るが、溝83(第2面)に北肩を切られており、幅は不明である。検出した深さは16cmであるが、埴輪の多くは周溝検出面より浮いた状態での出土であるため本来の深さではないであろう。南側および西側の周溝内より円筒埴輪と朝顔形埴輪が多数出土した。その内5本は全体の形状を復元できるものである。

その他にも弥生時代中期および後期の遺物も出土している。

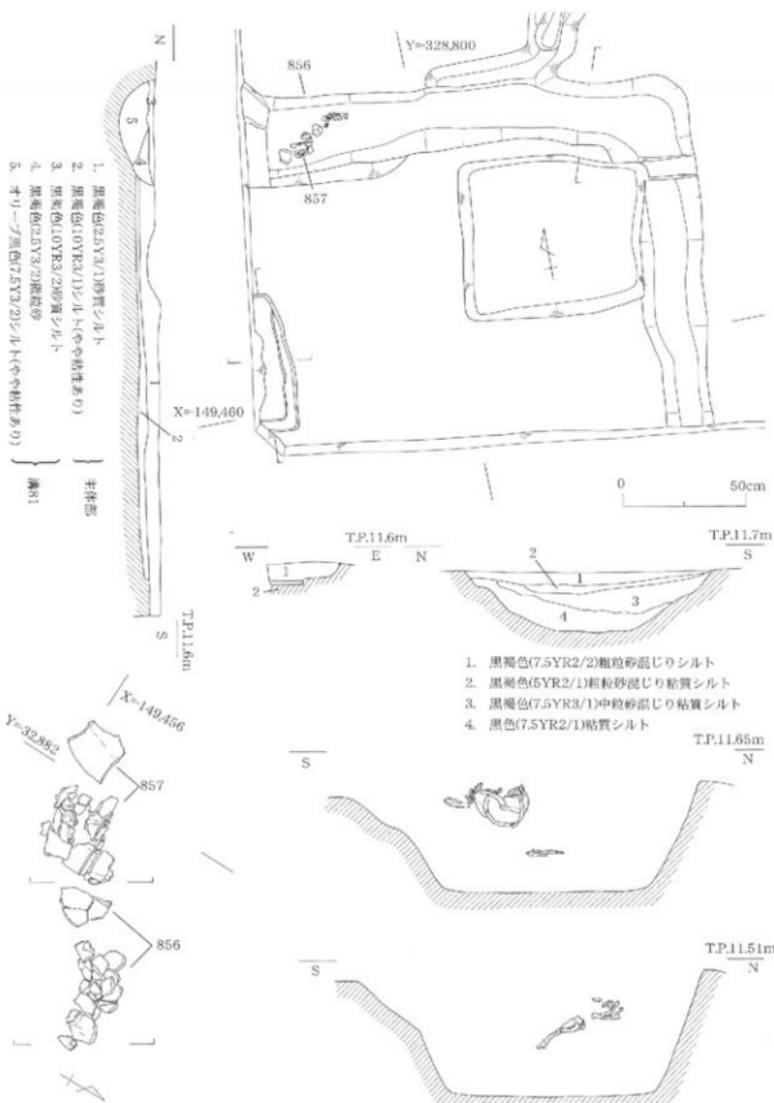
4号墳(第15図) 周溝は二辺を検出した。検出長は北辺7.5m・東辺5.5mで、深さは26cm～50cmである。北辺は第2面の溝83によって切られ、第5面の溝116とも重複しているため、掘り下げすぎている可能性もある。また北東



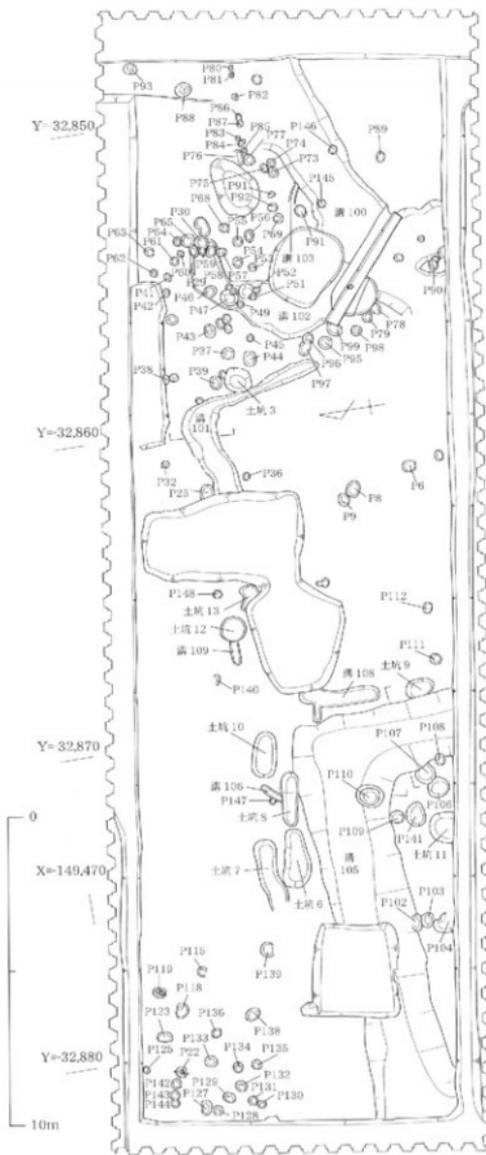
第13図 第3面平面実測図



第14図 第3号堤遺物出土状況・断面実測図



第15図 第4号墳遺物出土状況・断面実測図



第16図 第4面平面実測図

コーナー付近では第5面の土坑19を切っている。

周溝内からは2個体分の完全な形に復元できる埴輪が出土している。その他に弥生時代中期の土器も出土しているが、上記の通り、本来は第5面の土坑・溝に伴うものであろう。

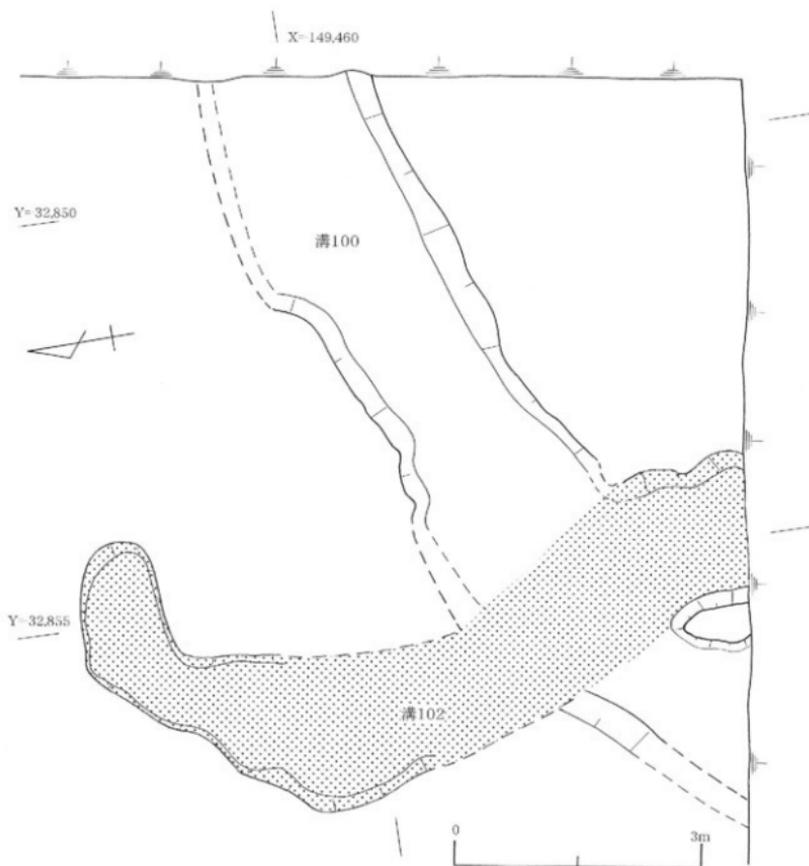
調査区の西端で主体部と考えられる土坑を検出した。残存状態は非常に悪く木棺の痕跡と考えられる落込みを検出したに過ぎない。北側を溝81(第2面)に切られているが、かろうじて北端は確認することができた。残存する規模は長辺230cm、短辺60cmをはかり、深さは8cmである。

また遺構の輪郭を確認することはできなかったが、3・4号墳それぞれのコーナーが向かい合っている地点で頸を欠いた提瓶(第76図730)と上半部だけの壺(第76図732)が並んだ状態で出土している(図版4)。

#### 第4面(弥生時代後期～古墳時代前期)(第16図)

弥生時代後期を主とする遺構面であるが、一部、古墳時代前期(布留式)の遺物を含む遺構も検出されている。溝・土坑・ピットを検出した。

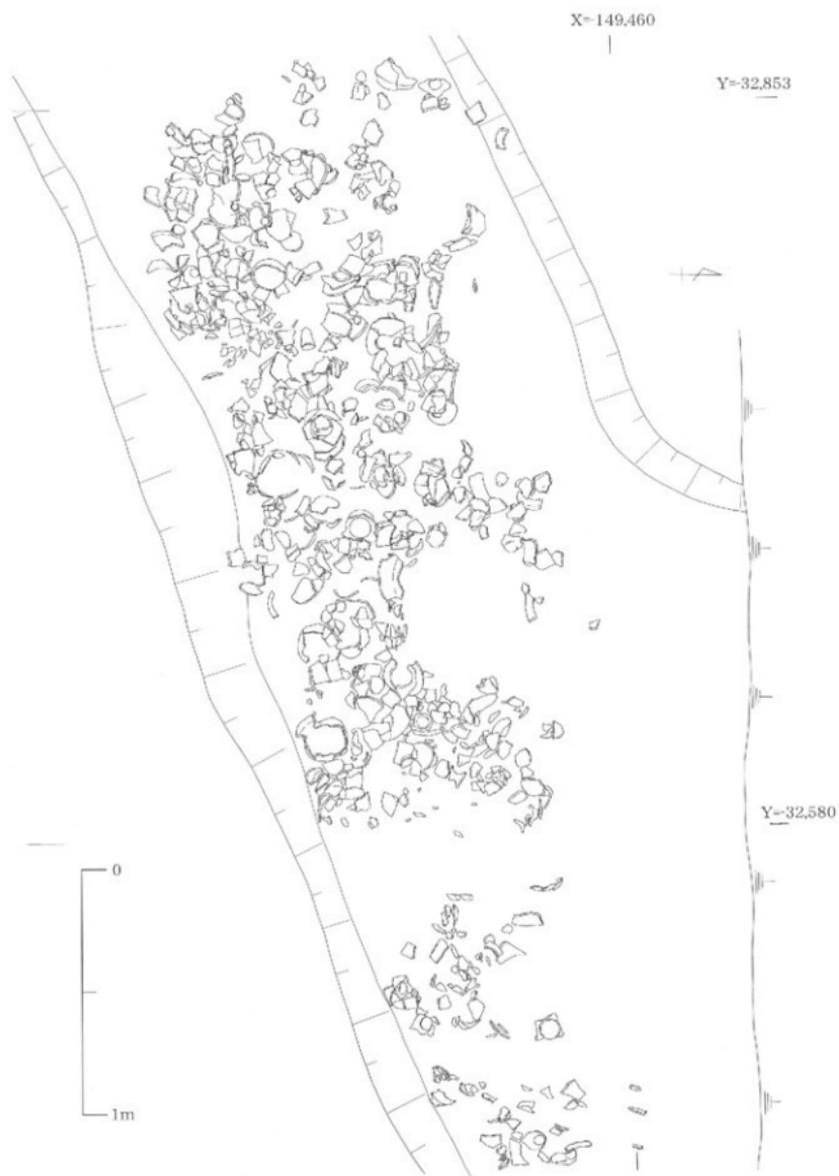
溝102 調査時の長さ6.0m、幅1.0m、深さ10cmである。一部、庄内～布留期の遺物を含むがその他にも多くの弥生時代後期の遺物を含んでいる。溝100と交差しており、遺物の時期差からしても溝100を切っていることは確実と思わ



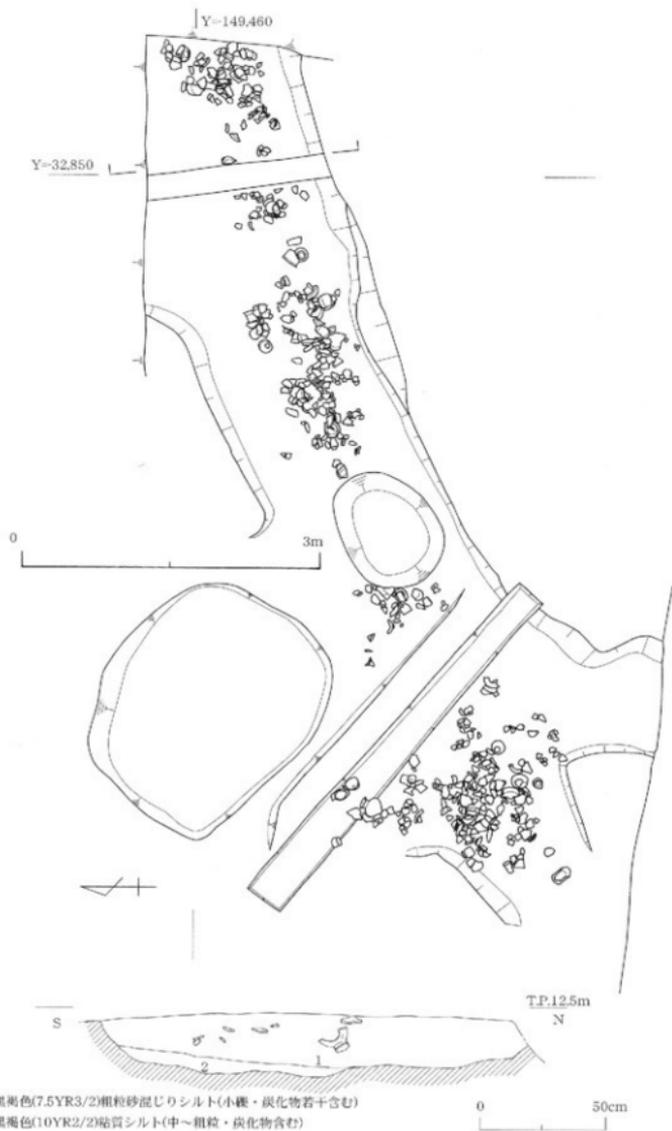
第17図 溝100・102交差状況推定復元図

れるが、断面の乾燥が著しく、多数のひび割れを生じたりしたことなどから、断面では切り合いを確認することはできなかった。ただ調査段階では溝100の分岐として捉えていた部分が溝102の続きと考えることもできそうであり、その場合が第17図である。この場合長さは8.0mになり、溝100を横断することになる。ただしあくまでも可能性を指摘することしかできないのは調査段階での認識不足によるもので、また含まれている弥生時代後期の土器に完形のものが含まれることも問題である。

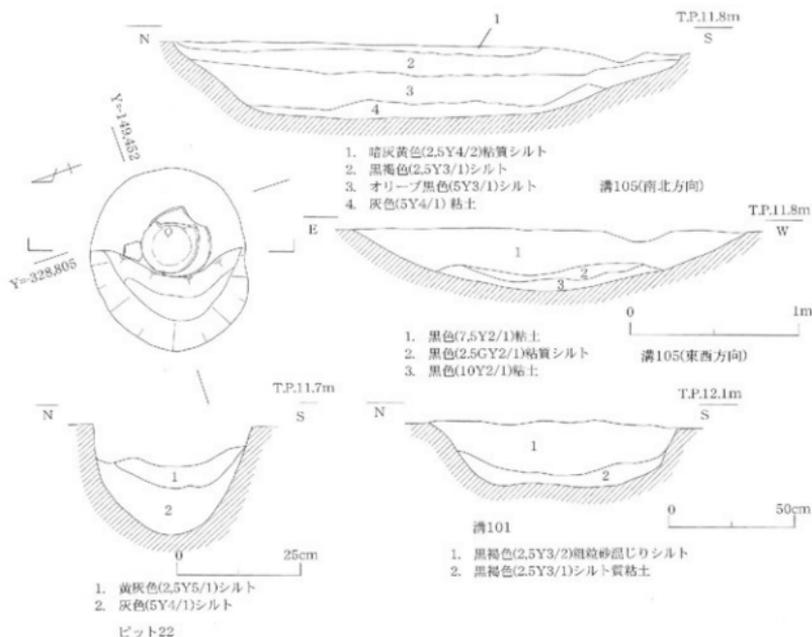
溝100(第18・19図) 第12次調査B区から連続して検出したものである。今回の検出部分は長さ10m、幅2m、深さ25cmである。12次調査部分と同様に多量の弥生時代後期の土器を含んでいるが、異なる点として完形となるものが少なく破片の状態のものが多いたことが上げられる。今回検出したうちでは東側(つまり12次調査につながる側)により多く出土しており、東側では上下2段に重なっ



第18回 溝100上層遺物出土状況実測



第19図 溝100下層遺物出土状況・断面実測図



第20図 溝101・105断面、ピット22遺物出土状況・断面実測図

いるのに対し西側は一度でほぼ全ての土器を検出することができた。このことから西へ行くに従って土器の量は徐々に減少しているようである。ただし、前述した溝102の推定ラインが正しいとすればその影響も考慮する必要があるであろう。北層は溝61(第2面)によって切られているが、溝の幅はほぼ一定であるのでおおよその復元は可能である。

溝101(第20図) 長さ4.0m、幅1.1m、深さ25cmで、L字状に曲がる溝である。一方の端は試掘坑にかかっているため不明である。コーナー部分で集中して弥生時代後期の遺物が出土した。

溝105(第20図) 東西の長さ13m、幅2.7m、深さ30~40cmの溝である。主体部となるような遺構は検出していないが、溝の規模と調査区南西隅でコーナーと思われる部分を確認しており、「コ」字形の平面形態から方形周溝墓の可能性が考えられる。溝内から土器は出土しているが、まとまっているような状況ではなかった。また弥生時代中期後半と後期の遺物が混じって出土しているが、これは中期の溝や土坑を切っているためである。

ピット22(第20図) 壺の口縁部が逆さになった状態で出土している。直径30cm、深さ22.5cmの円形である。

その他に調査区東側の溝100北側および調査区西側で多数のピットが集中して検出されているが、建物などを復元するにはいたらなかった。しかしこの2地点に集中していることから、掘立柱建物などなんらかの構造物が存在したと思われる。

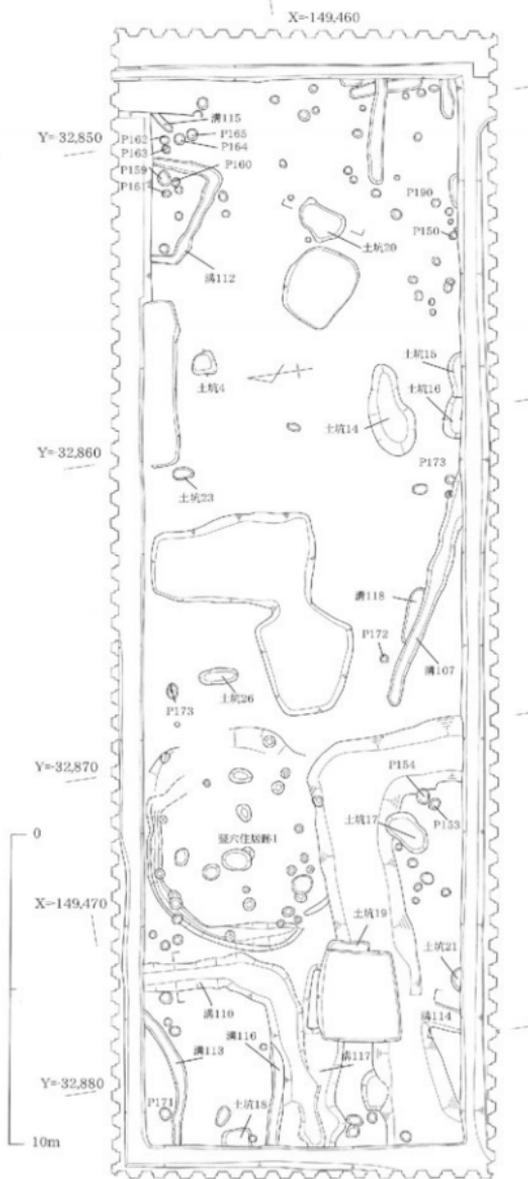
第5面(弥生時代中期) (第21図)  
 竪穴住居跡・溝・土坑・ピット  
 などを検出した。

調査区西側で検出した溝110・  
 溝116と溝114・溝117はそれぞ  
 れ「L」字状につながって2本の  
 溝となる可能性もあるが、溝83(第  
 2面)、3・4号墳周溝(第3面)、  
 溝105(第4面)など上面の主要  
 な遺構に切られているために、  
 それぞれ4m程度が検出できた  
 のみである。よって可能性を指  
 摘するにとどめておく。

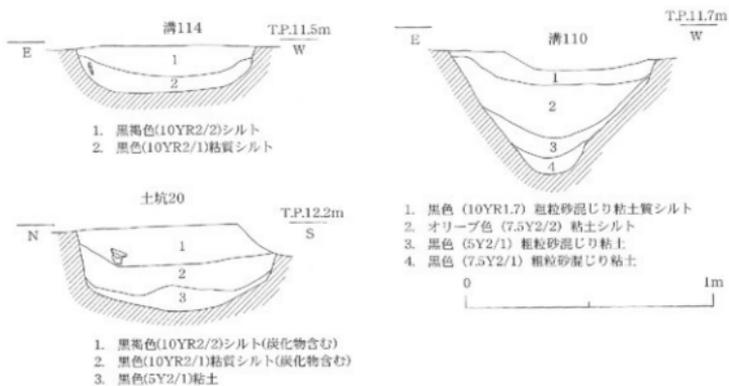
溝110 深さ50cmであるが、  
 真上を3号墳の周溝が通っており、  
 この溝を古墳築造の際に周  
 溝として利用している可能性も  
 ある。溝114は深さ20cmを測る。  
 (第22図)

溝112 調査区東側で検出し  
 た「コ」字状の溝である。長さ32m、  
 幅30cm、深さ10cmを測る。第  
 4面を精査した際に検出はして  
 いたが、この部分は機械掘削時  
 に削りすぎてしまった部分であ  
 るため、第5面の遺構として図  
 化したものである。規模などか  
 ら方形の竪穴住居であるとする  
 ならば、後期の遺構である可能  
 性も考えられるものである。ま  
 たそうであるなら溝100の外側  
 に近接して住居が建てられてい  
 たことになるのであり、溝100  
 の性格も大きく変わることにな  
 るが、遺物が細片しか出土して  
 おらず時期を決定するには至っ  
 ていない。

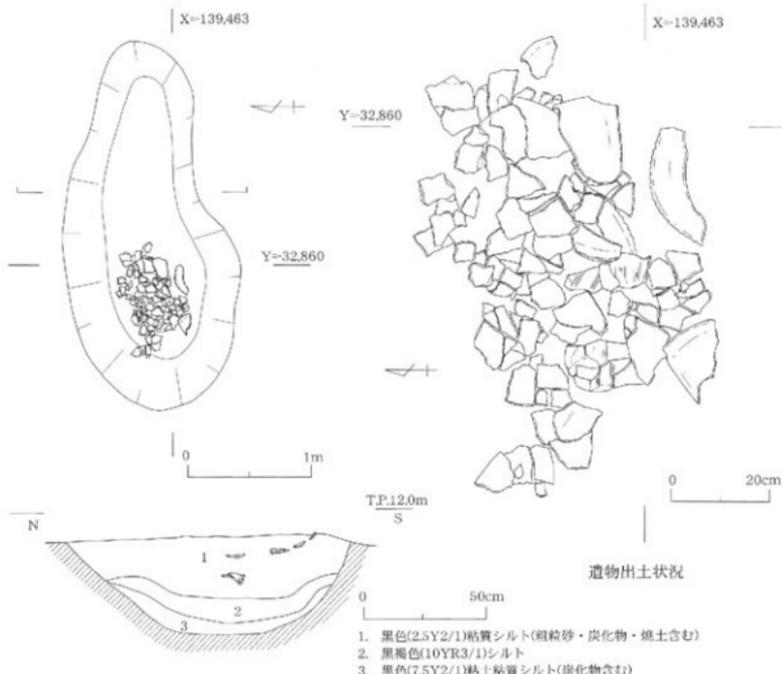
溝113 調査区北西端で検出  
 した溝である。長さ45m、幅40cm、



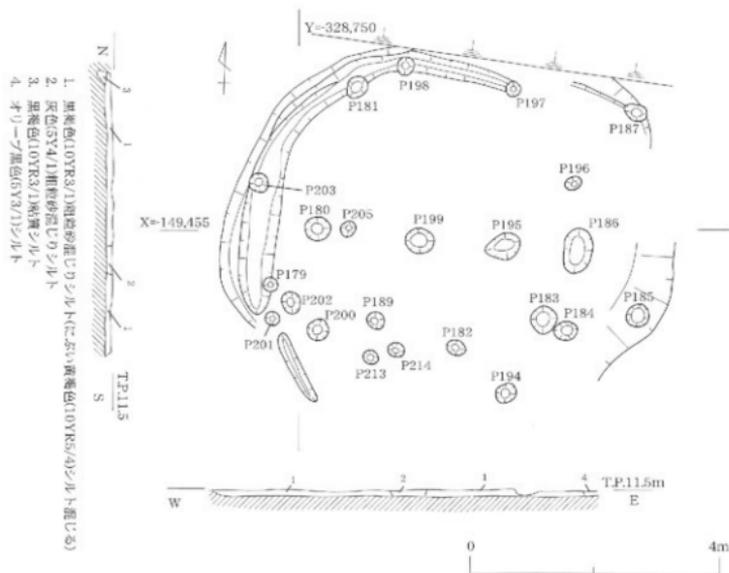
第21図 第5面平面実測図



第22図 溝110・114・土坑20断面実測図



第23図 土坑14遺物出土状況・断面実測図



第24図 竪穴住居跡1平・断面実測図

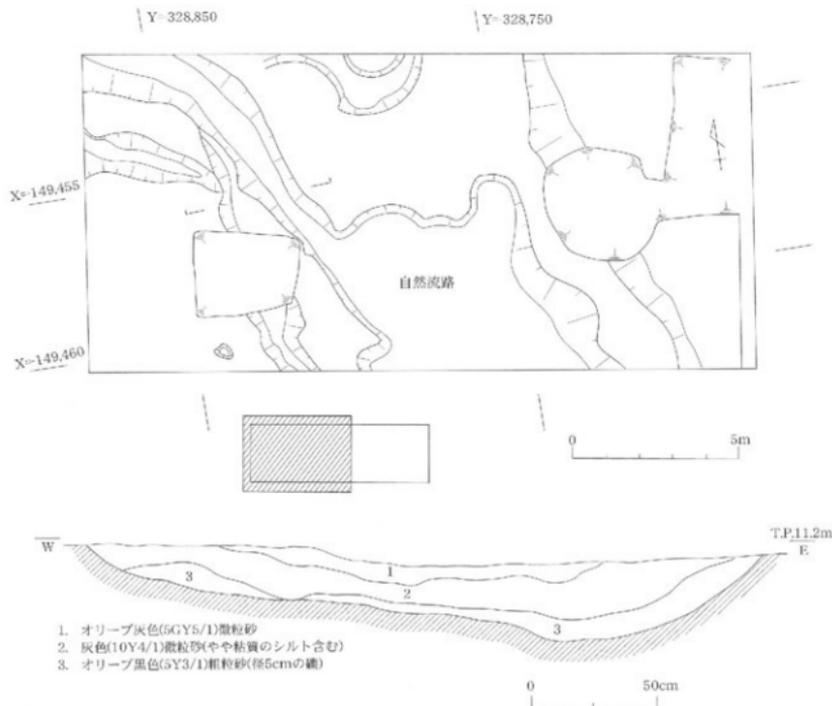
深さ10cmでゆるく弧を描いており、竪穴住居跡に伴う溝である可能性も考えられる。

土坑14(第23図) 調査区東側で検出したやや楕円形気味の不定形な土坑で、長辺3m、短辺1.2m、深さ40cmを測る。最上層から土器がまとめて出土している。埋土には炭や焼土を含んでいるが、出土した土器も火を受けているようで全体的に器表面が赤変しており、剥離が著しい状態である。ただし土坑自体は火を受けた痕跡は認められない。弥生時代中期前半の土器が出土している。竪穴住居跡を始めとする他の遺構は中期後半のものがほとんどなので、周辺で中期前半の集落が検出されることも考えられる。

土坑19 調査区西側で検出した土坑で長さ1.4m、幅35cm、深さ20cmである。西側は試掘坑に切られており、上面は4号墳周溝(第3面)および溝105(第4面)に削られている。4号墳周溝出土の弥生時代の土器は本来この土坑に属するものであろう。

土坑20(第22図) 調査区東側で検出したやや楕円形気味の土坑で長径160cm、短径90cm、深さ35cmを測る。上面は溝100(第4面)によって削られている。埋土に炭化物や焼土を含んでいる。

竪穴住居跡1(第24図) 直径7mの平面円形の竪穴住居跡であるが、調査時は第5面では検出できず、第6面として精査した段階で落ち込み状のくぼみを検出した。しかし、この段階でも住居としては認識ができず、更に掘り下げた段階(第7面とした面)で初めて住居跡として認識できた。出土遺物から弥生時代中期の遺構であることが確認できたので、第6・7面は第5面に合成しているため欠番になっている。壁の立ち上がりの半ばから深さ8cm程度の溝がめぐらされている。住居内ではピットを壁際から8基、内部から15基の計23基検出しているが、柱配置の復元はできない。



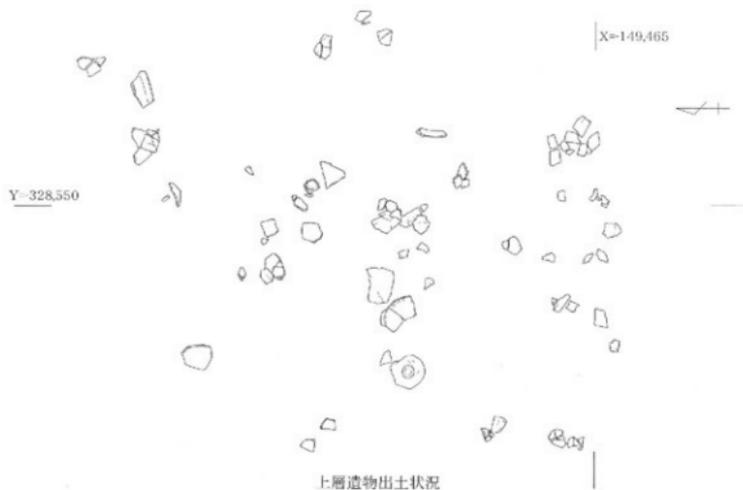
第25図 第8面平面・自然流路断面実測図

#### 第8面(縄文時代晩期)(第25図)

調査区西側で深さ20cm程度の極浅い自然流路を検出した。複雑に分岐しているが、東に生駒山地が存在する地形からみて東から西へ向かって流れていたものと思われる。わずかではあるが縄文時代晩期の土器が出土している。基本的には下層から検出された河川3～5と同様のものであるが調査時にふった遺構番号とずれが生じることになるのでこの面のみ名称が異なっている。

#### 第9面(縄文時代晩期)(第26図)

遺構は検出されていないが、調査区東端の南北2.5m、東西3.0mの範囲で土器が集中して出土した。土器が出土した地点以外には黒色粘土が厚さおよそ20～30cmで堆積しており、砂などはほとんど混じっていない純粋な粘土層である。つまり土器出土地が最も高く、周囲に粘土の堆積するような水の動きの少ない環境(湿地帯や沼のような環境)が広がっていたと考えることができるのではないだろうか。第26図の上段が上層、下段が下層であるが、上層に比べて下層の方が北側に広がっている状況が見て取れる。これは北側及び西側に若干下がっている地形であったことによるものであり、上層と下層の遺物には特に時期差は認められない。



第26図 第9面土器集中部上層・下層遺物出土状況実測図



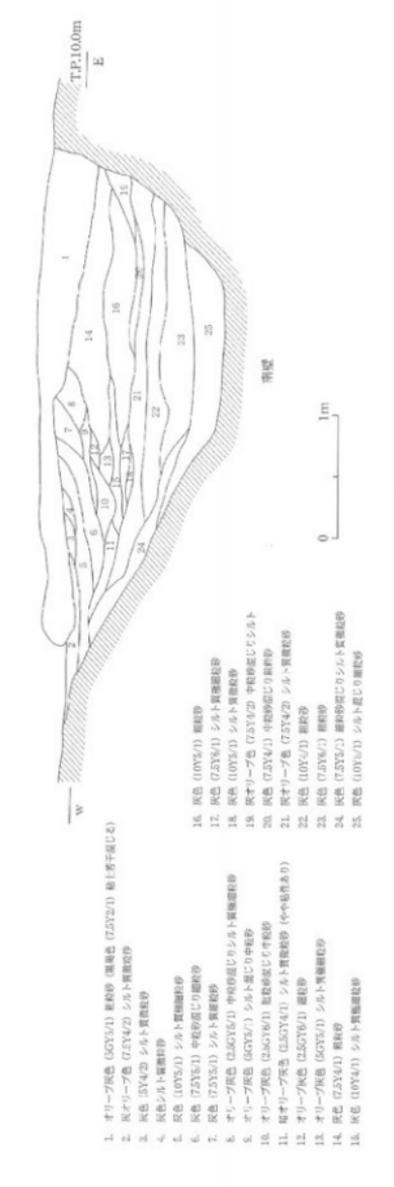
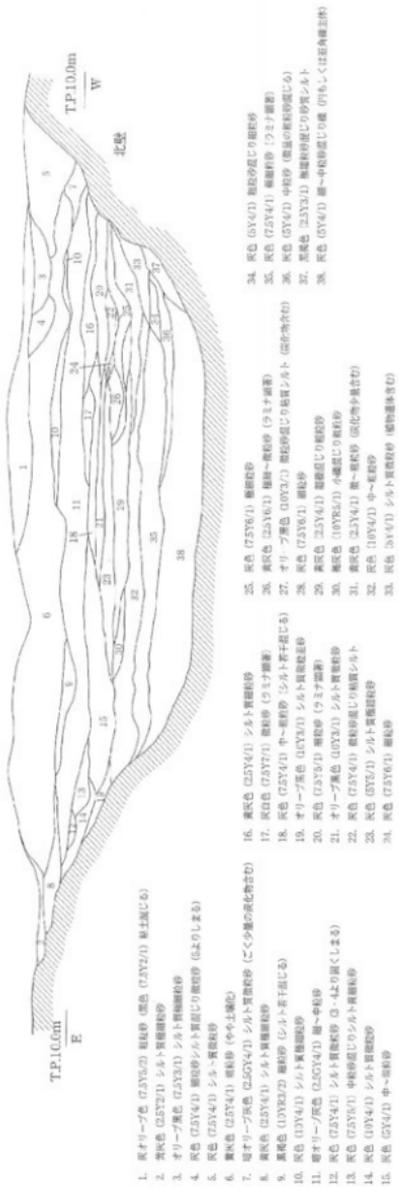
第27図 第10面河川1・2平面実測図

第10面(縄文時代後期)(第27図)

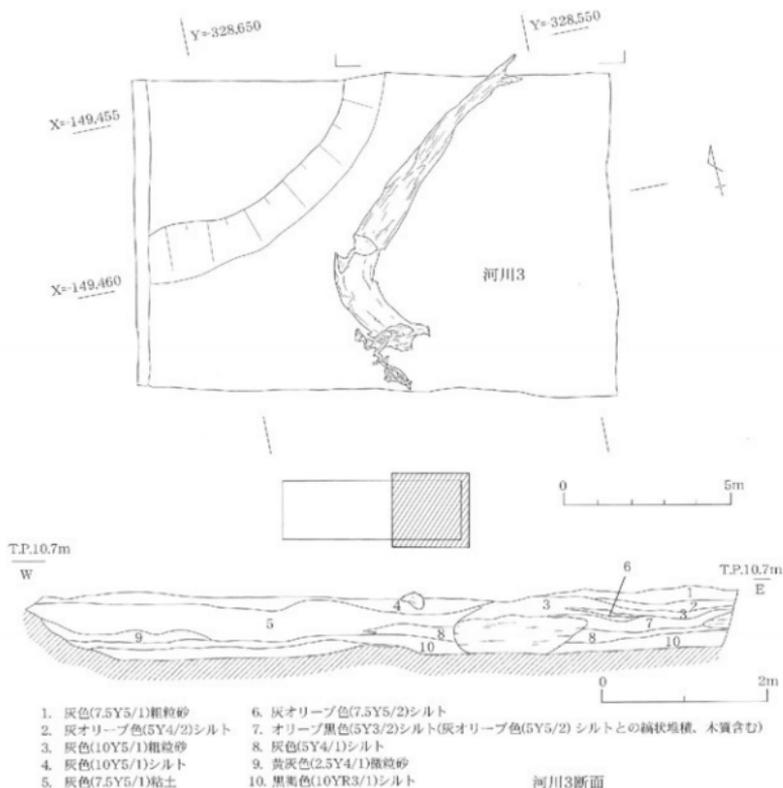
調査区の東西それぞれの端で河川1・2を検出した。河川1は調査区北端でややカーブしているがおおむね南北方向に流れているもので、幅2.5m、深さ1.6mを測る。北壁の断面の幅が広いのは河川がカーブしているためである。埋土中からは縄文時代後期の土器が出土しているが、この河川は最下層で非常に堅固な礫混じりの層を削りこんでおり、かなりの水量と速さを持つ流れであったようである。そのために出土した遺物は周囲の包含層が削られることによって層中の土器が河川の埋土中に含まれるようになった可能性も考えられる。埋土は全体的に砂層であるが、北壁の最下層には礫を含む層が存在している。

河川2は調査区南東端を通っているものであるが、西端を検出したのみであり、全体の規模は不明である。検出した部分は最大幅2m、長さ3mを測る。ごく一部の検出にとどまったためもあるであろうが、遺物はほとんど出土してなく時期も不明である。

この面で検出した流れは河川1・2とも南北方向の流れである。上面および下面で検出したものはいずれも東西方向の流れでありこの2本のみ方向が異なっている。また地形的にも東が高く西に低い地形であり、不自然である。また河川1の深さも特異である。このような違いの生じる原因は不明であるが、特に河川1は砂や砂利を多く含む埋土であり強い流れのもと一気に埋まってしまったものなのかもしれない。



第28図 河川断面実測図



第29図 第11面平面・河川3断面実測図

#### 第11面(縄文時代後期)(第29図)

調査区東側で河川3を検出した。調査区の北東から南西へ斜め方向に流れていたものであるが、西側でははっきりした続きを検出できていない。第13面の河川4とほぼ同じ位置であったため、河川の周囲も攪拌されたような状態になってしまっておりどちらに属する層であるのか判断に苦しむ部分も多かった。北西側の岸のみ検出している。検出幅は最大で12.5m、深さは0.7mである。

上面から既に一部姿を表していたクスノキの倒木はこの面で全体の姿が明らかになったが、直径1m、長さ12mを測る。北側に先端を向けている。根は全体のおよそ半分が残存しており、河川の南岸に生えていた木がなんらかの原因で河川内に倒れこんだものと思われる。いくつかの偶然が重なった結果、奇跡的に残ったものであろう。これほど良好な残存状況ではないが、周囲からも、多数の木片が出土している。自然科学的な分析を行っていないので、推定に過ぎないが、これらのことから、この木一本だけが生えていたわけではなく、森林のような様相で、その中を河川が流れていたような環境が想定できる。

第12面(縄文時代中期～後期)  
(第30図)

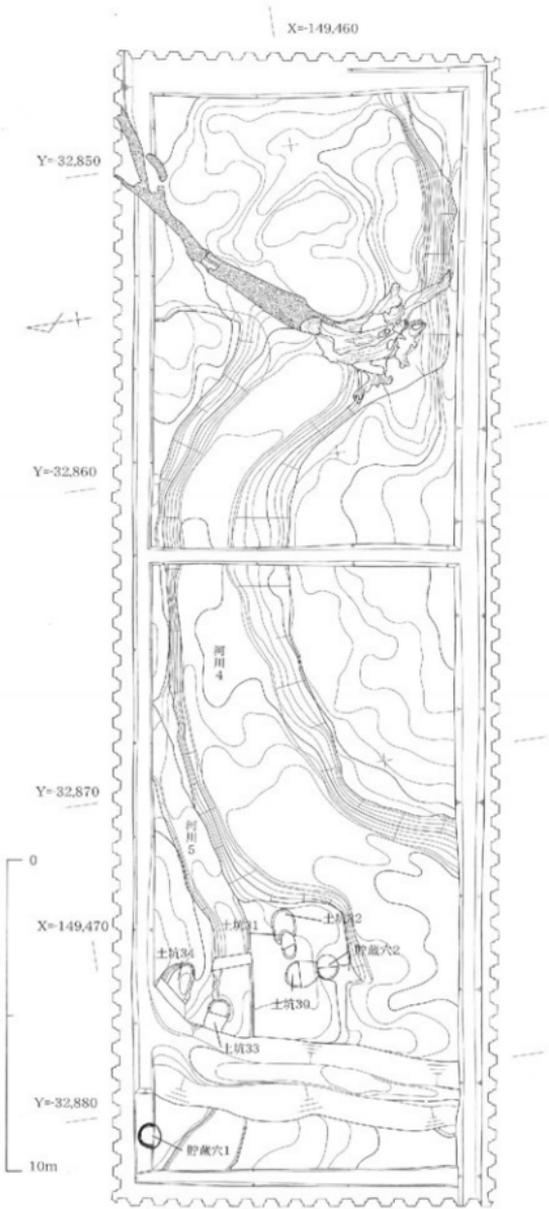
河川、貯蔵穴、土坑を検出した。

河川4 調査区全体を東西方向に横切るもので、長さ36m、幅4m、深さ0.7mである。縄文時代後期の土器が出土している。河川5は河川4に比べ細いものである。遺物はほとんど出土していない。

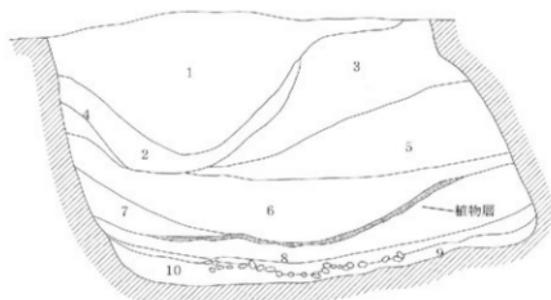
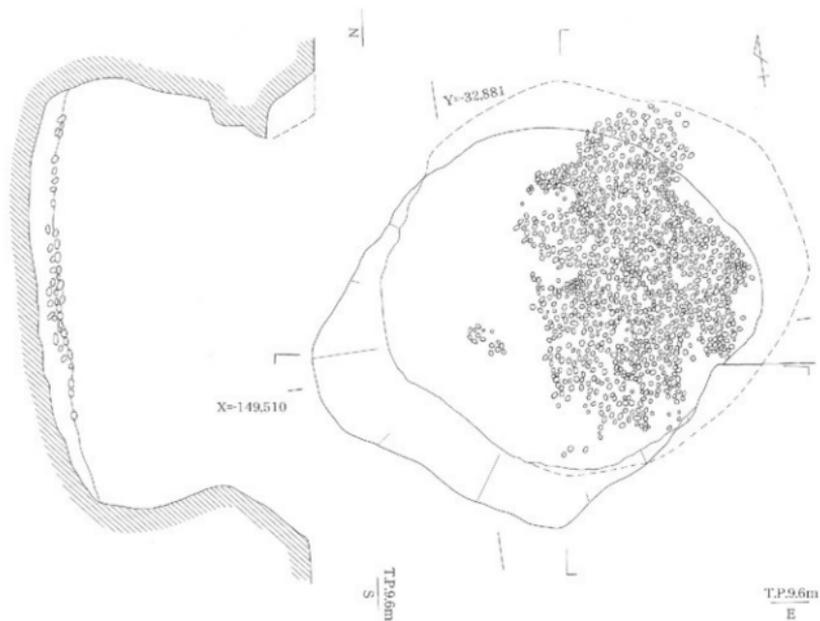
土坑などの遺構は集中して6基検出した。貯蔵穴1のみ若干離れた位置から検出されている。これらの遺構は全て河川の北側からのみ検出されており、南側には遺構は確

貯蔵穴1(第31図) 調査区北西隅、河川5の北0.5mに位置する。平面形態はやや不整な円形で直径は東西77cm、南北81cm、深さは55cmを測る。断面形態は上部よりも底面の方が広がる袋状であり、この形状は南北方向の断面においてより顕著である。底面から約5cm上で多量のドングリが良好な状態で検出された。底面のドングリは貯蔵穴の東側に集中しており、平面分布にはやや偏りがみられる。

埋土は最上層のものが、種子類を全く含まない砂層であり、それより下層はドングリに加えてトチなどを含むシルトや砂層である。底面に集中しているドングリの約5cm上には数cmの厚みで樹皮、木葉、小枝などが積み重なった状態が確認でき、蓋の役割をはたして

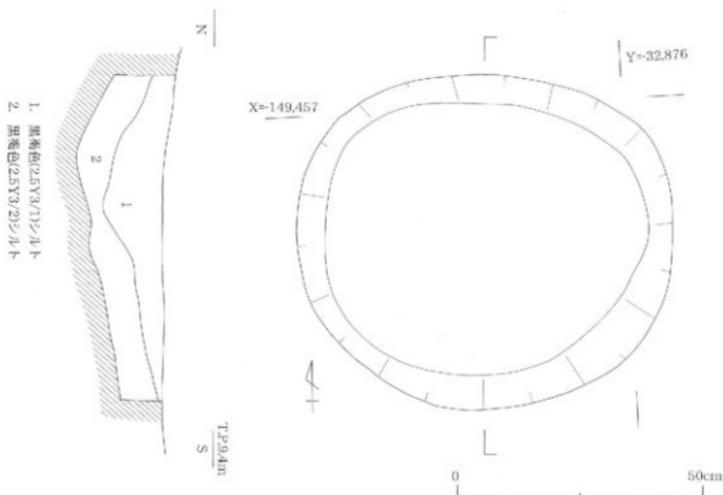


第30図 第12面平面実測図



1. オリーブ灰色(2.5GY5/1)粗粒砂
2. 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粗粒砂混じり粘質シルト (炭化物多く含む)
3. 灰オリーブ色(7.5Y4/2)シルト混じり粗粒砂
4. 黒色(10YR2/1)粗粒砂混じり粘質シルト
5. 灰オリーブ色(5Y6/2)シルト混じり粗粒砂
6. オリーブ黒色(5Y3/1)中粒砂混じり粘質シルト
7. 灰色(7.5Y4/1)中粒砂
8. 灰色(5Y4/1)粘質シルト
9. 黄褐色(2.5Y5/6)粘土
10. 黄褐色(2.5Y5/6)シルト混じり細～中粒砂(ドングリ密度高い)

第31図 貯蔵穴1出土状況・断面実測図



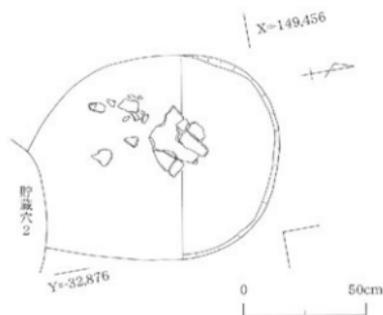
第32図 貯蔵穴2平面・断面実測図

いたものと考えられる(8層直上)。この層より下ではドングリのみが認められた。

ドングリは底面より約3cm浮いた状態であったが、底面とドングリとの間の層が、意図的に敷かれた土であるのかどうかは不明である。埋土中からは、種子類以外に詳細な時期は不明ながら縄文土器の細片も出土している。

貯蔵穴2(第32図) 長さ76cm、幅69cm、深さ18cmを測る。浅いものではあるが、埋土中からドングリが若干出土している。また平面規模、形状、河川からの距離など貯蔵穴1と共通する点が多いことからこの土坑も貯蔵穴の可能性があると判断した。土器などは出土していない。

土坑30(第33図) 長さ100cm、幅80cm、深さ10cmを測る。貯蔵穴2によって南側を切られているが、上面で深鉢(第39図1)が出土している。



第33図 土坑30遺物出土状況実測図

## 2) B区の遺構

12年度の調査で未調査となっていた部分である。工事の都合により南北に分割して調査を行った。

調査範囲が非常に狭く、溝などはいずれも調査区内では完結しない。また12次調査の遺構に続きが確認できるものは少ない。

#### 第1面(弥生時代後期～古墳時代後期)(第34図)

溝・ピットを検出した。

溝3(第35図) 北側と南側に分割した調査区の境界で検出したため、全体の形状がうまく把握できていない。南北調査地を合成した図での計測値は長さ2.1m、幅1.9m、深さ30cmを測る。南に存在する溝6と埋土が似ていることから、「L」字状に曲がっている可能性もある。調査区境界の北側では遺物がまとまって出土している。

溝100(第35～37図) B区で調査したのは6m足らずに過ぎないが、他の地点と同様に多量の弥生時代後期の土器が出土した。幅1.6m、深さ40cmを測る。A区での検出部分よりも完形の土器が多く含まれている。上層の方が遺物の量としては多いが、下層では完形のものも多く見られる。また完形の壺があたかも並んでいるかのような状態で出土している。またA区ではそれほど顕著ではなかったのであるが、B区では調査地全面に暗褐色の非常に固い層が存在する。この層は遺構であるか否かに関わらず見られることから、後世に地下水位が上がるなどなんらかの原因で生じたものである可能性が高い。第35図の断面図2層がこれに相当するものである。

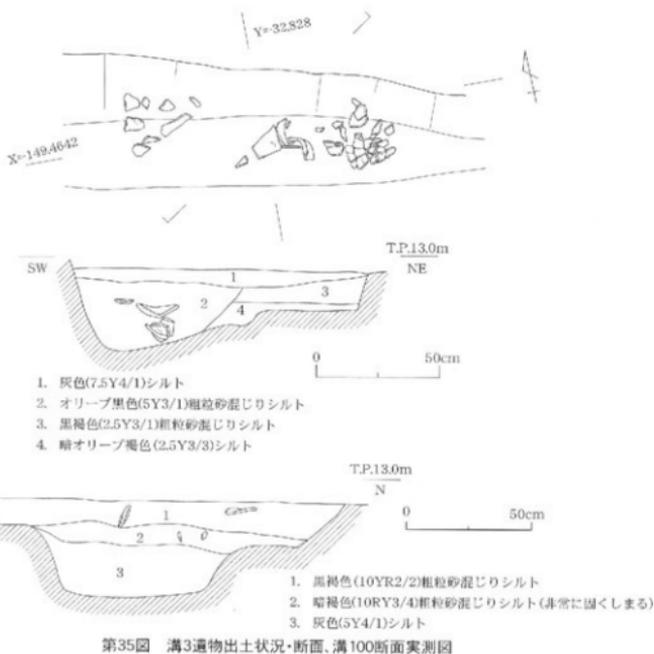
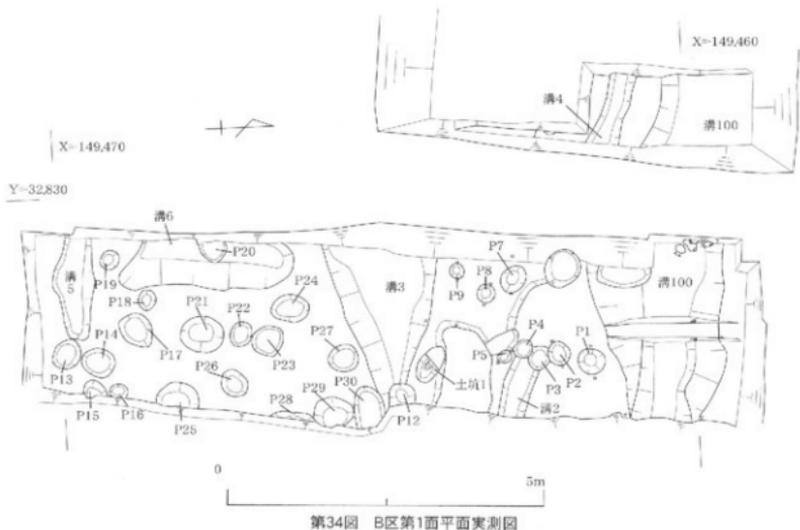
#### 第2面(弥生時代中期～後期)(第38図)

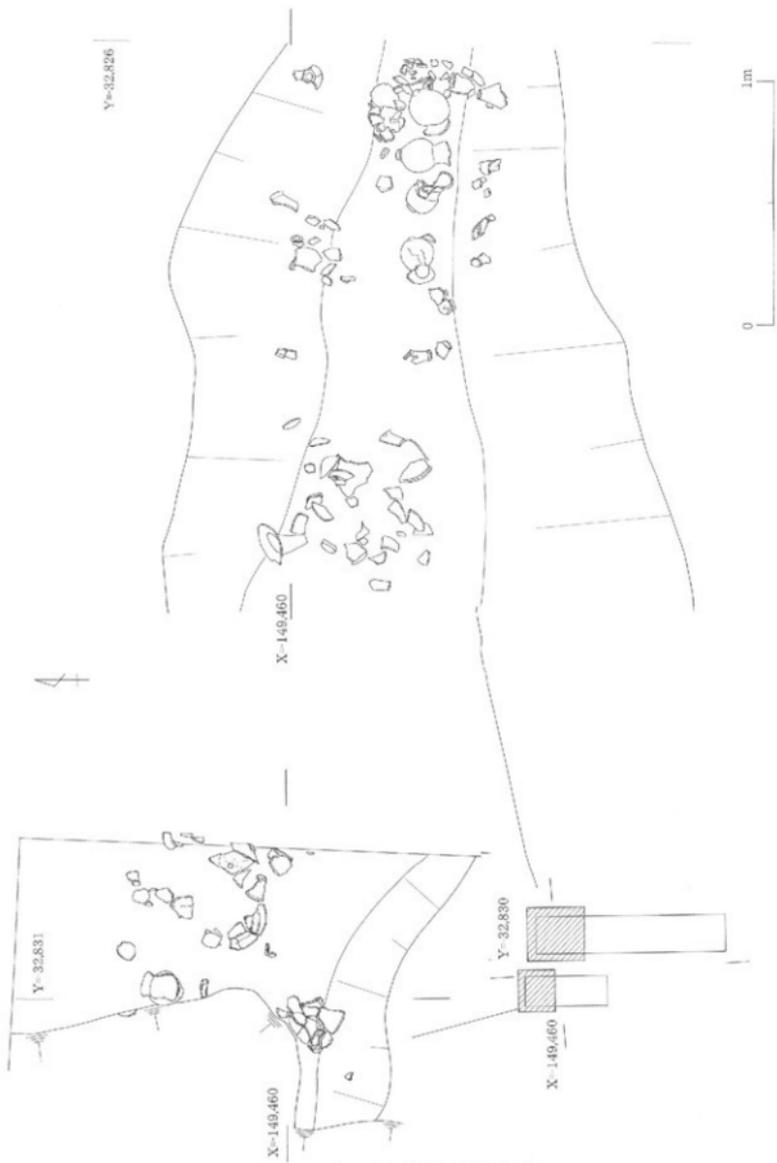
溝・ピット・土坑を検出した。

溝2・4 第1面の段階でも一部を検出していたものである。互いにつながると思われる。それぞれ溝2が長さ3.0m、幅45cm、深さ5cm、溝4が長さ110cm、幅35cm、深さ10cmである。12次調査溝78とつながるようである。

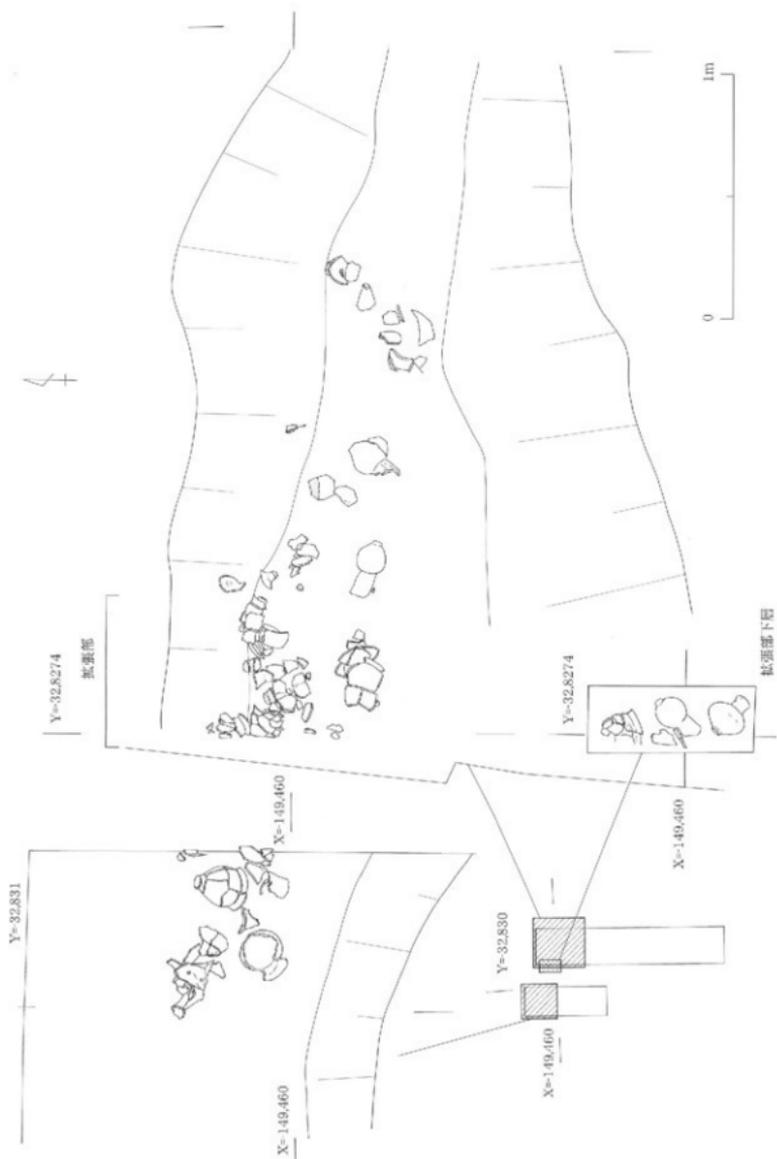
#### 第3面(弥生時代中期?)(第38図)

溝・ピット・土坑を検出した。ほとんどの遺構から遺物が出土しておらず、時期は確定できない。出土している遺物はいずれも弥生土器であり縄文土器は含まれていない。少なくとも縄文時代にいたるものではないであろう。

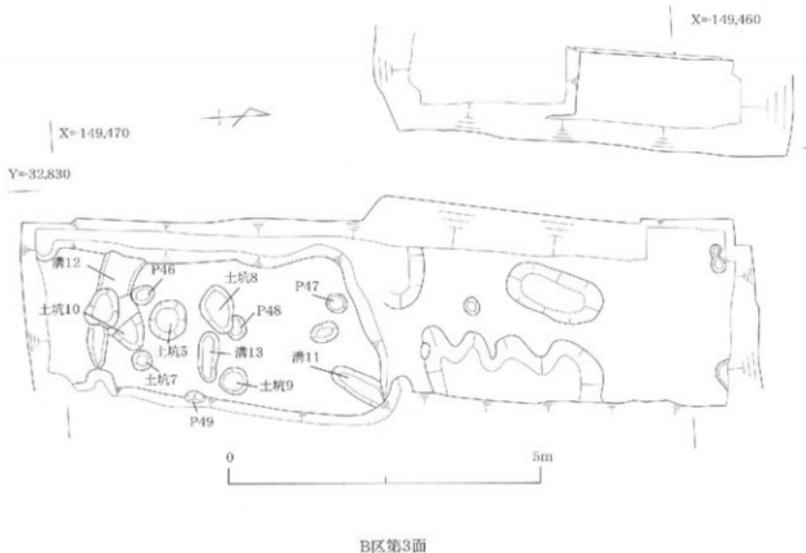
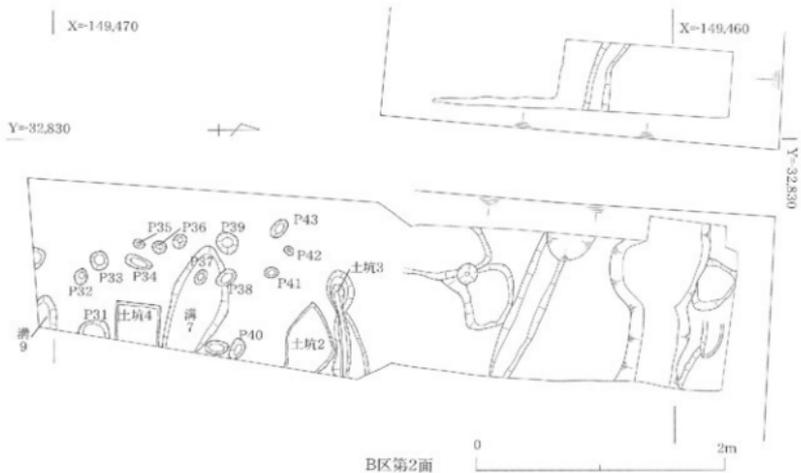




第36图 溝100上層遺物出土状況実測図



第37圖 溝100下層遺物出土狀況實測圖



第38图 B区第2·第3面平面实测图

第1表 遺構観察表

## A区ビット

遺構番号	検出面	地区	出土遺物	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考	遺構番号	検出面	地区	出土遺物	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	第2面	I-5b		30	30	20		80	第4面	II-1b		30	10	15	
2	第2面	I-5c	弥	55	45	10		81	第4面	II-1b		20	10	15	
3	第2面	I-5c	土・須	25	22	15		82	第4面	II-1b		20	20	20	
4	第2面	I-9c	弥	30	30	5		83	第4面	I-10b		10	10	10	
5	第2面	I-9c	弥	30	20	10		84	第4面	I-10b		30	10	20	
6	第4面	I-8c	弥	40	40	15		85	第4面	I-10b		20	15	20	
7	第2面	I-8c	弥	40	30	10		86	第4面	I-10b		20	20	10	
8	第4面	I-8c	弥	50	35	5		87	第4面	I-10b		20	20	10	
9	第4面	I-8c		35	35	20		88	第4面	II-1b	弥・石	50	50	10	
10	第1面	I-7c		30	30	14		89	第4面	I-10c		35	25	10	
22	第4面	I-4a	弥	35	35	10		90	第4面	I-10c	弥	30	30	10	
25	第4面	I-8b		45	40	6		91	第4面	I-10b		20	20	10	
27	第4面	I-10b		40	30	20		92	第4面	I-10b		30	30	15	
28	第4面	I-10b	弥	40	40	30		93	第4面	II-1b		45	35	20	
29	第1面	I-10b		40	20	10		95	第4面	I-10c	弥・須	45	45	20	
30	第4面	I-10b	弥・石	40	40	20		96	第4面	I-10b	弥・製造	30	30	15	
32	第4面	I-8b		30	25	15		97	第4面	I-10b	弥	40	35	10	
36	第4面	I-8b		30	20	10		98	第4面	I-10b		35	35	10	
37	第4面	I-9b		40	40	20		99	第4面	I-10c		50	40	5	
38	第4面	I-9b	弥	35	20	15		102	第4面	I-5c	弥	55	30	10	
39	第4面	I-9b	弥	45	35	20		103	第4面	I-5c		50	40	5	
40	第4面	I-9b		20	20	5		104	第4面	I-5c	弥	65	65	10	
41	第1面	I-9b		30	20	10		105	第4面	I-9b		30	30	10	
42	第4面	I-9b		30	20	10		106	第1面	I-6c		70	65	25	
43	第4面	I-9b		50	40	20		107	第4面	I-6c		60	60	15	
44	第4面	I-9b	弥	50	40	20		108	第4面	I-6c	弥	40	30	10	
45	第4面	I-9b		25	20	6		109	第4面	I-6c	弥	40	40	15	
46	第4面	I-9b	弥	40	30	10		110	第4面	I-6b		60	50	15	
47	第4面	I-9b	弥	55	50	30		111	第4面	I-7c		40	35	20	
48	第4面	I-9b		20	20	10		112	第4面	I-7c		35	30	10	
49	第1面	I-9b		20	20	10		115	第4面	I-5a	弥	35	35	10	
50	第4面	I-9b	弥	50	50	10		118	第4面	I-5a	弥	50	40	10	
51	第4面	I-9b		20	20	10		119	第4面	I-5a	弥	40	35	10	
52	第1面	I-9b		20	20	10		123	第4面	I-5a	弥	50	30	10	
53	第4面	I-9b	弥(中期)	30	25	15		125	第1面	I-4a		25	20	10	
54	第4面	I-9b		40	30	20		127	第4面	I-4a	弥	50	30	10	
55	第4面	I-10b		35	30	5		128	第4面	I-4a	弥	30	30	10	
56	第4面	I-10b	弥	45	30	20		129	第1面	I-4a	弥	45	30	10	
57	第4面	I-10b		30	25	5		130	第4面	I-4a	弥	25	20	5	
58	第4面	I-10b	弥	40	30	20		131	第4面	I-4a		30	30	10	
59	第4面	I-10b		25	20	10		132	第4面	I-4a	弥(中期)	40	35	10	
60	第4面	I-10b	弥	20	20	10		133	第4面	I-4a	弥	30	30	10	
61	第4面	I-10b	弥	30	30	10		134	第4面	I-4a		30	30	10	
62	第4面	I-10b		25	25	10		135	第4面	I-4a	弥	40	40	5	
63	第1面	I-10b	弥	40	30	15		136	第4面	I-5a	弥	30	30	10	
64	第4面	I-10b		30	30	5		138	第4面	I-5a		60	35	10	
65	第4面	I-10b	弥	45	35	20		139	第4面	I-5a	弥・須	50	45	10	
68	第1面	I-10b		35	30	10		140	第4面	I-7b	弥	30	15	10	
69	第4面	I-10b	弥	30	30	10		141	第4面	I-6c	弥	80	60	10	
71	第4面	I-10c		40	30	10		142	第4面	I-4a	弥	30	30	10	
73	第1面	I-10b		30	30	15		123	第4面	I-4a	弥	30	25	10	
74	第4面	I-10b		25	25	10		144	第1面	I-4a	弥	20	20	10	
75	第4面	I-10b		30	20	15		145	第4面	I-10b	弥	30	25	10	
76	第1面	I-10b		50	30	10		146	第4面	I-10b	弥	30	30	10	
77	第4面	I-10b		35	30	25		147	第1面	I-6b		20	20	5	
78	第4面	I-9c		30	30	5		148	第4面	I-6b		30	25	15	
79	第4面	I-9c		30	30	10		150	第5面	I-10b	弥	20	20	10	

## A区ピット

遺構番号	検出面	地区	出土遺物	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	備考	遺構番号	検出面	地区	出土遺物	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	備考
153	第5面	I-6c		40	30	10		182	第5面	I-6b		30	20	10	住居内
154	第5面	I-6c		50	40	15		183	第5面	I-6b		35	25	10	住居内
155	第5面	I-5c		30	20	10		184	第5面	I-6b		35	25	10	住居内
156	第5面	I-6c		45	35	10		185	第5面	I-6a		40	40	10	住居内
157	第5面	I-5c		30	30	10		187	第5面	I-6a		40	25	10	住居内
158	第5面	I-5c		20	20	10		189	第5面	I-6b	弥	30	30	7	住居内
159	第5面	I-10a		50	40	10		190	第5面	I-10b		30	20	10	
160	第5面	I-10a		25	20	15		193	第5面	I-6b		35	30	10	住居内
161	第5面	I-10a		25	25	10		194	第5面	I-6b		35	30	5	住居内
162	第5面	I-10a		30	20	10		195	第5面	I-6b		60	40	15	住居内
163	第5面	I-10a		30	20	10		196	第5面	I-6a		30	20	15	住居内
164	第5面	II-10a		40	30	10		197	第5面	I-6a		30	20	10	住居内
165	第5面	II-1a		40	30	10		198	第5面	I-6a		30	25	10	住居内
166	第5面	I-4b		30	30	10		199	第5面	I-6b		45	45		
168	第5面	I-4b		50	35	10		200	第5面	I-6b		35	30	10	住居内
169	第5面	I-4b		40	40	10		201	第5面	I-5b		25	25	10	住居内
172	第5面	I-7c		30	25	10		202	第5面	I-5b		40	30	11	住居内
173	第5面	I-8c	弥	30	30	10		203	第5面	I-5a		35	30		住居内
174	第5面	I-9a	弥	50	30	5		213	第5面	I-6b		20	20		住居内
179	第5面	I-5b		25	20	10	住居内	214	第5面	I-6b		25	20		住居内
180	第5面	I-6a		40	35	10	住居内	215	第5面	I-6b	弥	20	20	20	住居内
181	第5面	I-6a		40	35	10	住居内								

## A区土坑

遺構番号	検出面	地区	出土遺物	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	備考	遺構番号	検出面	地区	出土遺物	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	第2面	I-8a	弥・土・須 埴土・石	160	50	20		16	第5面	I-9b	弥・石	130	55	15	
2	第2面	I-6a	弥・須・石	130	60	10		17	第5面	I-6c	弥・石	160	80	15	
3	第4面	I-9b	弥	80	80	20		18	第5面	I-4b	弥	95	60	10	
4	第5面	I-9b	弥	70	70	30		19	第5面	I-5b	弥・石	140	35	20	
6	第4面	I-6b	弥	130	50	10		20	第5面	I-10b	弥・石	150	120	35	
7	第4面	I-6b	弥	150	40	10		21	第5面	I-5c	弥	80	30	15	
8	第4面	I-6b	弥	120	40	15		22	第5面	I-4b	弥	135	90	15	
9	第4面	I-7c	弥	90	60	20		23	第5面	I-8a	弥	60	40	10	
10	第4面	I-6b	弥	150	75	10		26	第5面	I-9a	弥	125	50	20	
11	第4面	I-6c	弥	100	80	20		30	第13面	I-5b	弥文	100	80	10	
12	第4面	I-7b	弥	80	80	5		31	第13面	I-5b	弥	90	40	5	
13	第4面	I-7b	弥	85	50	5		32	第13面	I-6b	弥	100	70	15	
14	第5面	I-9b	弥・石	300	140	40		33	第13面	I-5a	弥	100	65	10	
15	第5面	I-9b	弥・石	145	40	15		34	第13面	I-5a	弥	140	110	10	

## A区溝

遺構番号	検出面	地区	出土遺物	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	備考	遺構番号	検出面	地区	出土遺物	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	第1面	I-6b	弥・土・須	1010	40	10		11	第1面	I-7a	土	160	20	5	
2	第1面	I-6b	弥・須	1010	30	5		12	第1面	I-5a	弥・須	990	40	5	
3	第1面	I-6b	弥・土・須	950	35	10		13	第1面	I-4b	土・須 瓦器	500	30	5	
4	第1面	I-5b	土・須	280	30	5		14	第1面	I-5b	土	800	30	5	
5	第1面	I-5b	土・須	160	20	5		15	第1面	I-5c	土	170	35	5	
6	第1面	I-5a	土・須	570	50	10		16	第1面	I-5c	弥・須	180	35	5	
7	第1面	I-4a	土・須 瓦器・石	500	30	10		17	第1面	I-5a	弥・須(東 掘系)・石	1010	160	10	
8	第1面	I-4b	土・須	1020	40	5		19	第1面	I-7b	弥・土・須	1030	50	5	
10	第1面	I-7a	弥・土・須 瓦器	400	80	50		20	第1面	I-6b	弥・土	110	20	5	

## A区溝

遺構番号	検出面	地区	出土遺物	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考	遺構番号	検出面	地区	出土遺物	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
21	第1面	I-6b	弥・土・須	100	20	5		61	第2面	I-10b	土・須・石	1250	50	20	溝37・8と接続
22	第1面	I-7c	弥	350	60	10		65	第2面	I-8b	弥・土	100	20	10	
23	第1面	I-5a	弥・土・須・瓦器	560	70	10		68	第2面	I-10c	土	320	45	10	
24	第1面	I-4a	弥・土・須・石	1010	120	20		70	第2面	I-5b	土・須	590	45	15	
25	第1面	I-5a	弥・土・須	350	30	5		71	第2面	I-5b	弥・土・須	1010	50	10	
26	第1面	I-5b	土・須	210	30	5		75	第2面	I-6b	弥・土・須	770	30	10	
27	第1面	I-6a	弥・土	70	20	5		76	第2面	I-6b	弥・土・須	770	40	10	
28	第1面	II-1b	土・須	100	20	5		79	第1面	I-7a	弥・土	280	30	5	
29	第1面	II-1b	七	110	20	5		81	第2面	I-6b	弥・土・須・製塩	2140	50	10	
32	第1面	II-1b		90	20	5		83	第2面	I-6a	弥・土・須・埴輪・石	2400	100	15	溝37・8と接続
33	第1面	I-10c		160	30	5		84	第2面	I-10b	弥	140	30	10	
34	第1面	I-10c	弥・須	310	20	5		98	第3面	I-6a	埴輪・石	1250	80	15	3号溝周溝
35	第1面	I-10c	弥・土・須・製塩	410	35	5		99	第3面	I-6b	弥・須・埴輪・石	700	100	25	4号溝周溝
37	第1面	I-4b		300	15	5		100	第4面	I-10b	弥・石	1000	200	30	
38	第1面	I-4a		300	15	5		101	第4面	I-9b	弥	400	110	25	
39	第1面	I-4a		220	10	5		102	第4面	I-9b	弥・土(古墳前期)・石	600	100	10	
40	第1面	I-5c		210	60	10		103	第4面	I-10b		60	20	5	
41	第1面	I-5b		710	50	5		105	第4面	I-6b	弥・石	1250	250	50	
42	第1面	I-5c		80	10	5		106	第4面	I-6b	弥	80	20	5	
43	第2面	I-5a	弥・土・瓦器	400	50	10		107	第5面	I-9c	弥	750	70	10	
44	第2面	I-5a	弥	340	40	5		108	第4面	I-7b	弥	260	50	10	
45	第2面	I-5a	弥・土・須	550	50	15		109	第4面	I-7b	弥	70	30	5	
46	第2面	I-5a	弥・土・須	570	70	10		110	第5面	I-5a	弥	440	80	50	
47	第2面	I-4b	弥・土・須	360	30	5		112	第5面	I-10b	弥	320	30	10	
48	第2面	I-4b	弥・土・須・石	430	40	10		113	第5面	I-5a	弥	450	40	10	
49	第2面	I-5c	弥・須	190	100	10		114	第5面	I-5c	弥	120	70	20	
50	第2面	I-5c	土	210	50	10		115	第5面	II-1b	弥	100	20	5	
52	第2面	I-6b	弥・土・須	1010	60	10		116	第5面	I-4b	弥	310	40	15	
56	第2面	I-10c	弥・土・須・製塩	690	40	10	溝81と接続	117	第5面	I-4b	弥	350	130	25	
57	第2面	I-10b		1250	35	20	溝82・83と接続	118	第5面	I-9c	弥	190	40	10	
								120	第5面	I-6a		900	40		住居跡

## B区ピット

遺構番号	検出面	出土遺物	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考	遺構番号	検出面	出土遺物	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	第1面	弥	40	40	23		20	第1面	弥	30	30	10	
2	第1面	弥・土	40	35	10		21	第1面	弥・須	40	35	5	
4	第1面		35	30	13		22	第1面	弥	70	60	10	
5	第1面		30	30	10		23	第1面		40	35	5	
6	第1面		40	40	10		24	第1面	弥	50	50	5	
7	第1面		45	40	15		25	第1面	弥	60	45	10	
9	第1面		30	30	10		26	第1面	弥	70	40	10	
11	第1面	須	35	35	10		27	第1面	弥	40	40	10	
12	第1面	弥	40	35	15		28	第1面		70	10	5	
13	第1面	弥	50	40	10		29	第1面	弥・土・石	55	50	20	
14	第1面	弥	50	45	10		30	第1面	弥	65	50	5	
15	第1面	弥	40	25	15		31	第2面	弥・土・須	50	25	5	
16	第1面	弥	30	20	10		32	第2面	弥	15	15		
17	第1面	弥・石	60	50	5		33	第2面	弥	30	25		
18	第1面		30	30	5								

## B区ビット

遺構番号	検出面	出土遺物	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考	遺構番号	検出面	出土遺物	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
34	第2面	弥	45	20			42	第2面		15	10		
35	第2面	弥	15	10			43	第2面	弥	30	20		
36	第2面		20	20			44	第2面	須	40	20		
37	第2面		25	20			45	第2面	弥	35	20		
38	第2面		35	20			46	第3面	弥	50	45	5	
39	第2面		40	30			47	第3面		30	30	10	
40	第2面		30	20			48	第3面		40	30	10	
41	第2面	弥	20	20			49	第3面		35	10	5	

## B区溝

遺構番号	検出面	出土遺物	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考	遺構番号	検出面	出土遺物	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	第1面	弥・須・土	240	160	5		9	第2面	弥	60	30		
2	第2面	弥	300	45	5	溝4と接続	10	第2面	弥	150	15		
3	第1面	弥	210	190	30		11	第3面	弥	100	40	15	
4	第2面	弥・土	110	35	10	溝2と接続	12	第3面		190	55	10	
5	第1面	弥	165	65	10		13	第3面		80	35	5	
6	第1面	弥	275	70	50		100	第1面	弥	560	200	40	12次調査の続き
7	第2面	弥	170	100									

## B区土坑

遺構番号	検出面	出土遺物	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考	遺構番号	検出面	出土遺物	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	第1面	弥	65	35	20		7	第3面		35	35	8	
2	第2面		110	80			8	第3面		80	50	10	
3	第2面		60	40			9	第3面		45	45	10	
4	第2面		70	60			10	第3面		70	60	10	
5	第3面		65	60	15								

### 3. 出土遺物

#### 1) 土器

縄文土器 各遺構面および包含層から多数の土器が出土しているが、器形を復元できるものは数点に過ぎず大半は器形すら定かでない小片である。以下に掲載するものはそれらの内から口縁部と底部及び、調整・文様の認められる体部を選び出したものである。胎土中に角閃石を多く含むいわゆる「生駒西麓産」については在地の土であるため過半数をしめており煩雑になるため特に記していない。胎土の観察で角閃石が認められなかったものを「非生駒西麓の胎土」として記述している。また破片資料の拓本は断面の右側が外面、左側が内面になっている(48のみ左側に位置するが外面の拓本である)。

縄文土器については、泉 拓良 1980、千葉 豊 1989、家根祥多 1994などを参考にした。

#### 遺構出土の土器(第39～44図)

第12面(第39～40図) 土坑30・土坑34・貯蔵穴1・河川4から遺物が出土している。

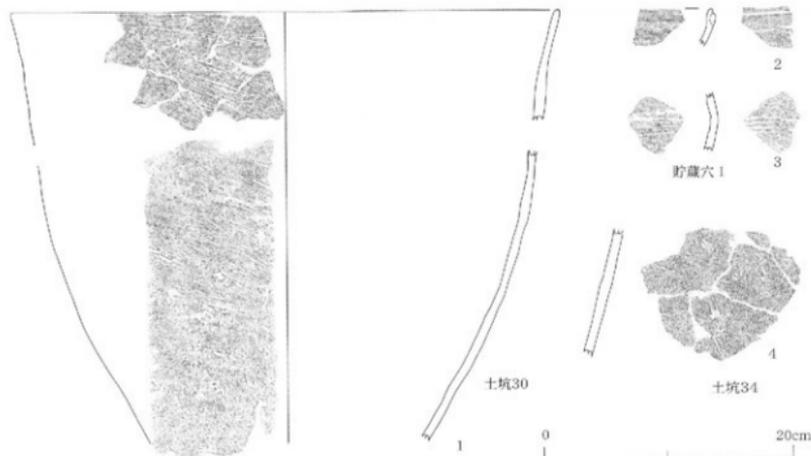
土坑30出土遺物(第39図1) 後期前葉北白川上層式1期の深鉢が出土している。1は遺構検出時に上面に貼りつくような状態で出土したものである(第33図)。口縁と体部は接合しなかったが、同一個体であり、写真図版20のものも全て同一個体の破片である。口径43.8cm。外面調整条痕、内面調整ナデ、内面には煤の付着が、外面には黒斑が見られる。また胎土に長石粒を非常に多く含む。非生駒西麓の胎土。

貯蔵穴1出土土器(第39図2・3) 深鉢及び浅鉢が埋土の中程から出土している。

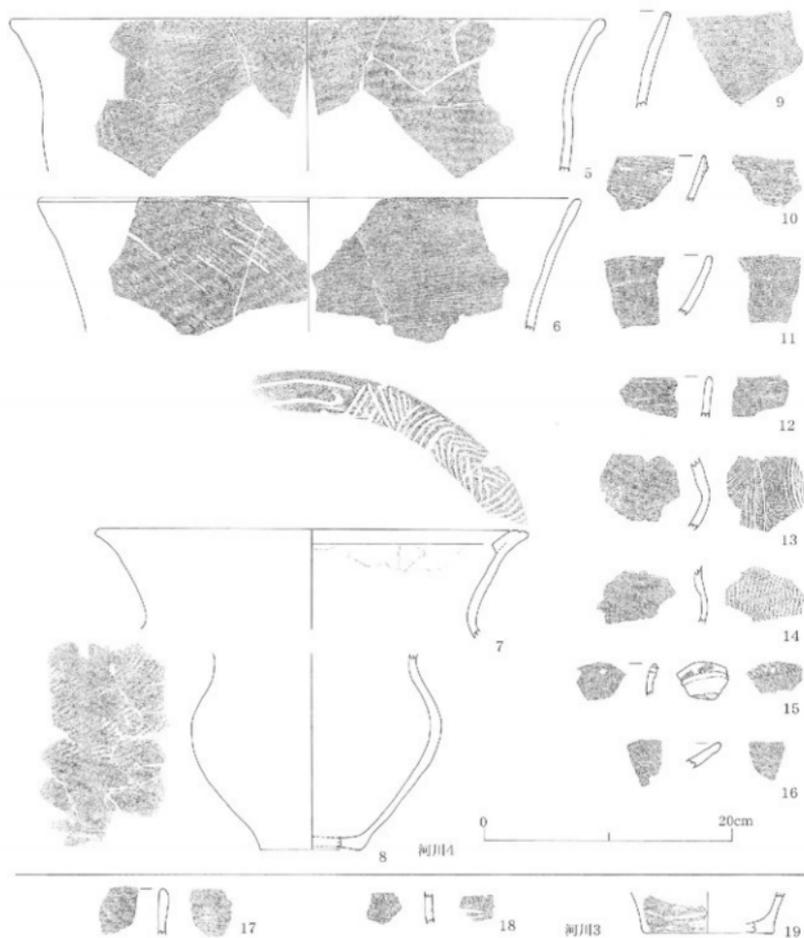
深鉢(3)3は残存器高5.0cm。外面調整条痕、内面調整ナデ。

浅鉢(2)2は残存器高3.1cm。口縁部外面直下に沈線を一条施す。外面調整ナデ、内面調整ミガキ。

土坑34出土土器(第39図4) 深鉢が出土している。4は残存器高10.5cm。外面調整ミガキ、内面調整ナデ。胎土に長石粒を多く含む。



第39図 第12面土坑30・34、貯蔵穴1出土土器実測図



第40図 第12面河川4・第11面河川3出土土器実測図

河川4出土土器(第40図5~16) 12点を図示した。深鉢及び浅鉢である。後期前葉北白川上層式1期である。

深鉢(5~14) 深鉢はいずれも外面に煤が付着している。5は口径47.4cm、残存器高12.5cm、口縁はゆるやかに外方へひらき、端部外面に縄文を施す。体部外面及び内面調整ミガキ、非生駒西麓の胎土。6は口径43.0cm、残存器高10.9cm、口縁端部はやや肥厚している。内外面調整条痕、内面にも煤が付着する。非生駒西麓の胎土。7は口径35.0cm、残存器高8.2cm、口縁内面に面を作り、文様を施す。文様は縄文の後に沈線を施すことによって描かれる。外面の残存最下端に縦方向の沈線があるようなので、何らかの文様が施されていた可能性

がある。外面調整ケズリ、内面調整ミガキ。内面にも煤が付着しており、口縁内面の文様帯下には炭化物が付着している。非生駒西麓の胎土。8は底径8.2cm、残存器高16.0cm。口縁部が欠損する。外面調整条痕及び縄文、体部下半及び内面調整はミガキ。内面にも煤が付着する。9は残存器高7.9cm。口縁は山形の突起を持つようである。外面調整条痕、内面調整不明。胎土に長石粒を含む。10は残存器高3.8cm。口縁は外方に肥厚する。内外面調整条痕、波状口縁になる可能性がある。非生駒西麓の胎土。11は残存器高5.0cm。外面調整ミガキ。内面調整ナデ。内面にも煤付着。12は残存器高3.3cm。外面調整二枚貝条痕。内面調整ナデ。非生駒西麓の胎土。13は残存器高5.8cm。外面にへら描き沈線で文様が施されている。内面調整ナデ。内面にも煤と炭化物が付着している。非生駒西麓の胎土。14は残存器高4.7cm。外面は全体に縄文が施される。内面調整ナデ。非生駒西麓の胎土。

浅鉢(15・16) 15は残存器高2.5cm。外面口縁端部に縄文が施され、穿孔が一つ施される。外面調整ミガキ、内面調整ナデ。16は残存器高2.0cm、内外面調整ナデ。外面に煤が付着している。

#### 第11面(第40図)

河川3出土土器(第40図17~19) 3点を図示した。深鉢及び底部である。

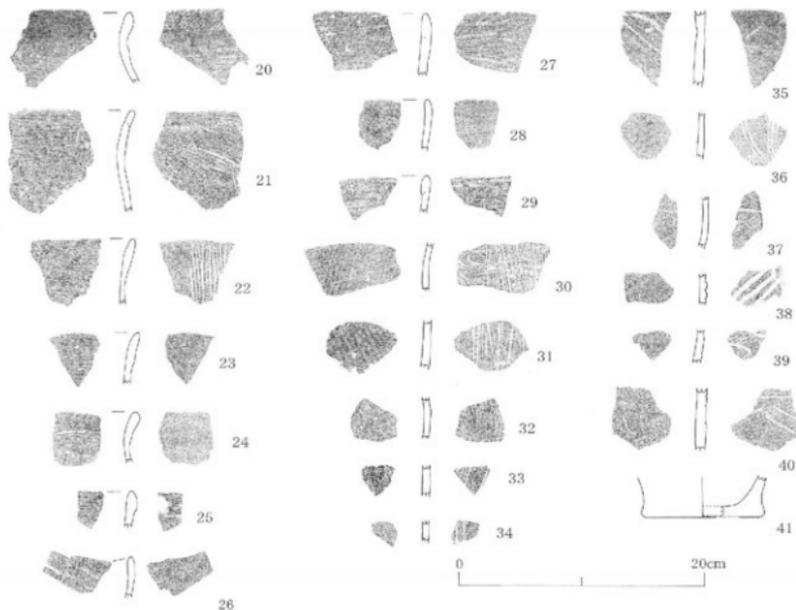
深鉢(17・18) 17は残存器高3.8cm。外面調整条痕、口縁部のみナデ、内面調整ミガキ。外面に煤付着。18は残存器高2.5cm。外面に縄文が施され、沈線が一条残存する。内面調整ナデ。非生駒西麓の胎土。

底部(19) 19は底径10.2cm、残存器高3.3cm。外面調整条痕、内面調整ナデ。

#### 第10面(第41図)

河川1出土土器(第41図20~41) 22点を図示した。深鉢及び底部である。後期前葉北白川上層式1~2期である。

深鉢(20~40) 39以外は外面に煤が付着している。20は残存器高6.2cm。口縁外面に縄文を施す。外面調整ナデ、内面調整ミガキ。21は残存器高8.3cm。外面調整条痕、内面調整ミガキ。22は残存器高5.3cm。外面に縦方向の多条沈線を施す。内面調整ミガキ。内面に焼け焦げあり。非生駒西麓の胎土。23は残存器高4.0cm。外面調整ミガキ、内面調整ナデ。24は残存器高4.2cm。摩滅のため定かではないが、口縁外面に縄文が施されているようである。内外面調整ミガキ。25は残存器高2.9cm。口縁端部は外方に肥厚している。内外面調整ミガキ。非生駒西麓の胎土。26は突起部分で残存器高4.0cm。外面調整二枚貝条痕、内面調整ミガキ。非生駒西麓の胎土。27は残存器高5.3cm。外面調整ナデ、内面調整条痕。28は残存器高4.0cm。内外面調整ミガキ。内面にも煤付着。29は残存器高3.0cm。口縁端部は内側に肥厚する。外面調整ナデ、内面調整ケズリ。30は残存器高3.8cm。外面に縦方向の多条沈線を施す。内面調整ミガキ。31は残存器高4.1cm。外面に縦方向の多条沈線を施す。内面調整ナデ。32は残存器高3.5cm。外面に縦方向の多条沈線を施す。内面調整ナデ。33は残存器高2.5cm。外面に縦方向の沈線を施す。内面調整ナデ。34は残存器高1.7cm。外面に縦方向の沈線を施す。内面調整ナデ。33・34の沈線は22・30~32の沈線と比べ規則的であり、文様の一部を構成するものかもしれない。35は残存器高6.8cm。外面調整条痕、内面調整ケズリ。36は残存器高4.0cm。外面に三条で一組になる沈線が2組あり文様が描かれているようである。内面調整ミガキ。37は残存器高4.3cm。外面に斜め方向の細い沈線が施される。内面調整ナデ。非生駒西麓の胎土。38は残存器高2.6cm。外面に縄文と幅の広い沈線を施す。内面調整ナデ。39は残存器高2.7cm。外面に縄文と幅の広い沈線を二条施す。内面調整ナデ。非生駒西麓の胎土。40は残存器高5.2cm。外面に縄文の後に沈線を施す。内面調整ナデ。



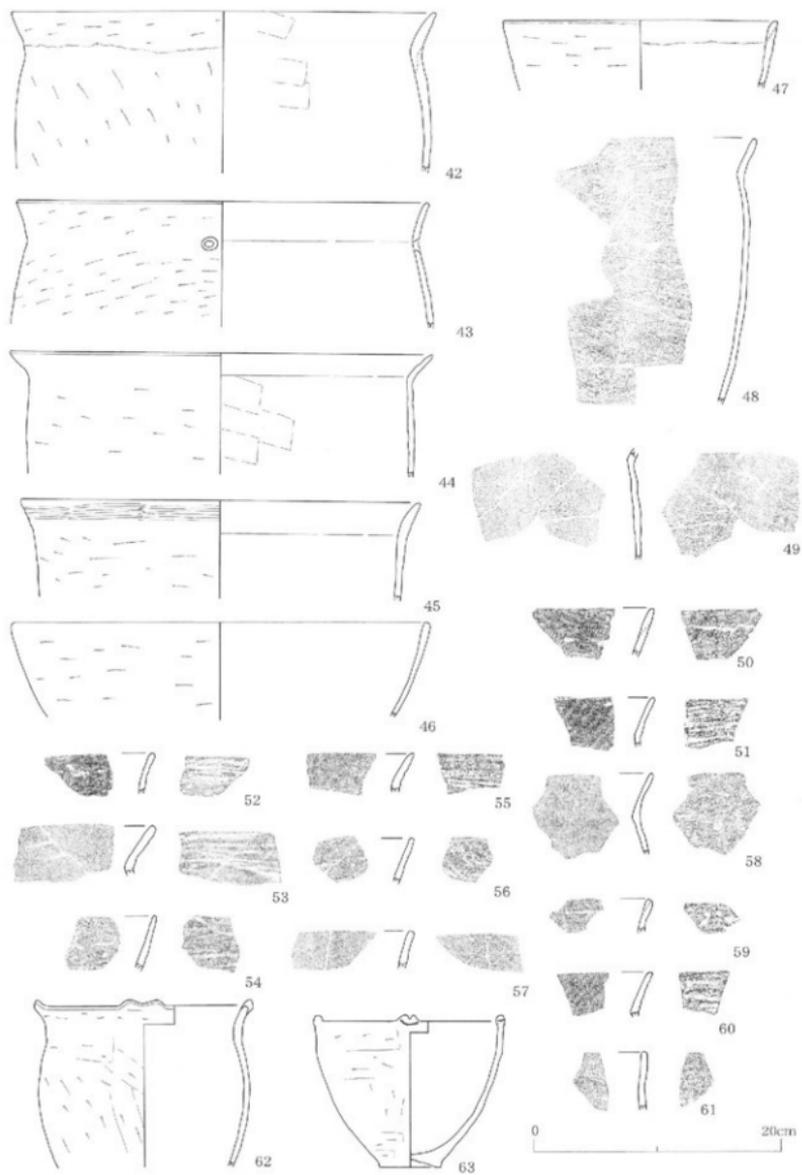
第41図 第10面河川1出土土器実測図

底部(41) 41は底径10.0cm、残存器高3.5cm、外面調整ナデ、内面調整ケズリ。非生駒西麓の胎土

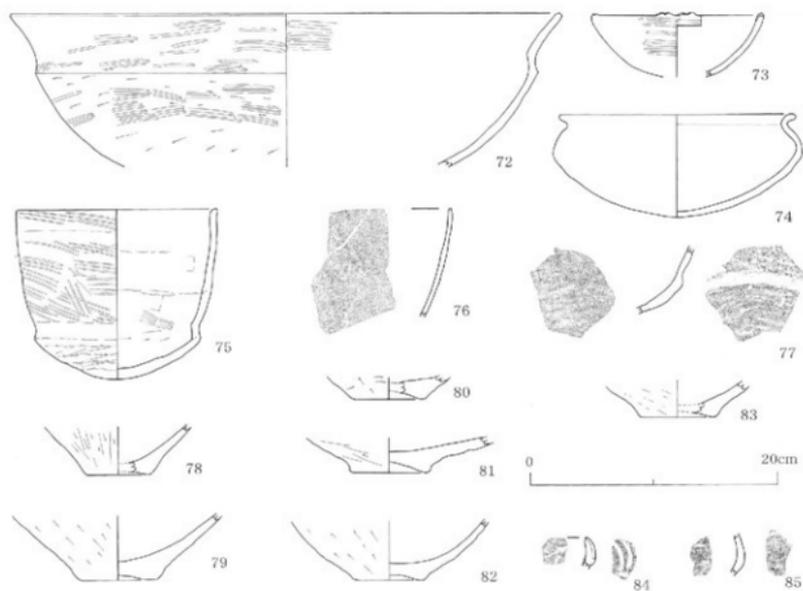
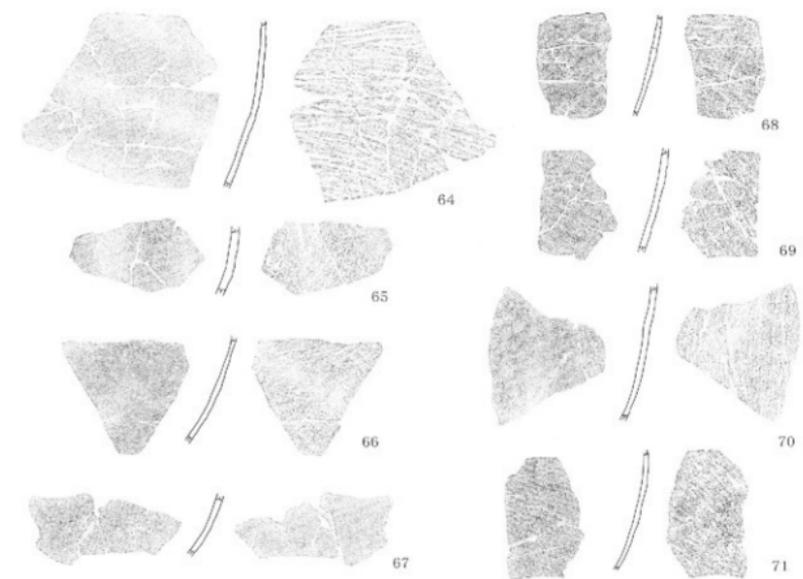
#### 第9面(第42・43図)

土器集中出土土器(第42・43図42~85) 44点を図示した。深鉢、浅鉢、底部である。他の遺構・包含層出土土器と比べて、破片が大きく器形を復元できるものは多いが、器表面の残存状況が良くないのか煤の付着が認められるものが少ない。晩期畿原式古段階である。

深鉢(42~71・84・85) 口縁形態には端部が外方へひろくもの(42~45・48・49・51~53・55・58・62)と、内湾もしくはまっすぐに立ち上がるもの(46・47・50・54・63)とがある。42は口径34.0cm、残存器高13.3cm。外面調整ケズリ、内面調整イタナデ。43は口径33.0cm、残存器高10.2cm。外面調整ケズリ、内面調整ナデ。頸部と体部の境に補修孔が1個残存している。44は口径34.0cm、残存器高10.0cm。外面調整ケズリ、内面調整イタナデ。45は口径32.0cm、残存器高8.0cm。外面調整は頸部が二枚貝条痕、体部がケズリ、内面調整ナデ。46は口径33.8cm、残存器高7.7cm。外面調整ケズリ、内面調整ナデ。47は口径11.0cm、残存器高6.0cm。外面調整ケズリ、内面調整ナデ。48は残存器高21.9cm。外面調整ケズリ、内面調整イタナデ。49は残存器高9.2cm。外面調整は頸部がナデ、体部がケズリ、内面調整イタナデ。50は残存器高4.0cm。内外面調整ナデ。51は残存器高4.0cm。外面調整ケズリ、内面調整ナデ。52は残存器高3.3cm。外面調整二枚貝条痕、内面調整ナデ。53は残存器高3.9cm。外面調整二枚貝条痕、内面調整摩滅のため不明。54は残存器高4.5cm。外面調整二枚貝条痕、内面調整ナデ。55は残存器高3.2cm。外面調整二枚貝条痕、内面調整ナデ。56は残存器高3.8cm。外面調整ケズリ後ナデ、内面調整ナデ。



第42图 第9面土器集中部出土土器実測图(1)



第43图 第9面土器集中部出土土器实例图(2)

非生駒西麓の胎土。57は残存器高4.0cm。摩滅のため調整不明。58は残存器高6.6cm。外面調整ケズリ。内面調整ナデ。59は残存器高2.7cm。外面調整ケズリ、内面調整ナデ。60は残存器高3.5cm。外面調整ケズリ、内面調整ナデ。61は残存器高4.7cm。外面調整ケズリ、内面調整ナデ。非生駒西麓の胎土。62は口径17.8cm、残存器高13.7cm。口縁端部に2個1対の山形の突起がつく。外面調整ケズリ、内面調整ナデ。63は口径14.8cm、器高12.4cm、底径5.0cm。口縁端部に刻み目をもつ突起がつく。外面調整ケズリ、内面調整ミガキ。非生駒西麓の胎土。64は残存器高13.8cm。外面調整二枚貝条痕、内面調整イタナデ。外面に煤付着。65は残存器高5.8cm。外面調整ケズリ、内面調整ナデ。66は残存器高8.8cm。外面調整ケズリ、内面調整ナデ。非生駒西麓の胎土。67は残存器高5.1cm。内外面調整ナデ。68は残存器高8.5cm。外面調整ケズリ、内面ナデ。69は残存器高8.5cm。外面調整ケズリ、内面調整イタナデ。70は残存器高11.0cm。外面調整ケズリ、内面調整ナデ。非生駒西麓の胎土。71は残存器高9.7cm。外面調整ケズリ、内面調整ナデ。84・85は後期の深鉢である。84は残存器高2.5cm。外面に沈線が施される。内面調整ナデ。85は残存器高3.3cm。外面に縄文及び一糸の沈線が残る。内面調整ナデ。非生駒西麓の胎土。

浅鉢(72~77) 72は口径44.4cm、残存器高12.5cm。口縁は頸部で屈曲して外方へひらく。外面調整ケズリ後ミガキ、内面調整ミガキ。非生駒西麓の胎土。73は口径14.0cm、残存器高5.2cm。口縁部は若干内湾する。外面調整ミガキ、内面調整ナデ。口縁端部に2個1対の突起がつく。非生駒西麓の胎土。74は口径18.6cm、器高8.5cm。口縁部は一度内湾し再び外方へひらく。内外面調整ミガキ。丸底である。非生駒西麓の胎土。75は口径16.0cm、器高13.9cm。丸底の鉢の上に筒状の体部がのったような形状で、外面調整は上方が二枚貝条痕、下方がナデ、内面調整イタナデ。76は残存器高8.9cm。外面調整ナデ、内面調整摩滅のため不明。非生駒西麓の胎土。77は残存器高5.6cm。外面調整ケズリ、内面調整二枚貝条痕。

底部(78~83) 底部は全てが凹底である。78は底径5.0cm、残存器高4.1cm。外面調整ケズリ、内面調整ミガキ。79は底径6.0cm、残存器高5.5cm。外面調整ケズリ、内面調整ナデ。80は底径5.8cm、残存器高1.9cm。外面調整ケズリ、内面調整ナデ。非生駒西麓の胎土。81は底径6.0cm、残存器高3.0cm。外面調整ケズリ、内面調整ミガキ。82は底径5.6cm、残存器高5.0cm。外面調整ケズリ、内面調整ナデ。83は底径3.0cm、残存器高3.0cm。外面調整ケズリ、内面調整ナデ。

#### 第8面(第44図)

自然流路出土土器(第44図86~88) 3点を図示した。深鉢及び底部である。

深鉢(86・87) 86は口径25.6cm、残存器高5.8cm。内外面調整ミガキ、口縁端部内面には沈線を一条施し、外面には突帯を一条持つ。87は口径25.8cm、残存器高6.5cm。外面調整ナデ、内面調整ミガキ。

底部(88) 88は底径5.2cm、残存器高1.5cm。内外面調整ナデ。中央部が凹底のものである。

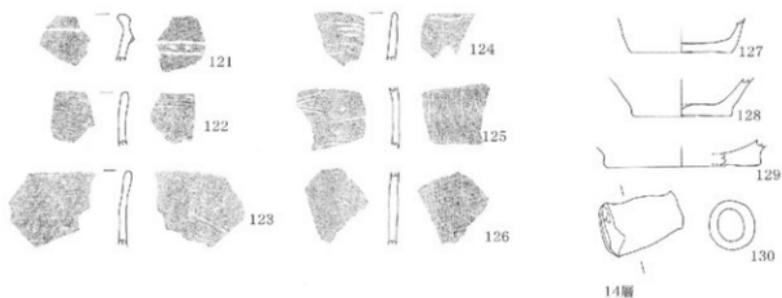
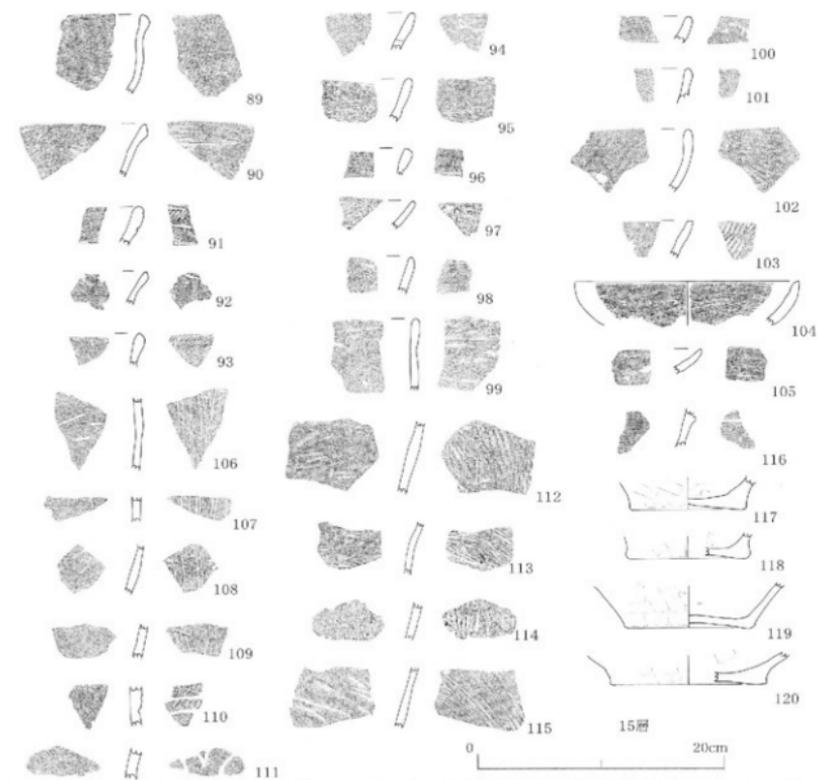
#### 包含層出土土器(第45~47図)

15層出土土器(第45図89~120) 32点を図示した。深鉢、浅鉢、底部である。後期前葉北白川上層式1~2期である。

深鉢(89~101・106~116) 89は残存器高6.5cm、



第44図 第8面自然流路出土土器実測図



第45图 第14·15层出土土器实测图

外面は頸部に無文の部分があるが、口縁部と体部に縄文を施す。内面調整ナデ。非生駒西麓の胎土。90は残存器高4.3cm。外面口縁部に縄文、体部に条痕を施す。内面調整ナデ。非生駒西麓の胎土。91は残存器高3.2cm。外面口縁部に二本の沈線を施し、その間に縄文が認められる。内面調整ナデ。非生駒西麓の胎土。92は残存器高2.6cm。口縁外面に縄文を施す。内外面調整ナデ。非生駒西麓の胎土。93は残存器高2.5cm外面に縄文が施される。内面調整ナデ。非生駒西麓の胎土。94は残存器高3.0cm。内外面調整ナデ。補修孔が1個開けられる。非生駒西麓の胎土。95は残存器高3.3cm。内外面調整ナデ。非生駒西麓の胎土。96は残存器高2.2cm。内外面調整ナデ。97は残存器高2.2cm。内外面調整ナデ。非生駒西麓の胎土。98は残存器高3.0cm。外面調整条痕、内面調整ナデ。非生駒西麓の胎土。99は残存器高6.0cm。外面調整条痕、内面調整ナデ。100は残存器高2.1cm。内外面調整ナデ。101は残存器高2.6cm。内外面調整ナデ。非生駒西麓の胎土。106は残存器高5.8cm。外面に縦方向の多条沈線を施す。内面調整ケズリ。外面に煤付着。107は残存器高2.1cm。外面に縦方向の多条沈線を施す。内面調整ナデ。外面に煤付着。非生駒西麓の胎土。108は残存器高4.0cm。外面に縦方向の多条沈線を施す。内面調整ナデ。外面に煤付着。非生駒西麓の胎土。109は残存器高2.7cm。外面に縦方向の多条沈線を施す。内面調整ナデ。外面に煤付着。内面に焼け焦げあり。110は残存器高3.3cm。外面縄文の後に沈線を二条施す。内面調整ナデ。111は残存器高2.5cm。外面に沈線が四条認められる。何らかの文様の一部であろう。112は残存器高5.9cm。外面調整条痕、条痕の後に縦方向の多条沈線が施される。内面調整ナデ。外面に煤付着。113は残存器高4.3cm。外面全体に縄文が施される。内面調整ナデ。非生駒西麓の胎土。114は残存器高3.2cm。外面に縦方向の多条沈線が施される。内面調整は摩滅のため不明。非生駒西麓の胎土。115は残存器高5.0cm。外面に斜め方向の多条沈線施される。内面調整条痕。116は残存器高3.0cm。外面に沈線が一条認められる。内外面調整ナデ。非生駒西麓の胎土。

浅鉢(102~105) 102は残存器高5.0cm。内外面調整ナデ。103は残存器高3.0cm。口縁部は面をなし、外面は全体に縄文を施す。内面調整ナデ。非生駒西麓の胎土。104は口径18.0cm。残存器高3.6cm。内外面調整条痕。外面に煤付着。105は残存器高2.0cm。内外面調整条痕。

底部(117~120) 117は底径9.6cm。残存器高2.6cm。内外面調整イタナデ。118は底径9.5cm。残存器高2.1cm。内外面調整イタナデ。119は底径9.8cm。残存器高3.6cm。外面調整イタナデ、内面調整ケズリ。120は底径12.4cm。残存器高2.8cm。内外面調整イタナデ。

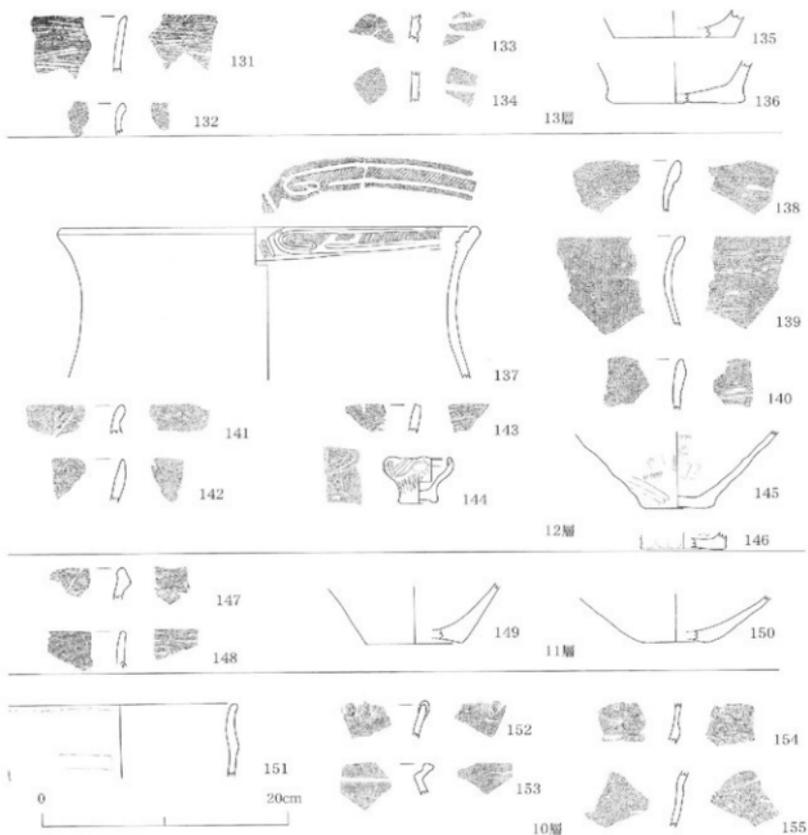
14層出土土器(第45図121~130) 10点を図示した。深鉢、浅鉢、底部、注口土器である。後期前東北白川上層式1~2期である。

深鉢(122~126) 122は残存器高4.4cm。内外面調整条痕。外面に煤付着。非生駒西麓の胎土。123は残存器高6.1cm。内外面調整条痕。124は残存器高3.9cm。外面調整ナデ、内面調整条痕。125は残存器高4.8cm。外面に縦方向の多条沈線が施される。内面調整条痕。外面に煤付着。内面に焼け焦げあり。126は残存器高5.8cm。外面に縦方向の多条沈線が施される。外面調整条痕、内面調整ミガキ。外面煤付着、内面に焼け焦げあり。

浅鉢(121) 121は残存器高3.7cm。口縁部は内側に拡張され、外面下方に刻み目をもつ突帯がつく。外面に煤付着。非生駒西麓の胎土。

底部(127~129) 127は底径8.0cm。残存器高2.9cm。外面調整ケズリ、内面調整ナデ。外面に煤付着。128は底径8.2cm。残存器高3.1cm。外面調整条痕、底面ケズリ、内面調整ナデ。外面に煤付着。129は底径12.0cm。残存器高2.3cm。摩滅のため調整不明。

注口土器(130) 130は最大径4.1cm。残存長6.5cm。外面調整ミガキ、内面調整ナデ。注口部分は



第46図 第10～13層出土土器実測図

完存している。非生駒西麓の胎土。

13層出土土器(第46図131～136) 6点を図示した。深鉢及び底部である。後期前葉北白川上層式1～2期である。

深鉢(131～134) 131は残存器高4.8cm, 内外面調整条痕。内面に煤附着。132は残存器高2.7cm, 外面口縁端部に縄文を施す。内外面調整ナデ。非生駒西麓の胎土。133は残存器高2.3cm, 外面に縄文を施した後に二条の沈線を施す。内面調整ケズリ。134は残存器高2.5cm, 外面に縄文と沈線を施す。内面調整ケズリ。非生駒西麓の胎土。

底部(135・136) 135は底径9.8cm, 残存器高2.2cm, 摩滅のため調整不明。136は底径11.2cm, 残存器高3.5cm, 外面調整ケズリ。内面調整は摩滅のため不明。

12層出土土器(第46図137~146) 10点を図示した。深鉢、浅鉢、ミニチュア土器、底部である。後期前葉北白川上層式2期である。

深鉢(137~142) 137は口径34.0cm、残存器高12.3cm。口縁部がゆるやかに外方へひらいていくもので、口縁内面に面を作り、沈線と縄文で文様を描いているものである。内外面調整ミガキ、内外面に煤付着。非生駒西麓の胎土。138は残存器高4.0cm、外面調整ミガキ。内面調整二枚貝条痕。口縁は外方に肥厚する。また波状口縁になる可能性もある。139は残存器高7.3cm、内外面調整二枚貝条痕。138と139は同一個体の可能性がある。140は残存器高4.0cm、内外面調整二枚貝条痕。141は残存器高2.3cm、内外面調整ナデ。非生駒西麓の胎土。142は残存器高3.5cm、摩滅のため調整不明。非生駒西麓の胎土。

浅鉢(143) 143は残存器高2.3cm、外面調整二枚貝条痕、内面調整ナデ。口縁端部に沈線を一条施す。非生駒西麓の胎土。

ミニチュア土器(144) 144は復元口径5.0cm、残存器高3.8cm。深鉢のミニチュアであろう。外面に沈線で文様を施す。内外面調整ナデ、外面に煤が付着する。非生駒西麓の胎土。

底部(145・146) 145は底径4.6cm、残存器高6.2cm。内外面調整ナデ。146は底径6.5cm、残存器高1.3cm、外面調整ナデ、内面調整ケズリ。

11層出土土器(第46図147~150) 4点を図示した。深鉢及び底部である。

深鉢(147・148) 147は残存器高2.6cm。口縁が内側に拡張される。内外面調整ナデ。外面に煤付着。148は残存器高3.1cm、内外面調整ミガキ。非生駒西麓の胎土。

底部(149・150) 共に凹底である。149は残存器高4.6cm。内外面調整ナデ。外面が焼けて赤く変色している。150は残存器高3.9cm。内外面調整ナデ。

10層出土土器(第46図151~155) 5点を図示した。深鉢・浅鉢で、晩期篠原式古段階である。

深鉢(151・152・154・155) 151は口径18.4cm、残存器高6.9cm。口縁端部が外方へ軽く折り曲げられる。外面調整イタナデ、内面調整ナデ。内外面に煤付着。152は残存器高3.0cm。口縁部に2個1対の突起を貼り付ける。内外面調整ナデ。154は残存器高3.3cm、内外面調整ケズリ。155は残存器高4.5cm。外面調整ケズリ、内面調整ナデ。

浅鉢(153) 153は残存器高2.5cm。口縁が一度外方へ広がり、内側に折り曲げられて丸くおさまられる。内外面調整ナデ。非生駒西麓の胎土。

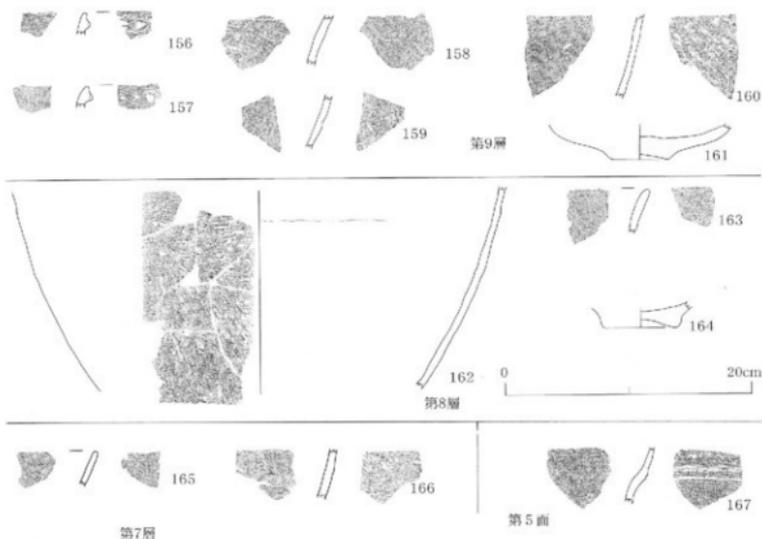
9層出土土器(第47図156~161) 6点を図示した。深鉢・底部で、晩期後半船橋式である。

深鉢(156~160) 156は残存器高2.0cm。口縁端部のやや下方に突帯が一条残存し、突帯には「D」字状の刻み目を施す。内面調整ナデ。157は残存器高1.9cm。口縁端部のやや下方に突帯が一条残存し、突帯には「O」字状の刻み目を施す。158は残存器高4.2cm。内外面調整ナデ。159は残存器高4.5cm。外面調整ケズリ、内面調整ナデ。160は残存器高6.8cm。外面調整ケズリ、内面調整ナデ。内外面に煤付着。

底部(161) 161は底径4.7cm、残存器高3.0cm。摩滅のため調整不明。胎土中に長石粒を多く含む。

8層出土土器(第47図162~164) 3点を図示した。深鉢及び底部である。

深鉢(162・163) 162は残存器高16.2cm。外面調整ケズリ、内面調整ケズリ後ナデ。胎土中に白色砂粒を多く含む。外面に煤付着。163は残存器高3.5cm。内外面調整ナデ。底部(164) 164は底径5.8cm。残存器高2.2cm。内外面調整ナデ。凹底である。



第47図 第7～9層、第5面出土土器実測図

7層出土土器(第47図165・166) 2点を図示した。深鉢である。

深鉢(165・166) 165は残存器高3.0cm。内外面調整ナデ。166は残存器高4.0cm。外面調整ケズリ、内面調整ナデ。

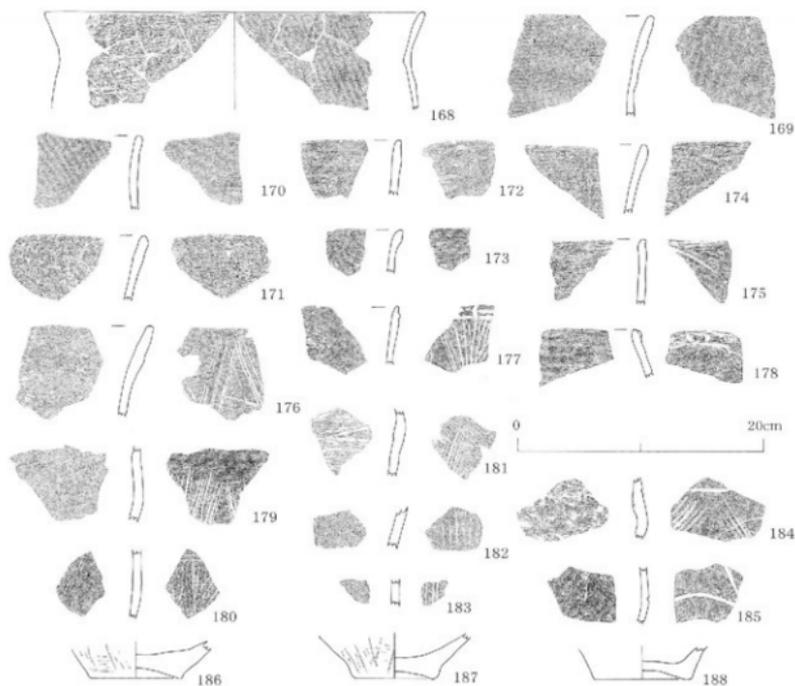
第5面出土土器(第47図167) 第5面で検出した竪穴住居跡の埋土に含まれていたものである。

深鉢(167) 167は残存器高4.5cm。外面に沈線が一条残存する。内面調整ナデ。外面に煤付着

側溝出土土器(第48図168～188) 21点を図示した。深鉢、底部である。

調査区の周囲に掘削した側溝及び断面観察用畦から出土したものであるため、後期から晩期にかけての遺物が混じっている。168が晩期篠原式古段階、178が晩期長原式である。それ以外は後期北白川上層式と考えられる。

深鉢(168～185) 168は口径30.8cm。残存器高8.0cm。口縁が外方へひらくものである。外面調整頸部ケズリ、体部二枚貝条痕、内面調整ナデ。169は残存器高8.2cm。口縁に山形の突起をもつ。外面調整ナデ、内面調整ミガキ。非生駒西麓の胎土。170は残存器高6.2cm。外面調整ミガキ、内面調整ナデ。非生駒西麓の胎土。171は残存器高5.3cm。内外面とも摩滅のため調整不明。172は残存器高4.5cm。内外面調整ナデ。内面に煤付着。非生駒西麓の胎土。173は残存器高3.5cm。口縁端部が外方へ肥厚する。内外面調整ナデ。174は残存器高5.5cm。口縁端部が外方へ肥厚し、外面に縄文が施される。内外面調整ナデ。内外面に煤付着。175は残存器高5.5cm。外面調整条痕。内面調整ナデ。外面に煤付着。非生駒西麓の胎土。176は残存器高7.5cm。外面に縦方向の多条沈線が施され、口縁部で三角形に交わっている。外面調整条痕、内面調整ナデ。外面に煤付着。非生駒西麓の胎土。177は残存器高4.9cm。外



第48図 側溝出土土器実測図

面に縦方向の多条沈線が施され、口縁直下には沈線が二条施される。内面調整ナデ。外面に煤付着。178は残存器高2.0cm。口縁端部に突帯が一条残存し、「D」字状の刻みを施す。内外面に煤付着。179は残存器高5.5cm。外面に縦方向の多条沈線が施される。下方に空間があることから三角形状に交わるものであろう。内外面調整ナデ。外面に煤付着。非生駒西麓の胎土。180は残存器高5.5cm。外面に縦及び斜め方向の多条沈線が施される。内外面調整条痕。内外面に煤付着。非生駒西麓の胎土。181は残存器高5.3cm。外面に縦方向の多条沈線が施される。内面調整二枚貝条痕。内外面に煤付着。非生駒西麓の胎土。182は残存器高3.5cm。外面に縦方向の多条沈線が施される。内外面調整ナデ。内外面に煤付着。183は残存器高2.0cm。外面に縦方向の多条沈線が施される。内面調整ナデ。184は残存器高5.0cm。外面に横方向の沈線が一条残存し、三角形状に交わる縦方向の多条沈線を施す。内面調整ナデ。外面に煤付着。非生駒西麓の胎土。185は残存器高4.8cm。外面に文様の一部と思われる沈線が二条残存する。外面調整条痕、内面調整ケズリ。内面に煤が付着する。非生駒西麓の胎土。

底部(186~188) いずれも凹底である。186は底径7.7cm、残存器高3.0cm。外面調整ケズリ、内面調整ナデ。内面に煤が付着する。187は底径7.8cm、残存器高3.7cm。外面調整ケズリ、内面調整ナデ。188は底径7.5cm、残存器高2.7cm。外面調整ナデ、内面調整ケズリ後ナデ。

#### 弥生時代以降の土器

弥生土器、土師器、須恵器、瓦器などがある。

#### 第5面 土坑14出土土器(第49Ⅳ)

##### 壺(第49Ⅳ189~191・196・197・199)

189は寸高の球形胴部と漏斗状の長い頸部をもち、口縁部が短く外折する。口縁端部は上下に拡張し、面をもつ。口縁部下端部にはヘラによるキザミメが施される。内面口縁部端部にヘラによる「/ | \」記号、外面頸部に櫛描直線文(8/0.9cm)が見られる。調整は内面ハケメ、外面にはヘラミガキが施される。口径18.7cm、体部最大径16.7cm、色調は内面明赤褐色(2.5YR5/6)、外面明赤褐色(5YR5/6)を呈する。190は大きくなだらかに外反する口頸部をもち、口縁端部は上下に拡張し、面をもつ。口縁部下端部にはヘラによるキザミメが施される。外面頸部に櫛描直線文(9/1.4cm)が見られる。調整は内外面共に著しい風化のため詳細不明。口径28.8cm、色調は内面褐灰色(10YR5/1)、外面灰黄褐色(10YR6/2)を呈する。191は頸部のみ残存する。外面に櫛描直線文(8/1.2cm)が見られる。調整は内面ハケメ、外面にはハケメ後ヘラミガキが施される。色調は内面灰黄色(2.5Y7/2)、外面灰黄褐色(10YR6/2)を呈する。196は直線的に外方に広がる長い頸部から、外反する口縁部をもつ。口縁端部はやや下方に拡張気味。外面頸部に櫛描直線文(14/1.9cm)が見られる。調整は内面ハケメ(8/cm)後ヘラミガキ、外面にはヘラミガキが施される。口径21.0cm、色調は内面にぶい橙色(7.5YR7/4)、外面橙色(5YR6/6)を呈する。197は短く直立する頸部から、外反する口縁部、口縁端部は丸味をもって終わる。調整は内外面共にハケメ後ヘラミガキが施される。口径15.5cm、色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面にぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。199は直立する頸部に外折する口縁部、口縁端部は面をもち、上下端をわずかに拡張する。調整は内外面共にハケメ(5/cm)を施す。口径16.0cm、色調は内面橙色(2.5YR6/8)、外面明赤褐色(2.5YR5/6)を呈する。

##### 甕蓋(第49Ⅳ198)

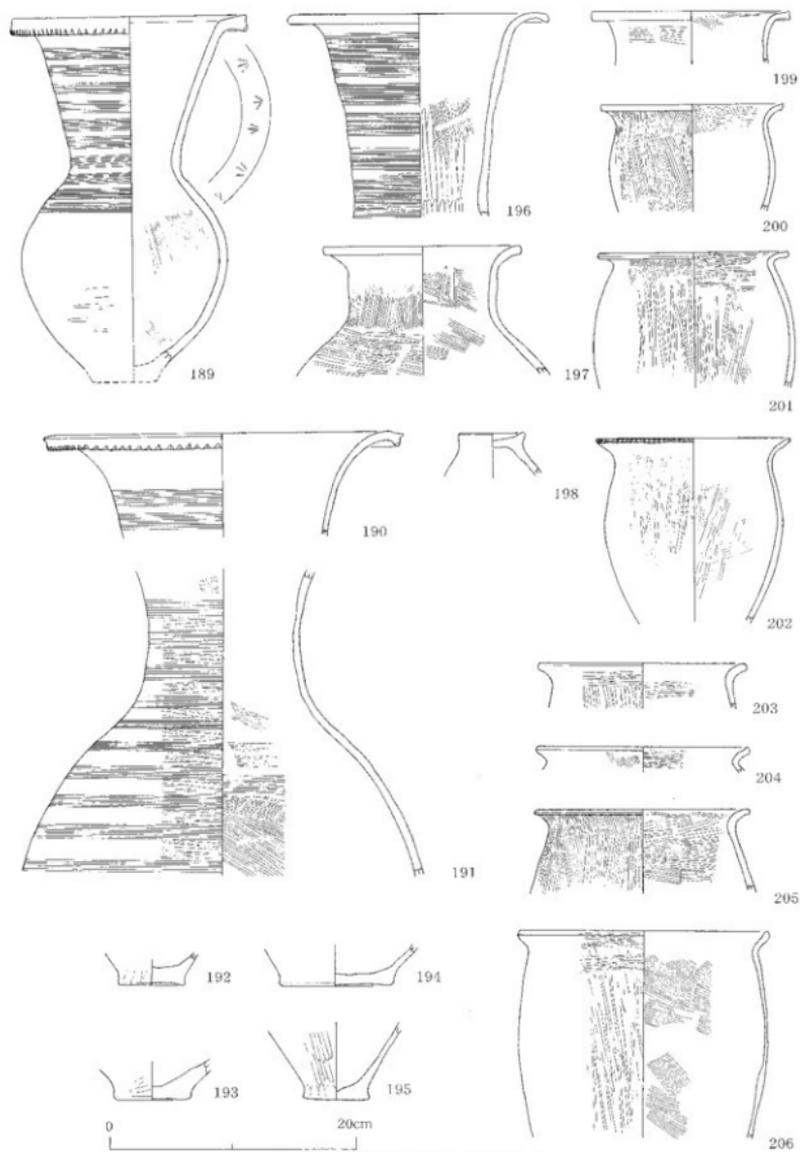
内面に煤は見られない。調整は著しい風化のため詳細不明。つまみ径5.2cm、色調は内面にぶい橙色(5YR6/4)、外面灰褐色(5YR5/2)を呈する。

##### 甕(第49Ⅳ200~206)

すべて20cm以内の中型タイプに属す。口縁部形態から202はゆるやかに外反する口縁部、口縁端部にキザミメを施すⅡ様式の甕に見られる特徴をもつ。200・201・204は口縁端部に面をもつ。203・205は口縁端部を丸くおさめる。206は口縁端部をつまみ上げる。200の調整は内外面共にハケメ(5/cm)が施される。口径14.6cm、体部最大径13.4cm、色調は内面にぶい黄褐色(10YR5/3)、外面にぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。201の調整は内外面共にハケメ(9/cm)後ヘラミガキが施される。内外面に煤付着。口径15.0cm、体部最大径16.2cm、色調は内面にぶい黄褐色(10YR5/3)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。202の調整は内外面共にハケメ(7/cm)後ヘラミガキが施される。内外面に黒斑あり。口径15.4cm、体部最大径14.2cm、色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。203の調整は内外面共にヘラミガキが施される。外面に煤付着。口径16.4cm、色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。204の調整は内面ヘラミガキ、外面にはハケメ(5/cm)が施される。口径16.8cm、色調は内面灰黄褐色(10YR4/2)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。205の調整は内外面共にハケメ(7/cm)が施される。外面に煤付着。口径16.8cm、色調は内面にぶい黄褐色(10YR5/3)、外面にぶい黄褐色(10YR5/4)を呈する。206の調整は内面ハケメ(9/cm)、外面にはヘラケズリ後ヘラミガキが施される。内面に黒斑あり。口径19.8cm、体部最大径20.0cm、色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面橙色(5YR6/6)を呈する。

##### 底部(第49Ⅳ192~195)

すべて甕の底部と思われる。192~194は上げ底、195は平底の底部。192の調整は内外面共に



第49图 第5面土坑14出土土器实测图

ナデが施される。底径5.1cm。色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。193の調整は内面ナデ、外面にはヘラミガキが施される。底径6.3cm。色調は内面褐灰色(10YR5/1)、外面にぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈する。194の調整は内面剥離のため調整不明、外面にはヘラミガキが施される。底径6.1cm。色調は暗灰黄色(2.5Y5/2)を呈する。195の調整は内面煤付着のため詳細不明、外面にはヘラミガキが施される。底径5.3cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR6/3)、外面明赤褐色(2.5YR5/6)を呈する。以上のことから土坑14の時期は、畿内第Ⅱ様式(以下、畿内は略)に属すと考えられる。

#### 第5面 竪穴住居跡1出土土器(第50図)

##### 壺(第50図207～210・212・214・218)

漏斗状に広がる口頸部から、口縁部は外反する。口縁端部に面をもちわずか上下に拡張するタイプ。207の調整は内面風化のため詳細不明、外面にはハケメ(5/cm)が施される。口径19.2cm。色調は内面橙色(5YR6/6)、外面明褐色(7.5YR5/6)を呈する。208の調整は内面ナデ、外面にはヘラミガキが施される。口径23.0cm。色調は内面褐色(7.5YR4/6)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。209は口縁部下端にヘラによるキザミメ、外面頸部には櫛描直線文(8/1.2cm)が見られる。調整は内外面共にハケメ(6/cm)が施される。口径25.0cm。色調は内面淡赤橙色(2.5YR7/4)、外面浅黄橙色(10YR8/3)を呈する。210は口縁部端面に小刻みな櫛描籬状文が見られる。調整は内外面共にハケメ(6/cm)が施される。口径28.0cm。色調は内面黒白色(5Y2/1)、外面灰白色(2.5Y8/1)を呈する。212は無頸壺。内傾する体部から外反する短い口縁部をもつ。調整は内外面共にハケメ(7/cm)が施される。口径13.6cm。色調は内面灰黄褐色(10YR6/2)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。214・218は壺の体部片。214は外面に櫛描籬状文(10/1.5cm)・直線文(同原体)・斜列点紋(同原体)が見られる。調整は内面にナデが施される。色調は内面明褐色(7.5YR5/6)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。218は外面に櫛描直線文(11/1.4cm)が見られる。調整は内外面共にヘラミガキが施される。色調はにぶい黄褐色(10YR5/4)を呈する。

##### 鉢(第50図211)

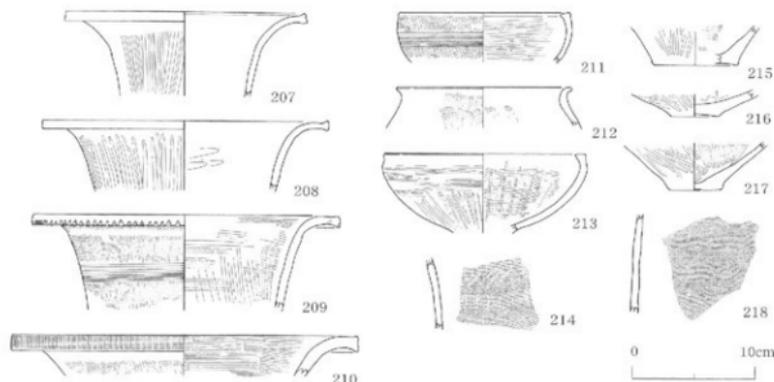
体部の形状が半球形をなし、口縁部上方に面をもち終わる。外面に櫛描列点文(14/1.5cm)・直線文(9/1.15cm)が見られる。口径13.6cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/3)、外面にぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。

##### 高坏(第50図213)

浅い椀状の坏体部から、口縁部上方に面をもち終わる。調整は内面ハケメのち粗いヘラミガキ、外面にはヘラミガキが施される。口径16.0cm。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。

##### 底部(第50図215～217)

215・217は甕、216は壺の底部と思われる。215・216は上げ底、217は平底の底部。215の調整は内面ナデ、外面にはヘラケズリ後ヘラミガキ、底部は工具によるナデが施される。底径6.6cm。色調はにぶい黄褐色(10YR6/3)を呈する。216の調整は内面ハケメ、外面には分割性のあるヘラミガキが施される。底径3.8cm。色調は灰黄褐色(10YR4/2)を呈する。217の調整は内面ハケメ(7/cm)、外面にはハケメ(同原体)後ヘラミガキ、底部はヘラミガキが施される。底径4.4cm。色調は内面灰黄褐色(10YR4/2)、外面にぶい黄褐色(10YR5/4)を呈する。以上のことから竪穴式住居1の時期は、第Ⅲ様式に属すと考えられる。



第50図 第5面竪穴住居跡1出土土器実測図

第5面 土坑20出土土器(第51図)

壺(第51図219)

漏斗状に広がる口縁部、口縁端部は面をもちわする。調整は内面ハケメ(7/cm)、外面にはヘラミガキが施される。外面に煤付着。口径16.2cm。色調は橙色(2.5YR6/6)を呈する。

甕(第51図220・221)

220は大型甕。口縁部は外折し、口縁端部は面をもち、下端部は下方にやや拡張する。調整は内外面共に板状工具によるナデが施される。口径26.8cm。色調は明赤褐色(5YR5/6)を呈する。221は直立気味の体部から「く」の字形に外折する口縁部、口縁端部は面をもつ。調整は内面ナデ、外面には一部ハケメ(4/cm)が見られる以外は剥離のため詳細不明。外面に煤付着。口径12.0cm。色調は内面にぶい黄橙色(10YR6/3)、外面にぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。

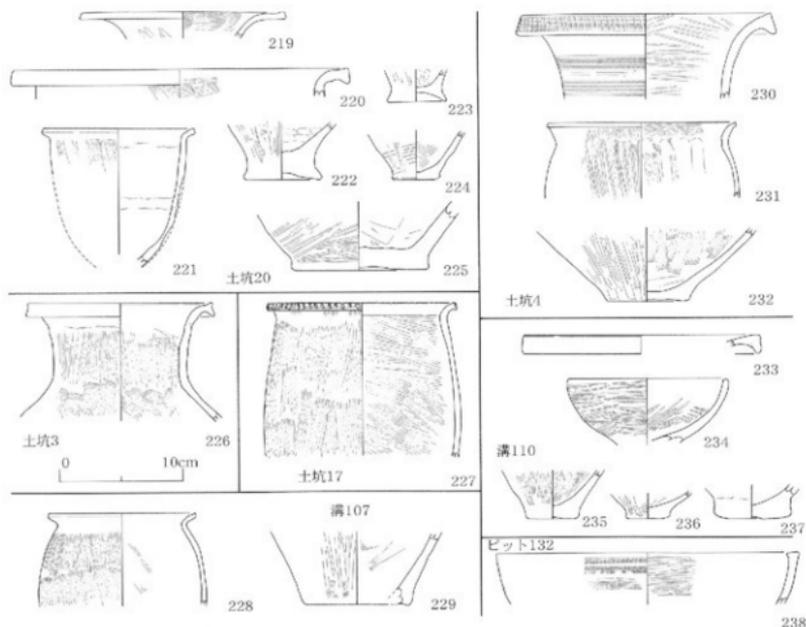
底部(第51図222～225)

甕の底部と思われる。222・223・225は上げ底気味、224は平底の底部。222の調整は内面ナデ、外面にはヘラケズリ・ハケメ後ヘラミガキ、底部は工具によるナデが施される。底径6.2cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR5/3)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。223の調整は内面ナデ、外面にはヘラケズリが施される。底径4.6cm。色調は内面灰褐色(5YR4/2)、外面明赤褐色(5YR5/6)を呈する。224の調整は内面ハケメ(9/cm)、外面にはタタキメ後ハケメ(同原体)。底部はハケメが施される。底径3.9cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面にぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。225の調整は内面工具によるナデ、外面には分割性のあるヘラミガキ、底部にはヘラミガキが施される。底径11.0cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR5/3)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。以上のことから土坑20の時期は、第IV様式に属すと考えられる。

第5面 土坑3出土土器(第51図)

壺(第51図226)

直線的に外方に広がる頸部から、口縁部は外弯し、口縁端部は上下に拡張する。調整は内外面共にハケメ(6/cm)が施される。口径14.8cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面明褐色(7.5YR5/6)を呈する。第Ⅲ～Ⅳ様式に属すと考えられる。



第51図 第5面土坑3・4・17・20、ピット132、溝107・110出土土器実測図

第5面 土坑17出土土器(第51図)

甕(第51図227)

直立気味の体部から、「く」の字に外反する口縁部、口縁端部は面をもち、端面にキザミが見られる。調整は内外面共にハケメ(6/cm)が施される。内面に煤付着。口径15.0cm、体部最大径15.8cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR5/3)、外面にぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する。第Ⅲ～Ⅳ様式に属すと考えられる。

第5面 溝107出土土器(第51図)

甕(第51図228・229)

228は「く」の字形に外反する口縁部から、口縁端部は面をもち終わる。調整は内外面共にハケメ(7/cm)が施される。口径11.8cm、体部最大径13.6cm。色調は内面明褐色(7.5YR5/6)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。229は甕の底部と思われる。調整は内面工具によるナデ、外面にはハケメ(8/cm)後ヘラミガキが施される。底径8.2cm。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。

第5面 土坑4出土土器(第51図)

壺(第51図230)

漏斗状に広がる頸部から、口縁端部は下方に拡張する。口縁部端面には小刻みな櫛描篋状文(10/1.2cm)、頸部には同原体による直線文が見られる。調整は内外面共にヘラミガキが施される。口径20.0cm。色

甕(第51図231・232)

231はなだらかに外弯する口縁部、口縁端部は面をもち終わる。調整は内面ハケメ(5/cm)、外面にはハケメ(同原体)後ヘラミガキが施される。外面に黒斑あり。口径15.0cm。色調はにぶい黄褐色(10YR6/3)を呈する。232は甕の底部と思われる。ほぼ平底。調整は内面ハケメ(7/cm)、外面にはヘラケズリ後ヘラミガキが施される。底径6.2cm。色調は内面明褐色(7.5YR5/6)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。第Ⅲ～Ⅳ様式に属すと考えられる。

第5面 溝110出土土器(第51図)

器台(第51図233)

口縁部がラッパ状に開き、口縁端部を下方に拡張し、口縁部端面は無文。調整は内外面共にナデが施される。外面に煤付着。口径18.8cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR6/3)、外面にぶい橙色(7.5YR7/3)を呈する。

高坏(第51図234)

碗形の形態に、口縁端部は丸くおさめる。調整は内面に5分割、外面にも分割性のあるヘラミガキが施される。内面に黒斑あり。口径12.6cm。色調は内面赤褐色(2.5YR4/6)、外面明赤褐色(2.5YR5/6)を呈する。

底部(第51図235～237)

甕の底部と思われる。235・237は中央が凹み、236はほぼ平底の底部。235の調整は内外面共にハケメ(9/cm)、外面底部にはナデが施される。底径4.3cm。色調はにぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する。236の調整は内面ハケメ、外面にはハケメ後ヘラミガキ、底部はヘラミガキが施される。底径3.5cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR5/4)、外面明褐色(7.5YR5/6)を呈する。237の調整は内面風化のため詳細不明、外面にはナデが施される。底径6.2cm。色調は内面黄灰色(2.5Y4/1)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。第Ⅴ様式に属すと考えられる。

第5面 ビット132出土土器(第51図)

鉢(第51図238)

直線的に立ち上がる口縁部、口縁端部上方に面をもつ。外面口縁部には櫛描籬状文(12/1.25cm)・直線文(同原体)が見られる。調整は内面ヘラミガキ、外面は風化のため詳細不明。外面に煤付着。口径24.2cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面にぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する。第Ⅲ～Ⅳ様式に属すと考えられる。

第4面 溝100出土土器(第52～68図)

出土土器の器種としては、広口壺・小形壺・短頸壺・長頸壺・付直口壺・甕・高坏・鉢・器台・壺蓋・甕蓋・ミニチュア土器などがある。器形・文様・製作手法などの特徴からいくつかの型式に分けられる。以下、器種ごとに各型式の特徴を記述する。

広口壺A(第52・54図258・288)

直立した頭部から、外反する口縁部、口縁端部は下方に拡張する形態の壺。258の調整は内面ハケメ後ナデ、外面にはハケメ(同原体)後ヘラミガキが施される。口径17.8cm。色調はにぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する。288は中期に属す混入品。調整は内外面共に著しい風化のため詳細不明。口径21.7cm。色調は内面灰褐色(7.5YR5/2)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。

広口壺B(第52図239・241~244・248・250)

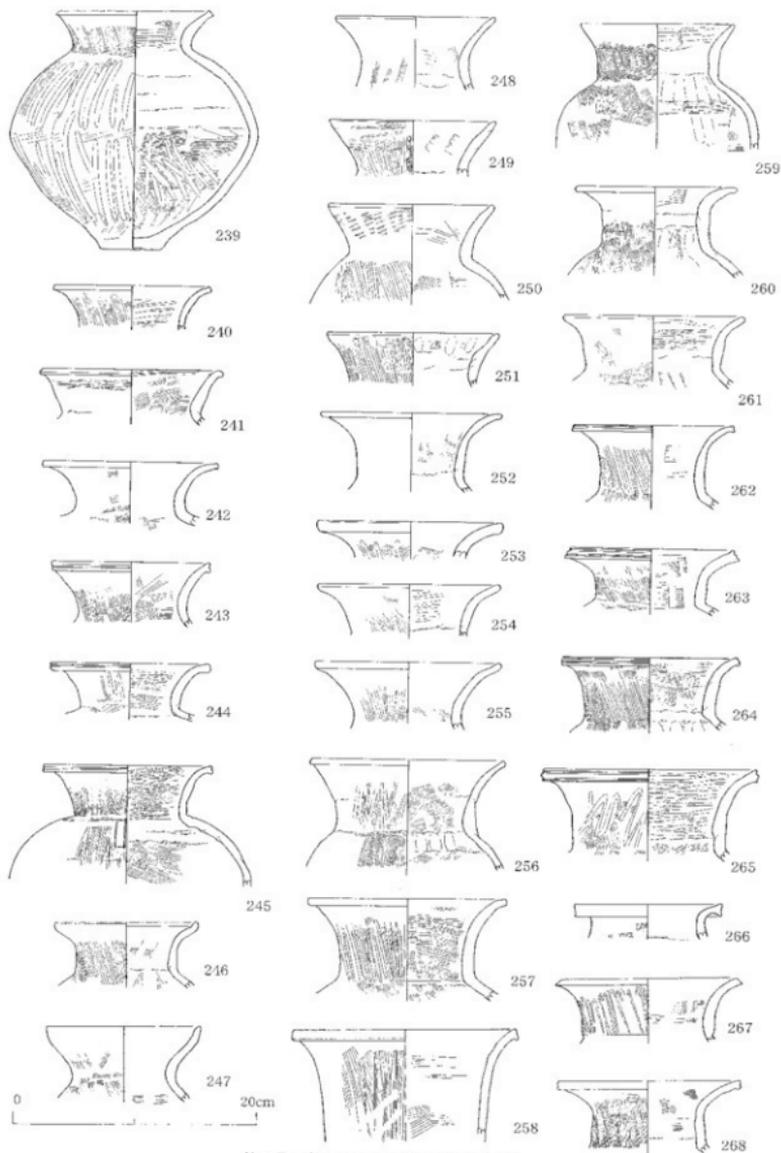
球形にちかい体部に、短くならかに外弯した口縁部。口縁部端面に沈線をもつものはあるが、端部は拡張しない形態の壺。239の調整は内外面共にハケメ(7/cm)後ヘラミガキが施される。口径12.1cm、器高19.7cm、底径4.5cm、体部最大径20.0cm。色調は内面灰黄褐色(10YR5/2)、外面灰黄褐色(10YR6/2)を呈する。241の調整は内外面共にハケメ(6/cm)が施される。口径14.2cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面にぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。242の調整は内外面共にハケメ(8/cm)が施される。口径14.0cm。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。243の口縁部端面に1条の凹線が見られる。調整は内外面共にハケメ(8/cm)が施される。口径12.5cm。色調は内面にぶい赤褐色(5YR5/4)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。244の口縁部端面に1条の沈線が見られる。調整は内外面共にハケメ(5/cm)後ヘラミガキが施される。口径12.6cm。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。248の調整は内外面共にハケメが施される。口径12.6cm。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。250の調整は内面ハケメ(5/cm)、外面にはタタキメ・ハケメ(同原体)が施される。外面に煤付着。口径13.1cm。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。

広口壺C(第52図245・255)

ラッパ状にひろく口頸部、口縁部はわずかに拡張する形態の壺。245の口縁部端面に1条の凹線、肩部に一岡めぐる沈線と長方形の線刻が見られる。調整は内外面共にハケメ(7/cm)後ヘラミガキが施される。外面に黒斑あり。口径13.4cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/3)、外面にぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。255の調整は内外面共にハケメ(5/cm・12/cm)が施される。口径14.7cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面にぶい黄褐色(10YR5/4)を呈する。

広口壺D(第52・54図252・254・256・257・259~265・267・268・286)

直立する頸部から、口縁部は屈曲して外反する。口縁部端面に凹線をもつものはあるが、端部は拡張しない形態の壺。252の調整は内面ハケメ(11/cm)、外面は著しい風化のため詳細不明。口径14.2cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/3)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。254の調整は内外面共にハケメ(10/cm)が施される。口径14.5cm。色調は明褐色(7.5YR5/6)を呈する。256の調整は内面ハケメ(8/cm)、外面にはハケメ(同原体)後ヘラミガキが施される。口径15.4cm。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。257の調整は内面ハケメ(8/cm)、外面にはハケメ(同原体)後ヘラミガキが施される。口径15.8cm。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。259は外面頸部に2個1単位の円形竹管文が見られる。調整は内外面共にハケメ(7/cm)が施される。口径12.2cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/3)、外面にぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。260の調整は内外面共にハケメ(9/cm)が施される。口径12.4cm。色調はにぶい褐色(5YR6/4)を呈する。261の調整は内面ハケメ(8/cm)後ヘラミガキ、外面にはハケメ(同原体)後スリ消しが施される。口径14.3cm。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。262は口縁部に面をもち、端面には1条の凹線が見られる。調整は内外面共にハケメ(5/cm)が施される。口径12.6cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面にぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する。263は口縁部に面をもち、端面には2条の凹線文が見られる。調整は内外面共にハケメ(6/cm)が施される。口径13.0cm。色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。264は口縁部に面をもち、端面には2条の凹線が見られる。調整は内面ハケメ(8/cm)後ヘラミガキ、頸部部境にヘラケズリ、外面にはハケメ(同原体)が施される。口径13.8cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/4)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。265は口縁部に面をもち、端面には2条の凹線が見られる。調整は内外面共にハケメ後ヘラミガキが施される。口径16.9cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/3)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。267は口縁部に面をもち、頸部部境には沈線条の段が見られる。調整は内面ハ



第52图 第4面溝100出土土器実測図(1)

ケメ(9/cm)、外面には放射線状のヘラミガキが施される。口径14.0cm、色調は内面灰黄褐色(10YR6/2)、外面にぶい黄橙色(10YR7/4)を呈する。268は口縁部に面をもち、端面にはハケ状工具によるナデが見られる。調整は内外面共にハケメ(10/cm)が施される。口径14.4cm、色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面にぶい橙色(5YR6/4)を呈する。286は口縁部に面をもち、そのまま終わる。調整は内外面共にハケメ(8/cm)後ヘラミガキが施される。内外面に黒斑あり。口径16.1cm、器高29.6cm、底径4.55cm、体部最大径25.6cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR6/3)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。

#### 広口壺E(第52回246・247)

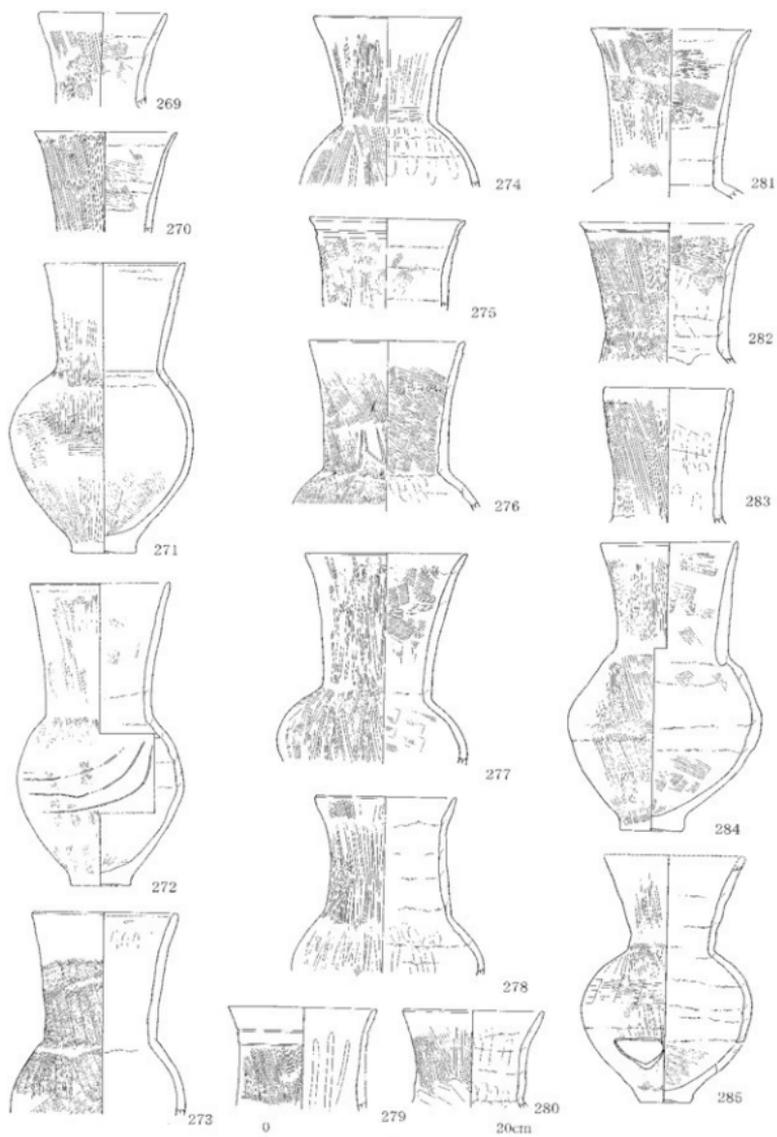
外方に開く頸部から、屈曲して内弯気味に立ち上がる口縁部をもつ形態の壺。246の調整は内外面共にハケメ(10/cm)が施される。口径11.4cm、色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)外面明褐色(7.5YR5/6)を呈する。247の調整は内外面共にハケメ(10/cm)が施される。口径12.2cm、色調は内面にぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。

#### 広口壺(第52回240・249・251・253・266)

口縁部の残存が少ないため、形態の分類が不明なもの。240は口縁部に面をもつ。調整は内外面共にハケメ(8/cm)後ヘラミガキが施される。口径12.4cm、色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。249の外面口頸部に円形竹管による装飾的な文様が施される。調整は内面ハケメ、外面にはハケメ後ヘラミガキが施される。口径13.3cm、色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/3)、外面にぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。251の調整は内外面共にハケメ(6/cm)が施される。外面口縁部に煤付着。口径13.7cm、色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。253の調整は内面ハケメ、外面にはハケメ後ヘラミガキが施される。口径14.5cm、色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/3)を呈する。266は口縁部に面をもち、端部をわずかに上下に拡張する。調整は内面ナデ、外面にはハケメ(13/cm)が施される。口径11.7cm、色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。

#### 長頸壺(第53回269～285)

無花果形または球形に近い体部から、頸部は長く、大きく外弯する口縁部をもつ形態の壺。口頸部が器高の1/2以下のもの(271・272・284)がある。口頸部の形態から、ラッパ状に外弯しながら外方にひろくもの(269・270・274・275・277・285)、直線的に外方にのびるもの(271～273・276・283・284)、直立気味に立ち上がる頸部から、口縁部が屈曲し外方にひろがるもの(278～282)がある。269の調整は内外面共にハケメ(9/cm)が施される。口径10.1cm、色調は内面にぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。270の調整は内面ハケメ(6/cm)、外面にはハケメ(同原体)後密なヘラミガキが施される。口径11.2cm、色調は内面にぶい褐色(7.5YR6/3)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。271の調整は内面ナデ・ハケメ(4/cm)、外面はタタキメ(3/cm)後ハケメ(同原体)、底部には工具によるナデが施される。口径11.1cm、器高23.8cm、底径5.2cm、体部最大径14.8cm、色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面にぶい黄褐色(10YR6/3)を呈する。272の外面体部に3条一単位の線刻が見られる。調整は内外面共にハケメが施される。口径11.2cm、器高24.8cm、底径4.6cm、体部最大径13.5cm、色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。273の調整は内面ナデ、外面には密なハケメ(8/cm)が施される。口径11.6cm、色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/3)を呈する。274の調整は内面ラミガキ・ナデ、外面にはハケメ(5/cm)後ヘラミガキが施される。口径11.8cm、色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/3)を呈する。275は口縁部に2条の沈線文が見られる。調整は内面ハケメ(11/cm)、外面にはハケメ(同原体)後ヘラミガキが施される。口径12.5cm、色調は内面にぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。276の外面頸部にヘラによる記号文、肩部にクシ工具による列点文が見られる。調整は内面ハケメ(7/cm)・ナデ、外面にはハケメ(同原体)が施される。口径12.5cm、色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面にぶい黄褐色(10YR5/4)を呈する。



第53图 第4面溝100出土土器実測図(2)

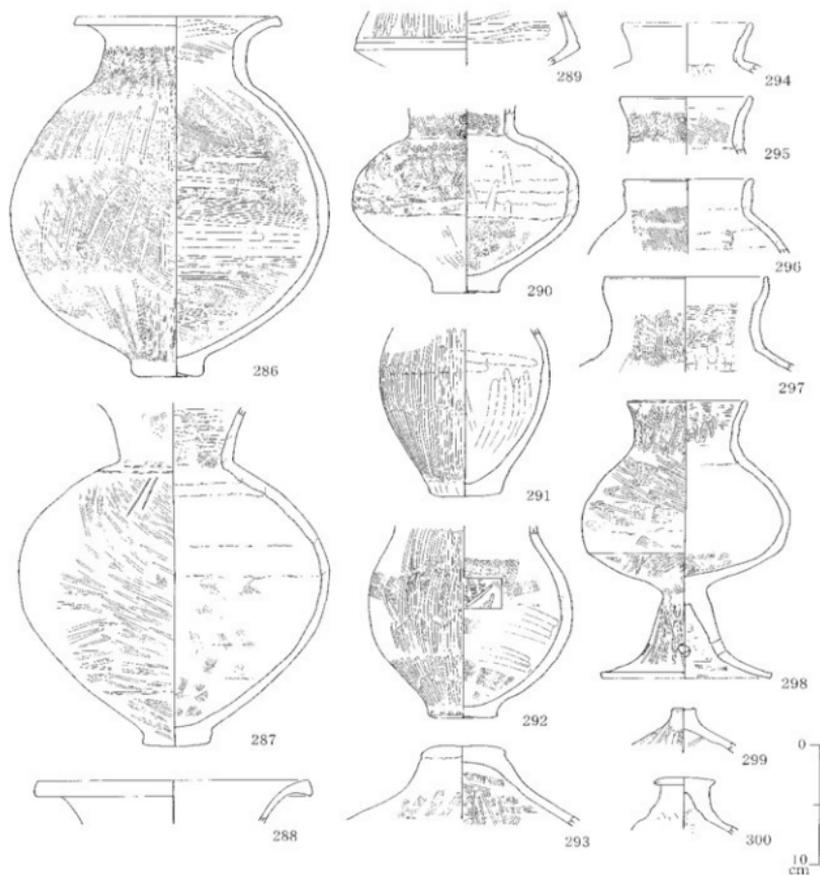
277の調整は内面ハケメ(5/cm)、外面にはハケメ(同原体)後ヘラミガキが施される。外面に煤付着。口径12.9cm。色調は内面にぶい黄橙色(10YR6/3)、外面にぶい黄橙色(10YR6/4)を呈する。278の調整は内面ナデ、外面にはハケメ(6/cm)後ヘラミガキが施される。外面に黒斑あり。口径11.2cm。色調はにぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する。279の外面口縁部にはクシ工具による沈線文が2条見られる。調整は内面太く粗いヘラミガキ、外面には密なハケメ(8/cm)が施される。口径11.5cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面にぶい橙色(5YR6/4)を呈する。280の調整は内面ナデ、外面にはハケメ(6/cm)・ナデが施される。口径11.2cm。色調は内面明褐色(7.5YR5/6)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。281の調整は内面ハケメ(9/cm)・ナデ、外面にはハケメ(同原体)後ヘラミガキが施される。口径13.7cm。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。282の外面口縁部に1条の沈線文が見られる。調整は内面ハケメ(6/cm)・ナデ、外面には密なハケメ(同原体)が施される。口径13.75cm。色調はにぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する。283の調整は内面風化のため詳細不明、外面にはハケメ(5/cm)が施される。口径10.2cm。色調は内面褐色(5YR6/6)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。284の調整は内外面共にハケメ(4/cm)、底部には工具によるナデが施される。外面に黒斑あり。口径10.8cm、器高23.9cm、底径4.9cm、体部最大径15.5cm。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。285の体部下方に逆三角形の穿孔が見られる。調整は内面ナデ・ハケメ(6/cm)、外面にはハケメ(同原体)後ヘラミガキが施される。体部最大径13.6cm、底径3.95cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面にぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する。

#### 短頸壺(第54図294~298)

長頸壺より頸部の短い形態の壺。口頸部には直線的に外傾するもの、直立する頸部から口縁部は外折するもの、口縁部が内湾するものがある。294の調整は内外面共にナデが施される。口径10.3cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/4)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。295の外面頸部に2個1単位の円形竹管文が見られる。調整は内外面共にハケメ(8/cm)が施される。口径10.5cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR6/3)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。296の調整は内外面共にハケメ(7/cm)が施される。口径10.2cm。色調はにぶい黄褐色(10YR6/3)を呈する。297の口縁部は内湾する。調整は内面ハケメ(7/cm)・ナデ、外面にはタタキメ後ハケメ(同原体)が施される。口径13.0cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/3)、外面にぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。298は台付。ラッパ状に広がる台部をもち、壺部は扁平な球形から、やや外傾する口頸部をもつ。台部に4ヶ所の円孔を穿つ。調整は壺部内外面共にハケメ(6/cm)後ヘラミガキ、台部内面ヘラケズリ・ハケメ(同原体)、外面にはハケメ後ヘラミガキが施される。口径9.6cm、器高22.8cm、裾部径13.4cm、体部最大径16.7cm。色調は明赤褐色(5YR5/6)を呈する。

#### 形態不明な壺(第54図287・289~292)

口縁部を欠損するため形態が不明なもの。287は広口壺の体部と思われる。頸体部に線刻が見られる。調整は内外面共にハケメ(8/cm)後ヘラミガキが施される。体部最大径25.1cm、底径5.3cm。色調はにぶい黄褐色(10YR6/3)を呈する。289は無頸壺の体部と思われる。調整は内外面共にヘラミガキが施される。体部最大径18.0cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面にぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。290は長頸壺の体底部と思われる。外面頸部に2個1単位の円形竹管文肩部には櫛波状文が見られる。調整は内外面共にハケメ(11/cm)、外面底部には工具によるナデが施される。体部最大径18.1cm、底径5.0cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。291の調整



第54図 第4面溝100出土土器実測図(3)

は内面ナデ、外面は密なヘラミガキ、底部にはJ.具によるナデが施される。体部最大径13.5cm、底径5.6cm。色調は内面赤灰色(2.5YR6/2)、外面にぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する。292の体部最大部位に、確かではないがヘラによる記号文が見られる。調整は内面ハケメ(7/cm)、外面はハケメ(同原体)後ヘラミガキ、底部にはJ.具によるナデが施される。体部最大径16.3cm、底径5.4cm。色調は内面黄褐色(2.5Y5/3)、外面にぶい黄橙色(10YR7/4)を呈する。

蓋(第54図293・299・300)

壺蓋(299)と甕蓋(293・300)がある。293の調整は内面ハケメ(7/cm)後放射線状のヘラミガキ、外面にはハケメ(同原体)が施される。内外面に煤付着。つまみ径6.7cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR5/3)、

外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。299は直径2.0cmのつまみが見られる。調整は内面ハケメ、外面にはハケメ後ヘラミガキが施される。内面に煤付着。色調は内面にぶい橙色(7.5YR7/3)、

外面にぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。300の調整は内外面共に工具によるナデが施される。つまみ径4.9cm。色調は内面明褐色(7.5YR5/6)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。

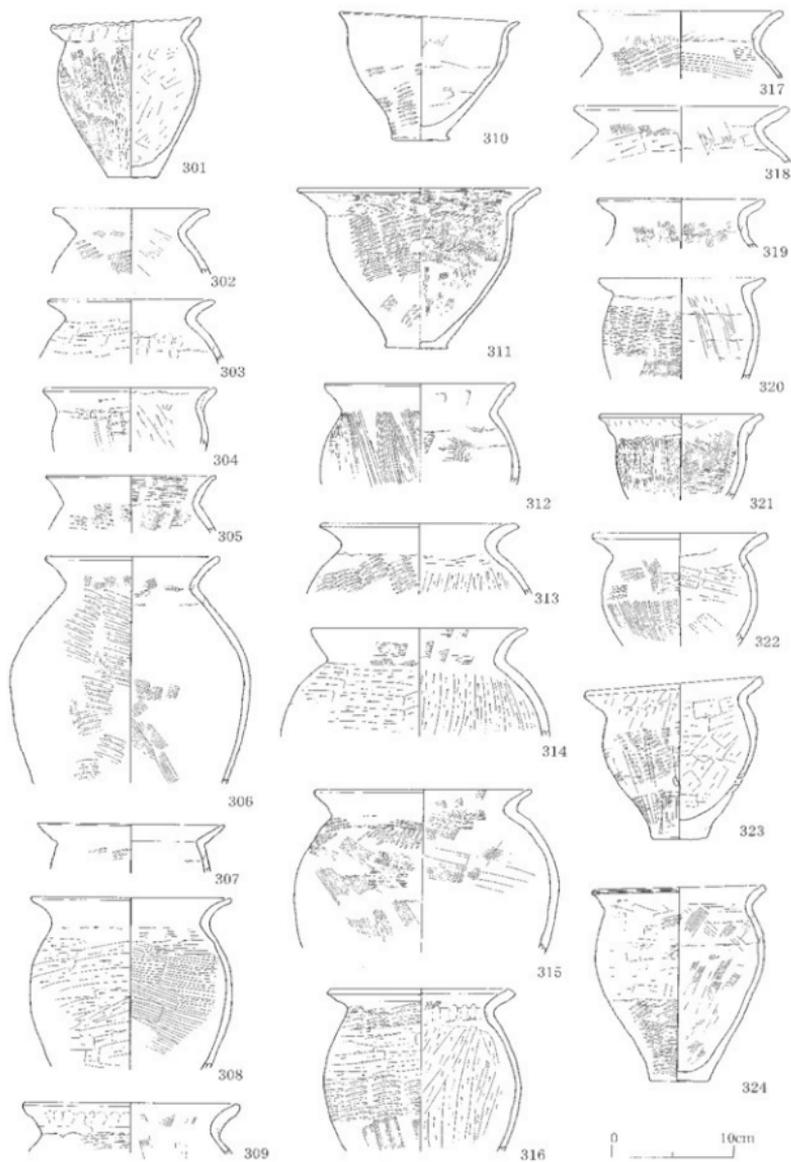
#### 甕(第55～57図)

口径の大きさから、小型(10～15cm内外)、中小型(20cm内外)、大型(30cm以上)とに分けた。口縁端部の形態は面をもつもの・丸くおさめるもの・凹むもの・内湾するもの・わずかに上下に肥厚するもの・下方に肥厚するもの・打ち欠いたものなどがある。これらは口縁部が「く」の字形に外反するものである。

小型甕(第55～57図301～307・310・312・316・319～324・329・332・339・340・342・349・358～361)

口縁端部の形態は、面をもつもの(323・332)、下方に肥厚するもの(305・322・358～361)、丸味をもつもの(302～304・306～320・329)、凹むもの(324)、上方に拡張するものしくはつまみあげるもの(339・340・342・349)、口縁端部を打ち欠いたもの(301)、また口縁部がなだらかに外反するもの(310・321)などがある。また口径が体部最大径をしのぐもの(310・321・323・324)も見られる。

301の調整は内面ヘラケズリ、外面にはハケメ(10/cm)が施される。外面に煤付着。口径12.2cm、器高13.5cm、底径4.0cm、体部最大径11.8cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。302の調整は内面ハケメ、外面にはハケメ後タタキメ(3/cm)が施される。口縁部内外面に黒斑あり。口径12.5cm。色調は内面灰黄褐色(10YR6/2)、外面にぶい黄褐色(10YR5/4)を呈する。303の調整は内面ナデ、外面にはヘラケズリが施される。口径13.2cm。色調はにぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する。304の調整は内外面共にヘラケズリが施される。口径13.8cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/3)、外面にぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。305の調整は内面ハケメ(9/cm)、外面にはタタキメ(4/cm)が施される。口径13.9cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR5/4)、外面にぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。306の調整は内面ハケメ(8/cm)、外面にはハケメ(同原体)後タタキメ(1.5/cm)が施される。内外面に煤付着。口径14.1cm、体部最大径19.8cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR7/2)、外面にぶい黄褐色(10YR7/3)を呈する。307の調整は内面ナデ、外面にはタタキメ(3.5/cm)後ナデが施される。口径15.2cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/3)、外面にぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。310の調整は内面ハケメ、外面にはタタキメ(3/cm)、底部は工具によるナデが施される。外面に煤付着。口径14.6cm、器高10.7cm、底径4.3cm、体部最大径13.0cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR5/4)、外面にぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。312の調整は内面ハケメ(7/cm)、外面にはヘラケズリ後ハケメ(同原体)が施される。口径15.4cm。色調は内面灰黄褐色(10YR6/2)、外面にぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。316の調整は内面ヘラケズリ、外面にはタタキメ(3/cm)後ヘラケズリ、体部下位にハケメ(7/cm)が施される。外面に黒斑あり。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面にぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。319の調整は内外面共にハケメ(8/cm)が施される。口径13.4cm。色調はにぶい黄褐色(10YR6/3)を呈する。320の調整は内面ハケメ、外面にはタタキメ(3/cm)、体部下位にハケメ後ナデが施される。口径13.4cm、体部最大径12.9cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR5/3)、外面にぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。321の調整は内外面共にハケメ(8/cm)が施される。内面に煤付着。口径13.0cm、体部最大径10.6cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。322の調整は内面ヘラケズリ・ハケメ(5/cm)、外面にはタタキメ後ハケメ(同原体)が施される。口径13.9cm、体部最大径12.7cm。色調は内面灰黄褐色(10YR6/2)、外面にぶい黄褐色(10YR6/3)を呈する。323の体



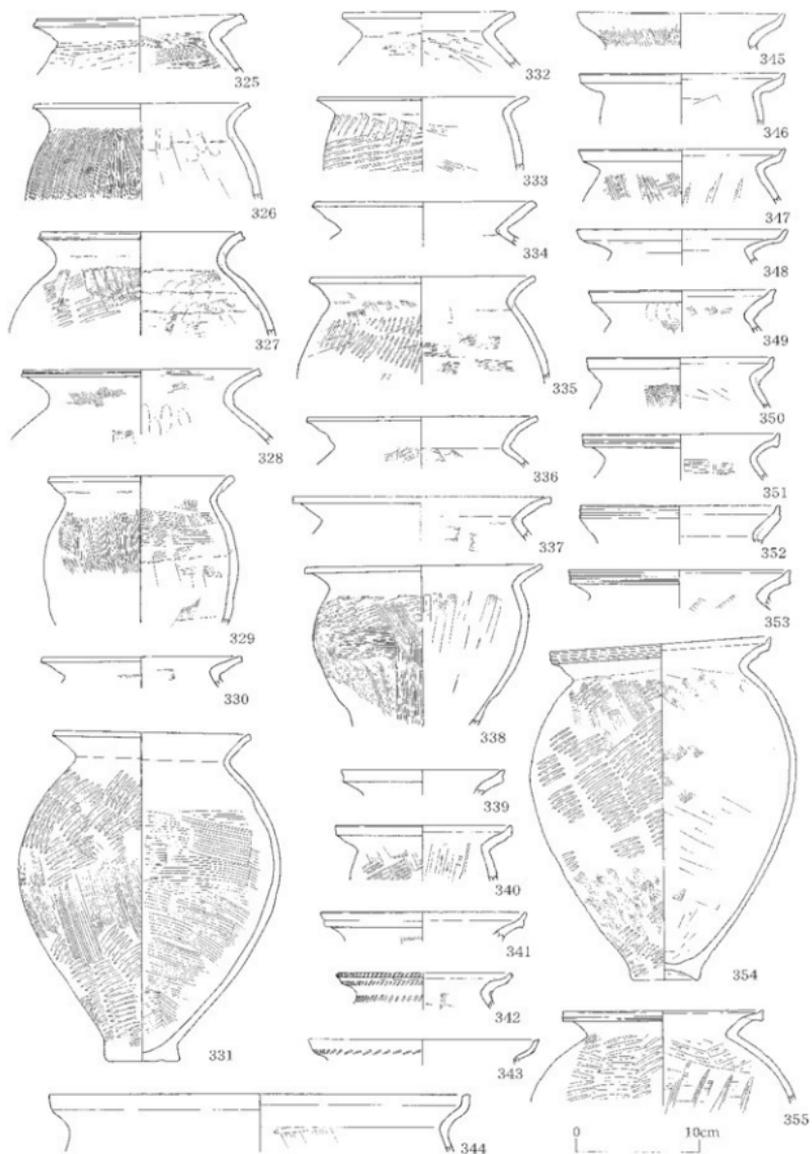
第55图 第4面漢100出土土器実測図(4)

部に1ヶ所穿孔が見られる。調整は内面ヘラケズリ、外面にはタタキメ(4/cm)後ハケメが施される。外面に黒斑、内面には煤付着。口径14.1cm、器高13.6cm、底径4.3cm、体部最大径12.6cm。色調は内面にぶい黄橙色(10YR6/4)、外面にぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する。324の調整は内面ヘラケズリ・ハケメ、外面にはタタキメ後ヘラケズリ、底部に工具によるナデが施される。内面に黒斑、外面には煤付着。口径13.7cm、器高16.5cm、底径4.5cm、体部最大径13.8cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面にぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。329の外面体部には剥離が見られる。調整は内外面共にハケメ(7/cm)が施される。内外面に煤付着。口径14.6cm、体部最大径15.6cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR5/3)、外面にぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する。332の調整は内面ヘラケズリ、外面にはタタキメ後ハケメ後ナデが施される。口径14.5cm、色調はにぶい黄褐色(10YR6/3)を呈する。339の調整は内外面共にヨコナデが施される。内面に煤付着。口径13.0cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/3)、外面灰黄褐色(10YR5/2)を呈する。340の調整は内面ヘラケズリ、外面にはタタキメ(4/cm)後ハケメが施される。口径14.1cm色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。342の外面口縁部と頸体部境にキザミメが見られる。調整は内面ハケメ、外面にはヨコナデが施される。外面に煤付着。口径13.8cm。色調は内面にぶい赤褐色(5YR5/3)、外面にぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。349の調整は内外面共にハケメ(5/cm)が施される。口径15.0cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面にぶい褐色(7.5YR6/4)を呈する。358の調整は内外面共にハケメ(7/cm)が施される。口径14.4cm。色調は内面浅黄褐色(7.5YR8/4)、外面にぶい橙色(7.5YR7/4)を呈する。359の調整は内面ナデ、外面にはハケメ(6/cm)が施される。口径12.8cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面橙色(7.5YR6/6)を呈する。360の調整は内面ハケメ(7/cm)、外面にはナデが施される。外面に煤付着。口径13.4cm。色調はにぶい黄褐色(10YR5/4)を呈する。361の調整は内面ナデ、外面にはタタキメ後工具によるナデが施される。外面に煤付着。口径14.2cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/3)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。

中型甕(第55~57)4308・309・311・313~315・317・318・325~328・330・331・333~338・341・343・345~348・350~357・362~365)

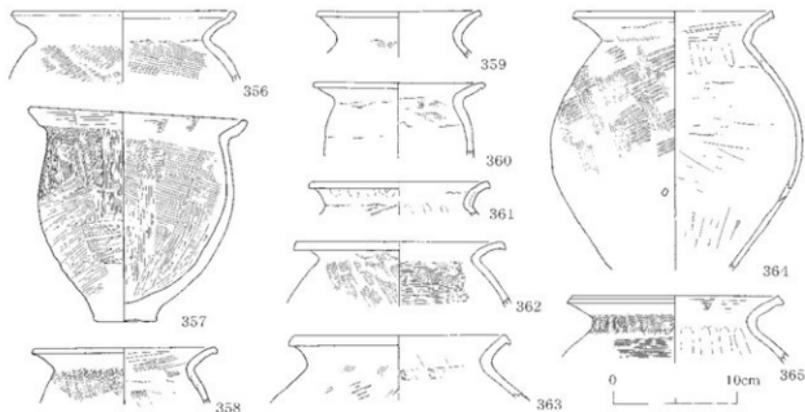
口縁端部の形態は、面をもつもの(311・330・331・333・335~338)、下方に肥厚するもの(334・362~365)、丸味をもつもの(308・309・313~315・317・318)、凹むもの(325~328・351~355)、上方に拡張もしくはつまみあげるもの(341・343・345~348・350~357)、口縁部がなだらかに外反するもの(317・326・327)などがある。また口径が体部最大径をしのぐもの(311・338)も見られる。

308の調整は内面ハケメ(3/cm)、外面にはヘラケズリが施される。外面に煤付着。口径16.4cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面浅黄褐色(10YR8/3)を呈する。309の調整は内面ハケメ、外面にはタタキメが施される。口径17.7cm。色調はにぶい褐色(7.5YR6/4)を呈する。311の調整は内面ハケメ(7/cm)、外面にはハケメ(同原体)後タタキメ(4/cm)が施され、底部は剥離している。口径19.5cm、器高13.5cm、底径4.8cm、体部最大径15.2cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/3)、外面にぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する。313の調整は内面ヘラケズリ、外面にはタタキメ(2/cm)が施される。口縁部外面に煤付着。口径15.8cm。色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。314の調整は内外面共に口縁部ハケメ(6/cm)、体部にはヘラケズリが施される。外面に煤付着。口径17.5cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR6/3)、外面にぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。315の調整は内面ハケメ(12/cm)、外面にはタタキメ後ハケメ(同原体)が施される。外面に煤付着。口径17.6cm、体部最大径21.8cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面にぶい褐色(7.5YR6/4)を呈する。317の調整は内面ハケメ(3.5/cm)、外面にはハケメ(同原体)後タタキメ(3/cm)が施される。口径16.5cm。色調はにぶい褐色(7.5YR6/4)を呈する。318の調整は内面ハケメ、外面にはハケメ後ヘラケズリが施される。口径17.0cm。色調は



第56图 第4面溝100出土土器実測図(5)

内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。325の調整は内面ハケメ(7/cm)、外面にはヘラミガキ後ヘラケズリが施される。外面に煤付着。口径16.4cm。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。326の調整は内面工具によるナデ、外面にはハケメ(10/cm)が施される。外面に煤付着。口径17.0cm。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。327の調整は内面ナデ、外面にはタタキメ後ハケメ(7/cm)が施される。外面に煤付着。口径16.6cm。色調は内面橙色(5YR6/6)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。328の調整は内面口縁部ハケメ(11/cm)・体部ナデ、外面にはハケメ(同原体)が施される。口径19.0cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面にぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。330の調整は内外面共にハケメが施される。口径15.9cm。色調は内面橙色(7.5YR6/6)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。331の調整は内面ハケメ(5/cm)、外面にはタタキメ(2/cm)後ハケメ(同原体)が施される。外面には煤付着。口径15.65cm。器高27.15cm。底径5.3cm。体部最大径21.0cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)外面にぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する。333の調整は内面ハケメ、外面にはタタキメ(2/cm)後ハケメ(2/cm)が施される。口径16.5cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR5/4)、外面灰褐色(7.5YR5/2)を呈する。334の調整は内外面共にナデが施される。口径17.2cm。色調は内面灰黄褐色(10YR5/2)、外面灰黄褐色(10YR4/2)を呈する。335の調整は内面ハケメ(9/cm)、外面にはハケメ(同原体)後タタキメ(3/cm)後板状工具によるナデが施される。口径17.7cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/4)、外面橙色(7.5YR6/4)を呈する。336の調整は内面ハケメ、外面にはハケメ後タタキメが施される。口径18.4cm。色調は内面にぶい赤褐色(5YR5/4)、外面にぶい赤褐色(5YR4/4)を呈する。337の調整は内面ハケメ、外面にはナデが施される。口径20.6cm。色調は内面明褐色(7.5YR5/6)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。338の体部外面に剥離痕が見られる。調整は内面ハケメ(7/cm)、外面にはタタキメ(2/cm)後ハケメ(同原体)が施される。外面に煤付着。口径18.9cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR5/3)、外面褐灰色(5YR4/1)を呈する。341の調整は内面ヨコナデ、外面にはハケメ(13/cm)が施される。口径16.4cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/4)、外面にぶい黄褐色(10YR5/4)を呈する。343の外面口縁部にクシ(3/0.7cm)による刺突文、口縁端部には沈線が見られる。調整は内外面共にヨコナデが施される。口径18.6cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/3)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。345の調整は内面ヨコナデ、外面にはハケメ(7/cm)が施される。口径16.7cm。色調はにぶい黄褐色(10YR6/3)を呈する。346の調整は内面工具によるナデ、外面には煤付着のため詳細不明。口径16.5cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。347の調整は内面ヘラ状工具によるナデ、外面にはタタキメ(3/cm)後ハケメ(7/cm)が施される。口径16.7cm。色調はにぶい黄褐色(10YR5/4)を呈する。348の調整は内外面共にヨコナデが施される。口径17.0cm。色調は灰色(N6/)を呈する。350の調整は内面ヘラケズリ、外面にはタタキメ(3.5/cm)後ハケメ(7/cm)が施される。口径15.0cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/3)、外面にぶい黄褐色(10YR5/4)を呈する。351の調整は内面ハケメ(8/cm)、外面にはヨコナデが施される。口径15.8cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面にぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する。352の調整は内外面共にヨコナデが施される。口径16.0cm。色調は褐色(5YR6/6)を呈する。353の調整は内面ハケメ、外面にはヨコナデが施される。外面に煤付着。口径17.8cm。色調はにぶい褐色(7.5Y5/4)を呈する。354の底部は凹む。調整は内面ハケメ(5/cm)・ヘラケズリ、外面にはハケメ(同原体)後タタキメ(2/cm)、底部はヘラケズリが施される。外面に煤付着。口径17.8cm。器高28.0cm。底径5.2cm。体部最大径21.5cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/4)、外面にぶい黄褐色(10YR5/4)を呈する。355の調整は内面ヘラケズリ・ハケメ、外面にはハケメ後タタキメ(2/cm)が施される。口径16.1cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR6/4)、外面にぶい黄褐色(10YR7/3)を呈する。356の調整は内面ハケメ(8/cm)、外面には



第57図 第4面溝100出土土器実測図(6)

ハケメ(同原体)後タタキメ(4/cm)が施される。口径17.3cm。色調は明褐色(7.5YR5/6)を呈する。357の調整は内外面共にハケメ(8/cm)後ヘラケズリ、底部には工具によるナデが施される。口径16.8cm、器高17.5cm、底径4.4cm、体部最大径15.6cm。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。362の調整は内外面共にハケメ(9/cm)が施される。外面に煤付着。口径16.4cm。色調はにぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する。363の調整は内面工具によるナデ、外面にはハケメ後タタキメが施される。口径16.8cm。色調は内面明赤褐色(2.5YR5/6)、外面橙色(5YR6/6)を呈する。364の体部に1ヶ所穿孔が見られる。調整は内面ハケメ・ヘラケズリ、外面にはタタキメ(3/cm)後ハケメが施される。外面に煤付着。口径15.7cm、体部最大径20.2cm。色調はにぶい黄橙色(10YR6/4)を呈する。365の調整は内外面共にハケメ(7/cm)が施される。口径16.6cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR7/3)、外面橙色(5YR6/6)を呈する。

#### 大型甕(第56図344)

口縁部を上方に拡張し、端部に面をもつ形態。調整は内面工具によるナデ、外面にはヨコナデが施される。口径33.8cm。色調はにぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する。

#### 高坏(第58図)

高坏Aは坏部が屈曲(外面に稜をもつ)して立つ口縁部に、高い脚台がつくもの、高坏Bは浅い椀形に、低い脚台がつくもの、高坏Cは丸味をもつ体部から、口縁部が短く外反するものがある。

#### 高坏A(第58図366~383)

366の調整は内外面共にハケメ(9/cm)が施される。口径14.4cm。色調は内面にぶい橙色(5YR6/4)、外面明赤褐色(5YR5/6)を呈する。367の調整は内面ヘラミガキ、外面にはナデが施される。口径16.4cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面にぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。368の調整は坏部内面にヘラミガキが見られる以外は、内外面共にハケメ(13/cm)が施される。口径16.4cm、器高8.85cm、裾部径8.4cm。色調にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。369の調整は内面ハケメ後ヘラミガキ、外面には一部にヘラケズリが見られる以外は密なヘラミガキが施される。口径17.0cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR5/3)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。370の調整は内面ヘラミガキ、外面には

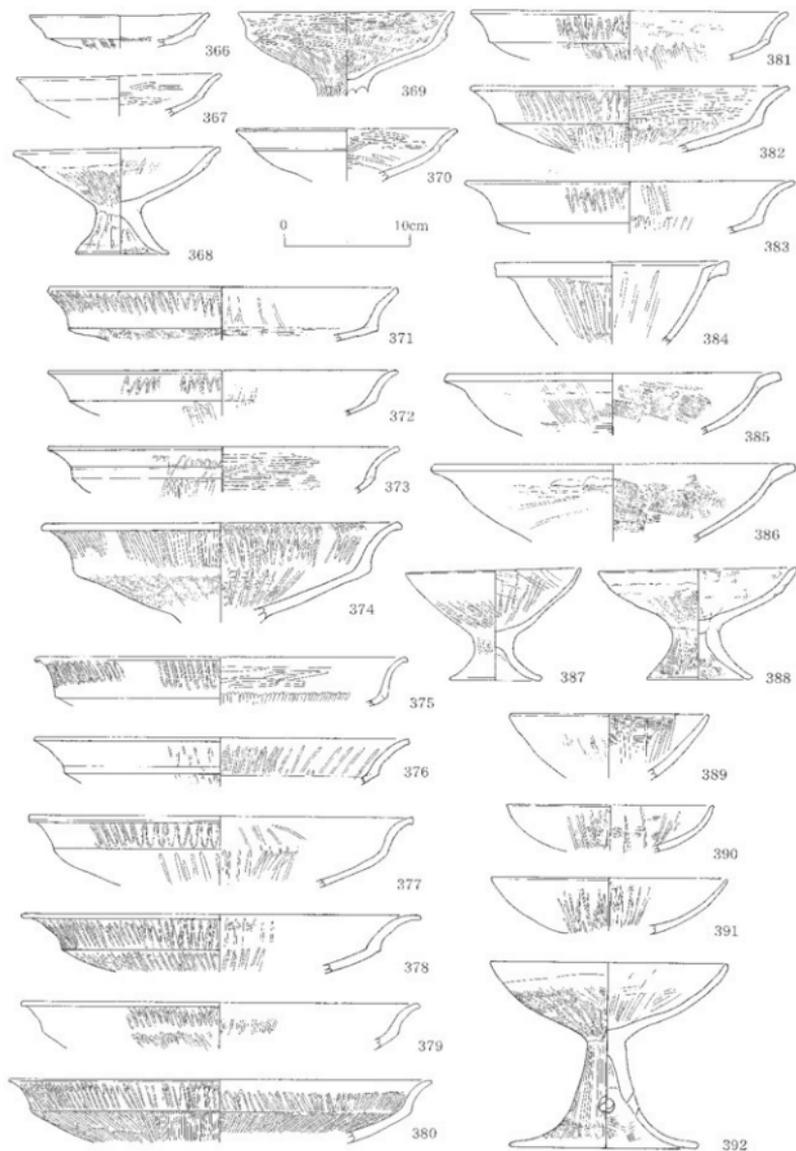
ナデが施される。口径17.2cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR6/3)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。371の内外面口縁部にはジグザグ状のヘラミガキが見られる。調整は内外面体底部にハケメ(5/cm)が施される。口径27.7cm。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。372の外表面口縁部にはジグザグ状のヘラミガキが見られる。調整は内面ハケメ、外面体底部にはハケメ後ヘラミガキが施される。口径17.9cm。色調はにぶい黄褐色(10YR6/3)を呈する。373の外表面口縁部には1条の沈線とジグザグ状のヘラミガキが見られる。調整は内外面共にヘラミガキが施される。口径28.0cm。色調はにぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する。374の内外表面口縁部にはジグザグ状のヘラミガキ、内面底部に放射状のヘラミガキが見られる。調整は内外面共にハケメ(7/cm)が施される。口径29.0cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。375の外表面口縁部にはジグザグ状のヘラミガキが見られる。調整は内面ハケメ(13/cm)後ヘラミガキが施される。口縁部に煤付着。口径29.4cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/3)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。376の内外表面口縁部にはジグザグ状のヘラミガキが施される。口径30.0cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR6/3)、外面橙色(7.5YR6/6)を呈する。377の内外表面口縁部にはジグザグ状のヘラミガキが、体底部に放射線状のヘラミガキが施される。口径30.7cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR6/4)、外面にぶい橙色(7.5YR7/4)を呈する。378の外表面口縁部にはジグザグ状のヘラミガキが見られる。調整は内外面共にハケメ(7/cm)後放射線状のヘラミガキが施される。口径31.8cm。色調は橙色(5YR6/6)を呈する。379の外表面口縁部にはジグザグ状のヘラミガキが見られる。調整は内外面共にヘラミガキが施される。口縁部に煤付着。口径31.9cm。色調は内面にぶい赤褐色(5YR5/4)、外面にぶい褐色(5YR6/4)を呈する。380の外表面口縁部にはジグザグ状のヘラミガキが見られる。調整は内表面口縁部ヘラミガキ、体底部ハケメ後ヘラミガキ、外面には密なヘラミガキが施される。口径34.0cm。色調はにぶい褐色(7.5YR6/4)を呈する。381の外表面口縁部にはジグザグ状のヘラミガキが見られる。調整は内外面共にハケメ(10/cm)後ヘラミガキが施される。口径25.2cm。色調はにぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する。382の外表面口縁部にはジグザグ状のヘラミガキが見られる。調整は内表面口縁部ヘラミガキ、体底部内外面共にハケメ(17/cm)後ヘラミガキが施される。口径25.3cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR6/4)、外面にぶい褐色(7.5YR7/4)を呈する。383の外表面口縁部にはジグザグ状のヘラミガキが見られる。調整は内面ヘラミガキ、外面体底部にはナデが施される。口縁部に煤付着。色調は内面にぶい褐色(7.5YR6/4)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。

#### 高坏B(第58図387~392)

387の調整は内外面坏部ハケメ後ヘラミガキ、外面脚柱部ハケメ、内外面脚部にはナデが施される。口径14.1cm。器高9.2cm。裾部径7.3cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/3)、外面にぶい褐色(7.5YR6/4)を呈する。388の調整は内外面共にハケメ(7/cm)・ナデが施される。口径15.8cm。器高9.1cm。裾部径8.4cm。色調はにぶい黄褐色(10YR6/3)を呈する。389の調整は内面ハケメ(11/cm)後ヘラミガキ、外面にはハケメ(同原体)が施される。口径15.7cm。色調はにぶい褐色(7.5YR6/4)を呈する。390の調整は内外面共にハケメ(7/cm)後ヘラミガキが施される。口径16.5cm。色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。391の調整は内面ハケメ後ヘラミガキ、外面にはヘラミガキが施される。口径18.8cm。色調はにぶい褐色(7.5YR6/4)を呈する。392の脚柱部に4ヶ所の円形透かし孔が見られる。調整は内外面共にハケメ(5/cm・10/cm)が施される。口径18.9cm。器高15.2cm。裾部径14.8cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR6/4)、外面にぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。

#### 高坏C(第58図384~386)

384の調整は内面放射線状のヘラミガキ、外面にはハケメ後放射線状のヘラミガキが施される。口



第58图 第4面溝100出土土器実測図(7)

径18.5cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面にぶい橙色(7.5YR7/4)を呈する。385の調整は内外面共にハケメ(10/cm)が施される。口径26.6cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR7/4)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。386の調整は内面ハケメ(7/cm)、外面にはハケメ(同原体)後ヘラミガキが施される。口径28.5cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面にぶい橙色(7.5YR7/3)を呈する。

#### 器台(第59図393~397・409~414)

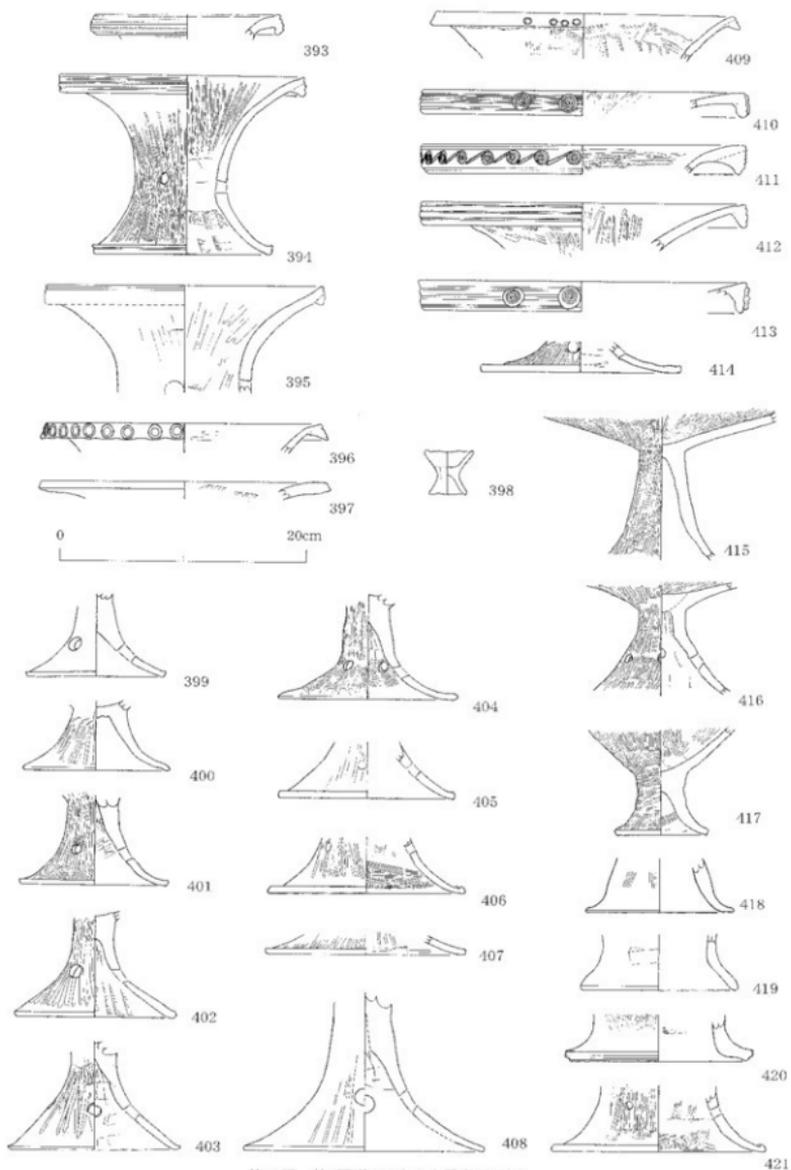
口縁部・裾部がラッパ状に開き、中央部の狭い鼓胴形で中空をなす。30cm以上は大型とする。393の口縁部を下方に拡張し、口縁部端面に凹線文が見られる。調整は内面ヨコナデ、外面にはハケメ(10/cm)が施される。内面に煤付着。口径14.9cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。394は受皿部・裾部の区別が明瞭な形態をもつ。口縁部端面に3条の凹線文、裾部端面には1条の凹線文が見られる。筒部に4ヶ所の円形透かし孔を穿つ。調整は内外面共にハケメ(6/cm)・ヘラケズリが施される。口径19.6cm。器高14.8cm。裾部径14.3cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面にぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。395は口縁部を下方に拡張するものと思われるが剥離のため詳細不明。口縁部端面には1条の凹線文が見られる。筒部に円孔を穿つ。調整は内面ハケメ・ヘラミガキ、外面にはハケメが施される。口径22.2cm。色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。396は口縁部を下方に拡張し、口縁部端面には円形竹管文が見られる。調整は内外面共にナデが施される。外面に煤付着。口径23.2cm。色調は内面明赤褐色(5YR5/6)、外面黒色(2.5Y2/1)を呈する。397の口縁部は面をもち終わる。調整は内面ハケメ、外面にはナデが施される。口径22.8cm。色調はにぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する。409は口縁部を下方に拡張し、口縁部端面には円形竹管文が見られる。調整は内面ハケメ(7/cm)後ヘラミガキ、外面にはハケメ(同原体)が施される。口径14.0cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面褐色(7.5YR7/6)を呈する。410は口縁部を下方に拡張し、口縁部端面には4条の凹線文に、円形浮文の上に竹管文が見られる。調整は内面ヘラミガキ、外面にはナデが施される。口径25.8cm。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。411は口縁部を下方に拡張し、口縁部端面には2条の凹線文と蕨手文が見られる。調整は内面ハケメ(8/cm)後ヘラミガキ、外面にはナデが施される。口径25.9cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/4)、外面にぶい黄褐色(10YR6/3)を呈する。412は口縁部を下方に拡張し、口縁部端面には3条の凹線文が見られる。調整は内外面共にハケメ(6/cm)後ヘラミガキが施される。口径26.0cm。色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。413は口縁部を下方に拡張し、口縁部端面には3条の凹線文に、円形浮文の上に竹管文が見られる。調整は内外面共にナデが施される。口径26.2cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR5/4)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。414は裾部端面に面をもち終わる。調整は内面工具によるナデ、外面にはヘラミガキが施される。筒部に2ヶ所の円形透かし孔を穿つ。裾部径16.0cm。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。

#### ミニチュア土器(第59図398)

高坏と思われる。調整はユビナデが施される。口径3.9cm。器高3.6cm。裾部径2.8cm。色調は内面灰黄褐色(10YR4/2)、外面にぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。

#### 脚台(第59図399~408・415~421)

高坏に属す脚部と思われる。なだらかに「ハ」の字形に広がる裾部をもつもの(399・401~403・405)、ラッパ状に大きく広がる裾部をもつもの(404・406~408・421)、裾部が屈曲して広がるもの(400・417~420)などの形態がある。399は3ヶ所の円形透かし孔が見られる。調整は内外面共にナデが施される。裾部径11.0cm。色調は内面褐色(7.5YR6/6)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。400の調整は内面ナデ、外面にはヘラミガキが施される。裾部径11.5cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR7/4)、



第59图 第4面满100出土土器实测图(8)

外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。401は3ヶ所の円形透かし孔が見られる。調整は内面ハケメ(17/cm)、外面にはハケメ(同原体)後ヘラミガキが施される。裾部径11.7cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR5/4)、外面にぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する。402は3ヶ所の円形透かし孔が見られる。調整は内面ハケメ、外面にはヘラミガキが施される。裾部径12.8cm。色調は内面にぶい赤褐色(2.5YR5/4)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。403は4ヶ所の円形透かし孔が見られる。調整は内面工具によるナデ、外面にはハケメ後ヘラミガキが施される。裾部径13.4cm。色調は内面にぶい赤褐色(5YR5/4)、外面明赤褐色(5YR5/6)を呈する。404は5ヶ所の円形透かし孔が見られる。調整は内外面共にハケメ(7/cm)が施される。裾部径13.9cm。色調はにぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する。405は1ヶ所の円形透かし孔が見られる。調整は内面風化のため詳細不明、外面にはハケメが見られる。裾部径14.0cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面明赤褐色(5YR5/6)を呈する。406は2ヶ所の円形透かし孔が見られる。調整は内面ハケメ、外面にはハケメ後ヘラミガキが施される。裾部径15.7cm。色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。407の調整は内外面共にヘラミガキが施される。裾部径16.1cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/3)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。408は3ヶ所の円形透かし孔が見られる。調整は内面ヘラズリ・ナデ、外面にはヘラミガキが施される。裾部径19.3cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面にぶい褐色(7.5YR6/4)を呈する。415の調整は坯部内面ヘラミガキ、脚柱部ポリメ、外面にはハケメ(10/cm)後ヘラミガキが施される。色調は内面にぶい褐色(7.5YR6/4)、外面褐色(7.5YR7/6)を呈する。416は5ヶ所の円形透かし孔が見られる。調整は脚柱部内面に工具によるナデ、坯部内面・外面にはハケメ(8/cm)後ヘラミガキが施される。色調はにぶい黄褐色(10YR6/3)を呈する。417の調整は内外面共にハケメ(8/cm)が施される。裾部径7.2cm。色調はにぶい黄褐色(10YR6/3)を呈する。418の調整は内面ナデ、外面にはハケメ(6/cm)が施される。裾部径11.6cm。色調は褐色(5YR7/6)を呈する。419の調整は内面ナデ、外面には工具によるナデが施される。裾部径12.2cm。色調はにぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する。420の裾部端面に2条の凹線文が見られる。調整は内外面共にハケメ(8/cm)が施される。裾部径14.0cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR7/4)、外面にぶい褐色(7.5YR6/4)を呈する。421は2ヶ所の円形透かし孔が見られる。調整は内外面共にハケメが施される。裾部径17.0cm。色調はにぶい黄褐色(10YR6/3)を呈する。

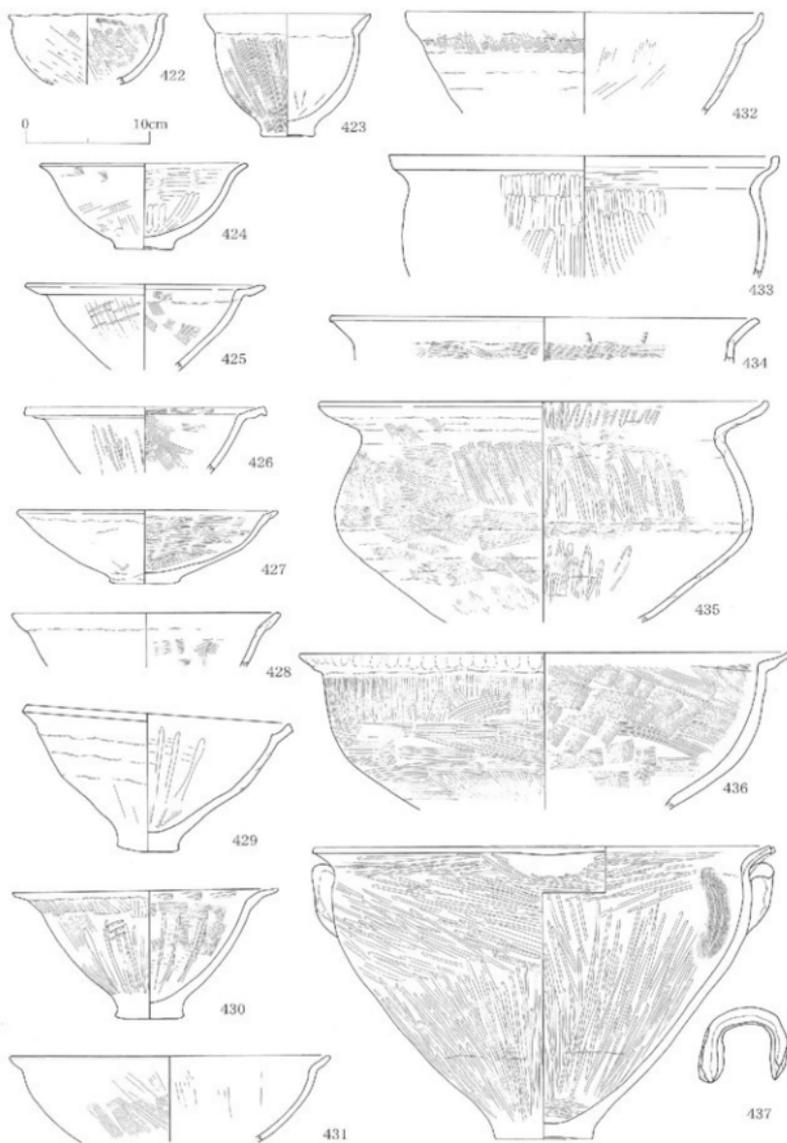
#### 鉢(第60・61図)

直口の口縁部をもつものを鉢A、外反する口縁部をもつものを鉢Bとする。口径が10cm未満のものを小型、30cm以上のものを大型と呼ぶこととする。

#### 鉢A(第61図438~443・445~448)

底部の形態が上げ底気味のもの(438~441・445)、孔を穿いたもの(442・446~448)、裾端部を打ち欠いたもの(443)などがあり、口縁部の形態から丸味をもつもの(438~441・448)、尖り気味のもの(442・447)面をもつもの(445・446)などがある。

438の調整は内外面共にハケメ(6/cm・9/cm)後ナデ、外面底部には工具によるナデが施される。外面に煤付着。口径10.7cm、器高6.1cm、底径4.0cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR5/3)、外面暗灰黄色(2.5Y5/2)を呈する。439の調整は内面ナデ、外面にはハケメ(6/cm)後ナデ、底部に工具によるナデが施される。完形。口径11.6cm、器高5.9cm、底径4.35cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR5/4)、外面にぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する。440の調整は内外面共にハケメ(5/cm)が施される。外面に黒斑あり。口径13.6cm、器高6.5cm、底径4.1cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR5/4)、外面にぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。441の調整は内面板状工具によるナデ、外面にはナデが施される。口径13.6cm、器高8.9cm、底径4.85cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR6/4)、外面褐色(7.5YR6/6)を呈する。442



第60图 第4面溝100出土土器実測図(9)

の調整は内面ハケメ(7/cm)、外面にはタタキメ(2/cm)、底部はナデが施される。口径13.8cm、器高8.1cm、底径4.1cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。443の調整は内外面共に板状工具によるハケメ(6/cm)が施される。底径5.8cm、色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。445の調整は内外面共にハケメ(7/cm)が施される。口径11.95cm、器高7.9cm、底径3.75cm。色調はにぶい黄褐色(10YR6/3)を呈する。446の調整は内外面共にハケメ(6/cm)が施される。口径13.9cm、器高10.5cm、底径4.1cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR6/4)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。447の調整は内面板状工具によるハケメ(5/cm)・ナデ、外面にはナデが施される。口径16.3cm、器高10.3cm、底径2.6cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/3)、外面にぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。448の調整は内面ハケメ後ナデ、外面にはタタキメ後ハケメ後ナデが施される。口径16.7cm、器高11.8cm、底径4.8cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR6/3)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。

鉢B(第60図422~437)

口縁部の形態から短く外反するもの(422)、「く」字形に外反するもの(423・427・429・434・437)、なだらかに外反するもの(424・428・430・431)、外方に屈曲するもの(425・436)、外反した後上方に伸びるもの(432・433・435)、また口縁端部には丸味をもつもの(427・428・431・432・435・436)、面をもつもの(422・424・426・429・433・434・437)、尖り気味のもの(423・425・430)などがある。422の調整は内面ハケメ(15/cm)、外面にはヘラケズリが施される。口径12.3cm。色調は内面褐色(7.5YR6/6)、外面にぶい褐色(7.5YR6/4)を呈する。423の調整は内面ハケメ後ナデ、外面にはハケメ(6/cm)、底部に工具によるナデが施される。内面に黒斑、外面には煤付着。口径13.0cm、器高10.5cm、底径4.3cm、色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/3)、外面にぶい褐色(7.5YR6/4)を呈する。424の調整は内面ヘラミガキ、外面にはハケメ(6/cm)、底部に工具によるナデが施される。口径16.2cm、器高7.1cm、底径4.5cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR6/4)、外面にぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。425の調整は内面ハケメ、外面にはタタキメ後ハケメが施される。口径19.0cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR6/4)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。426は中期の高坏の可能性もある。調整は内面ハケメ、外面にはヘラミガキが施される。外面に煤付着。口径19.2cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR6/4)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。427の内面に赤色顔料の付着が認められる。調整は内面ヘラケズリ後ヘラミガキ、外面には工具によるナデが施される。外面に黒斑あり。口径20.6cm、器高6.0cm、底径5.6cm、色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/3)、外面にぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。428の調整は内面ハケメ(8/cm)、外面にはナデが施される。口径21.2cm。色調はにぶい褐色(7.5YR6/4)を呈する。429の調整は内面ハケメ後放射線状の粗いヘラミガキ、外面にはナデが施される。外面に煤付着。口径21.2cm、器高10.4cm、底径5.0cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR6/3)、外面にぶい赤褐色(5YR5/3)を呈する。430の調整は内面ハケメ(8/cm)後放射線状の粗いヘラミガキ、外面にはハケメ(4/cm)後ヘラミガキが施される。口径21.35cm、器高10.6cm、底径5.5cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR6/3)、外面にぶい褐色(7.5YR6/4)を呈する。431の調整は内外面共にハケメ(6/cm)が施される。内面に黒斑あり。口径25.6cm。色調は内面明褐色(7.5YR5/6)、外面にぶい褐色(7.5YR6/4)を呈する。432の調整は内外面共にハケメ(6/cm)後ナデが施される。口径28.6cm。色調はにぶい黄褐色(10YR6/3)を呈する。433の調整は内外面共にハケメ(13/cm)後ヘラミガキが施される。口径31.2cm、体部最大径29.2cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/3)、外面にぶい褐色(7.5YR6/4)を呈する。434の調整は内外面共にハケメ(10/cm)が施される。口径34.0cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR6/4)、外面にぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。435の調整は内面ハケメ(7/cm)後ジグザグ状のヘラミガキ、外面にはハケメが施される。口径35.8cm、体部最大径33.6cm。色調はにぶい黄褐色(10YR5/4)を呈する。436の調整

は内外面共にハケメ(8/cm)が施される。外面に黒斑あり。口径39.2cm。色調は内面明赤褐色(5YR5/6)、外面橙色7.5YR7/6)を呈する。137の口縁部直下に逆「U」の字形に曲げた把手がつき、内面にはヘラ工具による記号文が見られる。調整は内外面共にヘラミガキが施される。内外面に煤付着。口径36.4cm、器高23.8cm、底径7.7cm。色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。

ミニチュア鉢(第61図449~451)

449の調整は内面板状工具によるナデ、外面には密なヘラミガキ、底部は工具によるナデが施される。口径5.65cm、器高5.0cm、底径2.45cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。450の底部は平底に作られている。調整は内外面共にナデで終わる。口径6.9cm、器高3.0cm、底径2.0cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面橙色(7.5YR6/6)を呈する。451はいびつな楕円形の形態をもつ。調整は内外面共にユビナデが施される。口径2.9cm・2.5cm器高4.3cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面にぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。

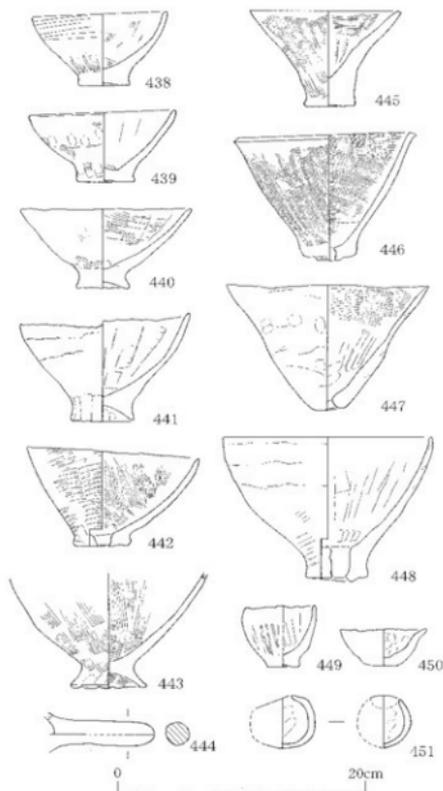
用途不明土器(第61図444)

棒状の形態で、断面円形である。把手とも考えられる。残存長8.9cm、厚み2.0cm。色調はにぶい黄橙色(10YR6/4)を呈する。

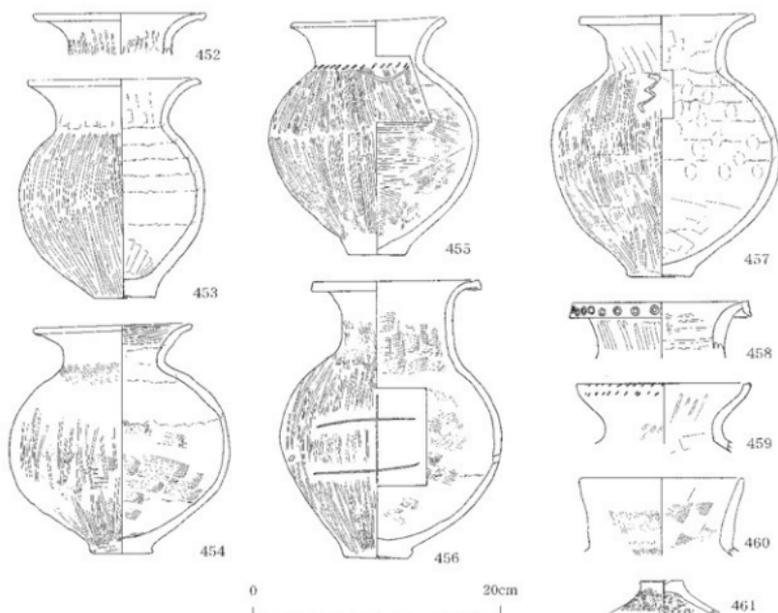
B区溝100出土土器(第62~66図)

広口壺(第62図452~459)

外反する口縁部から、口縁端部は下方に拡張する形態の広口壺A(458)、ラッパ状にひろく口頸部をもつ形態の広口壺C(452~455)、短く直立する頸部から、口縁部は屈曲して外反する形態の広口壺D(456・457)、外方にひろく頸部から、屈曲して内弯気味に立ち上がる口縁部をもつ形態の広口壺E(459)などがある。452の調整は内面ハケメ(5/cm)後粗いヘラミガキ、外面にはヘラミガキが施される。口径13.9cm。色調は内面褐色(7.5YR6/6)、外面にぶい褐色(7.5YR6/4)を呈する。453の調整は内面工具によるナデ、外面には板状工具によるナデ後密なヘラミガキ、底部に工具によるナデが施される。外面に煤付着。口径13.5cm、器高18.0cm、底径4.8cm、体部最大径14.9cm。色調は褐色(7.5YR7/6)を呈する。454の調整は内面ハケメ・ヘラミガキ、外面にはハケメ後タタキメ後ヘラミガキ、底部に工



第61図 第4区溝100出土土器実測図(10)



第62図 B区溝100出土土器実測図(1)

具によるナデが施される。外面に黒斑あり。口径12.4cm、器高18.9cm、底径5.1cm、体部最大径17.8cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。455の頸部部境にクシによる刺突文が一列めぐり、肩部に縦方向に刺突文とヘラによる偏平なU字状の記号文が見られる。調整は内面ハケメ(6/cm)、外面にはハケメ(同原体)後ヘラミガキが施される。口径11.9cm、器高19.6cm、底径4.6cm、体部最大径16.9cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面にぶい赤褐色(5YR5/3)を呈する。456の体部中央に「キ」の字形の線刻、1ヶ所に小さな穿孔が見られる。調整は内面ハケメ(5/cm)、外面ハケメ(同原体)後ヘラミガキ、底部にナデが施される。内面に黒斑あり。口径13.2cm、器高22.9cm、底径5.1cm、体部最大径17.9cm。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。457の肩部にジグザグ状のヘラによる記号文が見られる。調整は内面工具によるナデ・コピナデ、外面には工具によるナデ後ヘラミガキ、底部に工具によるナデ・ヘラミガキが施される。外面に黒斑あり。口径13.9cm、器高21.6cm、底径4.7cm、体部最大径18.3cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面にぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。458の口縁拡張部に凹形竹管による刺突文が見られる。調整は内面ハケメ、外面にはヘラミガキが施される。口径14.0cm。色調は灰黄褐色(10YR5/2)を呈する。459の口縁部外面にヘラによるキザミエが見られる。調整は内面ヘラミガキ・工具によるナデ、外面にはハケメが施される。口径13.7cm。色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。

短頸壺(第62図460)

口頭部が短く直線的に外傾する形態をもつもの。460の調整は内外面共にハケメ(7/cm)が施される。口径12.7cm。色調はにぶい黄褐色(10YR7/3)を呈する。

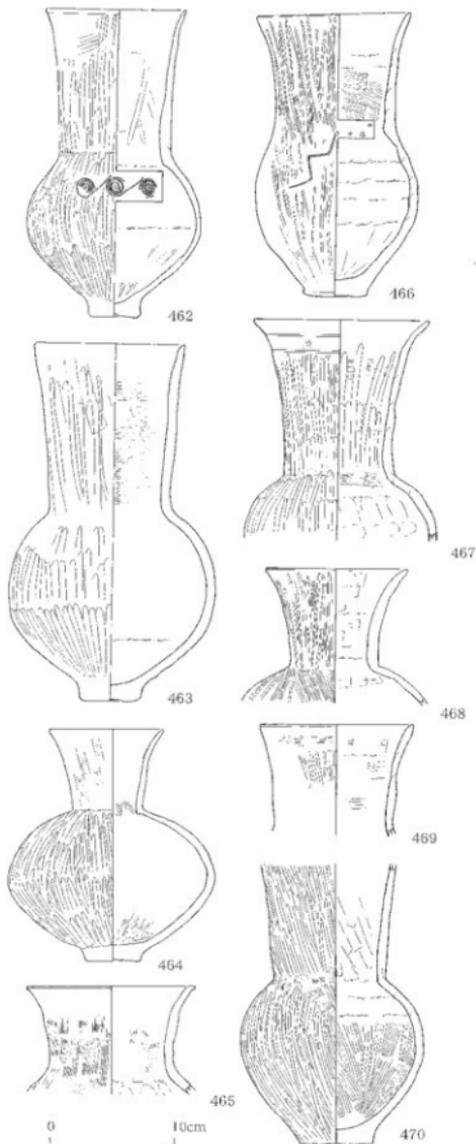
壺蓋(第62図461)

笠形を呈する。調整は内外面共にハケメ(12/cm)、つまみ外面には工具によるナデが施される。つまみ径3.2cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面明褐色(7.5YR5/6)を呈する。

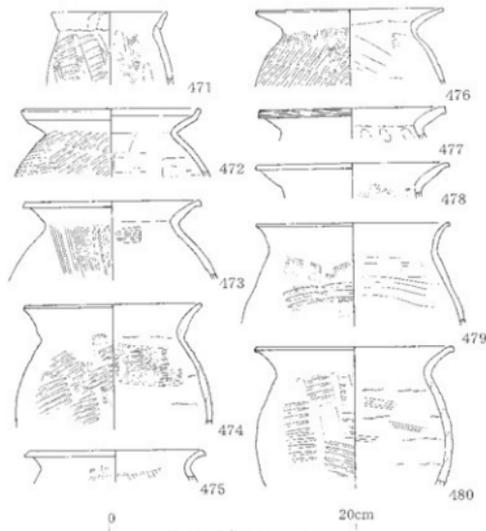
長頸壺(第63図462~470)

無花果形または球形に近い体部から、頸部は長く、大きく外弯する口縁部をもつ形態の壺。口頸部が器高の1/2以下のもの(462~464・466)がある。口頸部の形態から、ラッパ状に外弯しながら外方にひろくもの(462・463~469)、直線的に外方にびるもの(463)がある。

462の体部に3個からなる蕨手の記号が見られる。調整は内面ヘラによるナデ・ハケメ、外面にはヘラミガキ、底部に工具によるナデが施される。外面に煤付着。口径10.8cm、器高25.3cm、底径3.7cm、体部最大径14.9cm。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。463の調整は内面ハケメ、外面にはハケメ後ヘラミガキが施される。外面に黒斑あり。口径12.0cm、器高29.3cm、底径3.0cm、体部最大径16.5cm。色調は内面にぶい橙色(5YR6/4)、外面にぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する。464の調整は内面ハケメ(5/cm)、外面にはハケメ(同原体)後ヘラミガキが施される。外面に黒斑あり。完形。口径9.2cm、器高19.0cm、底径4.2cm、体部最大径16.6cm。色調はにぶい黄橙色(10YR6/4)を呈する。465は口縁端部上方に面をもつ。調整は内外面共にハケメ(12/cm)が施される。口径13.5cm。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。466の体部に4個の円形刺



第63図 B区溝100出土土器実測図(2)



第64図 B区溝100出土土器実測図(3)

(3/cm)が施される。口径11.9cm。色調は内面黄褐色(2.5YR5/3)、外面にぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する。470の口縁部は欠損するが長頸壺と思われる。調整は内面ハケメ(9/cm)、外面にはハケメ(同原体)後ヘラミガキが施される。外面に黒斑あり。底径5.8cm、体部最大径14.7cm。色調はにぶい黄褐色(10YR6/3)を呈する。

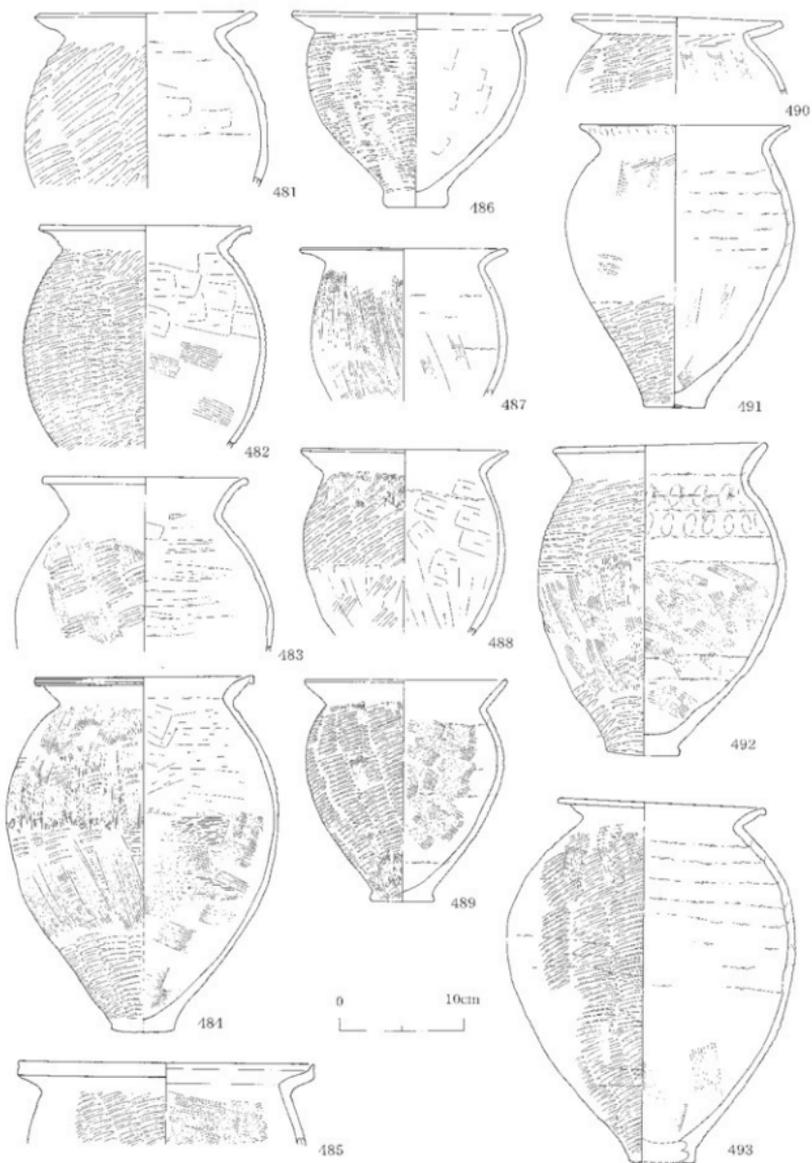
甕(第64・65図471~493)

口径の大きさから、小型(10~15cm内外)、中型(20cm内外)がある。口縁端部の形態には面をもつもの・丸くおさめるもの・凹むもの・内湾するもの・下方に肥厚するもの・やや尖り気味のものなどがあり、これらは口縁部が「く」の字形に外反するもの・なだらかに外反するものである。

小型甕(第64図471~480)

口縁端部の形態はやや尖り気味のもの(471)、面をもつもの(472~475・477・478)、下方に肥厚するもの(473・475・479・480)、丸くおさめるもの(476)、上方へ拡張するもの(472)、凹むもの(477)などがあり、口縁部は「く」の字形のもの・なだらかに外反するもの(479)がある。471の調整は内面ハケメ(15/cm)、外面にはハケメ(同原体)後タタキメ(2/cm)が施される。外面に煤付着。口径9.4cm。色調は内面灰褐色(7.5YR6/2)、外面灰黄褐色(10YR6/2)を呈する。472の調整は内面ヘラケズリ、外面にはハケメ後タタキメ(3/cm)が施される。外面に煤付着。口径14.0cm。色調は内面にぶい橙色(5YR6/4)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。473の調整は内外面共にハケメ(5/cm)が施される。口径14.0cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/4)、外面にぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。474の調整は内面ハケメ(9/cm)、外面にはハケメ(同原体)後タタキメ(3/cm)が施される。口径14.0cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR5/4)、外面にぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する。475の調整は内外面共にハケメ(7/cm)が施される口径14.1cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面浅黄色(2.5Y7/4)

突文、ヘラによるジグザグ状の記号文が見られる。調整は内面ハケメ(6/cm)、外面にはハケメ(同原体)後ヘラミガキ、底部に工具によるナデが施される。内外面に煤付着。口径12.0cm、器高23.4cm、底径5.2cm、体部最大径13.0cm。色調は内面明赤褐色(5YR5/6)、外面にぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。467の口縁部直下に2条の凹線文が見られる。調整は内外面共にハケメ(7/cm)後ヘラミガキが施される。口径14.0cm。色調は内面にぶい橙色(5YR6/4)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。468の調整は内面工具によるナデ、外面にはハケメ後ヘラミガキが施される。口径11.2cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR5/3)、外面にぶい黄褐色(10YR6/3)を呈する。469の調整は内外面共にハケメ



第65图 B区满100出土土器实例图(4)

を呈する。476の調整は内面板状工具によるナデ、外面にはハケメ(8/cm)後タタキメ(3/cm)が施される。外面に煤付着。口径14.8cm。色調はにぶい黄褐色(10YR7/4)を呈する。477の口縁部端面に2条の凹線文が見られる調整は内外面共にナデが施される。口径15.0cm。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。478の調整は内面板状工具によるナデ、外面にはナデが施される。口径15.2cm。色調は内面灰黄褐色(10YR6/2)、外面にぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。479の調整は内面板状工具によるナデ、外面にはタタキメ(3/cm)後工具によるナデが施される。外面に黒斑あり。口径15.4cm。色調は内面褐灰色(7.5YR4/1)、外面橙色(7.5YR6/6)を呈する。480の調整は内面ハケメ、外面にはタタキメ(2/cm)後ハケメが施される。口径15.6cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR5/3)、外面灰黄褐色(10YR4/2)を呈する

#### 中型甕(第65図481~493)

口縁端部の形態は丸味をもつもの(481・483・489)、面をもつもの(482・485~487・490・492・493)、尖り気味のもの(488・491)、下方に肥厚するもの(482・484・493)、上方につまみ上げるもの(485・490)などがあり、口縁部は「く」の字形のもの・なだらかに外反するもの(492)がある。

481の調整は内面工具痕が見られるが風化のため詳細不明、外面にはタタキメが施される。外面に煤付着。口径17.2cm、体部最大径19.6cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、黄褐色(2.5YR5/3)、外面にぶい橙色(5YR6/4)を呈する。482の調整は内面ハケメ(4/cm)、外面にはタタキメ(2.5/cm)後ナデ消しが施される。外面に煤付着。口径17.0cm、体部最大径19.6cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR7/3)、外面にぶい褐色(7.5YR7/4)を呈する。483の調整は内面ハケメ(7/cm)、外面にはタタキメ(3/cm)後ハケメ(同原体)が施される。外面に煤付着。口径16.4cm、体部最大径20.8cm。色調はにぶい褐色(7.5YR6/4)を呈する。484の口縁部端面に2条の凹線文が見られる。調整は内面ヘラケズリ・ハケメ(6/cm)、外面にはタタキメ(3/cm)後ハケメ(同原体)が施される。口径17.6cm。器高29.1cm、底径5.2cm、体部最大径22.1cm。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。485の調整は内面ハケメ(8/cm)、外面にはタタキメ(3/cm)が施される。口径23.9cm。色調は内面褐色(7.5YR6/6)、外面にぶい黄褐色(10YR6/3)を呈する。486の調整は内面板状工具によるナデ、外面にはタタキメ(5/cm)後ハケメ、底部に工具によるナデが施される。外面に煤付着。口径19.9cm、器高16.1cm、底径4.4cm、体部最大径17.6cm。色調はにぶい黄色(2.5Y6/3)を呈する。487の調整は内面一部にハケメ、外面にはハケメ(7/cm)が施される。口径16.3cm、体部最大径15.7cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面にぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。488の調整は内面ヘラケズリ、外面にはタタキメ(3/cm)後ハケメ(10/cm)が施される。外面に煤付着。口径16.6cm、体部最大径16.2cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR6/4)、外面褐色(7.5YR7/6)を呈する。489の調整は内面ハケメ(9/cm)、外面にはタタキメ(3.5/cm)後ハケメ(同原体)、底部に工具によるナデが施される。外面に煤が付着し黒斑も認められる。口径16.0cm、器高18.3cm、底径4.8cm、体部最大径15.9cm。色調は内面にぶい褐色(5YR6/3)、外面ににぶい褐色(7.5YR6/4)を呈する。490の調整は内面ハケメ・ヘラケズリ、外面にはタタキメ(2/cm)が施される。内面に煤付着。口径16.6cm。色調は内面褐色(5YR6/6)、外面にぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。491の調整は内面ハケメ、外面にはタタキメ(2/cm)後ハケメ、底部に工具によるナデが施される。口径16.7cm、器高23.2cm、底径4.7cm、体部最大径18.4cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR7/3)、外面にぶい褐色(7.5YR6/4)・にぶい黄褐色(10YR6/3)を呈する。492の調整は内面ハケメ(5/cm)、外面にはタタキメ(2/cm)後ハケメ(同原体)、底部に工具によるナデが施される。外面に煤付着。口径16.6cm、器高25.8cm、底径5.8cm、体部最大径19.8cm。色調はにぶい黄褐色(10YR6/3)を呈する。493の調整は内面ハケメ、外面にはタタキメ後ハケメ、底部に工具によるナデが施される。内外面共に煤付着。口径16.3cm、器高29.8cm、底

径4.8cm、体部最大径23.2cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面明褐色(7.5YR5/6)を呈する。  
鉢(第66図494~499)

直口の口縁部をもつ鉢A(494・495)、外反する口縁部をもつ鉢B(496~499)があり、口径が10cm未満のものを小型、30cm以上のものを大型と分類する。

494の調整は内外面共にハケメ(17/cm)、外面底部にナデが施される。口径11.7cm、器高7.0cm、底径4.6cm。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。495は口縁端部を打ち欠く。調整は内面ハケメ(11/cm)、外面にはハケメ後ナデ、底部にユビナデが施される。完形。口径14.5cm、器高8.7cm、底径5.2cm。色調は内面にぶい赤褐色(5YR5/4)、外面にぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。496は大型鉢。調整は内外面共にハケメ後ヘラミガキが施される。内面に黒斑あり。口径29.8cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/4)、外面にぶい橙色(5YR6/4)を呈する。497の口縁端部は上方に拡張する。調整は内面摩滅のため詳細不明、外面にはヘラミガキが施される。口径23.0cm。色調は明褐色(7.5YR5/6)を呈する。498の口縁部端部は凹む。調整は内外面共にハケメ(8/cm)が施される。口径15.4cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR5/3)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。499の口縁端部は上方に少しつまみ上げる。調整は内外面共にハケメ(11/cm)、底部には工具によるナデが施される。内外面に煤付着。口径17.7cm、器高9.5cm、底径4.6cm。色調は内面橙色(5YR6/6)、外面にぶい橙色(5YR6/4)を呈する。

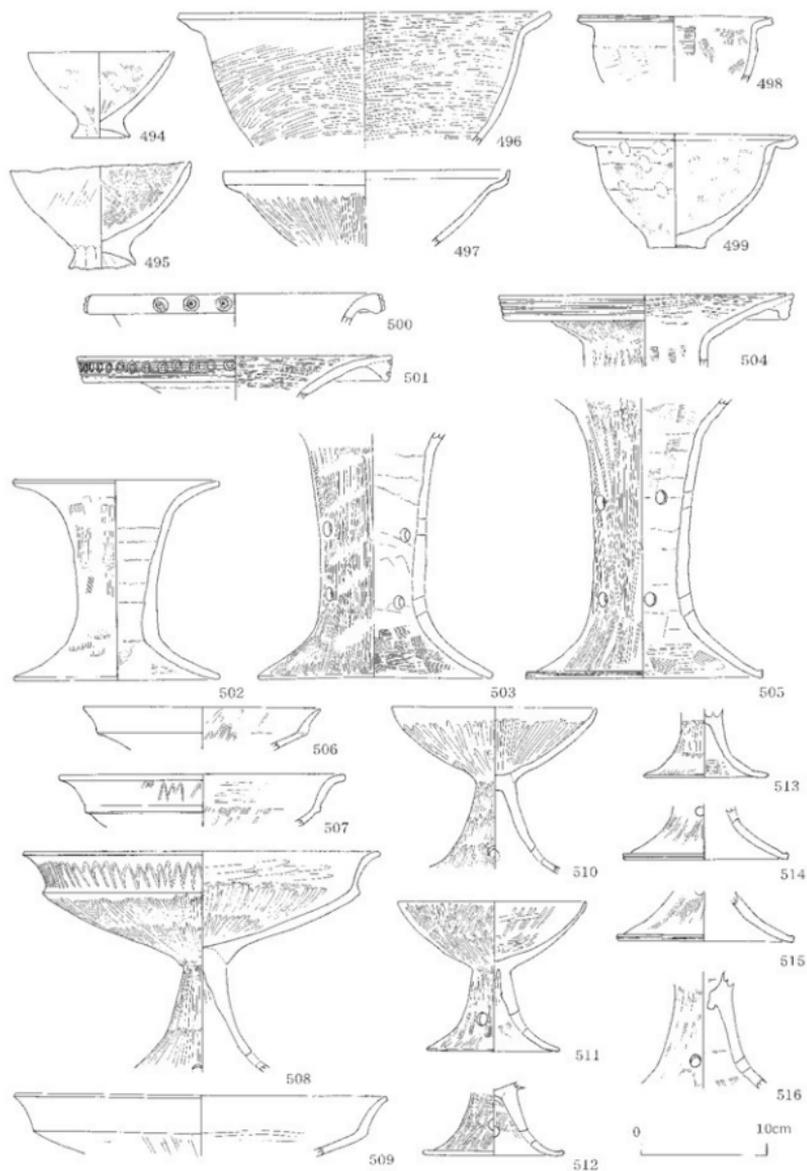
#### 器台(第66図500~505)

口縁部・裾部がラッパ状に開き、中央部の狭い鼓胴形で中空をなす。500は口縁部が下方に拡張し、口縁部端面に円形浮文とその上に円形竹管文の押印が見られる。口径23.0cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR7/4)、外面橙色(7.5YR6/6)を呈する。501は口縁部が下方に拡張し、口縁部端面に5条の凹線文と円形竹管文の押印が見られる。調整は内面4分割からなる密なヘラミガキ、外面にはナデが施される。口縁部に黒斑あり。口径23.2cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/4)、外面にぶい黄褐色(10YR5/4)を呈する。502の調整は内外面共にハケメ(5/cm)が施される。外面に黒斑あり。口径12.2cm、器高16.5cm、裾部径16.4cm。色調は橙色(7.5YR6/6)を呈する。503の胴部に上下二段にそれぞれ5ヶ所からなる円形透かし孔が見られる。調整は内面ハケメ(8/cm)、外面にはハケメ(同原体)後ヘラミガキが施される。外面に黒斑あり。裾部径18.6cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面にぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する。504は口縁部が下方に拡張し、口縁部端面に3条の凹線文が見られる。調整は内外面共にハケメ(13/cm)後ヘラミガキが施される。口径23.6cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR6/3)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。505の裾部端面に2条の凹線文、胴部に上下二段にそれぞれ5ヶ所からなる円形透かし孔が見られる。調整は内面ハケメ(10/cm)・ナデ、外面にはハケメ(同原体)後ヘラミガキが施される。裾部径18.9cm。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。

#### 高坏(第66図506~511)

坏部が屈曲(外面に稜をもつ)して立つ口縁部をもつ形態の高坏A(506~509)、浅い碗形の形態の高坏B(510・511)がある。

506の調整は内面にヘラミガキ、外面にはナデが施される。口径19.1cm。色調は橙色(7.5YR6/6)を呈する。507の調整は内面ハケメ(8/cm)後ヘラミガキ、外面にはヘラミガキが施されると思われるが、摩滅のため詳細不明。口径23.0cm。色調はにぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する。508は脚部に4ヶ所の円形透かし孔が見られる。調整は内外面共にハケメ後ヘラミガキが施される。口径28.6cm、口縁部に黒斑あり。色調は内面にぶい黄褐色(10YR7/4)、外面にぶい褐色(5YR7/4)を呈する。509の調整は内外面共にヘラミガキが施される。外面に煤付着。口径30.0cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR7/2)、外面にぶい褐色(7.5YR7/4)を呈する。510は脚部に3ヶ所の円形透かし



第66图 B区薄100出土土器实测图(5)

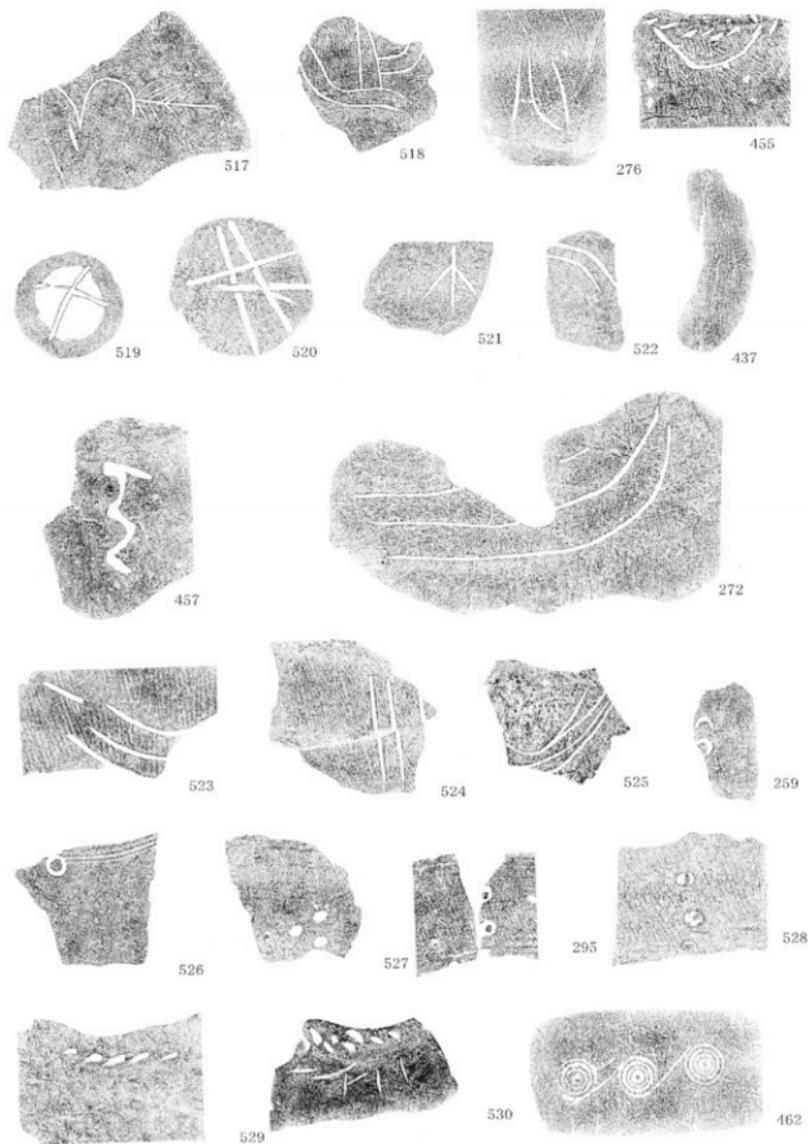
孔が見られる。調整は坯部内外面・脚部外面にヘラミガキ、脚部内面にはナデが施される。内面に黒斑あり。口径16.3cm。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。511は脚部に3ヶ所からなる円形透かし孔が見られる。調整は坯部内外面ヘラミガキ、脚部外面ハケメ後ヘラミガキ、内面にはナデが施される。外面に黒斑あり。口径15.0cm。器高12.3cm。裾部径10.8cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR5/3)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。

#### 脚台(第66図512～516)

高坏に属す脚部と思われる。512は円形透かし孔が4ヶ所に見られる。調整は内面ハケメ(9/cm)、外面にはハケメ(同原体)後ヘラミガキが施される。裾部径10.9cm。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。513の調整は内面ヘラミガキ、外面にはハケメ(7/cm)後ヘラミガキが施される。裾部径9.6cm。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。514の裾部端面に1条の凹線文、脚部には円形透かし孔が1ヶ所見られる。調整は内面ナデ、外面にはヘラミガキが施される。裾部径13.1cm。色調はにぶい黄褐色(10YR7/3)を呈する。515の裾部端面に1条の凹線文、脚部には円形透かし孔が1ヶ所見られる。調整は内面ナデ、外面にはヘラミガキが施される。裾部径14.0cm。色調は内面にぶい橙色(5YR7/4)、外面にぶい橙色(2.5YR6/4)を呈する。516は1ヶ所の円形透かし孔、脚柱部は面取りされている。調整は内面ハケメ、外面にはハケメ後ヘラミガキが施される。色調は内面灰白色(10YR8/1)、外面灰白色(10YR8/2)を呈する。

#### 絵画文・記号文のある上器(第67・68図)

絵画文・記号文のある土器を集めてみた。これらはヘラ描・クシ描・竹管文など、種々の施文法による記号的図形を、土器の一部に施す手法がみられる。これらを①～⑥の6タイプに分類をこころみた。(第12次調査報告書の分類に従う)①は典型的な絵画文といえるもので、517・518がある。517は壺体部最大径部上位に矢筈のような形をした文様と不明な絵画文がみられる。518は壺体部最大径部に不明な絵画文がみられる。②はヘラを使って1個体の記号をつくりだすもので、272・276・437・455～457・519～522がある。272は長頸壺体部に3条の線刻が見られる。276は頸部直上に不明な記号が見られる。437は大型鉢内面に2条の線刻が見られる。455は壺頸部境界にヘラによる「扁平なU字状」の記号が見られる。456は壺体部に「キ」記号が見られる。457は壺頸部直下に「稲妻状」の記号が見られる。519は裏のドーナツ状底部の外面に「×」状の記号が見られる。520は裏底部の外面に「#」状の記号が見られる。521は壺口縁部内面に「トリの足跡」のような記号が見られる。522は壺口縁部内面に「トリの足跡」のような記号が見られる。③は竹管・ヘラなどの工具を使って文様原体による1単位の記号をつくりだすもので、259・295・462・523～530・603・605がある。259・295・528は壺頸部に2個の竹管文が見られる。462は長頸壺の体部に3個の蕨手文様が見られる。523は壺体部に3条からなる線刻が見られる。524は壺体部に3条からなる線刻が見られる。525は壺頸部に4条からなる線刻が見られる。526は壺頸部に4条からなる線刻が見られる。527は壺頸部に4個の竹管文が見られる。529は壺頸部直上に5個からなる記号が見られる。530は壺頸部直上に残存8個からなる記号が見られる。603は壺底部脇に12個からなるキザミが見られる。605は頸部直下に5個からなるヘラによる記号が見られる。④は竹管などの工具を使って装飾的な文様の要素をつくりだすもので、249・290・531・547がある。249は壺頸部に4個の竹管文が見られる。290は壺頸部直上に残存2個の竹管文が見られる。531は壺頸部に残存5個の竹管文が見られる。547は壺頸部に5個の竹管文が見られる。⑤は竹管・ヘラなどの工具を使って器体を一周する文様の要素をつくりだすもので今回は該当なし。⑥はヘラなどの工具を使って器体を一周する直線文をつくりだすもので、532～535がある。532・535は壺体部に



第67回 第4面満100絵画文・記号文のある土器拓影(1)



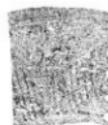
290



547



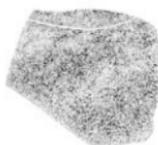
531



249



532



533



534



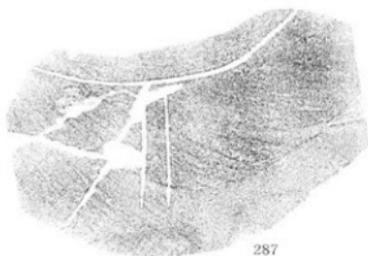
535



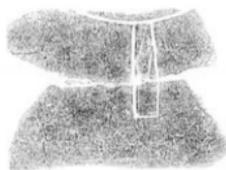
536



466



287



245



537



538



539



540

第68図 第4面溝100絵画文・記号文のある土器拓影(2)

横1条の沈線が見られる。533は壺頸部に横1条の沈線が見られる。534は壺体部に一周するかのよう  
に1条の沈線が見られる。その他に245は壺頸部直下に一周する直線文に、1ヶ所に方形をかたどる  
記号がみられ、㊸もしくは㊹に属す。287は壺頸部直下に一周する直線文に、1ヶ所に2条の垂下す  
る記号がみられ、㊸もしくは㊹に属す。466は長頸壺頸部境に3個の竹管文、その下に1ヶ所「稲妻状」  
のヘラ記号がみられ、㊸もしくは㊺に属す。536は壺体部上位に線刻による直線文?がみられ、㊸も  
しくは㊺に属す。537は壺頸部直下に線刻による波状文?がみられ、㊸もしくは㊺に属す。538は壺頸  
部直下にヘラによる連続した文様(残存5個)がみられ、㊸もしくは㊺に属す。539は壺口縁部直下に  
残存4個の竹管文がみられ、㊸もしくは㊺に属す。540は壺口縁部直下に残存7個の竹管文がみられ、  
㊸もしくは㊺に属す。

#### 第4面 溝102出土土器(第69図)

##### 土師器壺(第69図541~544・546)

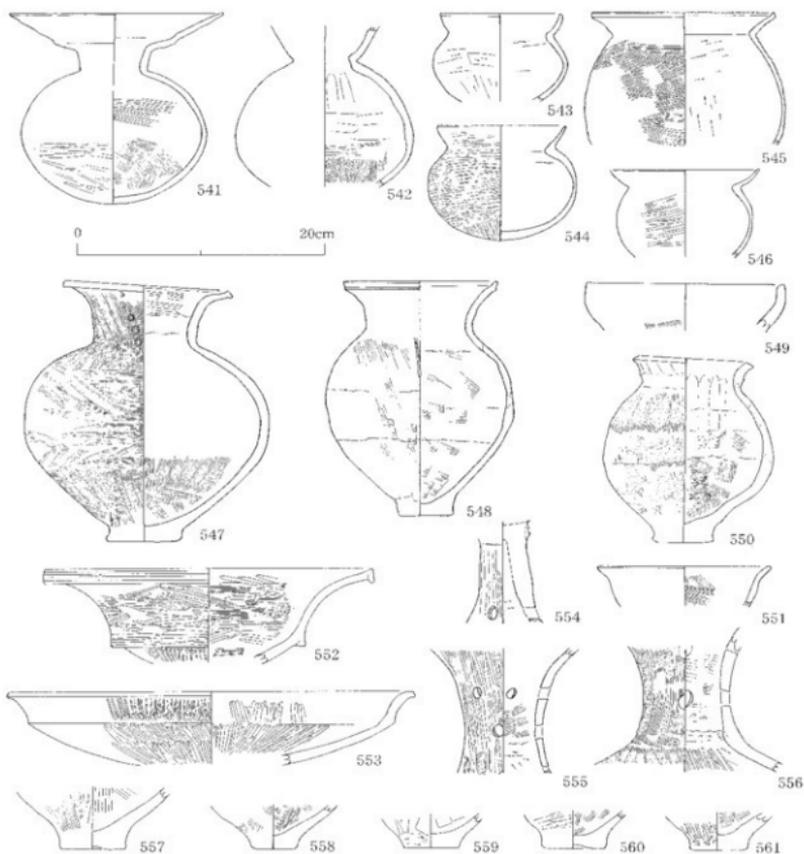
541は二重口縁壺。形態は球形の体部から短く直立する頸部に、口縁部は水平にし、段を有しながら  
上方へ外反する。調整は内面ハケメ(6/cm)、外面にはハケメ(河原体)後ヘラミガキが施される。口  
径17.4cm、器高15.7cm、体部最大径15.0cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR7/4)、外面橙色(5YR6/6)  
を呈する。542の形態は体部最大径が体部中央より下位に位置する。調整は内面ハケメ(9/cm)、外面  
にはヘラケズリが施される。頸部径5.0cm、体部最大径14.4cm。色調は橙色(7.5YR6/6)を呈する。543・  
545・546は小形丸底壺。丸味をもつ体部から、「く」の字形に外反し内湾しながら立ち上がる口縁部を  
もつ。543の調整は内面ナデ、外面にはヘラケズリが施される。口径9.8cm、体部最大径10.7cm。色調  
は橙色(5YR7/6)を呈する。544の調整は内面ナデ、外面には密なヘラミガキが施される。口径10.0cm、  
器高9.5cm、体部最大径11.8cm。色調は内面橙色(5YR6/6)、外面にぶい橙色(5YR7/4)を呈する。  
546の調整は内面ナデ、外面にはハケメ・ヘラミガキが施される。口径12.0cm、体部最大径11.0cm。  
色調は内面橙色(5YR6/6)、外面にぶい橙色(7.5YR7/4)を呈する。

##### 甗(第69図545)

丸味をもつ体部から、「く」の字形に外反する口縁部、口縁端部は上方につまみ上げる形態をもつ。  
調整は内面ヘラケズリ、外面にはタタキメ(6/cm)後ハケメ(7/cm)が施される。口径14.8cm、体部最  
大径16.4cm。色調は内面灰白色(10YR7/1)、外面褐色(10YR6/1)を呈する。

##### 混入品(第69図547~561)

第V様式の土器が混入する。547はやや直立する頸部から、口縁部は屈曲して外反する。口縁端部  
は面をもつ形態で、広口壺Dに属す。外面頸部に凹形竹管による装飾的な文様が見られる。調整は内  
外面共にハケメ(8/cm)が施される。口径13.1cm、器高21.5cm、底径5.5cm、体部最大径19.7cm。色  
調はぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。548・549は外方にひらく頸部から、屈曲して内方に立ち上  
がる口縁部をもつ形態で、広口壺Eに属す。548は口縁部端面に1条の凹線、外面肩部にはヘラによる  
「|」の記号が見られる。調整は内外面共にハケメ(9/cm)後ナデが施される。外面に煤附着。底部と  
口体部はそれぞれ異なる胎上をもつことが色調に現われている。色調は内外面共に口体部にぶい黄  
褐色(10YR6/3)、底部灰黄色(2.5YR6/2)を呈する。549の調整は内面ナデ、外面にはハケメ(13/cm)  
が施される。口径16.0cm。色調はぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。550は寸高の器体に、直線的に外  
方にひらく短い口頸部をもつ形態で、短頸壺に属す。調整は内外面共にナデ・ハケメ(7/cm)が施さ  
れる。外面に黒斑あり。口径9.8cm、器高14.8cm、底径5.0cm、体部最大径13.8cm。色調は内面黄灰色  
(2.5Y6/1)、外面にぶい橙色(5YR7/4)を呈する。551は外反する口縁部をもつ形態で、鉢Bに属す。調  
整は内外面共に板状工具によるナデが施される。口径13.8cm。色調はぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。



第69図 第4面溝102出土土器実測図

552・553は外面口体部境に稜をもち、口縁部が外反する形態で、高杯Aに属す。552は外面口体部境に凸帯がめぐり、口縁部は面をもち下方に肥厚し、口縁端部には2条の凹線文が見られる。調整は内外面共にハケメ(10/cm)後ヘラミガキが施される。口径26.8cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR7/4)、外面にぶい橙色(7.5YR7/4)を呈する。553の調整は内外面共にヘラミガキが施される。口径33.0cm。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。554は高杯の脚台と思われる。3ヶ所の円形透かし孔が見られる。調整は内面ヘラケズリ、外面にはヘラミガキが施される。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。555・556は器台。555の筒部に2段(上段5ヶ所・下段4ヶ所)からなる円形透かし孔が見られる。調整は内面ハケメ・ヘラケズリ、外面にはハケメ後ヘラミガキが施される。色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)

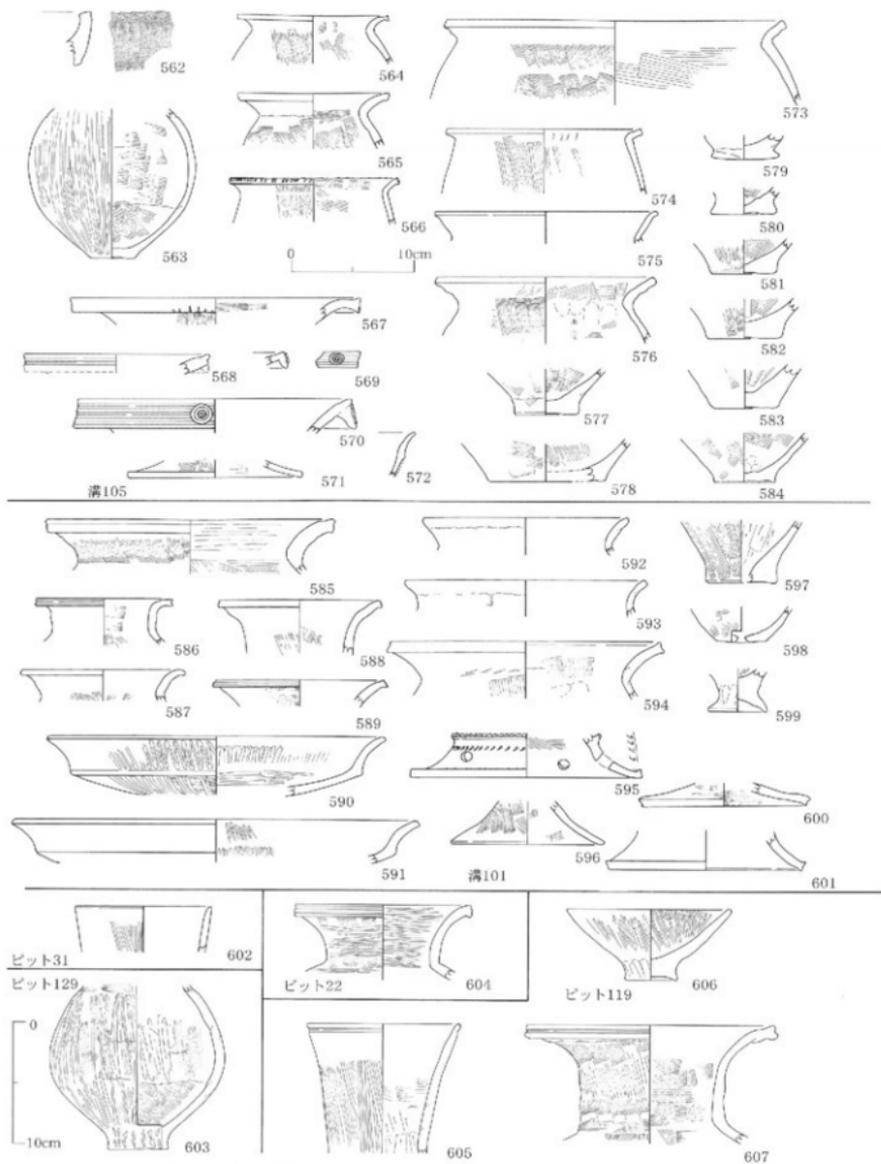
を呈する。556の筒部に2段(上段3ヶ所・下段4ヶ所)からなる円形透かし孔が見られる。調整は内面ハケメ(7/cm)・ヘラケズリ・ヘラミガキ、外面にはハケメ(同原体)が施される。色調は内面にぶい黄橙色(10YR6/4)、外面灰黄褐色(10YR6/2)を呈する。557~561は甕の底部と思われる。底部中央部が凹むもの(557・560)、平底(558・559・561)が見られる。557の調整は内外面共にハケメ(6/cm)、外面底部には工具によるナデが施される。底径5.4cm。色調は内面灰褐色(7.5YR6/2)、外面にぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。558の調整は内面ハケメ(10/cm)、外面には工具の異なるハケメ(5/cm)が施される。内面に煤付着。底径3.6cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/3)、外面にぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。559の調整は内面ハケメ(9/cm)、外面にはハケメ(同原体)・ヘラケズリ、底部に板状工具によるナデが施される。底径4.6cm。色調は内面灰黄褐色(10YR6/2)、外面にぶい黄橙色(10YR7/3)を呈する。560の調整は内面ハケメ、外面にはタタキメが施される。内面に煤付着。底径5.2cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR6/3)、外面にぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈する。561の調整は内面ハケメ(3/cm)、外面にはハケメ(同原体)後ヘラミガキ、外面底部にヘラミガキが施される。底径4.7cm。色調は内面にぶい黄橙色(10YR6/4)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。

#### 第4面 溝105出土土器(第70図562~584)

562は口縁部が拡張した形態をもつ広口壺B(第三~IV様式)に属す。口縁部には楕圓扇形文・2帯の籬状文(共に17/1.8cm)が施される。色調は内面にぶい黄褐色(10YR5/4)、外面明褐色(7.5YR5/6)を呈する。563は壺の体部と思われる。やや上げ底気味の底部から、球形の体部をもつ。調整は内面ハケメ(5/cm)、外面体・底部にはヘラミガキが施される。外面に黒斑あり。底径3.6cm、体部最大径13.6cm。色調は内面にぶい黄橙色(10YR6/3)、外面にぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。567は口縁端部を上下にわずかに肥厚し、端面が凹む形態をもつ広口壺E(第三~IV様式)に属す。口縁部下方に不規則なキザミメが見られる。調整は内外面共に板状工具によるナデが施される。口径23.4cm。色調はにぶい黄橙色(10YR7/2)を呈する。

564~566・573~576は甕。小型甕564~566、中型甕574~576、大型甕573がある。564は口縁端部に面をもち、わずか下方に肥厚する。調整は内外面共にハケメ(7/cm)が施される。口径12.2cm。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。565の調整は内外面共にハケメ(8/cm)が施される。口径12.4cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面灰黄褐色(10YR6/2)を呈する。566は口縁端部に面をもちキザミメが見られる。調整は内外面共にハケメ(5/cm)が施される。口縁部に煤付着。口径13.6cm。色調はにぶい黄褐色(10YR5/4)を呈する。573の調整は内面粗いハケメ(3/cm)、外面には細かいハケメ(7/cm)が施される。口径27.8cm。色調は内面橙色(5YR6/6)、外面にぶい橙色(7.5YR7/4)を呈する。574の調整は内外面共にハケメ(4/cm)が施される。口径15.6cm。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。575の調整はヨコナデが施される。内面に煤付着。口径17.8cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。576の調整は内面ハケメ(4/cm)、外面にはタタキメ(3.5/cm)後ハケメ(8/cm)が施される。外面に煤付着。口径18.0cm。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。

568~570は器台。568は口縁端部の下方が剥離する。口縁部端面には凹線文が見られる。口径14.8cm。色調はにぶい褐色(7.5YR6/4)を呈する。569の口縁部は下方に拡張し、口縁部端面には3条の凹線文に円形浮文の上に竹筧文が見られる。調整は細片のため詳細不明。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。570の口縁部は下方に拡張し、口縁部端面には3条の凹線文に円形浮文の上に竹筧文が見られる。調整は風化のため詳細不明。口径22.0cm。色調は内面にぶい褐色(2.5YR6/4)、外面褐色(7.5YR6/6)を呈する。



第70図 第4面溝101・105、ビット22・31・119・129出土土器実測図

571は壺蓋。調整は内面ハケメ、外面にはハケメ(9/cm)後ヘラミガキが施される。口径14.0cm。色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。

572は高坏A。外面に稜線がめぐる。調整は内面ナデ、外面にはハケメ(10/cm)が施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。

577~584は底部。すべて甕の底部と思われる。平底(579)、上げ底(577・580~584)、不明(578)がある。577の調整は内外面共にハケメ(7/cm)が施される。底径5.2cm。色調は内面ににぶい黄褐色(10YR5/3)、外面ににぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。578の調整は内外面共にハケメ(6/cm)が施される。底径9.6cm。色調は内面ににぶい黄褐色(10YR5/4)、外面ににぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。579の調整は内外面共にナデであるが、外面底部脇に工具痕が残存する。底径5.4cm。色調は内面ににぶい褐色(7.5YR5/4)、外面ににぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。580の調整は内面ハケメ(10/cm)、外面は詳細不明、底部にはナデが施される。底径5.4cm。色調は灰黄褐色(10YR5/2)を呈する。581の調整は内面ハケメ(7/cm)、外面にはハケメ(同原体)後ヘラミガキが施される。底径5.3cm。色調はにぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する。582の調整は内面ハケメ(7/cm)、外面にはハケメ(同原体)後ヘラミガキが施される。底径6.4cm。色調は内面橙色(7.5YR6/6)、外面ににぶい褐色(7.5YR6/4)を呈する。583の調整は内外面共にハケメ(7/cm)が施される。底径5.5cm。色調はにぶい黄褐色(10YR5/4)を呈する。584の調整は内外面共にハケメ(7/cm)が施される。底径5.0cm。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。

#### 第4面 溝101出土土器(第70図585~601)

585・586・588は広口壺。585はなだらかに外弯する口縁部をもつ広口壺Bに属す。口縁部端面に沈線状の凹線文が見られる。調整は内面板状工具によるナデ、外面にはハケメ(7/cm)が施される。内面に黒斑あり。口径23.6cm。色調はにぶい褐色(7.5YR6/4)を呈する。586・588は直立する頸部から、口縁部は屈曲して外反する形態をもつ広口壺Dに属す。共に口縁部端面に1条の凹線文が見られる。586の調整は内面ハケメ、外面にはヨコナデが施される。口径10.9cm。色調は内面ににぶい褐色(7.5YR6/4)、外面褐色(7.5YR6/6)を呈する。588の調整は内外面共にハケメが施される。口径13.0cm。色調はにぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する。

587・589・592~594は甕。口縁部の大きさから小型甕(587・589)、中型甕(592~594)がある。587の口縁部は外弯する形態をもつ。調整は内外面共にハケメ(9/cm)が施される。口径13.0cm。色調は内面赤褐色(5YR4/6)、外面ににぶい赤褐色(5YR4/4)を呈する。589の口縁部は面をもち、口縁部端面に沈線文が見られる。調整は内面ヨコナデ、外面にはハケメ(7/cm)が施される。口径13.6cm。色調は内面ににぶい褐色(7.5YR6/4)、外面褐色(7.5YR6/6)を呈する。592・593の口縁部はなだらかに外弯する形態をもつ。592の調整は内外面共にヨコナデが施される。内面に黒斑あり。口径16.8cm。色調は内面ににぶい褐色(5YR6/4)、外面ににぶい褐色(7.5YR6/4)を呈する。593の調整は内面ヨコナデ、外面には工具痕が見られる。口径13.6cm。色調は内面ににぶい褐色(7.5YR6/4)、外面褐色(7.5YR6/6)を呈する。594の口縁部は面をもち、口縁部端面はわずかに上下に肥厚する。調整は内外面共にハケメ(4/cm)が施される。外面に煤付着。口径22.6cm。色調は内面ににぶい褐色(7.5YR6/4)、外面ににぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。

590・591は口体部境に稜線をもつ高坏A。590の調整は内面密なヘラミガキ、外面口縁部にジグザグ状のヘラミガキ、体部にはハケメ後放射線状のヘラミガキが施される。口径27.6cm。色調はにぶい褐色(7.5YR7/4)を呈する。591の調整は内面ヘラミガキ、外面にはヨコナデが施される。外面に煤付着。口径33.2cm。色調は内面ににぶい黄褐色(10YR6/3)、外面灰黄褐色(10YR5/2)を呈する。

595は器台の裾部。裾部境に1条の凸帯にキザミメ、凸帯をはきんで上下と裾部に列点文、5ヶ所からなる円形透かし孔が見られる。調整は内面ハケメ(9/cm)、外面ナデが施される。裾部径18.6cm。色調はにぶい黄褐色(10YR6/3)を呈する。

596・601は脚台。共に高坏の脚台と思われる。596はなだらかに「ハ」の字形に広がる裾部。裾端部は丸くおさめる。調整は内外面共にハケメ(11/cm)が施される。裾部径12.2cm。色調はにぶい黄褐色(10YR6/3)を呈する。601は裾端部に面をもち、上下をわずかに肥厚させる。調整は内外面共にヨコナデが施される。弥生中期に属することも考えられる。裾部径15.6cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/3)、外面にぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。

600は蓋蓋。つまみ部を欠損する。調整は内外面共にハケメ(7/cm)が施される。内外面に煤附着。口径13.4cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR6/3)、外面褐色(10YR6/1)を呈する。

597～599は底部。597は壺の底部と思われる。やや上げ底気味の底部。調整は内面・外面底部にヘラケズリ、外面にはハケメ(7/cm)が施される。内面に煤附着。底径5.8cm。色調は内面灰黄褐色(10YR5/2)、外面にぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。598は鉢の底部。丸味をもつ底部から、見込み中央に穿孔が見られる。調整は内面ナデ、外面にはハケメ(11/cm)が施される。底径4.2cm。色調は内面灰黄褐色(10YR5/2)、外面にぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。599は上げ底。調整は内面ハケメ、外面にはナデが施される。底径4.7cm。色調はにぶい黄褐色(10YR5/4)を呈する。

#### 第4面 ビット31出土土器(第70図602)

長頸壺の口縁部と思われる。直線的に外方に広がる口縁部。調整は内面ナデ、外面にはハケメ(6/cm)が施される。口径11.0cm。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。

#### 第4面 ビット129出土土器(第70図603)

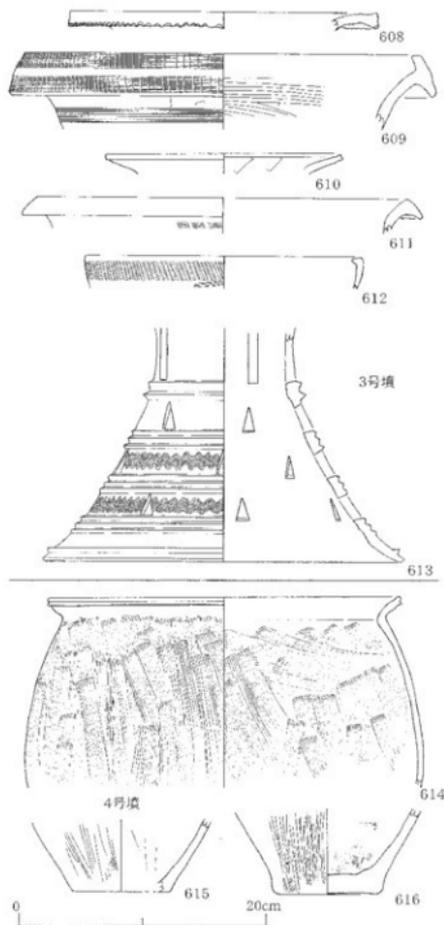
壺の体底部。底部脇に12個からなるキザミメが見られる。調整は内面ハケメ(8/cm)・ナデ、外面にはハケメ(同原体)後ヘラミガキが施される。内面に煤附着。底径5.0cm、体部最大径14.0cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面橙色(5YR6/6)を呈する。

#### 第4面 ビット22出土土器(第70図604)

604はラッパ状にひろく口頸部、口縁端部はわずかに拡張する形態をもつ広口壺Cに属す。口縁部端面に2条の凹線文が見られる。調整は内外面共にハケメ(4/cm)後ヘラミガキが施される。口径14.2cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/3)、外面にぶい黄褐色(10YR7/3)を呈する。

#### 第4面 ビット119出土土器(第70図605～607)

605は外弯しながら外方にひろく長頸壺。口縁部に1条の凹線、頸部下部にヘラによる5個の記号が見られる。調整は内面ハケメ(5/cm)・ヘラケズリ、外面にはハケメ(同原体)が施される。口径12.2cm。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。606は直口の口縁部をもつ形態の鉢Aに属す。調整は内外面共にハケメ(4/cm)後ヘラミガキ、外面底部脇には工具によるナデが施される。内面に黒斑あり。口径13.2cm、器高4.0cm、底径5.9cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面にぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。607は直立した頸部から、外反する口縁部、口縁端部は下方に拡張する形態をもつ広口壺A。口縁部端面に1条の凹線が見られる。調整は内外面共にハケメ(7/cm)が施される。外面頸部下位にヘラケズリが見られるが、記号とも考えられる。口径20.0cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外



第71図 第3面・4号周溝出土土器実測図

調整は内面ナデ、外面にはハケメが施される。口径22.4cm。色調はにぶい黄橙色(10YR6/4)を呈する。以上のことから第Ⅲ～Ⅳ様式に属すが混入品と考えられる。

613は須恵器器台。「ハ」の字形に外反する脚部に、裾部近くまで凸線があり、またその凸線によって界された櫛描波状文(9/1.2cm)からなる文様帯が見られる。三角形の透かし孔は千鳥状に配されている。調整は回転ナデが施される。裾部径29.4cm。色調は内面灰色(N4/、)外面灰色(N5/、)を呈する。I-3段階(中村編年)に属すと考えられる。

而明褐色(7.5YR5/6)を呈する。

第3面 3号墳周溝出土土器(第71図608～613)

608は広口壺の口縁部と思われる。大きく外反する口縁部に、口縁端部は下方に肥厚し、その下端部にキザミが見られる。調整は内外面共にナデが施される。口径25.0cm。色調は内面褐色(10YR5/1)、外面にぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する。609は蓋でなだらかに外弯する口縁部から、口縁端部は上下に拡張し施文帯とする。口縁拡張部には櫛描簾状文(13/1.4cm)、頸部には同原体による櫛描直線文が見られる。調整は内面板状工具によるハケメ(4/cm)、外面にはハケメ(9/cm)が施される。口径32.0cm。色調は内面褐色(10YR4/1)、外面明黄褐色(10YR6/6)を呈する。610は蓋の口縁部と思われる。調整は内面工具によるナデ、外面にはナデが施される。口径19.0cm。色調は内面にぶい黄橙色(10YR7/2)、外面灰白色(7.5YR8/2)を呈する。611は大型甕。口縁端部を下方に拡張し、面をもつ。調整は内面ナデ、外面にはハケメ(10/cm)が施される。口径30.9cm。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。612は口縁部が直線的にひらき、口縁端部は内側に肥厚する形態をもつ鉢Bに属す。外面口縁部に櫛描簾状文(11/1.4cm)が見られる。

第3面 4号墳周溝出土土器(第71図614~616)

614は大型甕。丸味をもつ体部から、「く」の字形に外反する口縁部、口縁端部は面をもち凹む。調整は内外面共にハケメ(10/cm)が施される。口径28.4cm、体部最大径32.2cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面にぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する。615・616は甕の底部。615の調整は内面工具によるナデ、外面にはハケメ後ヘラミガキが施される。底径8.0cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/3)、外面にぶい黄褐色(10YR7/4)を呈する。616は平底。調整は内面ハケメ(9/cm)、外面にはハケメ(同原体)後ヘラミガキが施される。外面に黒斑あり。底径8.0cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/4)、外面にぶい黄褐色(10YR5/4)を呈する。以上のことからⅢ～Ⅳ様式に属すが混入品と考えられる。

第2面 上坑1出土土器(第72図617~629)

617~626は土師器、627~629は須恵器。

617・618・621・623は杯A。617は内面放射線状暗文、外面には粗いヘラミガキが見られる。調整は内外面共にナデが施される。口径10.6cm、器高2.9cm。色調は浅黄褐色(7.5YR8/4)を呈する。618は内外面共に著しい摩滅のため詳細不明。口径12.2cm、器高2.9cm。色調は淡黄色(2.5Y8/3)を呈する。621は外面底部にヘラ記号が見られる。調整は内外面共にナデが施される。口径10.6cm、器高2.9cm。色調は浅黄褐色(10YR8/3)を呈する。623は内面に2段からなる放射線状暗文、外面には粗いヘラミガキが見られる。調整は内面摩滅、外面底部にはヘラケズリが施される。口径20.0cm、器高4.5cm。色調は淡黄色(2.5Y8/3)を呈する。619は杯C。内面に放射線状暗文が見られる。調整は内外面共に摩滅のため詳細不明。口径14.2cm、器高2.9cm。色調はにぶい黄褐色(10YR7/3)を呈する。

622は皿A。調整は表面の剥離・著しい摩滅のため詳細不明。口径13.4cm、器高2.0cm。色調は褐色(7.5YR7/6)を呈する。

620は椀C。調整は著しい摩滅のため詳細不明。口径15.0cm。色調は褐色(7.5YR7/6)を呈する。

624は甕C。「く」の字形にひろがる口縁部、口縁端部は面をもち内側に肥厚する。調整は内面ハケメ(9/cm)・ヘラケズリ、外面には同原体によるハケメが施される。外面に煤付着。口径13.6cm。色調は内面灰白色(2.5Y8/2)、外面にぶい褐色(5YR7/4)を呈する。

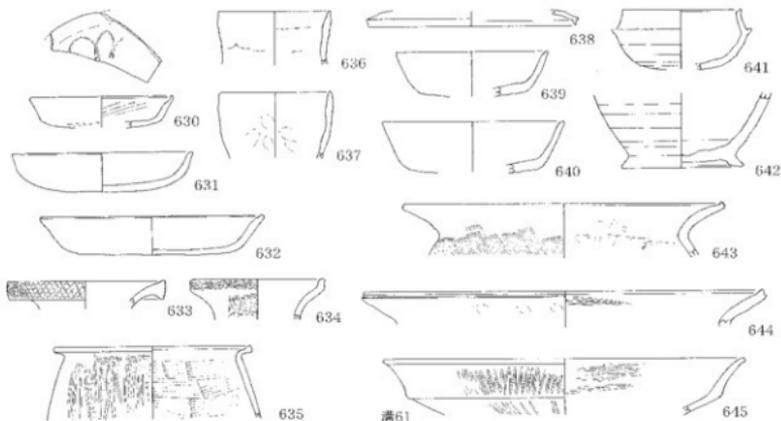
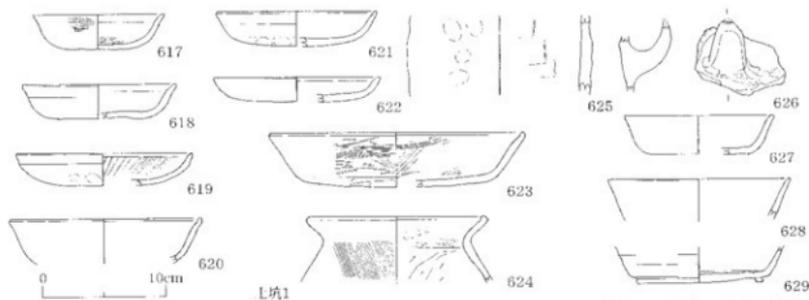
625は製塩土器。調整は内面板状工具によるナデ、外面はユビナデが施される。色調は内面にぶい黄褐色(10YR7/3)、外面褐色(7.5YR7/6)を呈する。

626は把手。外面の調整にヘラミガキが施されることから蓋の把手とも考えられる。色調は褐色(5YR7/6)を呈する。

627・628は杯身A。627の調整は内外面共に回転ナデが施される。口径12.0cm、器高3.2cm。色調は灰白色(7.5Y8/1)を呈する。628の調整は内外面共に回転ナデが施される。口径14.6cm。色調は内面灰白色(N8/)、外面灰色(5Y5/1)を呈する。629は高台をもつ杯身B。調整は内面回転ナデ、外面底部はヘラケズリ後ナデが施される。底径9.2cm。色調は明青灰色(5PB7/1)を呈する。

第2面 溝61出土土器(第72図630~645)

630~632・636・637・643・644は土師器、638~642は須恵器、633~635・645は弥生土器。630・632は杯A。630は内面口縁部放射状暗文、底部には螺旋状暗文が見られる。調整は外面底部にヘラケズリが施される。口径11.4cm、器高2.6cm。色調は褐色(5YR7/6)を呈する。632は口縁端部内側に沈線が見られる。調整は内外面共にナデが施される。内外面共に煤付着。口径17.8cm、器高3.2cm。



第72図 第2面土坑1、溝61出土土器実測図

色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。631は杯C。調整は内外面共に風化のため詳細不明。口径14.4cm、器高3.2cm。色調は内面橙色(7.5YR6/6)、外面にぶい橙色(7.5YR7/4)を呈する。

636・637は製塩土器。636は直線的に上方にのびる口縁部をもつ。調整は内外面共にナデが施される。口径9.0cm。色調は浅黄橙色(10YR8/3)。637は内湾する口縁部をもつ。調整はヨコナデが施される。口径8.8cm。色調は褐色(7.5YR7/6)を呈する。

643・644は甕。「く」の字形にひろがる口縁部、口縁部には面をもつ。643の調整は内外面共にハケメ(7/cm)が施される。口径21.6cm。色調は内面にぶい黄橙色(10YR7/4)、外面にぶい橙色(7.5YR7/4)を呈する。644の調整は内面ハケメ(9/cm)、外面にはヨコナデが施される。口径32.0cm。色調は内面灰白色(2.5Y8/2)、外面にぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する。

638は杯蓋。内面のかえりが消失し、天井部は丸みをもち、口縁端部を内方へ屈曲させる形態。調整は内外面共に回転ナデが施される。口径16.6cm。色調は内面灰白色(N7/)、外面灰色(N6/)を呈する。IV-1段階に属すと考えられる。639～641は杯身。639～640の調整は外面底部未調整、以外は内

外面共に回転ナデが施される。639の口径10.0cm、器高3.7cm。色調は灰色(5Y6/1)を呈する。640の口径14.4cm、器高4.2cm。色調は内面灰白色(2.5Y7/1)、外面灰白色(2.5Y8/1)を呈する。Ⅲ-2段階に属すると考えられる。641のたちあがりは比較的高く内傾し、内方に段が見られる。調整は外面底部1/2に回転ヘラケズリ、以外は内外面共に回転ナデが施される。口径9.6cm、器高4.9cm。色調は灰色(N5/)を呈する。Ⅰ-5段階に属すると考えられる。

642は壺の底部。「ハ」の字形にひろがる高台をもつ。内面には自然釉が見られる。調整は外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデが施される。底径9.8cm。色調は内面灰白色(10YR8/1)、外面灰白色(N7/)を呈する。

633~635・645は混入品。633は小型の広口壺。口縁部を上下に肥厚し、口縁部端面に斜格子状の文様が見られる。口径12.6cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR5/3)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。634は口縁部を上方に拡張し、拡張部に櫛描波状文が見られる。調整は内面風化のため詳細不明、外面にはハケメが施される。口径10.4cm。色調は内面明赤褐色(5YR5/6)、外面明褐色(7.5YR5/6)を呈する。

635は中型甕。短く外折する口縁部、口縁端部には面をもつ。調整は内面ハケメ(4/cm)、外面にはハケメ(同原体)後ヘラミガキが施される。口径15.8cm。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。

645は高坏A。外面口体部境に稜線をもつ形態。外面口縁部にはジグザグ状のヘラミガキが見られる。調整は内外面共にヘラミガキが施される。口径28.8cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR7/2)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。

## 第2面 溝83出土土器(第73・74図646~695)

646~661・677~679は土師器、662~676は須恵器、680~684は須恵器混入品、685~695は赤生土器であり混入品。

646・647は杯身A。646の調整は著しい摩滅のため詳細不明。口径16.0cm。色調は橙色(7.5YR6/8)を呈する。647は内面放射線状暗文、外面にはヘラミガキ・ヘラケズリが施される。口径18.6cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR7/4)、外面橙色(7.5YR7/6・6/8)を呈する。648・649は杯身B。648の調整は著しい摩滅のため詳細不明。高台径11.2cm。色調は浅黄褐色(10YR8/3)を呈する。649は内面2段からなる放射線状暗文、外面にはヘラミガキ・ヘラケズリが施される。口径17.8cm、器高5.5cm、高台径12.2cm。色調は橙色(5YR6/6)を呈する。650は杯身C。調整はヨコナデが施される。口径13.2cm。色調は淡黄色(2.5Y8/3)を呈する。

651~655は皿A。651の調整は摩滅のため詳細不明。口径13.6cm。色調はにぶい黄褐色(10YR7/4)を呈する。652の調整は著しい摩滅のため詳細不明、外面底部はヘラケズリが施される。口径14.0cm。色調は橙色(7.5YR7/6)を呈する。653は内面に放射線状暗文、外面にはヘラミガキ・ヘラケズリが施される。口径17.0cm、器高2.95cm。色調は浅黄褐色(10YR8/3)を呈する。654は内面に放射線状暗文、外面にはヘラミガキ・ヘラケズリが施される。口径18.2cm。色調は内面黒褐色(10YR2/3)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。655の内面口縁部に放射線状暗文、底部に螺旋状暗文、外面には粗いヘラミガキ・ヘラケズリが施される。口径21.6cm、器高2.4cm。色調は橙色(7.5YR7/6)を呈する。

656~658は甕。656の調整はヨコナデ。口径17.8cm。色調はにぶい黄褐色(10YR7/3)を呈する。657の調整はヨコナデ。外面に煤付着。口径17.4cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR7/2)、外面褐灰色(10YR6/1)を呈する。658は外反する口縁部、口縁端部は屈曲し内折する。調整は内面口縁部に粗いハケメ、体部にはヘラケズリが施される。口径22.6cm。色調はにぶい黄褐色(10YR7/2)を呈する。

659は鉢B。外傾する体部から、口縁部は内側にかかるく巻き込む形態。調整は内面著しい摩滅のため

詳細不明、外面には一部ヘラミガキが見られる。口径18.6cm。色調は内面浅黄橙色(10YR8/4)、外面浅黄橙色(10YR8/4)を呈する。

660は壺B。調整は板状工具によるナデが施される。外面口縁部から内面に煤付着。口径12.4cm。色調は橙色(5YR6/6)を呈する。

661は羽釜。調整は内面ハケメ(4/cm・8/cm)、外面にはナデが施される。口径22.2cm。色調は明赤褐色(5YR5/6)を呈する。

662~664は杯B蓋。662はボタン状の平坦なつまみが付く。調整は内面天井部一方向のナデ、外面天井部に時計廻りの回転ナデが施される。色調は青灰色(5PB6/1)を呈する。663はボタン状の平坦なつまみが付く。調整は内面回転ナデ、外面には逆時計廻りの回転ヘラケズリが施される。外面に自然釉付着。色調は内面灰白色(N7/)、外面灰白色(N8/)を呈する。664の内面口縁部に退化気味のかえり、外面天井部には擬宝珠つまみが付く。調整は内面回転ナデ、外面には時計廻りの回転ヘラケズリが施される。口径17.0cm、器高3.4cm。色調は青灰色(5PB6/1)を呈する。

665・666・671・673は杯身B。668~670・672は杯身A。665の調整は回転ナデが施される。口径14.1cm、器高4.2cm、高台径8.6cm。色調は灰白色(N7/)を呈する。666の調整は内面底部に一定方向のナデ、外面底部にはヘラ切で終わる。口径16.0cm、器高4.1cm、高台径12.1cm。色調は内面灰白色(2.5Y8/2)、外面明オリーブ色(2.5GY7/1)、浅黄橙色(10YR8/4)を呈する。668の調整は回転ナデが施される。口径11.2cm。色調は灰白色(N8/)を呈する。669の調整は回転ナデが施される。外面に重ね焼き痕が見られる。口径13.8cm。色調は灰白色(10Y8/1)を呈する。670の調整は回転ナデが施される。口径14.4cm。色調は内面灰白色(N8/)、外面灰白色(N7/)を呈する。671の調整は回転ナデが施される。高台径8.4cm。色調は灰白色(N8/)を呈する。672の調整は内面底部に一定方向のナデ、外面底部にはヘラケズリが施される。口径11.6cm、器高3.4cm。色調は灰白色(N7/)を呈する。673の調整は内面体底部内面、外面高台脇には回転ヘラケズリが施される。口径12.6cm、器高4.8cm、高台径8.2cm。色調は内面灰色(N6/)、外面灰白色(N7/)を呈する。

667は埴瓶の口縁部と思われる。調整は内外面共に回転ナデが施され、共に自然釉が見られる。口径13.8cm。色調は灰白色(N8/)を呈する。

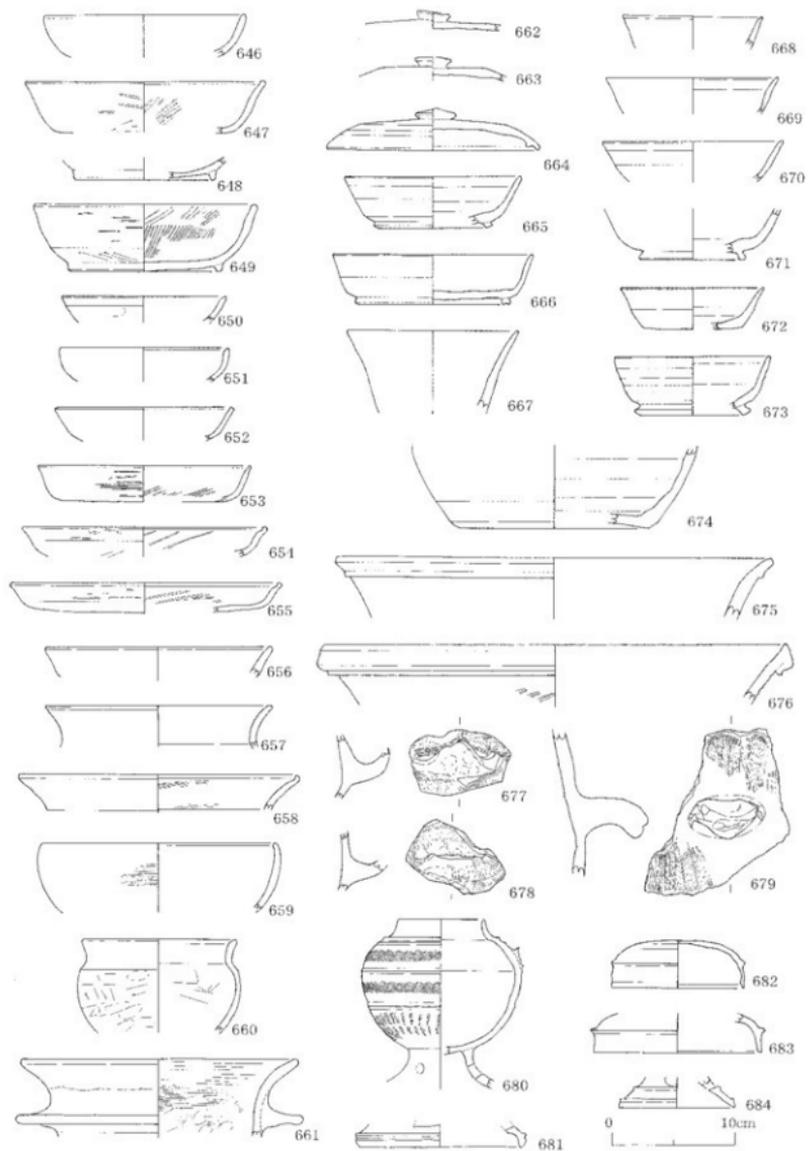
674は壺の底部と思われる。調整は内面回転ナデ、外面には体部回転ナデ、体部下位は回転ヘラケズリ、底部には工具によるナデが施される。底径15.2cm。色調は灰白色(N8/)を呈する。

675・676は甕。675は口縁部外面に凸帯が見られる。調整は回転ナデが施される。内面に自然釉が付着。口径35.0cm。色調は内面灰白色(N7/)、外面オリーブ黒色(7.5Y3/2)を呈する。676の口縁部は外面に折り返して肥厚する。外面にヘラによる斜行線文、自然釉が見られる。調整は回転ナデが施される。口径37.2cm。色調は内面灰色(N6/)、外面黒褐色(10YR3/1)を呈する。

677~679は把手。677の調整は内面ヘラケズリ後ハケメ(7/cm)、外面にはハケメ(同原体)が施される。色調は内面灰白色(10YR8/2)、外面にぶい橙色(7.5YR7/4)を呈する。678の調整は内面ヘラケズリ後ナデ、外面にはハケメ(6/cm)が施される。色調は橙色(5YR7/6)を呈する。679は壺の把手と思われる。調整は内面板状工具・ナデ、外面にはハケメ(16/cm)、把手には一部ヘラケズリが施される。色調はぶい黄褐色(10YR5/4)を呈する。

680は合付壺。台部には3ヶ所の円形透かし孔、体部には4条の突帯とその間に櫛波状文(8/1.1cm)と同原体による刺突文が見られる。肩部に把手の痕跡。口径6.8cm。色調は内面青灰色(5PB6/1)、外面暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)を呈する。

681・684は高杯の脚部。681はわずかながら長方形透かし孔の痕跡、裾部端面には1条の沈線が見られる。調整は回転ナデが施される。裾部径13.2cm。色調は青灰色(5PB6/1)を呈する。684は円形透



第73图 第2面满83出土土器实测图

かし孔、1条の凸線が見られる。外面に自然釉付着。調整は回転ナデが施される。裾部径9.4cm。色調は灰白色(N8/)を呈する。

682・683は杯蓋。682は内面口縁端部に沈線状の段をもち、やや丸味のある稜線が付く。調整は外面天井部2/3に回転ヘラケズリが施される。口径10.6cm。器高3.9cm。色調は内面暗オリーブ灰色(5GY4/1)、外面青灰色(5PB6/1)を呈する。683は内面口縁部端面に沈線状の段をもち、尖り気味の稜線が付く。調整は外面天井部にカキメが施される。口径13.6cm。色調はオリーブ黒色(10Y3/1)を呈する。

685～687は広口壺。685は広口壺D。調整は著しい摩滅のため詳細不明。口径14.6cm。色調は黄褐色(10YR5/6)を呈する。686は広口壺B。調整は内面表面が剝離のため詳細不明、外面にはハケメ(5/cm)が施される。口径18.6cm。色調はにぶい橙色(7.5YR7/4)・浅黄橙色(10YR8/3)を呈する。687は広口壺A。口縁部を下方に拡張し、口縁部端面には櫛描波状文(10/1.2cm)が見られる。調整はナデが施される。口径24.6cm。色調は灰白色(2.5Y8/2)・浅黄橙色(10YR8/3)を呈する。

688は直口壺。口縁端部にキザミメ、頸部には櫛描波状文・直線文(6/1.2cm)が見られる。外面口縁部に黒斑あり。口径6.8cm。色調は灰白色(10YR8/2)を呈する。

691は短頸壺。調整は内外面共にハケメ(9/cm)が施される。外面口縁部に黒斑あり。口径10.2cm。色調はにぶい黄橙色(10YR6/4)を呈する。

690は鉢A。調整は内面板状工具によるナデ、外面には粗いハケメ(5/cm)が施される。口径14.4cm。色調は橙色7.5YR6/6)を呈する。

689・692・693は甕。689は小型。調整は内面ナデ、外面にはヘラミガキが施される。口径10.2cm。色調は黄褐色(10YR5/6)を呈する。692は口縁端部を上方につまみ上げる形態。調整はヨコナデが施される。口径16.6cm。色調は橙色(7.5YR6/6)を呈する。693は大型。調整はヨコナデが施される。口径30.6cm。色調は橙色(7.5YR6/8)を呈する。

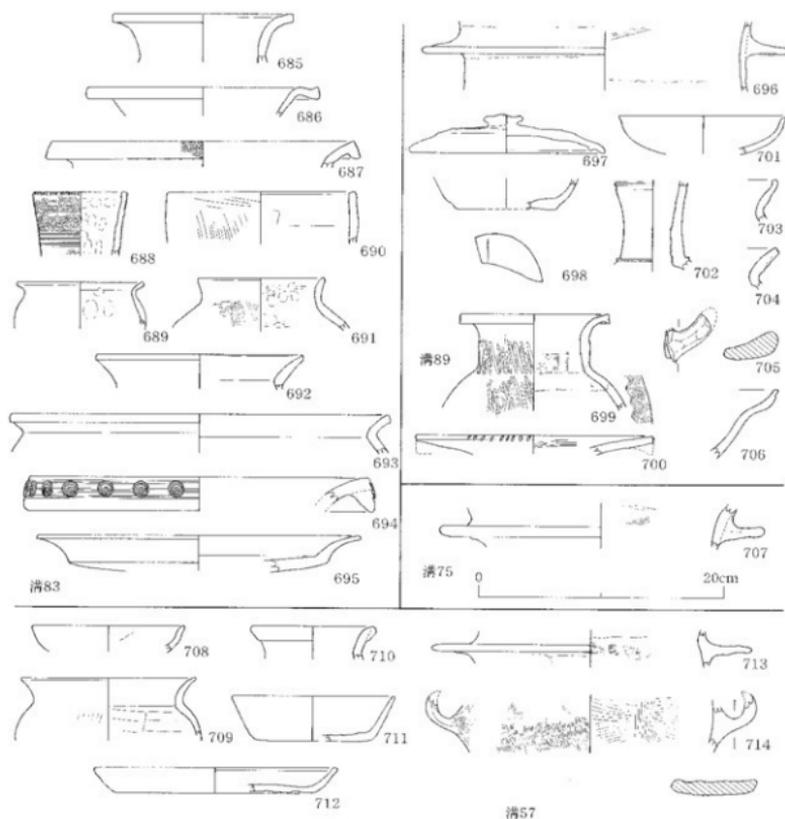
694は器台。口縁部を下方に拡張し、口縁部には3条の凹線と円形浮文に竹管文を押ししたものが見られる。調整は内面ヘラミガキ、外面にはハケメ(8/cm)が施される。口径27.4cm。色調は黄褐色(10YR5/6)を呈する。

695は高杯A。調整は著しい摩滅のため詳細不明。外面に黒斑あり。口径26.0cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR7/3)、外面オリーブ黒色(7.5Y3/1)を呈する。

## 第2画 溝89出土器(第74図696～706)

696・701・703～705は土師器。697・698・702は須恵器。699・700・706は混入品の弥生土器。696は羽釜。鋳は水平に付く。調整は内面ハケメ、外面にはヨコナデが施される。鋳部径29.8cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/4)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。701は杯C。口縁端部内面に沈線が見られる。調整はナデが施される。外面に黒斑あり。口径13.6cm。色調はにぶい橙色(7.5YR7/4)を呈する。703・704は甕。703は外反する口縁部から、口縁部は内傾し、やや丸味をもつ。調整は内面ナデ、外面にはハケメが施される。色調は内面にぶい橙色(7.5YR7/4)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。704は外反する口縁部に、口縁部は面をもち終わる。調整は内面ナデ、外面ハケメが施される。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。705は把手。調整はナデ・ユビオサエが施される。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。

697は杯蓋。天井部とつまみが扁平な形態に、内面のかえりはわずかに断面三角形をとどめる。調整は外面1/2に回転ヘラケズリが施される。口径15.6cm。器高3.2cm。色調は内面灰白色(N7/)、外



第74図 第2面溝57・75・83・89出土土器実測図

面灰色(5Y6/1)を呈する。698は杯身。やや平底の底部。調整は外面底部に回転ヘラケズリが施される。底径8.0cm。色調は内面灰色(10Y6/1)、外面灰色(N6/)を呈する。702は壺の頸部。頸部上部に沈線、頸体部境に凸帯が見られる。調整は内外面共に回転ナデが施される。色調は内面灰色(5Y5/1)、外面灰白色(N7/)を呈する。

699は広口壺A。直立する頸部に外反する口縁部口縁端部はわずかに拡張する形態。調整は内面ハケメ、外面にはハケメ後ヘラミガキが施される。内面に煤付着。口径12.0cm。色調は内面にぶい黄橙色(10YR6/4)、外面にぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する。700は器台。口縁端部は下方に拡張すると思われるが、剥離のため詳細不明。口縁部端面にキザミメ、内面口縁端部に極描波状文が見られる。

調整は内面ヘラミガキ、外面にはナデが施される。口径19.2cm。色調は内面にぶい黄橙色(10YR6/3)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。706は鉢A。口縁部が外方に外反する形態。調整は内面ナデ、外面にはハケメ(9/cm)が施される。外面に煤付着。色調は内面にぶい黄橙色(10YR6/3)、外面灰黄褐色(10YR6/2)を呈する。

#### 第2面 溝75出土土器(第74図707)

707は土師器羽釜の鈎。調整は内面ハケメ、外面にはヨコナデが施される。鈎部径26.5cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。

#### 第2面 溝57出土土器(第74図708～714)

708・709・712～714は土師器、710・711は須恵器。

708は皿C。内面に放射線状暗文がみられる以外は、ナデ調整が施される。口径12.4cm。色調は内面橙色(5YR6/6)、外面にぶい橙色(7.5YR7/4)を呈する。709は甕。調整は内面板状工具によるナデ、外面にはハケメ(3.5/cm)が施される。口径14.2cm。色調はにぶい黄橙色(10YR7/2)を呈する。712は皿A。口縁端部を内側に肥厚する形態。調整はナデが施される。口径19.6cm。色調はにぶい橙色(7.5YR7/4)を呈する。713は羽釜の鈎部。調整は内面板状工具によるナデ、外面にはヨコナデが施される。鈎部径26.0cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。714は鍋の把手部。調整は内面粗いハケメ(5/cm)、外面には細かいハケメ(11/cm)が施される。外面に煤付着。体部最大径28.0cm。色調は内面褐色(5YR7/6)、外面にぶい橙色(7.5YR7/4)を呈する。

710は壺。口縁部を外方に折り返す形態。調整は回転ナデが施される。口径9.8cm。色調は灰色(N6/)を呈する。711は杯身A。調整は回転ナデが施される。全面に煤付着。口径13.2cm。色調は内面灰色(5Y6/1)、外面灰色(5Y4/1)を呈する。

#### 第1面 溝3出土土器(第75図716)

瓦器椀。内面口縁端部に沈線が見られる。調整は内外面共にヘラミガキが施される。色調は内面灰色(N6/)、外面灰色(N5/)を呈する。

#### 第1面 溝10出土土器(第75図715)

瓦器椀。内面口縁端部に沈線が見られる。内面のヘラミガキは風化のため詳細不明。口径13.0cm。色調は灰色(N5/)を呈する。

#### 第1面 溝17出土土器(第75図723)

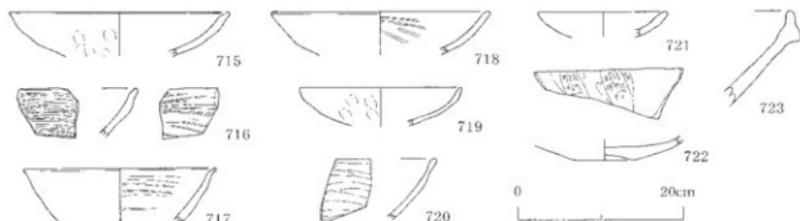
東播系須恵器控鉢。調整は内外面共にナデが施される。色調は灰色(N6/)を呈する。

#### 第1面 溝24出土土器(第75図721)

土師器小皿。調整は内面ナデ、外面にはコビオサエが施される。口径7.6cm。色調はにぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する。

#### 第1面 溝43出土土器(第75図718)

瓦器椀。口縁端部を丸くおさめる形態。内面には同心円状の暗文が施される。口径13.0cm。色調は内面灰白色(10Y7/1)、外面灰白色(N7/)を呈する。



第75図 第1面出土土器実測図

#### 第1面 第2層出土土器(第75図717・720)

瓦器碗。717は口縁端部に沈線をもつ形態の人和型。内面に渦巻状の暗文が施される。口径11.4cm。色調は灰白色(5Y8/1)を呈する。720は口縁端部を丸くおさめる形態の和泉型。内面には横方向のヘラミガキ施される。色調は灰色(N5/)を呈する。

#### 第1面 精査時出土土器(第75図719・722)

719は瓦器皿。調整はナデが施される。口径9.6cm。色調は灰色(5Y5/1)を呈する。722は青磁皿。丼筒底。外面高台内は軸ハギ、内面にはヘラによる双魚文が施される。底径3.6cm。色調は内面オリーブ灰色(2.5GY6/1)、外面オリーブ灰色(5GY6/1)を呈する。

#### 第2層出土土器(第76図737～743)

737・738・742は土師器。739～741は須恵器。743は弥生土器。

737は碗C。調整は内面ヘラミガキ、外面には板状工具によるナデが施される。口径18.4cm。色調は橙色(7.5YR7/6)を呈する。738は鍋の把手とも思われる。調整はナデが施される。色調はにぶい黄橙色(10YR7/4)を呈する。742は甕の口縁部。口縁部端面に同心円文のタタキメがみられる。調整は内面ナデ、外面には板状工具によるナデが施される。色調は内面褐色(7.5YR4/1)、外面橙色(7.5YR7/6)を呈する。

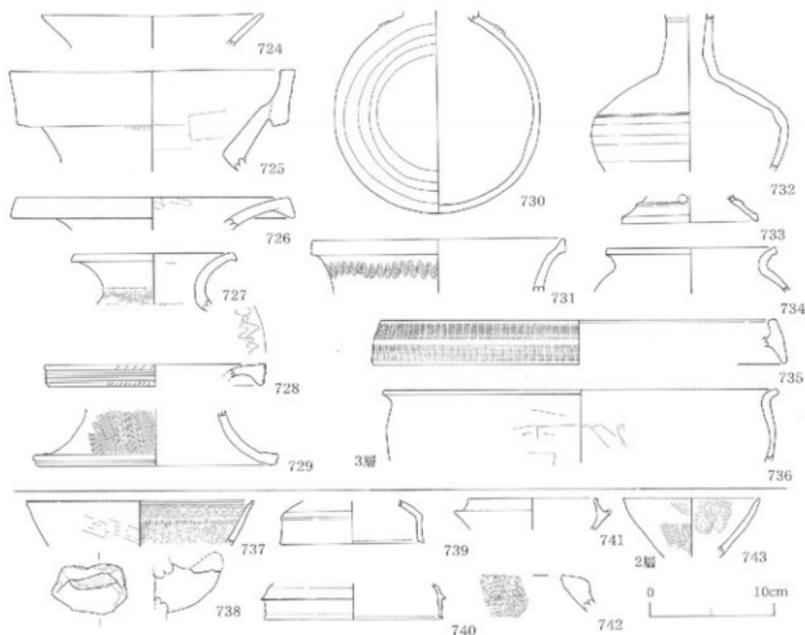
739・740は杯蓋。739の稜は短くシャープさを失い、口縁端部は内傾する面をもつ。調整は外面天井部に稜の近い所で回転ヘラケズリが施される。口径11.6cm。色調は灰色(N5/)を呈する。740の稜はやや短く尖り、口縁端部は内傾する面をもつ。調整は外面天井部2/3回転ヘラケズリが施される。口径14.4cm。色調は灰色(N5/)を呈する。741は杯身。立ち上がりは短く、口縁端部は丸くおさめる。外面に自然軸が見られる。口径10.0cm。色調は灰色(N6/)を呈する。

743は鉢A。調整は内外面共にハケム(6/cm)が施される。口径10.8cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR6/4)、外面明褐色(7.5YR5/6)を呈する。

#### 第3層出土土器(第76図724～736)

724・725は土師器。730～733は須恵器。726～729・734～736は混入品の弥生土器。

724は甕の口縁部。調整はヨコナデが施される。口径18.0cm。色調はにぶい黄橙色(10YR7/3)を呈する。725は壺。口縁部を上方に拡張し、口縁端部・上方に面をもつ。調整は内面板状工具によるナデ、外面にはハケム(5/cm)が施される。口径23.0cm。色調は浅黄橙色(10YR8/3)を呈する。



第76図 第2・3層出土土器実測図

730は埴瓶。肩部にボタン状の突起をもつ。調整は回転ヘラケズリ・ナデが施される。体部最大径16.6cm。色調は灰色(7.5YR6/1)を呈する。731は壺。頭部と体部に沈線が見られる。調整は体部沈線下から回転ヘラケズリが施される。体部最大径16.0cm。色調は内面灰色(N6/)、外面灰色(10Y5/1)を呈する。732は壺の頸体部。頸部上部と肩部に沈線が見られる。調整は体部沈線下に回転ヘラケズリが施される。色調は内面灰色(N6/)、外面灰色(10Y5/1)を呈する。733は高杯の脚台。裾部に円形透かし孔と段が見られる。調整は回転ナデが施される。裾部径11.0cm。色調は灰色(N7/)を呈する。

726・728・729は器台。726は口縁端部を下方に拡張する形態。調整は内外面共に板状工具によるナデが施される。口径22.0cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR7/3)、外面にぶい黄橙色(10YR7/4)を呈する。728は口縁端部拡張部に3条の凹線文、上下端部にキザミメ、口縁内端部には波状文が見られる。口径17.6cm。色調はにぶい黄橙色(10YR6/4)を呈する。729は裾部端面に1条の凹線文が見られる。調整は内面ナデ外面にはハケメ(7/cm)が施される。裾部径19.0cm。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。727・735は壺。727は広口壺B。わずかに口縁端部を下方に肥厚させる。調整は内面ナデ、外面にはハケメが施される。口径12.8cm。色調はにぶい黄橙色(10YR6/4)を呈する。735は口縁端部を上下に拡張し、その拡張部に2帯からなる櫛描籐状文(13/1.3cm)が見られる。口径31.8cm。色調は内面橙色(5YR6/6)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。734・736は甕。734はなだらかに外反する口縁部、口縁端部は面をもつ。調整は内外面共にナデが施される。口径13.6cm。色調は内面にぶ

い黄橙色(10YR7/2)、外面灰白色(10YR8/2)を呈する。736は大型甕。短く外反する口縁部、口縁端部は面をもつ。調整は内外面共にヘラケズリが施される。口径31.6cm。色調は内面にぶい黄橙色(10YR6/4)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。

#### 第4層出土土器(第77図751~753)

751は須恵器高杯の脚台。「ハ」の字形にゆるやかに外反し、端部近くに凸線をもち、四ヶ所の三角形透かし孔が見られる。調整は内面回転ナデ、外面にはカキメが施される。裾部径10.0cm。色調は青灰色(5B6/1)を呈する。

752は弥生土器把手付鉢。体部に把手の痕跡が残存する。口縁端部外面に小刻みなキザミメ、体部には櫛描篋状文(11/1.1cm)に内形浮文が2ヶ所見られる。調整は内面板状工具によるナデが施される。口径9.6cm。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。753は広口壺。口縁端部を上下に拡張する形態。拡張部には2帯からなる櫛描篋状文(13/1.6cm)が見られる。調整は内外面ともにヘラミガキが施される。口径32.8cm。色調は内面明褐色(7.5YR5/6)、外面橙色(5YR6/6)を呈する。

#### 第5層出土土器(第77図744~750)

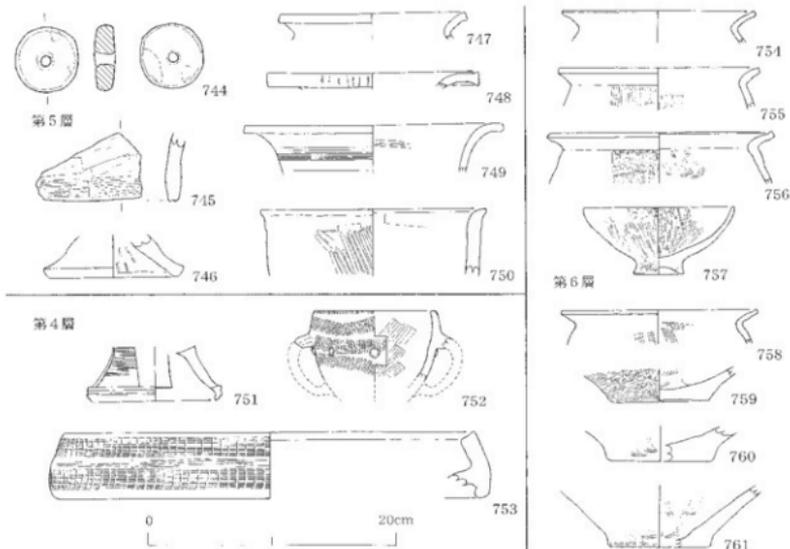
744は土製紡錘車。中心部に一方向からなる穿孔が見られる。調整は内外面共にナデが施される。完形品。長さ5.0cm、幅5.3cm、厚さ1.6cm。色調はオリブ褐色(2.5Y4/3)を呈する。

745は土師器甕の裾部。裾部端部には凹みが見られる。調整は内面板状工具によるナデ、裾部と外面にはハケメ(6/cm)が施される。色調は内面にぶい黄橙色(10YR6/3)、外面にぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する。

746は弥生土器高杯の脚台。器壁は厚みがある。調整は内面ハケメ、外面にはナデが施される。裾部径10.2cm。色調は内面褐色(10YR6/1)、外面にぶい黄橙色(10YR7/2)を呈する。747・750は弥生土器甕。747は口縁端部をわずか下方に肥厚する。調整はヨコナデが施される。口径14.6cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面明褐色(7.5YR5/6)を呈する。750は直立する体部から、口縁部が短く外反する、口縁端部は面をもつ。形態から輸入品とも考えられる。調整は内面板状工具によるナデ、外面にはハケメ(10/cm)後ヘラミガキが施される。口径18.0cm。色調は内面灰白色(10YR8/1)、外面にぶい黄橙色(10YR7/2)を呈する。748・749は弥生土器広口壺。748は口縁部端部にヘラによる列点文が見られる。調整は内外面共にヨコナデが施される。口径16.8cm。色調は内面褐色(7.5YR6/6)、外面にぶい橙色(7.5YR7/3)を呈する。749は外面頸部に櫛描直線文(8/1.4cm)が見られる。調整は内面板状工具によるナデ・ヘラミガキが施される。口径20.6cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/3)、外面灰黄褐色(10YR5/2)を呈する。

#### 第6層出土土器(第77図754~761)

754~756・758は弥生土器甕。754は「く」の字形に外反する口縁部、口縁端部は丸くおさめる。調整は内外面共にヨコナデが施される。口径15.4cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR6/4)、外面褐色(5YR6/6)を呈する。755・756・758は短く外折する口縁部、口縁端部に面をもつ。調整は内外面共にハケメ(6/cm)が施される。口径16.0cm。色調は内面褐色(2.5YR6/6)、外面赤褐色(10R6/6)を呈する。756の調整は内面板状工具によるナデ、外面にはハケメ(14/cm)が施される。口縁部内外面共に煤付着。口径17.6cm。色調はにぶい褐色(5YR6/4)を呈する。758の調整は内外面共にハケメ(10/cm)が施される。口径15.6cm。

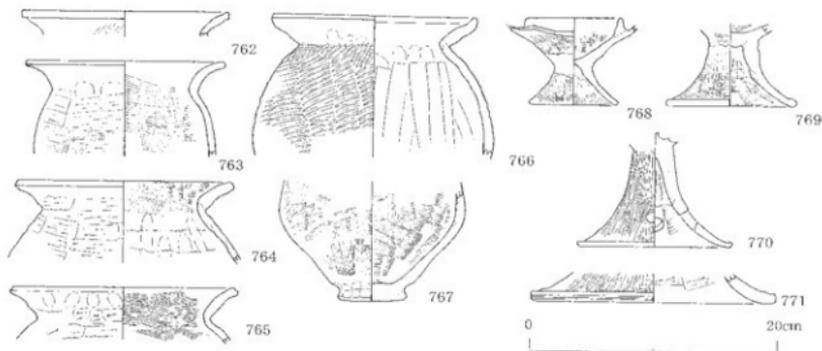


第77図 第4～6層出土土器実測図

色調は内面灰白色(2.5Y8/1)、外面にぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する。757は半球形の椀形の形態をもつ鉢。調整は内外面共にハケメ後ヘラミガキが施される。口径12.0cm、器高5.5cm、底径3.8cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。759は壺の底部。調整は内面ハケメ、外面には分割性のあるヘラミガキが施される。底径8.0cm。色調は内面明褐色(7.5YR5/6)、外面にぶい橙色(7.5YR6/3)を呈する。760・761は甕の底部。760の調整は内面剥離のため詳細不明、外面にはハケメが施される。底径8.6cm。色調は内面橙色(2.5YR6/6)、外面明赤褐色(2.5YR5/6)を呈する。761の調整は内外面共にハケメが施される。底径8.0cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/4)、外面にぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。

#### 攪乱出土土器(第78図762～771)

762～766は弥生土器甕。762は外折する口縁部、口縁端部は面をもつ。調整は内外面共にヨコナデが施される。口径16.4cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/3)、外面にぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。763はなだらかに外折する口縁部、口縁端部はやや丸くおさめる。755の調整は内面ハケメ(6/cm)、外面にはヘラケズリ・ハケメ(同原体)が施される。口径15.6cm。色調はにぶい黄褐色(10YR6/3)を呈する。764は太く外折する口縁部、口縁端部には面をもつ。調整は内面ハケメ・ナデ、外面にはヘラケズリが施される。口縁部内外面に煤付着。口径16.8cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/3)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。765は「く」の字形に外反する口縁部、口縁端部はわずかに下方に肥厚し面をもつ。調整は内面板状工具によるナデ、外面にはヘラケズリが施される。口径17.6cm。色調



第78図 攪乱出土器実測図

は内面にぶい黄橙色(10YR6/3)、外面にぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。766は「く」の字形に外折する口縁部、口縁端部は上方につまみヒげる。調整は内面板状工具によるナデ、外面にはタタキメ(3/cm)が施される。口径16.2cm。色調は内面灰黄褐色(10YR6/2)、外面にぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する。767は壺の底部。調整は内外面共にハケメ(8/cm)が施される。外面に黒斑あり。底径9.9cm、体部最大径15.0cm。色調は内面黄灰色(2.5Y5/1)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。768~771は高杯の脚台。768は内面に突起または須恵器杯身のような受部が巡り、口縁部は打ち欠いている。調整は内外面共にハケメが施される。裾部径6.6cm。色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。769の調整は内外面共にハケメ(6/cm)が施される。裾部径10.2cm。色調はにぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する。770は脚部に4ヶ所の円形透かし孔を穿つ。調整は内面板状工具によるナデ、外面にはヘラミガキが施される。裾部径12.1cm。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。771は裾部端面に沈線が見られる。調整は内面ヘラケズリ、外面にはヘラミガキが施される。裾部径18.0cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/3)、外面にぶい褐色(7.5YR6/4)を呈する。

762~771は攪乱坑出土であるが、検出地点から考えて溝100に伴うと考えられる。

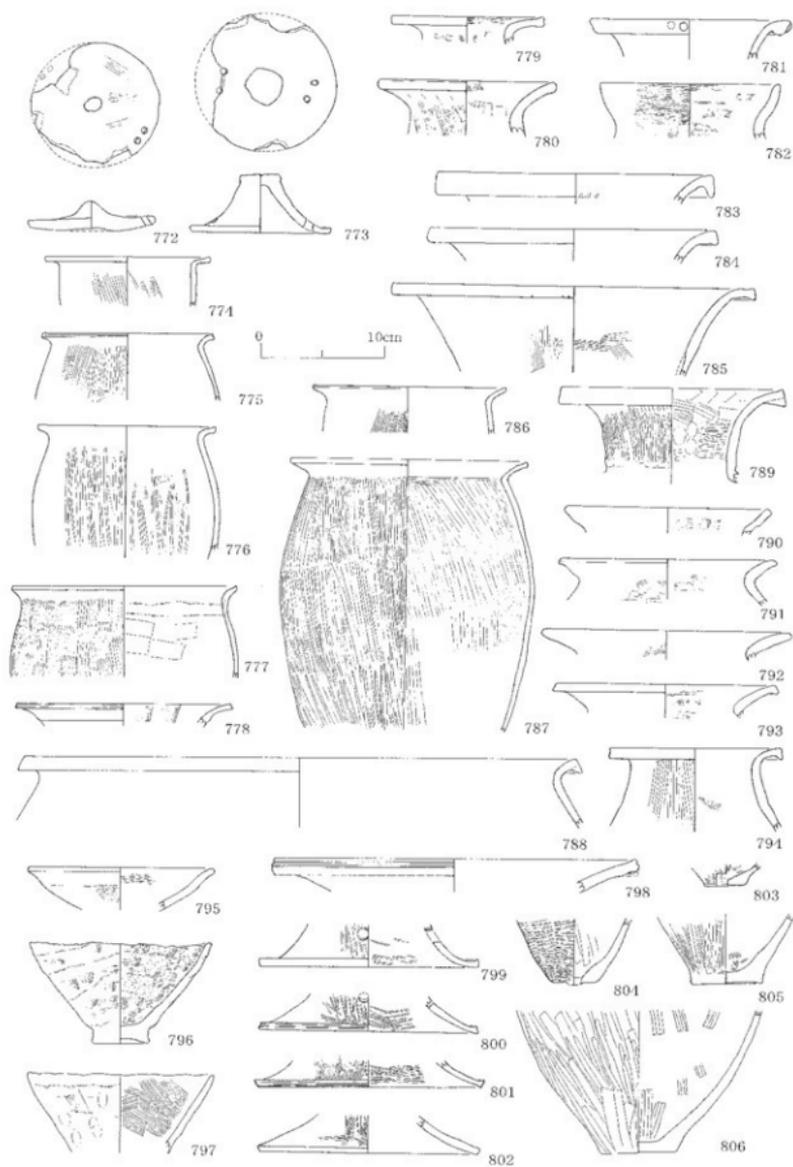
#### 側溝・攪乱出土土器(第79・80図772~827)

772は弥生土器壺蓋。円板の中央部に突起をもつにとどまる形態。一部に2個1対の紐孔が見られる。調整は内外面共にハケメが施される。口径10.1cm、器高2.4cm。色調は内面灰黄褐色(10YR6/2)、外面にぶい黄褐色(10YR7/3)を呈する。773は弥生土器壺蓋。2個1対の紐孔が見られる。調整はナデが施される。口径11.0cm、器高4.8cm、つまみ径3.0cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面明褐色(7.5YR5/6)を呈する。

774~778・786~788・790~793は弥生土器甕。774は直立する体部から、口縁部は外折し、口縁端部には面をもちおわる。調整は内外面共にハケメ(5/cm)が施される。口径13.2cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/4)、外面にぶい赤褐色(5YR5/3)を呈する。775は「く」の字形に外反する口縁部、口縁端部は内む。調整は内面ナデ、外面にはハケメ(6/cm)が施される。色調は内面褐色(7.5YR7/6)、外面にぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。776は外弯する口縁部、口縁端部は面をもつ。調整は内外面共にハケメ後ヘラミガキが施される。内外面に煤付着。口径14.2cm、体部最大径15.0cm。色調は内面に

ぶい褐色(7.5YR5/4)、外面にぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。777は短く外反する口縁部、口縁端部は面をもつ。調整は内面板状工具によるナデ、外面にはハケメ(6/cm)が施される。外面に煤付着。口径18.0cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR7/4)、外面橙色(7.5YR6/6)を呈する。778は外弯する口縁部、口縁端部に沈線が見られる。調整は内面ハケメ(10/cm)、外面にはナデが施される。外面に煤付着。口径17.2cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面にぶい黄褐色(10YR4/3)を呈する。786は外反する口縁部、口縁端部は丸くおさめる。調整は内面ナデ、外面にはハケメ(11/cm)が施される。口径15.4cm。色調は明赤褐色(5YR5/6)を呈する。787は「く」の字形に外折する口縁部、口縁端部は面をもつ。調整は内外面共にハケメ(4/cm・10/cm)が施される。内面に黒斑、外面に煤付着。口径19.0cm、体部最大径20.4cm。色調は内面浅黄褐色(7.5YR8/4)、外面浅黄褐色(7.5YR8/3)を呈する。788は大型甕。外反する口縁部、口縁端部は下方に拡張する。調整は内外面共に風化のため詳細不明。口径44.4cm。色調は橙色(2.5YR6/8)を呈する。790は断面が肥厚する口縁部、口縁端部は面をもつ。調整は内面ハケメ(10/cm)、外面にはヨコナデが施される。口径16.0cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。791は「く」の字形に外折する口縁部、口縁端部はやや丸くおさめる。調整は内面ハケメ(11/cm)、外面にはハケメ(同原体)・ヘラケズリが施される。口径17.0cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面にぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する。792の調整は内面ヨコナデ、外面にはハケメが施される。口径19.6cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面明褐色(7.5YR5/6)を呈する。793は「く」の字形に外折する口縁部、口縁端部は下方に拡張する。調整は内面ハケメ(10/cm)、外面にはヨコナデが施される。口径17.6cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面にぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する。

779～785・789・794は弥生土器壺。779は外折する口縁部、口縁端部は面をもち終わる。調整は内外面共にハケメ(12/cm)が施される。口径12.0cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面橙色(7.5YR6/6)を呈する。780は大きく外弯する口縁部、口縁端部は丸くおさめる。調整は内外面共にハケメ(8/cm)が施される。口径13.8cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/3)、外面にぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する。781は漏斗状に広がる口縁部、口縁端部は外折し肥厚する。口縁部端面に円形浮文が見られる。調整は風化のため詳細不明。口径15.8cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/4)、外面にぶい黄褐色(10YR5/4)を呈する。782は短く上方にのびる口縁部をもつ短頸壺。調整は内外面共にハケメ(10/cm)が施される。口径14.4cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面橙色(7.5YR6/6)を呈する。783は口縁端部を下方に拡張する形態の広口壺。調整は内面にヘラミガキが施される。口径22.0cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。784は口縁端部を肥厚する形態の広口壺。調整は風化のため詳細不明。口径22.8cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR7/3)、外面にぶい黄褐色(10YR6/3)を呈する。785は漏斗状に広がる頸部から、口縁部は外折する形態をもつ広口壺。口縁部下端にキザミが見られる。調整は内外共にハケメ(7/cm)が施される。口径29.0cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR7/3)、外面浅黄褐色(7.5YR8/3)を呈する。789は口縁端部を拡張する形態の広口壺。調整は内外面共にハケメ(4/cm)後ヘラミガキが施される。口径18.0cm。色調は橙色(7.5YR7/6)を呈する。794は短く外折する口縁部、口縁端部は下方に拡張する形態をもつ無頸壺。調整は内外面共にハケメ(8/cm)が施される。口径13.8cm。色調は内面明褐色(7.5YR5/6)、外面明赤褐色2.5YR5/6)を呈する。795～797は弥生土器鉢。体部から口縁部まで直線的に外方にのびる形態。795は口体部境をわずかに外方に屈曲し、口縁端部に面をもちおわる。調整は内外面共にハケメ(9/cm)が施される。口径14.8cm。色調は橙色(7.5YR6/6)を呈する。796・797は口縁端部を未調整でおわる。796は上げ底の底部をもつ。調整は内外面共にハケメ(13/cm)が施される。外面に黒斑あり。口径14.4cm、器高8.3cm、底径4.2cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面明褐色(7.5YR5/6)を呈する。



第79图 倒满·搜乱出土土器实测图(1)

797の調整は内外面共にハケメ(7/cm)が施される。口径14.8cm。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。

798～802は器台。798は口縁端部に凹線をもち、下方に拡張されると思われるが、剥離のため詳細不明。調整は内外面共にナデが施される。口径29.0cm。色調は内面明褐色(7.5YR5/6)、外面にぶい褐色(7.5YR6/4)を呈する。799～802は脚台部。799は円形透かし孔が見られる。調整は内外面共にヘラミガキが施される。裾部径17.6cm。色調は内面明赤褐色(5YR5/6)、外面褐色(5YR6/6)を呈する。800は円形透かし孔が穿孔され、裾部端面には1条の凹線が見られる。調整は内外面共にヘラミガキが施される。裾部径17.6cm。色調は内面明褐色(7.5YR5/6)、外面にぶい褐色(7.5YR6/4)を呈する。801は裾部端面に2条の凹線が見られる。調整は内外面共にハケメ(8/cm)後ヘラミガキが施される。裾部内外面に煤付着。裾部径18.0cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/3)、外面にぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。802の調整は内面ナデ、外面にはヘラミガキが施される。裾部径17.6cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面にぶい褐色(7.5YR6/4)を呈する。

803～806は甕の底部と思われる。803・804は底部中央部を穿孔する。803の調整は内外面共にハケメが施される。底径3.5cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR6/3)、外面にぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。804の調整は内面板状工具によるナデ、外面にはタキメが施される。外面に煤付着。底径3.8cm。色調は内面黄褐色(2.5Y5/3)、外面にぶい黄褐色(10YR6/3)を呈する。805はやや上げ底の底部。調整は内面ハケメ(6/cm)、外面にはハケメ(同原体)後ヘラミガキが施される。底径5.6cm。色調は内面灰褐色(7.5YR6/2)、外面にぶい褐色(7.5YR7/4)を呈する。806はほぼ平底の底部。調整は内面ハケメ(4/cm)、外面には板状工具によるナデ後ヘラミガキが施される。外面に黒斑あり。底径5.8cm。色調は内面明赤褐色(2.5YR5/6)、外面にぶい褐色(5YR6/4)を呈する。

807・808は土師器杯身C。807は口縁部内端に沈線が見られる。調整は内外面共にナデが施される。口径13.8cm。色調はにぶい黄褐色(10YR7/4)を呈する。808は口縁端部を外折する。調整は内外面共にナデが施される。口径14.0cm。色調は浅黄褐色(7.5YR8/4)を呈する。

809・812は製塩土器。809の調整は内外面共にユビナデが施される。色調は内面にぶい褐色(7.5YR7/4)、外面灰白色(2.5Y7/1)を呈する。812の調整は内外面共に板状工具によるナデが施される。口径11.0cm。色調は灰白色(10YR8/2)を呈する。

810・811は土師器皿A。共に口縁端部を内折する。810は内面に放射状暗文が見られ、外面底部にはヘラズリが施される。口径16.4cm。色調は内面浅黄褐色(7.5YR8/3)、外面褐色(7.5YR7/6)を呈する。811は内外面共にナデが施される。口径17.0cm。色調は内面褐色(7.5YR7/6)、外面にぶい褐色(7.5YR7/4)を呈する。

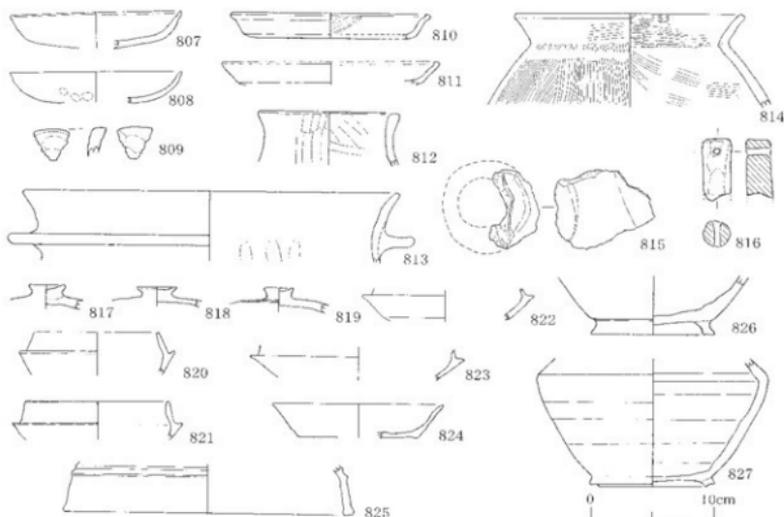
813は土師器羽釜。なだらかに外反する口縁部に、罫は水平につく。調整は内外面共にナデが施される。外面罫下に煤付着。口径29.8cm。色調は明褐色(7.5YR5/6)を呈する。

814は土師器甕。「く」の字形に外反する口縁部、口縁端部は面をもつ。調整は内外面共にハケメ(5/cm)が施される。口径18.0cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面にぶい褐色(7.5YR6/4)を呈する。

815は甕の羽口。外面胎土に炉壁内と壁中の境目が見られる。色調は内面にぶい黄褐色(10YR5/4)、外面にぶい黄褐色(10YR6/4)・灰白色(N7/)を呈する。

816は七鉢。円柱状の形態に、一端を穿孔する。調整はナデが施される。幅2.2cm。孔径0.5cm。色調は黒色(7.5Y2/1)を呈する。

817～819は須臾器蓋。扁平で中央部が凹む形態のつまみが付く。817の調整は内外面共に回転ナ



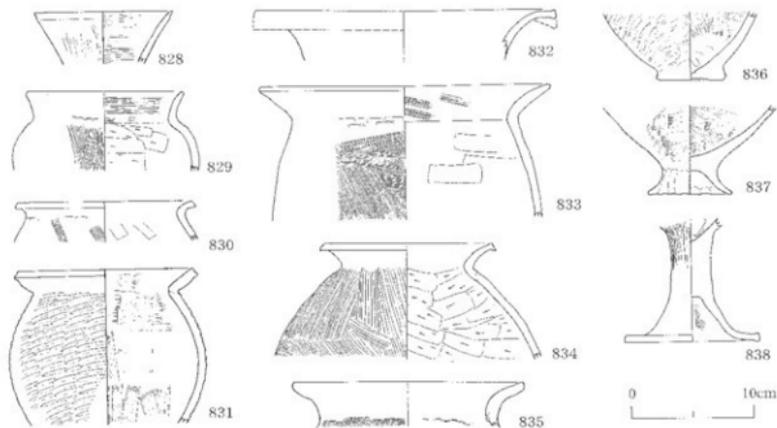
第80図 側溝・攪乱出土土器実測図

デが施される。つまみ径2.9cm。色調は内面灰白色(N7/)、外面灰色(N6/)を呈する。818は外面に自然軸が見られる。調整は内面ナデ、外面には回転ナデが施される。つまみ径3.2cm。色調は内面灰色(N6/)、外面灰白色(N7/)を呈する。819の調整は内面回転ナデ、外面には回転ヘラケズリが施される。つまみ径2.2cm。色調は内面灰色(N6/)、外面灰色(N7/)を呈する。

820～824は須恵器杯身。820の口縁部は内傾し、口縁端部は面をもち、受け部は上方に向く。調整は内外面共に回転ナデが施される。口径10.2cm。色調は青灰色(5PB6/1)を呈する。821の口縁部は内傾し、口縁端部は丸くおさめ、受部は水平に付く。調整は内外面共に回転ナデが施される。口径15.8cm。色調は青灰色(5PB6/1)を呈する。822の受部は水平に付く。調整は内面回転ナデ、外面1/2に回転ヘラケズリが施される。色調は内面灰白色(N8/)、外面灰白色(N7/)を呈する。823の受部は水平に付く。調整は内外面共に回転ナデが施される。色調は内面灰白色(N7/)、外面灰色(N6/)を呈する。824は平坦な底部と斜めに上にのびる口縁部、口縁端部は丸くおさめる。調整は外面底部ヘラ切り以外は、回転ナデが施される。口径13.8cm。器高2.8cm。色調は灰色(N5/)を呈する。

825は器台の裾部。脚部に強いヨコナデによる凸帯がみられ、裾端部は面をもち終わる。裾部径23.4cm。色調は灰色(N5/)を呈する。

826・827須恵器壺の底部。826は「ハ」の字形に広がる高台に、端部は面をもち凹む。調整は内面底部ナデ以外は、回転ナデが施される。底径10.0cm。色調は灰色(N6/)を呈する。827は「ハ」の字形に広がる高台に、端部は外方に面をもち凹む。調整は内外面共に回転ナデが施される。底径10.0cm。色調は内面青灰色(5B6/1)、外面灰色(N6/)を呈する。



第81図 B区側溝・攪乱出土土器実測図

B区側溝・攪乱出土土器(第81図 828~838)

828・829・832は甕。828は広口壺。口縁端部外面にわずか面をもつ。調整は内外面共にハケメ(6/cm)が施される。口径11.0cm。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。829は短頸壺。調整は内面ハケメ(8/cm)・ハラケズリ、外面にはハケメ(同原体)が施される。口径12.4cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR7/3)、外面にぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。832は広口壺。漏斗状にひろがる口縁部、口縁端部は下方に拡張すると思われるが剥離している。調整は風化のため不明。口径24.0cm。色調は灰白色(5Y8/1)を呈する。

830・831・833~837は甕。830は短く外反する口縁部、口縁端部は面をもちおわる。調整は内面工具によるナデ、外面にはハケメが施される。外面に煤付着。口径14.0cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR6/3)、外面灰褐色(7.5YR5/2)を呈する。831は「く」の字形に外折する口縁部、口縁端部は面をもち終わる。調整は内面ハケメ(7/cm)、外面にはタタキメが施される。外面に煤付着。口径14.0cm、体部最大径16.0cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR5/3)、外面にぶい黄橙色(10YR6/4)を呈する。833は大きく外弯する口縁部、口縁端部は丸くおさめる。調整は内面ハケメ(11/cm)・板状工具によるナデ、外面にはハケメ(同原体)が施される。口径23.2cm。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。834は「く」の字形に外折する口縁部、口縁端部は下方に拡張する。調整は内面ハラケズリ、外面にはハケメ(6/cm)が施される。口径13.6cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR7/4)、外面にぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。835はなだらかに外弯する口縁部、口縁端部は丸くおさめる。調整は外面にハケメ(6/cm)が施される。口縁端部に煤付着。口径18.4cm。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。836は中央部がやや上げ底気味の底部をもつ。調整は内面ハケメ(8/cm)、外面にはタタキメ(3/cm)が施される。底径5.2cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面にぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。837は「ハ」の字形に広がる高台をもつ。調整は内外面共にハケメ(7/cm)が施される。外面に煤付着。底径6.4cm。色調は内

面にふい褐色(7.5YR5/4)、外面にふい橙色(7.5YR6/4)を呈する。

838は高坏の脚柱部。中実の脚柱部に、「ハ」の字形に広がる裾部、裾端部は面をもちおわる。調整は内面杯部を板状工具によるナデ、裾部はハケメ(10/cm)、外面にはハケメ(同原体)後ヘラミガキが施される。裾部径11.0cm。色調は内面にふい黄褐色(10YR5/4)、外面灰黄褐色(10YR4/2)を呈する。

## 2) 埴輪

埴輪は3・4号墳の周溝、それぞれの周溝を切る溝83、第2面のそれ以外の溝および包含層などから出土している。また須恵質焼成のものと土師質焼成のものが存在する。土師質焼成のものは色調によって4つのグループに分けることができる。ただしこれは胎上分析などを行っていないため産地などに結びつくものではなく、あくまで表面の色調観察での違いである。個別に記すと煩雑になるためグループを記号化しておく。

- Aグループ(以下A) 灰白色系 Dグループ(以下D) 黄橙色系  
Bグループ(以下B) 棕色系 Eグループ(以下E) 須恵質焼成および須恵質気味焼成  
Cグループ(以下C) にふい橙色系

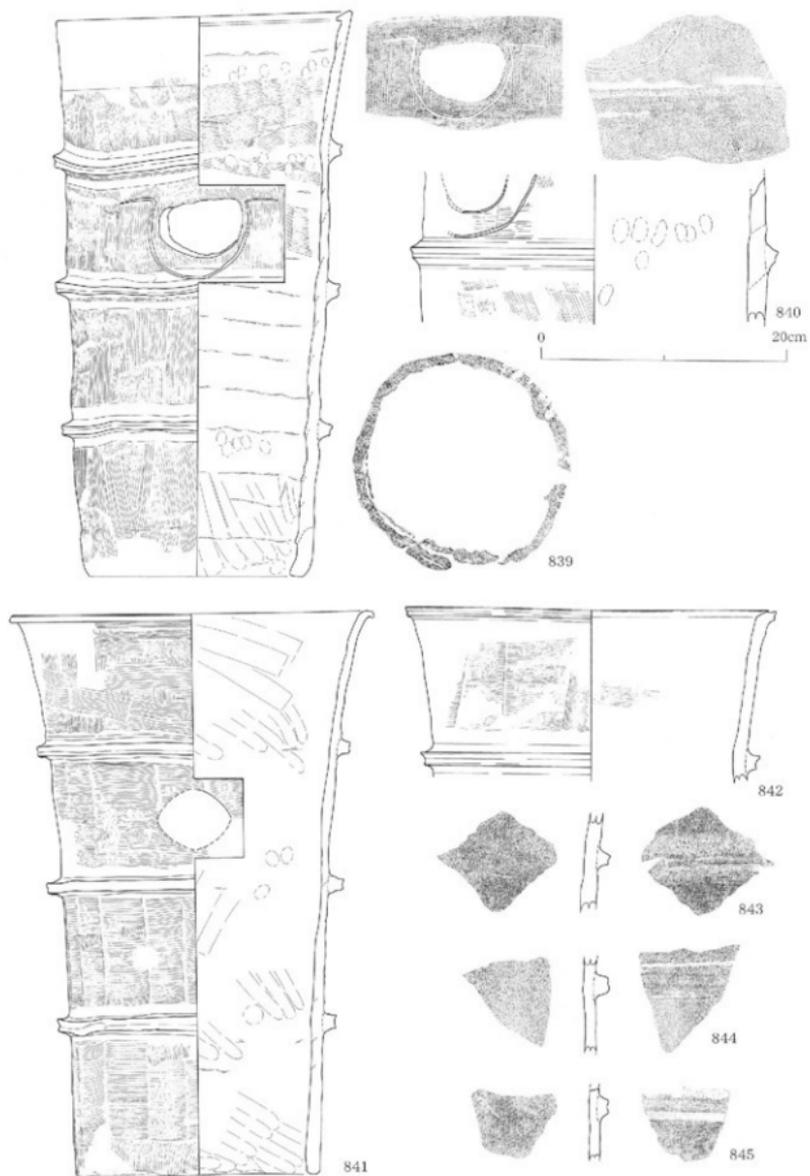
また、外面調整の内ヨコハケの分類については、川西分類(川西1978)とそれを細分した一瀬分類(一瀬1988)に基づいている。

埴輪の時期はいずれも川西編年IV期の範疇に収まるものである。

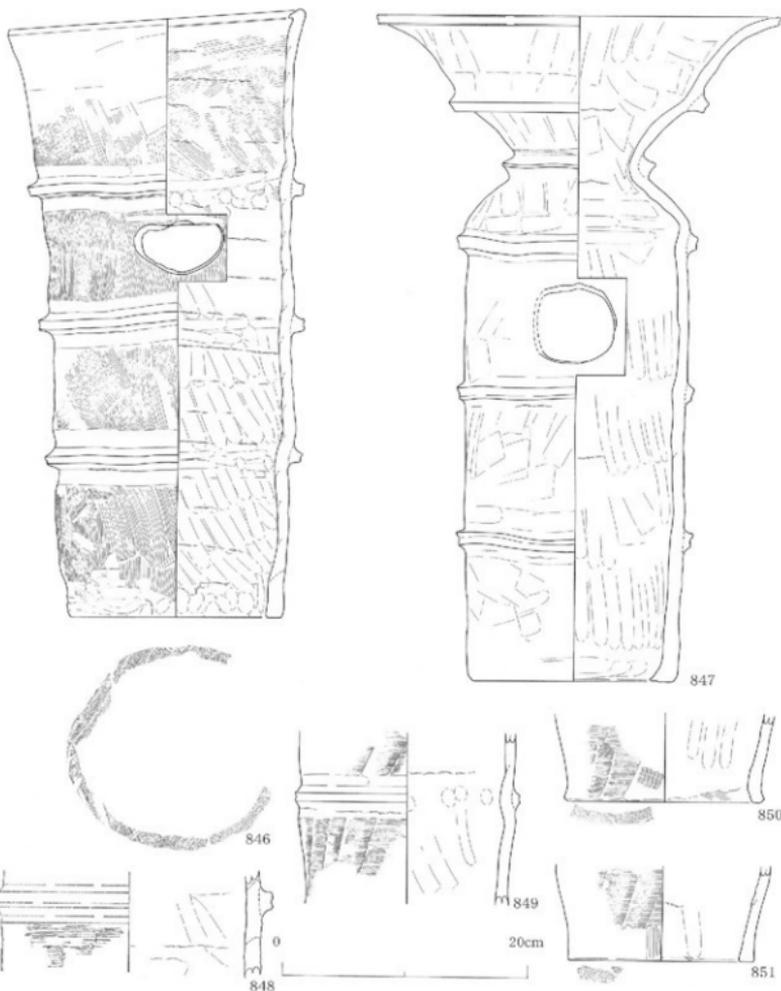
3号墳周溝出土埴輪(第82～84図839～855) 17点を図示した。円筒埴輪、朝顔形埴輪である。全体の形が判るものは(839・841・846・847・852)で、円筒埴輪(839・841・846)はいずれも3条の突帯を持つ4段のもので、3段目の対向する面に円形(841)もしくは半円形(839・846)の透かし孔がある。円筒埴輪の口縁の形状は2つに分けることができ、端部が外側に屈曲するもの(841・842)と、端部が内側に肥厚するもの(839・846)である。

色調及び焼成によるグループは、A(840・842・843) B(844・847・849～851) C(839・841・845・846・853・854) E(848・852・855)に分けられる。

円筒埴輪(839～846) 839は口径23.4cm、器高46.2cm、底径17.1cm。片方の透かし孔の周囲にひらがなの「ひ」状のヘラ記号を施す。外面調整タテハケ、内面調整は3・4段目がヨコハケ、1・2段目はナデ、粘土紐の痕跡が認められる。突帯は比較的高めのM字状である。基底部接着技法は「Z」字接着で、底面に棒状の圧痕が認められる。黒斑は認められない。840は残存器高12.1cm、体部径31.9cm。外面調整タテハケ後B種ヨコハケ、内面調整ナデ。円形もしくは半円形透かし孔が一部残存し、周囲に839と同様に「ひ」状の可能性のあるヘラ記号を施す。突帯は下方が著しく低い断面三角形に近い形状である。841は口径27.8cm、器高45.95cm、底径19.2cm。外面調整タテハケ後ヨコハケ(3・4段目はC a種、1・2段目はB c種)、内面調整ナデ。突帯は高く突出し断面台形である。基底部の接着は「S」字状で、底面にワラ状の圧痕が認められる。底部から口縁部まで6～16cmの幅で帯状に黒斑がある。842は残存器高14.0cm、口径30.0cm。外面調整B c種ヨコハケ、内面調整ヨコハケ後ナデ。突帯は細く、上方が大きく突出する形状である。843は残存器高8.2cm。外面調整ヨコハケ、内面調整ナデ。突帯は細く、上方が大きく突出する形状を呈する。842と843は同一個体の可能性がある。844は残存器高8.1cm。内外面調整ナデ。突帯は高く突出し断面台形である。845は残存器高5.8cm。外面調整ヨコハケ。突帯はやや低い断面台形である。846は口径23.6cm、器高49.7cm、底部径17.1cm。外面調整タテハケ、内面調整4段目のみヨコハケおよびナメハケ、以下はナデ。突帯はややM字状である。基底部の接着は「S」字状で、底面にワラ状の圧痕が認められる。黒斑有り。

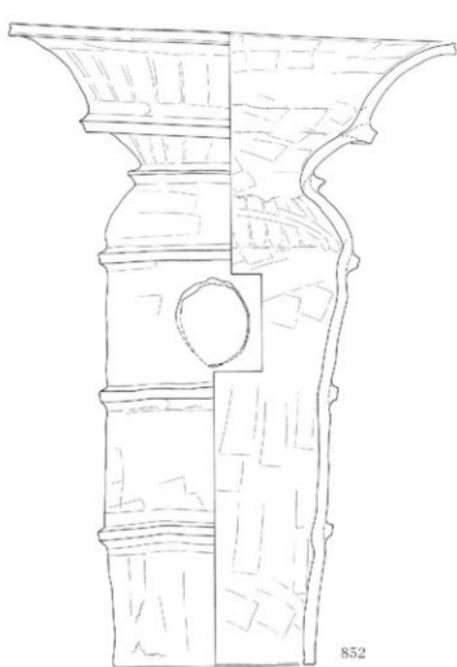


第82图 3号出土陶輪实测图(1)

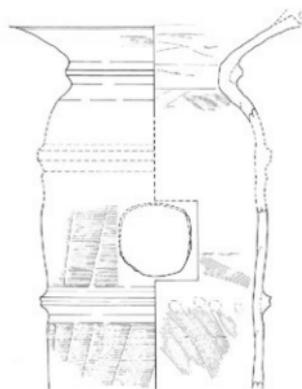


第83図 3号墳出土埴輪実測図(2)

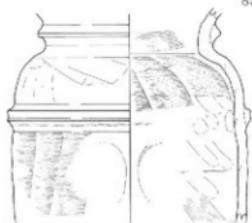
朝顔形埴輪(847~855) 847は口径32.6cm、器高54.3cm、底径16.2cm。3段目に円形スカシ孔を対面する2方向に穿孔する。内外面ともにナデ調整し、粘土紐接合痕跡を消す。突帯は低めの断面台形で、頭部のは断面三角形である。基底部の接着は「Z」字状で、底面にワラ状の圧痕が認められる。848は残存器高8.7cm、体部径23.0cm。外面調整Bc種ヨコハケ、内面調整ナデ。突帯は未広がり台形である。855と同一個体の可能性がある。849~851は同一個体の可能性があり、上部を欠く



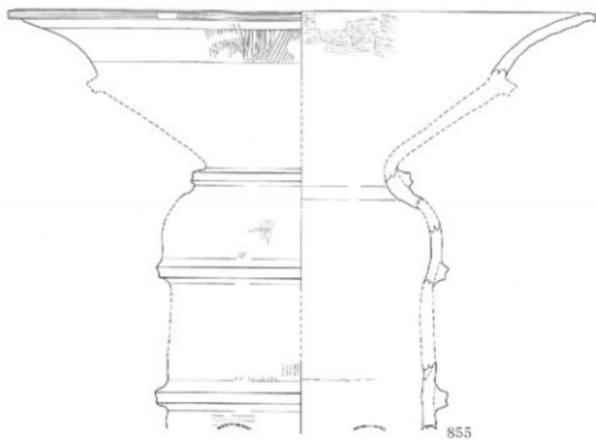
852



853



854



855

0 20cm

第84图 3号填出土地輪夾測圖 (3)

が朝顔形埴輪になると思われる。849は残存器高14.0cm、突帯部径18.2cm、外面調整B d 種ヨコハケ。突帯は突出が低く、断面M字状である。850・851は基底部である。いずれも外面調整B種ヨコハケで、底面にワラ状の圧痕が認められる。850は残存器高7.2cm、底径15.4cm。851は残存器高7.75cm、底径15.0cm。外面下端に一部タテハケが施される。また基底部の接着部分が残りに「S」字状である。852は口径36.0cm、器高54.3cm、底径15.7～17.4cm。3段目に円形スカーン孔を対面する2方向に穿孔する。内外面ともに丁寧にナデ粘土紐接合痕跡を消す。突帯は低めの断面台形で、頭部のは断面三角形。基底部の接着は「Z」字状で、底面にワラ状の圧痕が認められる。853・854は共に円形透かし孔を穿孔し、外面調整B d 種ヨコハケ、内面調整上部がヨコハケ、下方がナデ。突帯は断面M字形で、頭部の突帯は角が丸くなった断面台形(853)のものと、断面三角形(854)のものである。853は残存器高17.6cm、854は復元残存器高30.45cmである。855は同上で復元したもので、法量はいずれも復元値であるが口径47.8cm、器高34.1cm、頸部径18.1cm、体部径24.0cm。朝顔部の外面調整タテハケ、内面調整ヨコハケ、円筒部の外面調整タテハケ後ヨコハケ、内面調整ナデ。円形透かし孔が部分的に残存する。突帯は断面M字状を呈する。

4号墳周溝出土埴輪(第85回856・857) 2点を図示した。円筒埴輪(856・857)である。口縁端部の形状はそれぞれ異なり、外側に屈曲するもの(857)と内側に肥厚させるもの(856)である。共に土師質焼成(Cグループ)で3条の突帯を持つ4段のもので、3段目の対向する面に円形(857)もしくは半円形(856)の透かし孔がある。透かし孔の周囲に共に「ひ」状のヘラ記号を施す。

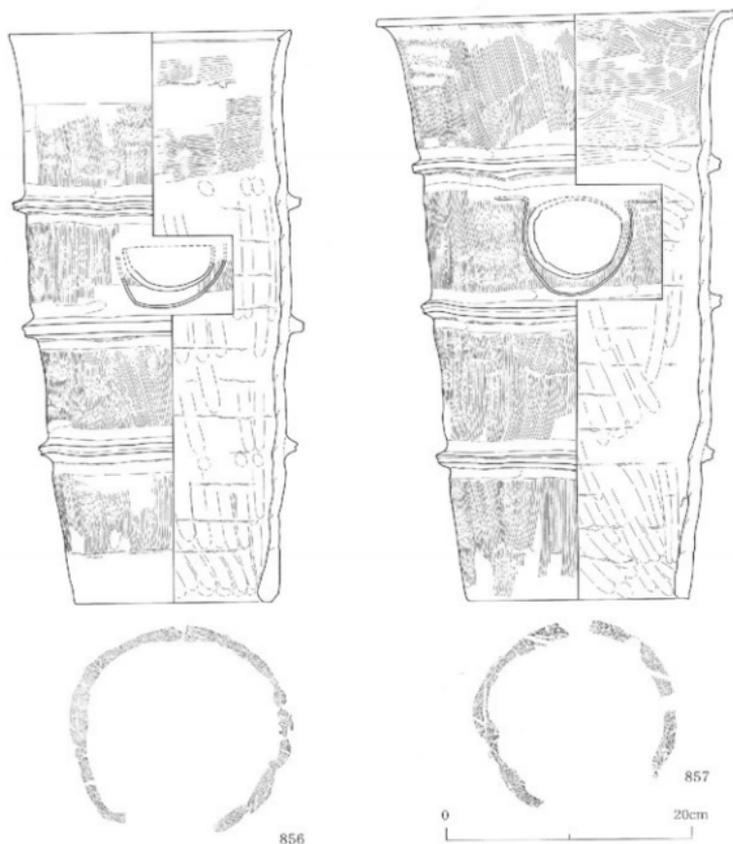
856は口径23.1cm、器高46.7cm、底部径15.9cm、外面調整タテハケ、内面調整は4段日のみヨコハケ、以下はナデ。突帯は高く突出する台形で、基底部の接着は「S」字状で、底面にワラ状および板状の圧痕が認められる。黒斑有り。857は口径28.8cm、器高48.1cm、底部径17.3cm～17.8cmである。外面調整タテハケ、内面調整は4段日のみヨコハケ、以下はナデ。突帯は高く突出する台形、基底部の接着技法はつき合わせ、黒斑は認められない。

上面の遺構および包含層出土の埴輪(第86～88回858～905)

溝83出土埴輪(第86・87回858～879) 22点を図示した。溝83は第2面の溝であるが、3・4号墳の周溝を切っているため破片ではあるが多くの埴輪が出土している。溝57・61とは一連の遺構であるが、占墳との位置関係上分けて説明する。円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪である。

色調及び焼成によるグループは、A(859・860・862・866～868・876・878) B(874・875・877・879) C(861・871～873) D(863) E(858・864・865・869・870)に分けられる。

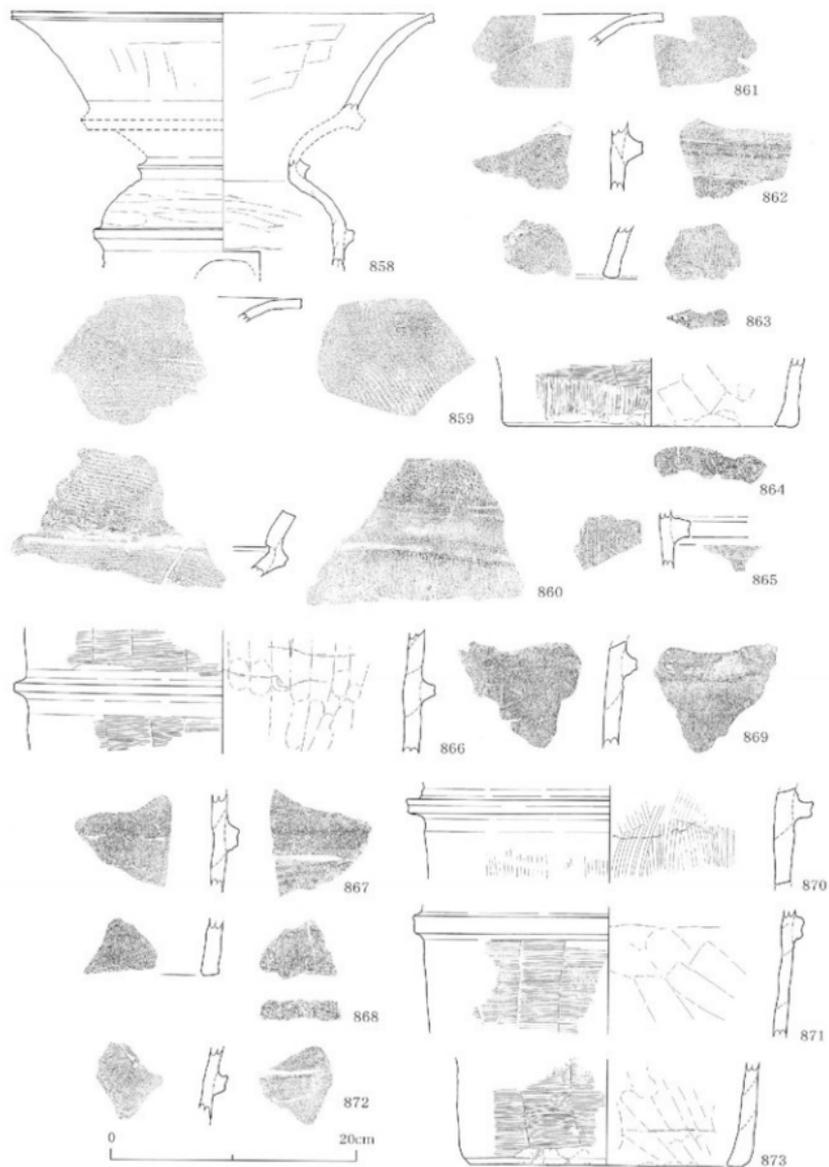
円筒埴輪(862～875) 862は残存器高5.6cm、外面調整ヨコハケ、内面調整ナデ。突帯は高く突出し断面台形である。863は基底部で残存器高4.4cm、外面調整タテハケ。底面にワラ状の圧痕が認められる。864は基底部で残存器高5.7cm、底部径23.0cm、外面調整タテハケ後B c 種ヨコハケ、内面調整イタナデ。底面にワラ状の圧痕が認められる。865は残存器高4.8cm、外面調整ヨコハケ、内面調整タテハケ。突帯は高く突出し断面台形である。866は残存器高10.25cm、体部径33.7cm、外面調整B c 種ヨコハケ、内面調整ナデ。突帯は断面台形である。867は残存器高8.4cm、外面調整B種ヨコハケ、内面調整ナデ。突帯は突出が低く扁平なM字状である。868は基底部で残存器高4.75cm、外面調整ヨコハケ後タテハケ、内面調整ナデ。底面にワラ状の圧痕が認められる。869は残存器高8.9cm、外面調整タテハケ、内面調整ヨコハケ。突帯の頂部が欠損している。870は残存器高7.4cm、体部径33.0cm、内外面調整タテハケ。突帯は高く突出する断面台形である。871は残存器高10.4cm、体部径31.4cm。



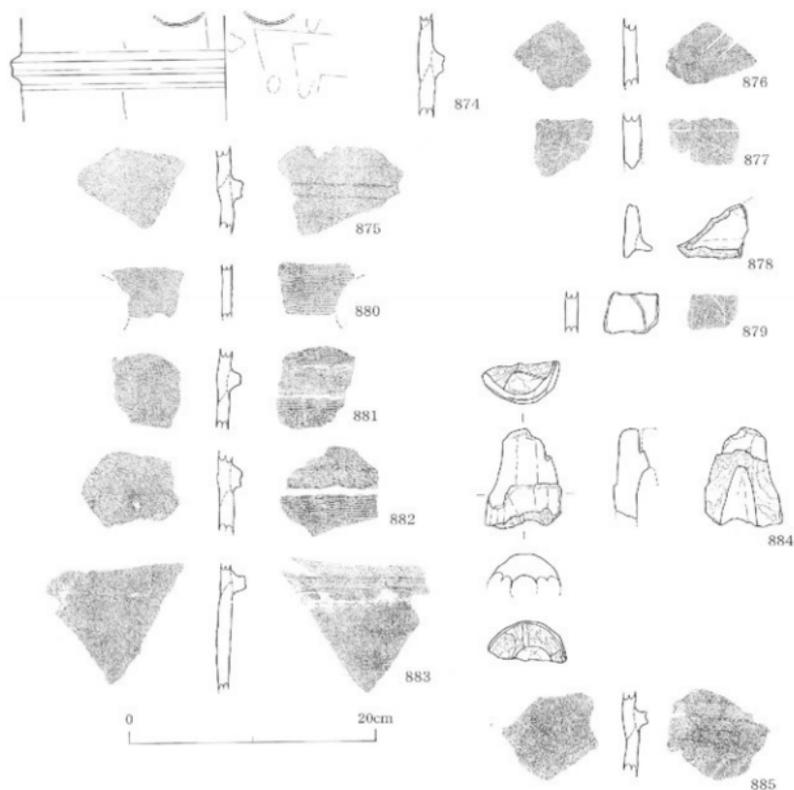
第85図 4号墳出土埴輪実測図

外面調整Bc種ヨコハケ、内面調整ナデ。突帯は幅広の扁平な台形である。872は残存器高6.5cm。外面調整不明瞭、内面調整ナデ。突帯はややM字状気味の台形である。873は基底部で残存器高8.6cm、底部径22.0cm。外面調整Bc種ヨコハケ、内面調整ナデ。底面にワラ状の圧痕が認められる。874は残存器高8.5cm、体部径34.7cm。内外面調整板ナデ。円形透かし孔一部残存。突帯はやや扁平な断面M字状である。875は残存器高7.3cm。内外面調整ナデ。突帯はM字状気味である。

朝顔形埴輪(858~861) 858は図上復元したもので、口径33.8cm、復元残存器高21.1cm。円形もしくは半円形透かし孔が穿孔されている。内外面とも丁寧なナデ調整。859は口縁部で残存器高1.2cm。外面調整タテハケ、内面調整ヨコハケ。860は残存器高4.9cm。外面調整タテハケ、内面調整ヨコハケ。



第86圖 溝83出土地輪尖刻圖



第87図 溝83他出土埴輪実測図

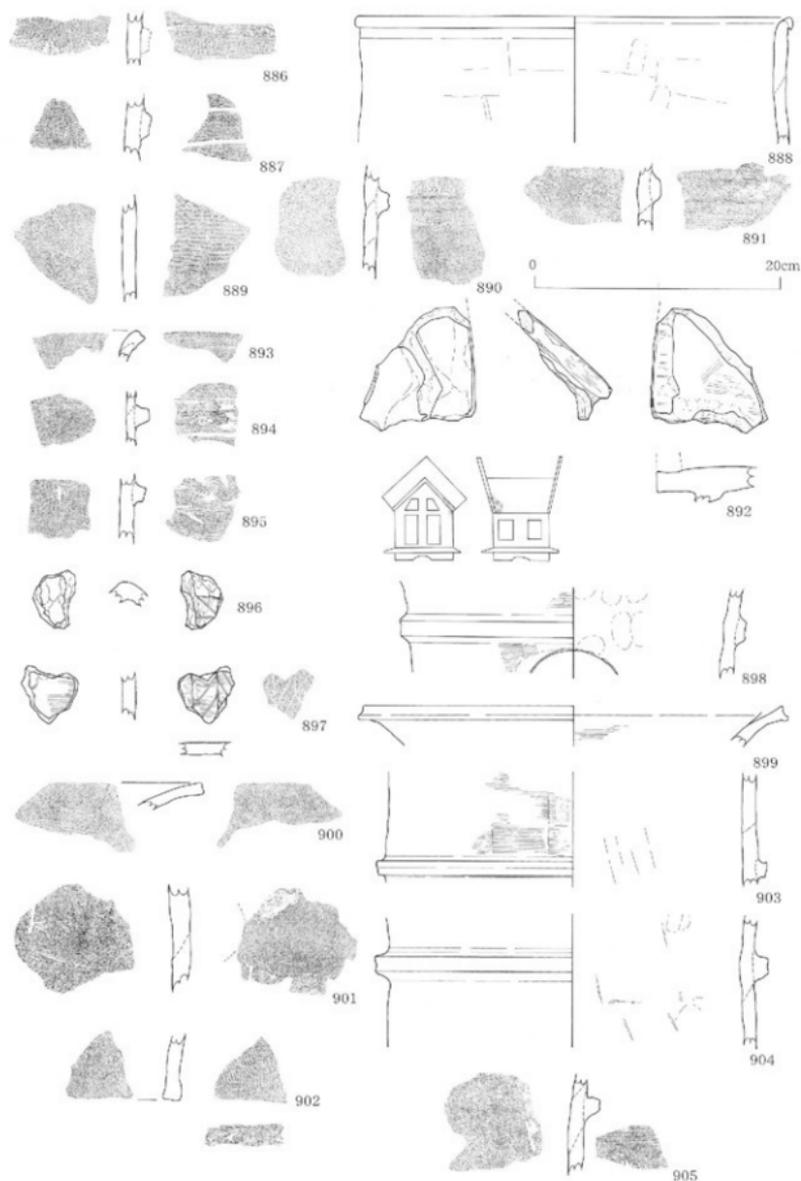
突帯は断面台形である。861は残存器高2.7cm。内外面ともイタナデ調整。

形象埴輪(876~879) 876・877・879は円筒埴輪の可能性もある。それぞれ外面に二条(876)および一条(877・879)の線刻がある。876は残存器高5.8cm, 877は残存器高4.5cm, 879は残存器高4.2cm。878は残存器高4.25cm。図の下端は剥離面である。どのような形状になるのかは不明である。

溝83以外の第2面溝出土の埴輪(第87図880~885) 円筒埴輪、形象埴輪である。

色調及び焼成によるグループは、A(881)C(884)D(880・882)E(883・885)に分けられる。

円筒埴輪(880~883・885) 880は残存器高4.6cm。外面調整B c種ヨコハケ、内面調整ナデ。円形透かし孔一部残存。他のものと比べると薄手である。溝75出土。881・882は溝76出土。881は残存器高6.6cm。外面調整タテハケ後ヨコハケ、内面調整タテハケ及びナメハケ。突帯は断面台形。882は残存器高6.5cm。外面調整ヨコハケ。突帯は残りが悪いが突出の低い断面台形である。883は残存器高



第88图 包含層出土埴輪実測図

10.6cm。内外面調整板ナデ。突帯は高く突出し断面台形である。溝52出土。885は残存器高6.9cm。外面調整ヨコハケ、内面調整ナデ。突帯は高く突出し断面はM字状である。溝61出土。

形象埴輪(884) 884は残存長7.9cm。最大幅6.1cm。最大厚さ2.5cm。円筒形のもの半分が割れたような状態である。外面の段は当初のものであり、図での上端に切り込みが見られる。切り込みは幅1mm程度で非常に細いものである。2ヶ所残存している。内面の状態からすると先の尖った棒状のものを差し込んだものであろうか。溝57出土。

包含層出土埴輪(第88図 886~905) 20点を図示した。円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪である。

色調及び焼成によるグループは、A(887・902・905) B(888・890・892・896・897・904) C(886・891・898・900) D(893・895・903) E(889・894・899・901)に分けられる。

出土地点には3・4号墳に直接するものとそうでないものがある。3号墳は5a・6a・7a区、4号墳は4a・5a・5b区に位置しており、それぞれの出土地区は4a(886)、4b(894~896・898・899)、5a(887)、5b(897)、5c(905)、6a(888~891)、6c(903)、7a(900)、7b(901・902)、8b(904)、その他(第1層・側溝など)(892・893)となっている。

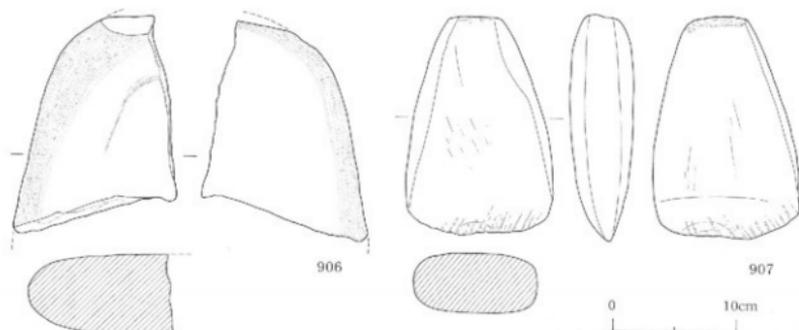
円筒埴輪(886~891・893~895・898・901~905) 886は残存器高4.4cm。タガが剥離した痕跡があり、剥離した部分にタテハケがみられる。887は残存器高4.5cm。外面調整ヨコハケ、内面調整ナデ。突帯は突出の低い著しく扁平な断面台形である。888は口縁部で残存器高10.3cm。口径35.0cm。内外面調整イタナデ。口縁部は外反する。889は残存器高9.0cm。外面調整B種ヨコハケ、内面調整ナメハケ。890は残存器高9.3cm。内外面調整ナデ。突帯は高く突出し断面台形である。891は残存器高5.4cm。外面調整B種ヨコハケ。突帯の突出は低い。全体が著しく摩滅する。893は口縁部で残存器高2.5cm。調整不明。894は残存器高4.4cm。内外面調整ナデ。突帯の高く突出し断面台形である。895は残存器高5.7cm。外面調整ヨコハケ、内面調整ナメハケか。全体が著しく摩滅する。突帯は断面やや台形気味である。898は残存器高7.3cm。体部径28.2cm。外面調整B種ヨコハケ、内面調整ナデ。円形透かし孔を穿孔する。突帯は幅広の扁平な断面台形である。901は残存器高9.9cm。外面調整タテハケ、内面調整ヨコハケ。円形透かし孔が一部残存する。902は残存器高4.5cm。外面調整タテハケ、内面調整ナデ。基底部の接合技法は「Z」字状である。903は残存器高9.25cm。体部径31.8cm。外面調整B種ヨコハケ。突帯はやや低い断面台形である。904は残存器高10.9cm。体部径32.0cm。外面調整不明、内面調整イタナデ。突帯は高く突出する断面台形である。905は残存器高8.4cm。外面調整B種ヨコハケ、内面調整ナデ。突帯は高く突出する断面台形である。

朝顔形埴輪(899・900) 899は残存器高3.3cm。口縁部が粘土の接合部で剥離している。擬口縁部径35.0cm。内面調整ヨコハケ。突帯は断面三角形である。900は口縁部で残存器高2.2cm。外面調整タテハケ、内面調整ヨコハケ。

形象埴輪(892・896・897) 892は家形埴輪の屋根部分であらうか。残存器高9.3cm。全体が著しく摩滅。896・897はそれぞれ外面に綾形文状の線刻が施されている。896は残存器高4.6cm。897は残存器高2.9cm。

### 3) 石器

縄文時代から古墳時代にかけての石器が出土している。弥生時代のものが多いが、後の時代の遺構および包含層中からの出土が多い。古墳時代のは紡錘車であり、また時期不明ながら砥石が一点出土している。また文章中で石材について記述しているものがあるが、いずれも筆者の内眼



第89図 縄文時代石器実測図

観察によるものである。

縄文時代の石器(第89図・図版103 906・907・931~933)

石皿(906) 906はおそらく全体の4分の1程度が残存していると思われる。片面が滑らかになっていることから石皿であろう。石材は砂岩である。第9面の土器集中部出土で、残存長9.0cm、残存幅6.7cm、残存厚3.5cm、重量247.34g。時期は共に出土した土器から縄文時代晩期籬原式古段階であろう。

石斧(907) 907はほぼ完形で、基部に敲打痕が残る。全体の形状は長楕円形で、断面形は楕円形を呈する。刃部には使用時についたと思われる線条痕と刃の欠けが認められる。第12面河川4出土で、最大長9.0cm、最大幅5.9cm、最大厚2.5cm、重量219.65g。時期は共に出土した土器から縄文時代後期前葉北白川上層式1期と考えられる。

石核・剥片(931~933) 図版103のみ掲載のものである。いずれも特に調整などはなされておらず、石材はサヌカイトである。931は河川4出土で最大長4.5cm、最大幅5.0cm、最大厚1.2cm、重量70.50g。4面に自然面が残る。932は15層出土で最大長6.3cm、最大幅3.4cm、最大厚0.8cm、重量18.65g。1面に自然面が残る。933は北側溝出土で、最大長5.5cm、最大幅7.5cm、最大厚1.3cm、重量57.97gである。一部に自然面が残るが、全体的に表面が風化している。

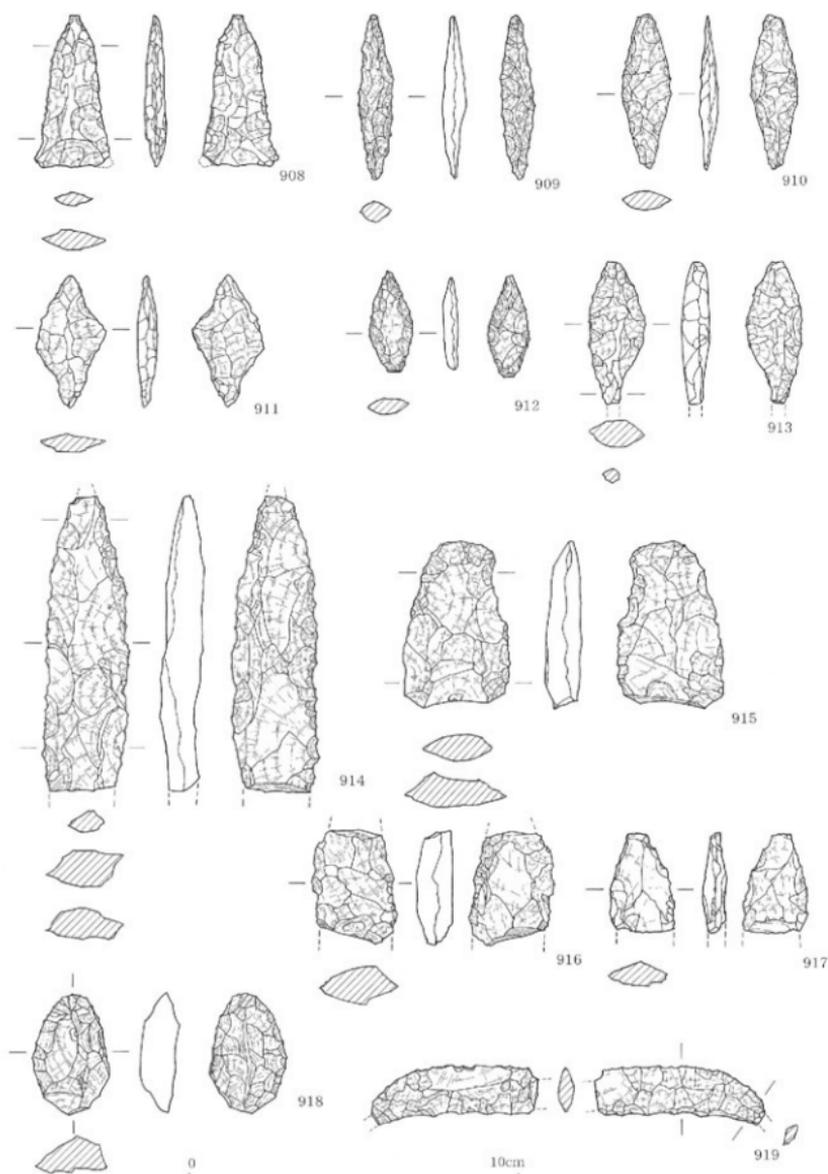
弥生時代の石器(第90・91図・図版104~109 908~927・934~939)

弥生時代の遺構・包含層から出土したものと新しい時代の遺構・包含層から出土したものが存在する量が少ないためまとめて報告する。ほとんどが弥生時代中期に所属するものであろう。

打製石器(第90・91図 908~922)

石鎌、石錐、石槍、不明石器、石小刀、剥片である。石材は918がガラス質の透明な石(石材は未鑑定)である以外はサヌカイトである。

石鎌(908~912) 908は基部が平らで平面長三角形の大型のものである。第1面精査時出土で、最大長4.65cm、最大幅2.25cm、最大厚0.6cm、重量4.84g。909は極めて細く棒状を呈する。断面はほぼ円に近い菱形。隣接地の立会調査時出土で、最大長5.0cm、最大幅1.0cm、最大厚0.6cm、重量2.49g。910は長細い菱形をしており、基部と先端がそれぞれ少しずつ欠ける。第4面溝100出土で、最大長4.75cm、



第90図 弥生時代石器実測図 (1)

最大幅1.45cm、最大厚0.55cm、重量3.63g。911は平面形が菱形で、横幅が広めである。第4面溝100出土で、最大長4.05cm、最大幅2.15cm、最大厚0.55cm、重量3.62g。912は基部が欠損している。第4面精査時出土で、最大長3.0cm、最大幅1.3cm、最大厚0.5cm、重量1.95g。

石錐(913) 913は頭部と錐部の境が明瞭なものであるが、錐部は折れている。第1面精査時出土で、残存長4.35cm、最大幅1.65cm、最大厚0.85cm、重量6.32g。

石槍(914~919) いずれも両端の細部調整が一部にしか施されていないため製作途中のものと考えられる。914は少しねじれたような形状である。第5層出土で残存長9.0cm、最大幅2.5cm、最大厚1.2cm、重量34.35g。915は第2面精査時出土で、残存長5.1cm、最大幅3.2cm、最大厚1.1cm、重量21.76g。916・917は第1面精査時出土で916は、残存長3.5cm、最大幅2.4cm、最大厚1.1cm、重量12.15g。917は一部未加工面が残存する。残存長3.05cm、残存最大幅1.95cm、最大厚0.75cm、重量4.85g。

不明石器(918) 918はガラス質の透明な石材(石材は未鑑定)を使用した石器。石材が独特であるため器種はあえて分類していない。鱗状の押し剥離が認められる。5層出土で全長3.7cm、最大幅2.2cm、最大厚1.2cm、重量10.89g。

石小刀(919) 919は全体が弧を描く形状のもので、片面にわずかに自然面が残る。表面はかなり風化している。第4面溝105出土で、残存長5.1cm、最大幅1.5cm、最大厚0.5cm、重量0.5g。

剥片(920~922・934) 920は刃部に調整を施しているものである。第5層出土で、最大長7.3cm、最大幅2.8cm、最大厚0.65cm、重量13.15g。921・922は断面形態が三角形を呈し、細部調整は特に施されていないものである。921は一部に自然面を残す。2面精査時出土で、最大長6.8cm、最大幅2.15cm、最大厚1.0cm、重量15.72g。922は極薄いものである。1面精査時出土で、最大長4.65cm、最大幅1.85cm、最大厚0.6cm、重量3.30g。934は図版106のみ掲載のものである。断面形態は三角形を呈する。B区1面P17出土で最大長7.7cm、最大厚3.3cm、最大厚1.0cm、重量16.45g。

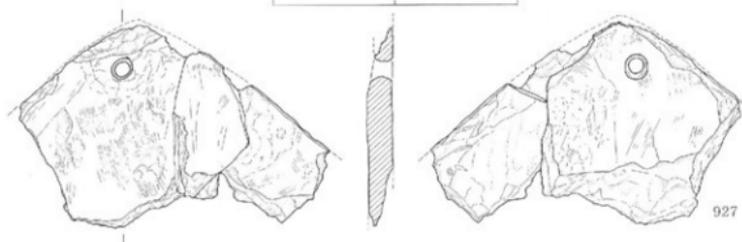
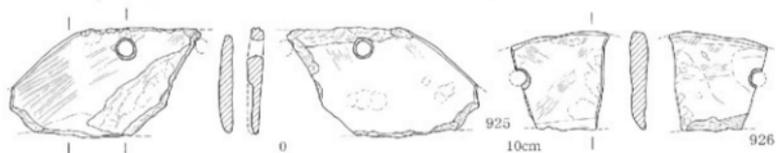
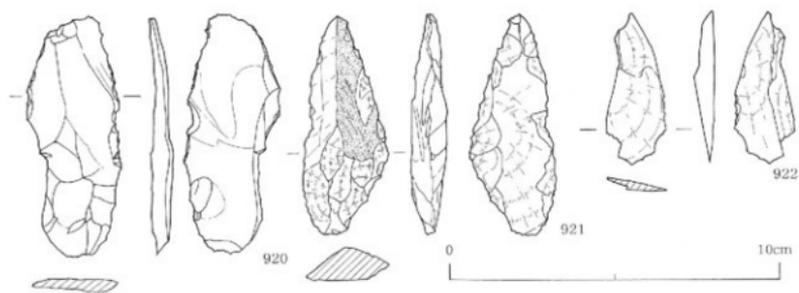
石核(935~939) 図版107のみ掲載のものである。石材はサヌカイトである。935は第2面溝48出土で最大長8.4cm、最大幅6.0cm、最大厚1.3cm、重量76.04g。1面以外には自然面が残る。936は第5層出土で最大長6.5cm、最大幅4.5cm、最大厚2.0cm、重量82.17g。3面に自然面が残る。937は第2面溝86出土で最大長6.0cm、最大幅7.8cm、重量138.30g。2面に灰白色を呈する自然面が残る。938は第2面溝61出土で最大長9.5cm、最大幅6.0cm、最大厚1.7cm、重量86.55g。1面に灰色を呈する自然面が残る。939は第5面土坑17出土で最大長5.0cm、最大幅9.5cm、最大厚1.3cm、重量72.92g。片側のほぼ全面に自然面が残る。

#### 磨製石器(第91図923~927)

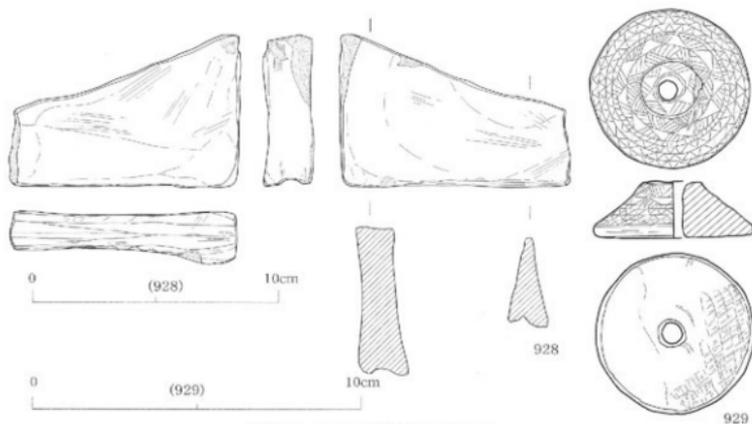
太型蛤刃石斧、石庖丁、大型石庖丁である。

太型蛤刃石斧(923) 923は基部が平らで刃部側が広がる長楕円形を呈するもので、断面形は円に近い楕円形である。全体的に損傷がひどいが残存部分には敲打痕が顕著に残る。第5面上坑20出土で、残存長11.6cm、最大幅6.1cm、最大厚4.2cm、重量430g。

石庖丁(924~926) 石材はいずれも緑泥片岩である。924は全体の3分の1程度が残存しており、紐孔は1つだけ残る。やや楕円形に近い杏仁形であり、刃は片刃。一部に敲打痕が残るが全体的には丁寧な研磨が施される。第1面溝17出土で、残存長4.8cm、最大幅3.9cm、最大厚0.6cm、重量17.31g。925は4分の1程度が残存する程度であり全体の形状は明らかではない。紐孔は1つが残存する。他の石庖丁に比べ幾分白っぽい色をしている。刃は片刃。第5面土坑16出土で、残存長3.9cm、最大幅4.0cm、



第91圖 弥生時代石器実測圖(2)



第92図 古墳時代以降石器実測図

最大厚0.7cm、重量20.15g。926はほぼ半分が残存する。形状は刃部が直線の半月形であろう。紐孔は1つが完存し、もう1つは痕跡のみ残る。刃は片刃である。3層出土で、残存長7.8cm、最大幅4.4cm、最大厚0.6cm、重量29.61g。

大型石庖丁(927) 927は破損が著しく全体の形状は明らかではないが、おそらく三角形に近い形になると思われる。紐孔は単孔である。両面に線条痕が著しい。石材は緑泥片岩である。土坑14出土で、残存長12.6cm、残存幅8.0cm、最大幅1.0cm、重量108.39g。

古墳時代以降の石器(第92図928～929) 砥石、滑石製紡錘車である。

砥石(928) 928は3つの面を砥石として使用している。いずれの面も非常によく使用されており著しく磨り減っている。また長側面はV字状にくぼんでいる。石材は砂岩である。全長9.3cm、幅6.2cm、厚2.0cm、重量93.01g。北側溝出土のため時期は不明である。

紡錘車(929) 929は断面台形であり、上部の平坦面に鋸歯文、斜面部分にも上部は鋸歯文を2段施す。ただし上段は上下から鋸歯文を隙間なく施し、下段は上向きのもののみを施す。下段の鋸歯文の下には縦方向の刻み目を入れ、その下には3段に渡って三角形文を施す。底面には文様は施されていないが、擦痕が認められる。直径4.9cm、高さ1.7cm、孔径0.8cm、重量46.12g。第2面溝56の出土であるが古墳時代のものである。

参考文献

- 泉 拓良 1980.3 「北白川上層式土器の細分」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』京都大学埋蔵文化財センター  
 千葉 豊 1989.11 「緑帯文系土器群の成立と展開」『史林第72巻第6号』 史学研究会  
 家根祥多 1994.3 「権原式の埴輪」『縄紋晩期前葉—中葉の広域編年』 北海道大学  
 川西空幸 1978 「円筒埴輪論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学  
 一瀬和夫 1988 「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大水川改修に伴う発掘調査概要・V』 大阪府教育委員会

## 第5章 自然遺物

### 1. 段上遺跡第13次調査出土倒木の樹種鑑定結果

(株)吉田生物研究所

#### 1) 試料

試料は縄文時代後期河川3から出土した倒木1点である。

#### 2) 観察方法

剃刀で木口(横断面)、柃目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

#### 3) 結果

樹種同定結果(広葉樹1種)の第2表と顕微鏡写真(図版110)を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

クスノキ科クスノキ属クスノキ(*Cinnamomum camphora* Presl)

遺物No.1)

(写真No.1)

散孔材である。木口では中庸の道管(～200 $\mu$ m)が単独または2ないし数個が放射方向あるいは斜方向に連続して年輪内に平等に分布する。軸方向柔細胞は道管の周囲を厚く鞘状に取り囲んでおり、その中に見え小さな道管と見間違えるほどの油細胞(樟脳油貯蔵細胞)がある。柃目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間隙孔はレンズ状の大型壁孔が階段状に並んでいる。板目では放射組織は1～3細胞列、高さ～800 $\mu$ mからなる。放射組織の直立細胞や軸方向柔細胞が油細胞に変化したものが多く見られる。クスノキは本州(関東以西)、四国、九州に分布する。

第2表 樹種同定表

NO.	出土地	樹種
1	河川3	クスノキ科クスノキ属クスノキ

#### 参考文献

- 島地 謙・伊藤隆夫 1988 『日本の遺跡出土木製品総覧』 雄山閣出版  
島地 謙・伊藤隆夫 1982 『図説 木材組織』 地球社  
伊藤隆夫 1999 『日本広葉樹材の解剖学的記載 1～V』 京大大学木質科学研究所  
北村西郎・村田 源 1979 『原色日本植物図鑑 木本編 1・II』 保育社  
深澤和 1997 『樹体の解剖』 海青社

## 2. 貯蔵穴1出土種類別の調査結果

(株)吉山生物研究所

東大阪市に所在する段上遺跡第13次調査時に出土した種実類の同定結果を報告する。

### 1) 調査した試料

試料は縄文時代後期の貯蔵穴1から出土した、水漬け状態の種実類である。

### 2) 調査方法

種実類を実体顕微鏡下で観察して、その形状、表面の紋様から種の同定を行った。同定に際しては、石川(1994)、中山・井之口・南谷(2000)を参照した。学名は基本的に北村・村田(1964)、岡(1979)に拠り、記述の順番は牧野(1990)に拠った。

### 3) 観察結果

同定できたのは第3表に示す植物10種(木本8種、つる性2種)である。出土層位ごとに各種の写真を示し、観察所見を記す。同定結果は第4表に示す。

第3表 検出された植物一覧

No.	和名	科名	学名	木本/つる性
1	オニグルミ	クルミ	<i>Juglans manshurica</i> Maxim. subsp. Sieboldiana	木本
2	コナラ属	ブナ	<i>Quercus</i> L.	木本
3	アカガシ亜属	ブナ	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i> sp.	木本
4	クスノキ?	クスノキ	<i>Camptotheca camptochaeta</i> L.	木本
5	(2種)	クスノキ	<i>Laurocarya</i>	木本
6	ツツラフジ		<i>Sinomenium acutum</i> Rehd. et Wils.	つる性
7	ユズリハ?	ユズリハ	<i>Daphniphyllum macropetalum</i> Miquel	木本
8	トチノキ	トチノキ	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	木本
9	ノブドウ属	ブドウ	<i>Ampelopsis</i> sp.	つる性

#### (1) オニグルミ (*Juglans manshurica* Maxim. subsp. Sieboldiana) (図版110)

大きさ(縦×横)2.8cm×2.3cmの約1/2の核が出土した。ほぼ円形を呈する。表面に浅い縦方向の溝が走る。

#### (2) コナラ属 (*Quercus* L.)

堅果が出土した。濃褐色で大きさ径1.8cm×1.2cm前後の長楕円形を呈する。殻斗が外れているので種の同定は不可能である。

#### (3) アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* sp.)

殻斗にほぼ全体が覆われた径4.5mm×4.0mmの幼果が出土した。殻斗は水平方向の段がみられるリング状である。

(4)クスノキ科 (*Laurocarace*)

3種類の種子が出土した。クスノキ (*Crinum arvense* Campobesi L.)? とその他2種の種子が出土した。3種ともほぼ球状で縦方向に隆条が1条走る。クスノキ? の種子は表面が平滑ではなく、大きさは径6.0mmである。他の2種は径6.5~7.0mmとそれよりも大型で、1種は表面が極めて平滑、もう1種は白色のまだら文様が見られる。

(5)ツツラフジ (*Sinomenium acutum* Rehd. et Wils.)

核が出土した。黄褐色で大きさ4.5mm×4.0mmの馬蹄形を呈し、中央部に小さな穴を持つ大きな凹みがある。凹みの縁は高くなる。

(6)ユズリハ? (*Daphniphyllum macrosepalum* Miquel)

種子が出土した。6.5mm×4.5mmの楕円形を呈し、表面には縦方向に隆条が走る。

(7)トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume)

効果、果皮、種子、種皮が出土した。横広楕円形を呈する。果皮の表面には凹凸がある。種子は横広楕円形を呈し下部に大きな臍がある。

(8)ノブドウ (*Ampelopsis* sp.)

種子が出土した。褐色で、4.5mm×4.0mmの広倒卵形を呈する。背面にはまるみがあり、腹面の中心線は稜となる。その稜の両側に凹みがある。

第4表 種実同定結果

No.	出土層位	検出植物と部位	写真NO.
1	上層	オニグルミの核	1
		トチノキの種子	2
2	2層	トチノキの果皮	3
3	3層	クスノキ科2種の種子	4・5
		コナラ属の堅果	6
4	4・5層	クスノキ科3種の種子	7~9
		トチノキの種子・種皮	10
		ツツラフジの核	11
5	6・7層	トチノキの種皮・効果	12・13
		コナラ属の堅果	14
6	8層	アカガシ亜属の効果	15
		クスノキ科3種の種子	16~18
		ユズリハ? の種子	19
		ノブドウの種子	20
7	底面	コナラ属の堅果	21

参考文献

- 石川茂徳 1994 『原色日本植物種子写真図鑑』 石川茂徳図鑑刊行委員会  
北村四郎・村田 源 1979 『原色日本植物図鑑 木本編 Ⅰ・Ⅱ』 保育社  
北村四郎・村田 源 1964 『原色日本植物図鑑 草本編 上・中・下』 保育社  
中山空大・井之口希秀・南谷忠志 2000 『日本植物種子図鑑』 東北大学出版会  
牧野富太郎 1990 『改訂増補 牧野新日本植物図鑑』 北隆館

## 第6章 調査成果の検討

### 1. 既往の調査と周辺遺跡の概要

#### 1) はじめに

段上遺跡周辺には複数の小規模な範囲の遺跡が互いに接した状態で存在している。もとより遺跡の指定範囲は現在便宜的に指定したものであり各時代の状況を反映できていないとは限らないものである。そこでそれぞれの遺跡の範囲にとらわれることなく、調査成果を総合的に見ることによって各時代の様相をより明らかにすることができるとと思われる。今回は段上遺跡とその周囲に接する縄手・上六万寺・下六万寺・五合田・北烏池、及び近接する船山の各遺跡を対象とする。

これまでの調査箇所は第94・95図に、調査成果の概略は第5表に示すとおりである。詳細については各文献を参照していただきたい。また段上遺跡における道路地内の調査については弥生時代中期～古代における遺構変遷概略図(第93図)を作成した。

#### 2) 各時代の様相

旧石器時代～縄文時代 現在までのところ、旧石器時代から縄文時代前期にかけての遺構および遺物は確認されていない。周辺で最初に確認されているのは、縄文時代中期の土器(縄手1～4次、段上3・4次)である。最も遺構は確認されていないのでそれ以上の状況は不明である。

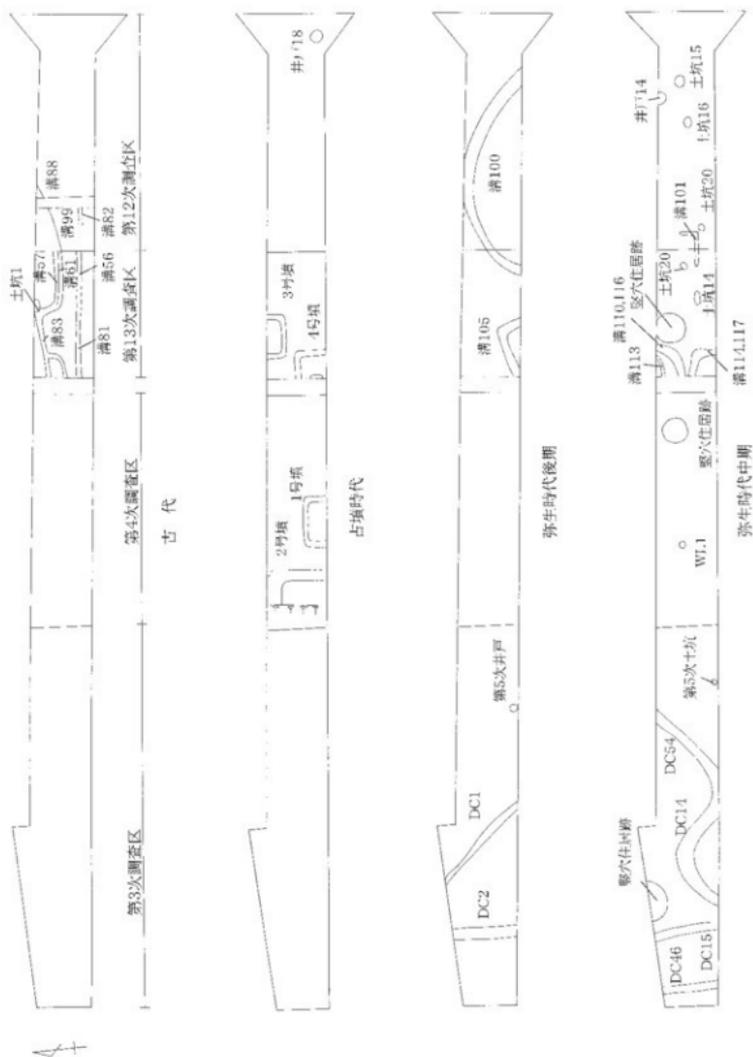
後期になると中津式～北白川上層式の時期にかけては多くの地点で遺物が出土している(縄手1～7・10次、段上3・4・13次)。また時期不明ながら船山1次で小片が、船山3次では元住吉山Ⅱ式～宮流式の土器が出土している。他に上製品として縄手遺跡1・7次調査で土偶が出土している。遺構は竪穴住居跡、土壇墓、配石遺構・貯蔵穴などが検出されており(縄手1～3・5・10次、段上13次)、縄手遺跡では集落が営まれていた。北白川上層式の後に続く一乗寺K式から晩期の遊賀里ⅢA式にかけてはほとんど遺物が出土していない。篠原式古段階以降は再び土器が出土ようになる(縄手2・10次、段上2・4・6・13次)。段上13次では篠原式古段階の土器がまとめて出土しているため、周辺に集落が存在していた可能性もある。

弥生時代 前期の土器は現在までのところ、縄手遺跡のみで出土している(縄手2・10・11次)。

中期になると段上遺跡で土坑、溝、竪穴住居跡などが検出されているが(段上1・3～5・12・13次)、他の遺跡内では遺物が出土しているのみである(縄手2・6・7次、上六万寺6次、五合田2次、船山5次)。段上1次で「溝状の落ち込み」から出土した土器は完形のものも多く、体部に穿孔されているものが認められた。このことから方形周溝墓に伴う供献土器である可能性が指摘されている。段上13次においても遺物の出土状況などから方形周溝墓の存在が推定されている。

後期になると各遺跡内で遺物が確認されるようになる(縄手2・5・7・9次、段上1～5・8～14次、上六万寺1～3・6・7次、北烏池5次、船山3～5次)。遺構は土壇墓、壺棺墓、溝、竪穴住居跡などが検出されている(縄手2・5次、段上3～5・12・13次、上六万寺2次、船山3次)。段上13次では方形周溝墓の可能性のある溝も検出されている。また段上遺跡12・13次の溝からは大量の土器を含んだ溝が検出されている。

古墳時代 前期には段上3・13次で溝が検出されているが、その他の遺跡では遺物のみが出土している(五合田3・4次、上六万寺3・7次、北烏池1・5次)。前期末にはえの木塚古墳(縄手3次)が、中期には段上遺跡内で古墳が造られている(段上4・13次)。ただしいずれも削平されて周溝のみが残っている状態であった。その他には溝などが幾つかの地点で検出されている程度である(縄手2・7・8



第93圖 段上遺跡遺構變遷圖

次、船山3次)。また遺物は縄手2・7・8・15・16次、段上2・4・8～14次、五合田3・4次、上六万寺3・4・6・7次、船山3～5次など多数の地点で確認されている。その他に特徴的な遺物として彌羽口や鉄滓など鍛冶関係の遺物(縄手8次)、刀子、有孔円板、勾玉などの滑石製模造品(下六万寺採集遺物)、滑石製紡錘車(段上12・13次)などがある。

古代 縄手遺跡と段上遺跡の間には河内国を南北に縦断する東高野街道が通っているが、以前の時期と比べると遺構、遺物ともに減少している。遺物は縄手16次、段上11～13次、五合田4次、上六万寺2～4・6次、船山1・3次で出土している。遺構は溝、土坑などが散見される程度で、建物などは検出されていない(段上12・13次)。船山3次では井戸が検出され、墨書土器が出土している。

中世 遺物は縄手13・15・16次、段上2～4・12・13次、上六万寺1・4・6・7次、船山1～5次で出土している。遺構は段上遺跡では鎌溝(段上12・13次)、縄手遺跡および上六万寺遺跡で井戸が検出されている(縄手16次、上六万寺1次)。段上遺跡周辺は耕作地であり縄手遺跡から上六万寺遺跡にかけての場所に居住地が存在した可能性がある。

近世 遺構・遺物ともに検出されていない。

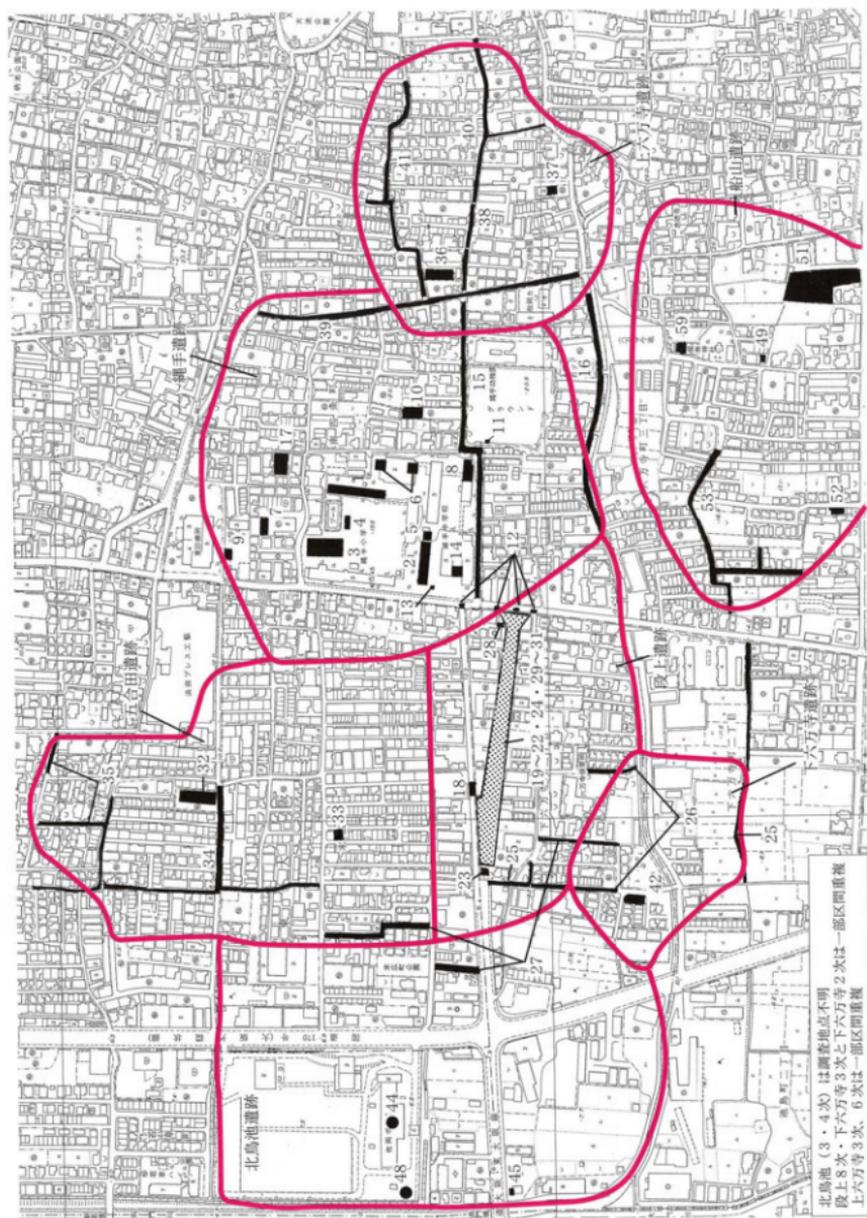
### 3) 小結

周辺では縄文時代中期から遺物は確認されているが、生活の痕跡が確認できるのは縄文時代後期以降である。段上遺跡内では主として河川が検出されているのみであり、この時期の生活の中心は縄手遺跡のようである。その後、晩期から弥生時代前期にかけては再び遺構が希薄になり、弥生時代中期になると段上遺跡で集落が営まれている。後期になると住居などは確認されていないが、引き続き段上遺跡が中心であったものと思われる。古墳時代前期には遺構が確認されているのは段上遺跡の溝のみであるが、遺物はより西側の五合田遺跡・北島池遺跡に多い。ただこの2遺跡は未だ詳細不明であるためこの時期の様相は定かではない。前期末～後期にかけては、縄手遺跡・段上遺跡で古墳が造られている。両遺跡間及び周辺の未調査地点に更に埋没していることが考えられる。古代には溝などが検出されているのみである。中世には耕作地化されている。ただ縄手16次・上六万寺1次では井戸が検出されていることからその周辺が居住域であった可能性がある。近世には引き続き周辺一帯は耕地であるようだが遺構としては確認されていない。

周辺はまだ調査が行われていない地点が多く、調査箇所が集中している傾向がある。これまでの調査で縄文時代から連続と生活が営まれていたことがわかっているが、各時代の様相は今後の調査で更に明らかになってくるものと思われる。



第94図 段上遺跡周辺調査地点図



第95図 段上遺跡周辺遺跡調査地点図

第5表 周辺遺跡の調査歴

遺跡名	遺跡名	調査年度	調査期間	調査面積	文 献	内 容
1	縄手遺跡 1	縄手小学校校舎増築工事に伴う発掘調査	1969.11.18～1970.1.26	500	『縄手遺跡2』東大阪市教育委員会 1971.10	縄文時代後期、土器遺構、石垣遺構、縄文時代中期・後期土器、縄文時代石器、土器土器
2	縄手遺跡 2	縄手小学校校舎建築工事に伴う発掘調査	1970.9.1～1971.3.31	442	『縄手遺跡2』東大阪市教育委員会 1976.3	縄文時代後期、石垣遺構、赤土時代後期磨石、古墳時代前期・中期・後期、古墳時代中期土器、縄文時代、弥生時代五器
3	縄手遺跡 3	縄手小学校屋内体育館増設工事に伴う発掘調査	1971.7～1971.8	600	『東大阪市の古墳(改訂版)』東大阪市教育委員会 2001.3	縄文時代後期、石垣遺構、赤土時代中期土器、縄文時代石器、埴輪、土器土器
4	縄手遺跡 4	縄手小学校校舎改修工事に伴う発掘調査	1972.7～1972.8	50		縄文時代中期・後期土器
5	縄手遺跡 5	縄手小学校校舎改修工事に伴う発掘調査	1973.4.1～1973.5.31	100	『縄手遺跡2』東大阪市教育委員会 1976.3	縄文時代後期住居跡、弥生時代後期土器、縄文時代土器
6	縄手遺跡 6	縄手小学校屋内体育館増設工事に伴う発掘調査	1975.8.19～8.28 1975.11.19～11.27	60	『調査会ニュースNo.3』東大阪市遺跡保護調査会 1976.3 『財』東大阪市文化財委員会年報 1983年度 『財』東大阪市文化財委員会年報 1983年度 『財』東大阪市文化財委員会年報 1983年度	縄文時代後期、弥生時代中期・後期、古墳時代後期土器、縄文時代後期土器
7	縄手遺跡 7	縄手児童福祉会児童福祉センターに伴う発掘調査	1977.9.5～1977.9.9	80	『山背遺跡発掘調査報告』東大阪市教育委員会 1990.3	縄文時代後期、弥生時代中期・後期、古墳時代後期土器
8	縄手遺跡 8	縄手小学校管理棟建設工事に伴う発掘調査	1980.4.7～1980.5.10	600	『東大阪市長蔵文化財調査報告書』1977年度 『東大阪市長蔵文化財調査報告書』1980.3 『東大阪市長蔵文化財調査報告書』昭和61年度 『縄手遺跡・若江遺跡の調査』東大阪市教育委員会 1987.3	古墳時代前期～後期土器、埴輪、土器土器
9	縄手遺跡 9	館前雑居調査	1980.1.29～1980.2.2	20		弥生時代後期土器
10	縄手遺跡 10	共同住宅建設に伴う調査	1986.7.1～1986.8.19	129		縄文時代後期、石垣遺構、縄文時代後期、晩期～弥生時代初期土器
11	縄手遺跡 11	縄手小学校/ランド排水歌取工事に伴う調査	1991.7.22～1991.7.24	10		
12	縄手遺跡 12	電気工事に伴う調査	1997.6			
13	縄手遺跡 13	防火構設に伴う調査	1999.11.30～1999.12.8	20	『発掘調査報告27次・調査遺跡周辺発掘調査報告』東大阪市教育委員会 2002.2	中世前期、中世土器
14	縄手遺跡 14	煙囪文化財センター建設に伴う調査	2000.8.28～2000.8.29			弥生時代後期、古墳時代中期～後期土器
15	縄手遺跡 15	公共下水道管渠築造工事に伴う調査	2000.7.12～2000.8.1	264	『東大阪市長蔵文化財調査報告書』平成12年度 『東大阪市長蔵文化財調査報告書』平成13年度 『東大阪市長蔵文化財調査報告書』平成14年度	古墳時代後期、中世土器
16	縄手遺跡 16	公共下水道管渠築造工事に伴う調査	2001.10.25～2001.12.17	89	『東大阪市長蔵文化財調査報告書』平成13年度 『東大阪市長蔵文化財調査報告書』平成14年度	古墳時代中期～後期、古代、中世土器
17	縄手遺跡 17	共同住宅建設に伴う調査	2001.12.5	4	『東大阪市長蔵文化財調査報告書』平成14年度 『財』東大阪市長蔵文化財委員会 2003.3	中世前期、中世土器
18	段上遺跡 1	電気工事/ブツ建設に伴う調査	1983.2.14	16	『財』東大阪市長蔵文化財委員会 1989.3	弥生時代中期・後期土器
19	段上遺跡 2	工業地方道大阪東大塚線道路建設工事予定地発掘調査	1989.2.28～1994.3.28	24		縄文時代晩期、弥生時代後期、古墳時代中期、中世土器

番号	道筋名	次第	事業名	実施期間	調査面積	文献	内容
20	段上道路	3	工藤町方道大坂市水原道路 跡部幹線に伴う調査	1994.8.1～1995.3.9	1,258	『段上道路第3次水原調査報告書』(財)東大阪 市文化財協会 2001.8	縄文時代前期～中期、弥生時代前期～後期、古 新石器、古銅時代前期、古墳時代中期、後期、弥 生時代中期～後期、古墳時代前期、中世前期、後期
21	段上道路	4	主要部方道大坂市水原道路 跡部幹線に伴う調査	1995.9.1～1996.2.29	720	『段上道路第3次水原調査報告書』(財)東大 阪市文化財協会 2001.8	縄文時代前期～中期、弥生時代前期～後期、古 新石器、古銅時代中期、古代、中世前期、後期
22	段上道路	5	公共下水道管渠敷設工事に 伴う調査	1995.11.6～1995.12.7	106	『東大阪市下水道事業関係施設調査報告書』 1995年度』(財)東大阪市文化財協会 1997.3	弥生時代中期～後期、古墳時代中期～後 期、弥生時代中期
23	段上道路	6	公共下水道管渠敷設工事に 伴う調査	1995.12.7～1996.1.17	30	『東大阪市下水道事業関係施設調査報告書』 1995年度』(財)東大阪市文化財協会 1997.3	縄文時代中期～後期、古墳時代中期
24	段上道路	7	公共下水道管渠敷設工事に 伴う調査	1996.12			
25	段上道路 下六万寺遺跡	8 3	公共下水道管渠敷設工事に 伴う調査	1997.9.3～1997.11.21	450	『東大阪市下水道事業関係施設調査報告書』 1998年度』(財)東大阪市文化財協会 1999.3	弥生時代中期～後期、古墳時代中期
26	段上道路	9	公共下水道管渠敷設工事に 伴う調査	1998.2.16～1998.4.6	171	『東大阪市下水道事業関係施設調査報告書』 平成11年度』(財)東大阪市教育委員会 2000.3	古墳時代中期、弥生時代中期～後期、古墳時代中期～後 期、古代土器
27	段上道路	10	公共下水道管渠敷設工事に 伴う調査	1999.6.21～1999.9.1	211	『東大阪市下水道事業関係施設調査報告書』 平成11年度』(財)東大阪市教育委員会 2000.3	弥生時代中期～後期、古墳時代中期～後 期、弥生時代中期
28	段上道路	11	消火栓配設に伴う調査	2000.6.29	6.3	『東大阪市埋蔵文化財調査報告書』平成12年 度』(財)東大阪市教育委員会 2002.3	弥生時代中期～後期、弥生時代土器
29	段上道路	12	工藤町方道大坂市水原道路 跡部幹線に伴う調査	2000.11.1～2001.3.23	767	『段上道路第12次水原調査報告書』東大 阪市教育委員会 2002.3	弥生時代中期～後期、弥生時代土器、古 新石器、古銅時代中期、後期、古墳時代中期～後 期、古代土器
30	段上道路	13	主要部方道大坂市水原道路 跡部幹線に伴う調査	2001.7.30～2002.3.1	465	本書	縄文時代前期～中期、弥生時代中期～後期、 弥生時代前期～後期、弥生時代土器、古 新石器、古銅時代中期、後期、古墳時代中期～後 期、弥生時代中期
31	段上道路	14	公共下水道管渠敷設工事に 伴う調査	2002.4.8～2002.6.3	175	『東大阪市下水道事業関係施設調査報告書』 平成14年度』(財)東大阪市教育委員会 2003.3	弥生時代中期土器、後期
32	五合田遺跡	1	共同住宅建設に伴う調査	1992.9.16～1992.10.17	95		弥生時代中期土器
33	五合田遺跡	2	個人住宅建設に伴う調査	1996.3.25～1996.5.25	63		弥生時代中期土器
34	五合田遺跡	3	公共下水道管渠敷設工事に 伴う調査	1996.9.2～1996.11.9	303	『東大阪市下水道事業関係施設調査報告書』 平成14年度』(財)東大阪市教育委員会 2002.3	弥生時代中期土器
35	五合田遺跡	4	公共下水道管渠敷設工事に 伴う調査	2002.7.22～2002.10.11	276		弥生時代中期土器

番号	遺跡名	次第	事業名	発掘期間	調査面積	文献	内容
36	上六方寺遺跡	1	宅地造成に伴う跡地調査	1973.10.23～1973.11.2	24	『東大阪市埋蔵品調査報告年報 1』東大阪 市埋蔵品調査会 1975.3	中世土器、弥生時代後期土器、中世土器
37	上六方寺遺跡	2	共同住宅建設に伴う調査	1980.8.1～1980.8.24	150	『阿倍川・上六方寺遺跡・川田65号遺跡発掘報告 昭和55年度』東大阪府教育委員会 1981.3	弥生時代後期住居跡、弥生時代後期土器、古代土器
38	上六方寺遺跡	3	公共下水道管渠築造工事に伴う調査	1991.11.5～1991.11.15	50	『東大阪市下水道事業関係発掘調査報告 1991年度』(財)東大阪市文化財協会 1992.3	弥生時代後期、古墳時代前期、後期、古代土器
39	上六方寺遺跡	4	公共下水道管渠築造工事に伴う調査	1998.6.18～1998.9.30	100	『東大阪市下水道事業関係発掘調査報告 1998年度』(財)東大阪市文化財協会 1999.3	古墳時代、古代、中世土器
40	上六方寺遺跡	6	公共下水道管渠築造工事に伴う調査	2001.8.17～2001.10.12	352	『東大阪市下水道事業関係発掘調査報告 平成13年度』東大阪府教育委員会 2002.3	弥生時代中期、後期、古墳時代中期～後期、中世土器、 古代土器
41	上六方寺遺跡	7	公共下水道管渠築造工事に伴う調査	2002.7.5～2002.8.26	253	『東大阪市下水道事業関係発掘調査報告 平成14年度』東大阪府教育委員会 2003.3	弥生時代後期、古墳時代前期、中世土器
42	下六方寺遺跡	1	稲田橋認識調査	1980.1.16～1980.1.18	4	『東大阪市埋蔵文化財発掘調査報告 1979年度』東大阪府教育委員会 1980.3	古墳～古代土器
43	下六方寺遺跡	2	公共下水道管渠築造工事に伴う調査	1996.7.11			
44	北島池遺跡	1	府営牧田ボウリング場建設工事に伴う調査	1964.6.14～1964.6.21	629	『河内古代遺跡の発見』大阪府立花園高校地 理部 1970.6、平人隆彦、北島池遺跡出土土器 の発掘調査『東大阪府教育委員会年報 1979年度』東大阪府埋蔵品調査会 1980.3	埴列、弥生時代後期～古墳時代前期土器
45	北島池遺跡	2	一般府道四本堂築設工事 配水管布設工事に伴う調査	1973.4.25	10	『若江城跡・北島池遺跡調査報告』東大阪府 埋蔵品調査会 1975.9	二次埴積の弥生時代後期、中世土器
46	北島池遺跡	3	配水管布設工事に伴う調査	1978.8.19～1978.8.12	110		
47	北島池遺跡	4	配中送電線路施設工事に伴う調査	1978.8.25～1979.1.27	20		
48	北島池遺跡	5	大阪府営下水道施設工事に伴う調査	1979.4.21～1979.5.24	120	『東大阪市埋蔵品調査報告発掘調査報告集 1980年度』東大阪府埋蔵品調査会 1981.10	弥生時代後期、古墳時代前期土器
49	船山遺跡	1	個人住宅建設に伴う調査	1965.4.11～1965.4.25	46	『東大阪市埋蔵文化財発掘調査報告 1965年度』東大阪府教育委員会 1965.9	縄文時代後期、古代、中世土器
50	船山遺跡	2	個人住宅建設に伴う調査	1993.8.17～1993.8.27	50		
51	船山遺跡	3	共同住宅建設に伴う調査	1991.2.21～1991.6.8	495	『船山遺跡第3次・沖並遺跡第23次発掘調査報告 1991年度』東大阪府教育委員会 2000.3	中世土器、瓦、石製品 縄文時代後期、弥生時代後期、古墳時代中期、古代 土器、縄文時代後期、弥生時代後期、古墳時代後期、古 代(楚墓・土器を含む)、中世土器
52	船山遺跡	4	個人住宅建設に伴う調査	1999.5.6～1999.5.10	33	『東大阪市埋蔵文化財発掘調査報告 平成11年度』東大阪府教育委員会 2000.3	中世土器、弥生時代後期、古墳時代、中世土器
53	船山遺跡	5	公共下水道管渠築造工事に伴う調査	2001.3.19～2001.6.21	104	『東大阪市埋蔵文化財発掘調査報告 平成13年度』東大阪府教育委員会 2002.3	古墳時代後期、中世土器

## 2. 段上古墳群について

### 1) はじめに

最近各地で墳丘が削平されて地上からは存在が分からなくなっていた古墳が発掘調査によって発見される例が増えている。東大阪市内では山賀遺跡・巨摩庵寺遺跡・瓜生堂遺跡などの平野に位置する遺跡や、植附遺跡・船古墳群・血池遺跡など生駒山地の扇状地上に位置する遺跡において発見されている。

段上遺跡では今回の調査地の西側に接する第4次調査において2基の古墳が検出されており〔財〕東大阪市内文化財協会 2001〕、今回も古墳が検出される可能性は十分にあった。調査の結果、第4章で報告したように新たに2基の古墳を検出した。以下、古墳・遺物それぞれについてまとめておくこととする。

### 2) 古墳について<sup>10)</sup>

段上遺跡ではこれまでに4基の古墳を検出している。いずれの古墳も調査区の関係で全体を検出できていない。ただ1・3号墳はそれぞれその一辺を検出できておりそれをもとに一辺13m程度に復元することができる。2・4号墳についても周溝の幅・深さ及び出土した遺物の内容に差が見られないことからほぼ同一の規模であると考えられる。第96図はいずれの古墳も同一規模かつ正方形であると仮定した場合の復元図である。

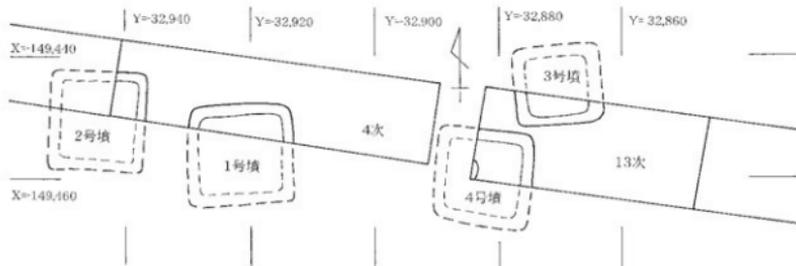
図に見られるとおり1・2号墳と3・4号墳の間に空閑地が見られるため、群として東西に分かれるものかもしれないが、調査区の関係で全体を検出できたものが一基も無く、また周囲の状況が全く不明な現状では判断できない。

主体部は4号墳において一基検出しているのみであるが、第96図上では北西に偏った位置になっている。これは第4次調査と第13次調査での遺構の検出状況を検討した結果で、第4次調査地内で西側周溝に相当する遺構が検出されていないためである。周溝は両調査区の間が存在する6mの未調査区間に存在すると考えられる。また一般的な例から考えると4号墳の主体部は墳丘の中心部にも存在したと思われ、複数埋葬がなされたのであろう。

### 3) 遺物について

#### (1) 須恵器について

今回検出した古墳では周溝内から直接出土したものは埴輪および器台(613)だけである。しかし、



第96図 段上遺跡検出古墳(1~4号墳)位置関係図

近接する場所や周溝を切る古代の溝(溝83)などから初期段階の須恵器が出土しており、その出土位置から古墳と関連すると考えられる。第97図はそれらを集成したものである。この中には隣接する第14次調査で出土した遺物もあるが、出土地点の位置的関係及び613と同一個体と<sup>(1)</sup>考えられる破片の出土や遺物の時期などから同一遺構のものとして判断できるため併せて掲載している。

壺 1は須恵器の壺で、口径16.3cm、器高23.0cm、外面調整タタキ、内面調整ナデ。頸部に波状文を施す。焼成はやや不良気味で灰白色を呈する。

器台 613は底径29.4cm、残存器高19.1cm。脚台部分のみの残存である。波状文と三角形と長方形の透かし孔が施される。

有蓋脚付壺<sup>(2)</sup> 680は溝83の出土で3号墳周溝を切っている地点からの出土である。口径6.8cm、残存器高8.9cm。波状文及び刺突文が施され、把手が一つ付けられている。脚台には円形の透かし孔が施される。以上3点の須恵器はいずれも中村編年I型式1段階のものである。

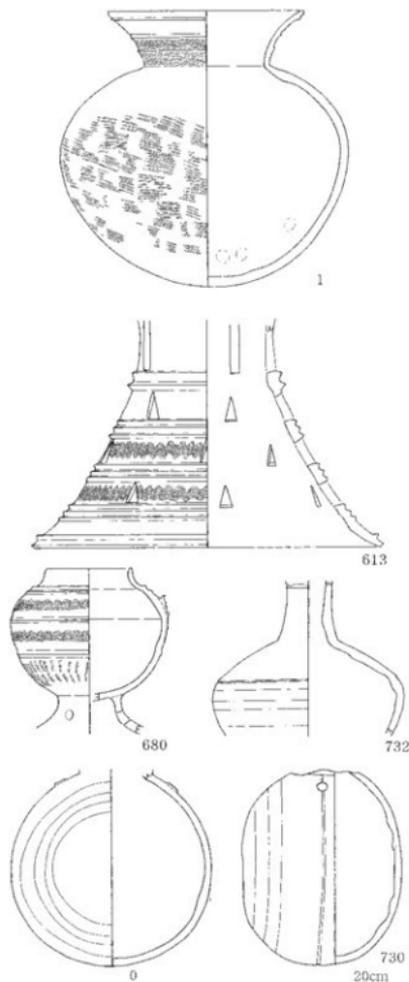
一方、須恵器壺(732)および提瓶(730)は3層中から並んで出土したものの(図版4)で、遺構の輪郭を確認することはできなかったが出土した位置(第13図)から古墳と関わりをもつ可能性を考えるものである。また土器を取除いた後の第4面調査時に直下でビット139が検出されている。このビットからは遺物が出土していないが、2点の土器が伴っていた可能性もある。

壺(732)は残存器高13.1cm。体部のみであり口縁部及び底部が欠損する。頸部と体部に沈線が一条づつ施される。提瓶(730)は残存器高16.4cm、丸い体部を持ち頸部が欠けている。

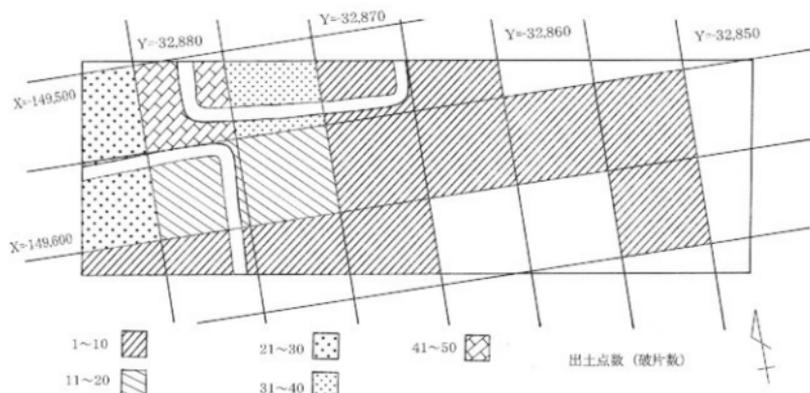
共にII型式6段階であり先述したI型式のものとは時期が大きくへだたる。しかし周囲にこの時期の遺構は確認されていないことや、出土位置から、少なくともこの頃までは古墳が墓として認識されていたことを示すものであるのかもしれない。

## (2) 埴輪について

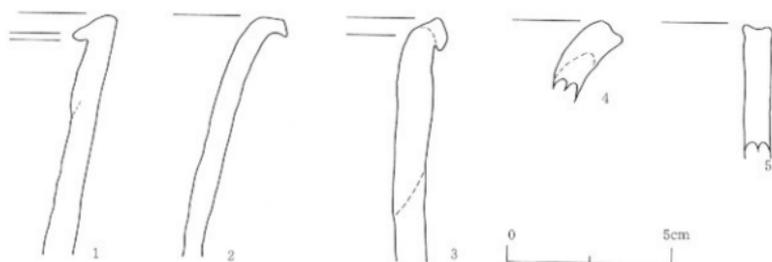
第4章において、今回出土した埴輪については述べた。第98図は調査区内での埴輪の分布状況である。地区の特定できるもの(主に包含層出土のもの)のみを表示し、第1・2面の溝など出土した遺構が複数の地区にまたがっているものは図では除外している。参考のためそれらの点数も以下に示し



第97図 古墳関係須恵器集成図



第98図 埴輪分布状況図



第99図 円筒埴輪口縁分類図

ておく。8 b・9 b・10 b (主に溝57・61)…21点、5 a・6 a・7 a (3号埴周溝・溝83)…78点、以下は主に第1面の罫溝内出土のもので、6 a・6 b…11点、5 a・5 b…9点、4 a・4 b…2点となる。これらの数値を加算すると3号埴周辺の点数が更に増加する。古埴の位置も示しておいたが古埴とその周辺に多く、古埴から離れるに従って急激に減少していくことが明らかである。

調査区東側でも若干出土しているが、これらの地区は第2面で検出された東西方向の溝(溝57・61・83・89および溝56・81)が存在している地区である。それ以外の地区からは出土していない。このことはこれらの溝(特に溝57・61・83・89)の掘削によって周溝が攪乱されたことで、周囲に埴輪が散乱したことを示すと思われる。中世に耕作地化した結果、更に広範囲に分布することになったのであろう。

第99図は出土した円筒埴輪の口縁部形態を集めたものであるが、第14次調査で出土したものも含めている。形態は1、内側に肥厚するもの、2、外側に大きく折り曲げられるもの、3、外反して貼り付けられるもの、4、やや外反するもの、5、真直ぐのままのもの、の5つに分けられる。口縁部が残存しているものは13点あり、数量としては少ないがそれぞれの比率もだしてみた(第6表)。1と2が高いのは完形のもの(口縁を確認できるもの)がいずれもこのどちらかの形態であることによるものである。

第6表 埴輪口縁形態の割合

口縁部形態	1	2	3	4	5
点数	4	4	2	2	1
割合(%)	30.7	30.7	15.4	15.4	7.7

また1と5に1点ずつ第14次調査出土分を含むので、5は第13次調査においては確認されていない形態である。しかし5の出土地点は先ほどの須恵器壺(第97図1)と同一地点であるので、3号墳に伴うものと考えられる。3号墳上ではさまざまな形態の口縁部をもつ埴輪が共に用いられていたことを示すのであろうか。

#### 4) 小結

以上簡単に段上遺跡において検出された古墳および遺物について述べてきた。これまでのところ検出された古墳は4基であり、規模や出土遺物などに差は見出しにくいものである。また遺構としては検出されていないが、第3次調査では4世紀末～5世紀初め頃の埴輪がまとめて出土している。2号墳も3次調査地では続きが確認されていないなど西側に行くほど後世の削平が著しいようであり、検出された古墳よりも古い時期の古墳が存在していた可能性は考えられる。この時期のものとして他には北東に約250mの位置に4世紀末とされるえの木塚古墳(縄手遺跡第3次調査において検出)が存在している。この古墳は周溝の一部が確認されているに過ぎないが、直径30mの円墳に復元されている。この古墳からは朱塗りのひれ付円筒埴輪や子持ち勾玉などが出土している。

ほぼ同時期の長原古墳群や住吉宮町古墳群などでは、まず塚ノ本古墳や坊ヶ塚古墳などの盟主墳とされるような規模の大きな古墳が作られ、その後引き続いて周囲に小規模な古墳が多く築造されていくことが分かっている。段上遺跡の場合はえの木塚古墳及び段上遺跡第3次調査埴輪群と1～4号墳の間に若干の空白時期がある。しかし今回の調査原因が道路建設であるため遺跡内を帯状に調査したに過ぎず、周囲の未調査地点にその空白を埋める古墳が存在する可能性が高い。今後周辺の調査が進むことによって更に多数の古墳が検出され、古墳群の実態が解明されてくるものと思われる。

#### 注

- (1) 1・2号墳は報告書(財)東大阪市文化財協会 2001)ではそれぞれ1号墳丘墓、2号墳丘墓とされている。また3・4号墳の両溝からは埴輪以外はほとんど出土していないが、1・2号墳では土師器や須恵器も出土しているようである。
- (2) 「大阪府教育委員会・(財)大阪府埋蔵文化財協会 1995)に類似した器形のものが集成されている(p.273)。それによると陶質土器にも見られる器種である。また大庭寺遺跡出土のものは小型品であるが、通常の大きさの蓋は出土している。

#### 参考文献

- 大阪府教育委員会・(財)大阪府埋蔵文化財協会 1995.3 『南邑・大庭寺遺跡IV』  
 大阪府教育委員会 1998.3 『みかん山古墳群』  
 神戸市教育委員会 2001.3 『住吉宮町遺跡 第24次・第32次発掘調査報告書』  
 東大阪市教育委員会 2001.3 『東大阪市の古墳(改訂版)』  
 大阪府文化財調査研究センター 2001 『第43回大阪府下埋蔵文化財研究会資料』  
 中村 浩 2001 『和泉陶器出土須恵器の型式編年』 文春書房出版  
 (財)東大阪市文化財協会 2001.8 『段上遺跡第3・4次発掘調査報告書』

### 3. 弥生時代後期の溝(溝100)について

#### 1) はじめに

段上遺跡第12・13次調査で検出した弥生時代後期の溝100(以下溝100)からは大量の弥生土器が出土している。第12次調査での検出部分及び出土遺物については既刊の報告書(東大阪市教育委員会 2001)で報告されているため逐一繰り返すことをしないが、道路予定地内での調査は今回で一区切りとなることから両方の調査を通しての状況について記しておく。

#### 2) 溝100の状況

溝は長さ約60mに渡って検出した。地点によって若干の差はあるがおよそ幅1～2m、深さ30cmである。全体の形状は第100図に見られるとおりであり、特に東側では出入りの激しい箇所もあるが弧を描いていることがわかる。検出部分を元に全体の形が円であると仮定すると第101図ようになる。この円は直径80mを測り、調査ではおよそ4分の1を検出していることになる。土器は溝の全域からコンテナで約200箱が出土しており、特に第12次調査出土分には完形のものが目立った。

溝の性格については溝の内側が調査範囲外であるためその状況は不明であり、断言することはできないが集落内部の区画溝と考えるのが妥当と思われる。その理由は性格のわかる溝としては環濠、排水溝、周溝墓などがあるが、今回検出した溝は以下に記すようにそう考えるには問題があると思われるからである。

環濠も一種の区画溝ではあるが集落の内と外を区画する溝とするには、溝の規模及び周辺の遺構の分布状況から考えにくいと思われる。溝の規模は幅1～2m、深さ30cmと多少の削平は考慮するとしても狭くて浅い。また遺構の分布状況は第13次調査A区において全てが同時期のものとは限らないがピットが集中している場所が溝のすぐ外側に存在する。また調査区西端でもピットが存在している。この2地点に集中することから掘立柱建物が存在したことも考えられる。一方第12次調査A区では溝の内側にピットが集中している場所があるが、これらは古墳時代のものであり掘立柱建物が復原できるようである。

排水溝については平面形態を円形にする必要が無いと思われることと溝内に水が流れていた痕跡が見られなかったことから考えにくいと思われる。

周溝墓については復原規模と出土遺物の様相から考えにくいと思われる。溝の推定復原規模は直径80mであり、これまでに各地で検出されている周溝墓と比べても巨大である。また溝内の出土遺物は第7表に示すとおり壺の比率が高く、器台などの比率が低いことから日常生活に使用していたものを廃棄したものと思われ、供献土器のような祭祀的な様子は認められない。

以上の理由から溝100は集落内の区画溝であると思われる。しかしその内部をどう利用したのかは不明であるが、円形で区画するという点に何らかの意味があるのであろう。

#### 3) 出土遺物について

溝100出土土器は弥生時代後期前葉の一括性の高い遺物であると考えられる。特に完形のものが多いことが特徴としてあげられる。もちろん破片のものも多いが、第12次調査では本来完形であったと考えられる土器が上面を走る古代の溝によって削平されていた状況が確認されている。削平を考える根拠としては土器がほぼ同一レベルで欠けており、そのレベル以下は完全に残っているものが多かったこと、またレベルより上からは古代の遺物と弥生時代後期の土器が出土していることがあげられており、当初はほとんどの土器が完形であったことも考えられる。

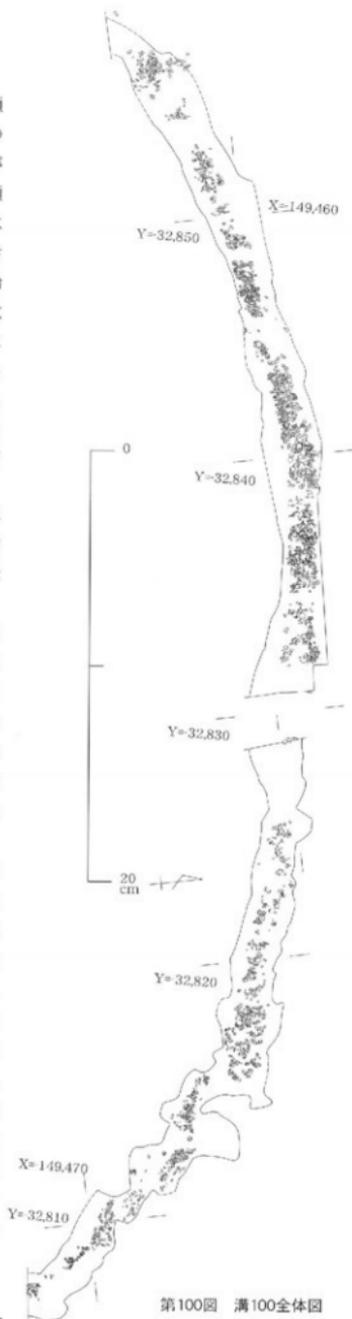
溝内から出土した土器は甕(長頸壺、広口壺、短頸壺、無頸壺)、甕、高杯、鉢、器台である。その器種別の割合は第7表の通りである。<sup>(2)</sup>器種別の割合では甕が非常に高く、壺と鉢はほぼ同率で、高杯、器台の順に減っていく。甕が多く、器台や高杯が少ないのは日常生活での消費量をそのまま反映していると考えられる。第8表は各器種における生駒西麓産の胎土のものとしてでないもの(非生駒西麓産)の個数を示している。<sup>(3)</sup>非生駒西麓産の胎土のものは非常にその比率が低い、一方で各器種を通じて存在しており、特定の器種に限定されるということはない。また口縁部が受口状になるものは近江でよく見られる形態であるが、今回出土したものの胎土は全て生駒西麓産である。

生駒西麓に位置する弥生時代中期の遺跡では平野部の遺跡と比べると低い割合ではあるが、生駒西麓産以外の胎土をもつものが含まれていることが分かっている。

西ノ辻遺跡では第42次調査及び第43次調査での遺構内出土土物を用いて統計が出されている。その結果では85%~91%程度が生駒西麓産の胎土をもつものであり、10%程度が非生駒西麓産のものである(東大阪市教育委員会 2001)。同様に山畑遺跡第15次調査においては90%が生駒西麓産、10%が非生駒西麓産という結果がでている【(財)東大阪市文化財協会 1999】。

弥生時代後期になると生駒西麓産のものがほとんどを占めるようになり、非生駒西麓産のものはほとんど見られなくなっている。今回の段上遺跡においては溝100出土土器のほぼ全てが生駒西麓産であり、非生駒西麓産は1%に満たない割合である。一方、段上遺跡とほぼ同時期の岩滝山遺跡第5次調査では94.4%が生駒西麓産、5.6%が非生駒西麓産という割合である【(財)東大阪市文化財協会 1999】。

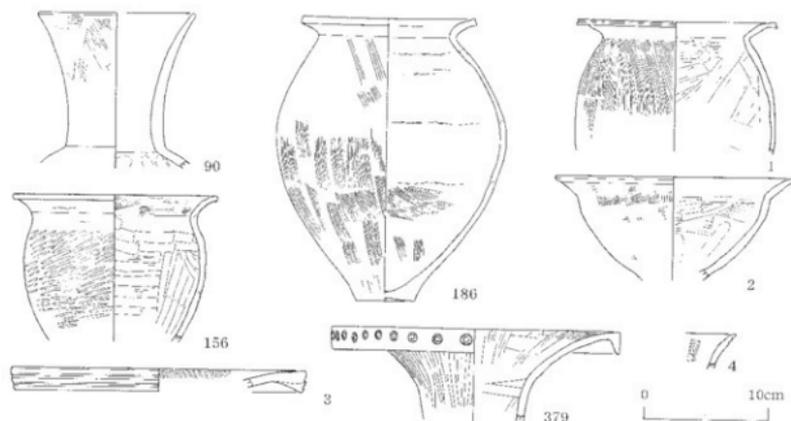
後期末~古墳時代前期にかけては生駒西麓の遺跡では遺構・遺物がほとんど確認できていないため不明な点が多いが、河内湖沿岸に出現した大集落群では西日本を中心に各地の土器が搬入されるようになる。生駒西麓の地域は弥生時代後期には特に在地的性が強い状況であったようである。



第100図 溝100全体図



第101図 滿100復元想定図



第102図 非生駒生麓産胎土の土器集成図

4) 溝100出土の非生駒生麓産の胎土をもつ土器について

第102図に非生駒生麓の胎土をもつ土器を集成した。ただし第13次調査出土分はいずれも小片のため図化することはできなかった。全て第12次調査出土分である。一部は既に報告済みであるが(90・156・186・379)、新たに図化したもの(1~4)があるため再度掲載している。溝100出土遺物の内、図化可能な非生駒生麓産の胎土をもつものはこれが全てである。器種は甕、鉢、杯、高杯、器台である。

長頸壺(90) 90は口径12.3cm、残存器高12.6cm、頸部が外方へ広がるもので、口縁端部は丸くおさめる。外面調整工具によるナデ、内面調整ナデ。

甕(156・186・1) 156は口径16.3cm、残存器高12.0cm、口縁端部は丸くおさめる。外面調整タタキ、内面調整口縁部ヨコハケ、体部横方向のイタナデ。186は口径13.8cm、器高23.3cm、口縁端部は面をなす。内外面調整タテハケ。1は口径16.0cm、残存器高11.8cm、口縁端部は下方に突き出して面を作り、凹線を一条施す。内面の口縁部と体部の境が明瞭である。外面調整タテハケ、内面調整ケズリ。

鉢(2) 2は口径19.0cm、残存器高8.5cm、やや内湾気味の体部から外方へ広がる口縁部をもつ。体部下半は二次焼成をうけているのか亦変しており、器表面は剥離している。外面調整タテハケ、内面調整横方向のイタナデ。

器台(379・3) 379は口径23.1cm、残存器高7.4cm、口縁部を下方に拡張し、端面に円形竹管文を施す。外面調整ミガキ、内面調整ナデ後ミガキ。3は口径23.6cm、残存器高1.8cm、口縁端部を下方に拡張し、端面に凹線を2条施す。胎土は砂粒が少なく非常に精良である。内外面調整タテミガキ。

高杯(4) 4は残存器高2.9cm。外面口縁部直下に凹線を2条施す。外面調整ヨコナデ、内面調整タテミガキ。破片のため全体の形状は明らかではないが、杯部が有稜となる形態のものである。

5) 小結

溝100は全体のおよそ4分の1の検出であるが、平面形態が弧を描いていることがわかった。

第7表 溝100出土器器種組成割合

口縁の形状	生駒西麓産	非生駒西麓産	合計	比率(%)
通常	160	0	160	33
凹縁なし 凹縁あり	14	0	14	3
拡張	59	0	59	13
凹縁なし 凹縁あり	23	0	23	5
変口	9	0	9	2
直口	159	2	161	36
長頸 短頸	28	1	29	6
無頸	9	0	9	2
総計	451	3	454	100

## 壺

口縁の形状	生駒西麓産	非生駒西麓産	合計	比率(%)
通常	1820	6	1826	90
変口	197	0	197	10
総計	2017	6	2023	100

## 高杯

口縁の形状	生駒西麓産	非生駒西麓産	合計	比率(%)
輪	67	0	67	22
有縁	242	1	243	78
総計	309	1	310	100

## 鉢

口縁の形状	生駒西麓産	非生駒西麓産	合計	比率(%)
直口	213	0	213	52
外反	191	1	192	47
変口	6	0	6	1
総計	410	1	411	100

## 器台

口縁の形状	生駒西麓産	非生駒西麓産	合計	比率(%)
凹縁なし	59	1	60	45
凹縁あり	71	1	72	55
総計	130	2	132	100

第8表 溝100出土器器種別割合

器種	生駒西麓産	非生駒西麓産	合計	比率(%)
壺	451	3	454	13.6
高杯	2917	6	2923	66.6
鉢	309	1	310	9.3
器台	410	1	411	12.3
その他	130	2	132	4.0
その他	7	0	7	0.2
合計	3324	13	3337	100
割合	99.7%	0.3%		

方後円墳とされる心合寺古墳の後円部復元径が92.2mであることなどからも「直径80m」の墓の巨大さがわかる。

(2) 口縁部の点数を数えたものである。

(3) ただし生駒西麓産の胎土のものには3%程度の割合で角閃石の量が少ないものを含んでいる。

(4) ほとんどのもので他地域産との表現がなされているが、河内の土器にも生駒西麓産と低地産(平野部の遺跡・瓜生堂遺跡など)とされるものがあるので、本書では胎土中に角閃石を含まないものに対して「非生駒西麓産」という表現を使っている。「生駒西麓地域」と「河内平野部を含む他地域」という意味に捉えれば正しいであろうが、通常旧国単位で地域を捉えていることが多いと思われるのでこのような表現にしている。

(5) 報告済みの番号は第12次調査報告書のものと同じである。なお第12次調査報告書では155が他地域産となっているが、156が他地域産(本稿でいうところの非生駒西麓産の胎土をもつ土器)である。記して訂正しておく。

## 参考文献

- (財) 東大阪市文化財協会 1999.3 『山畑遺跡第15次発掘調査概要』  
 (財) 東大阪市文化財協会 1999.3 『岩間山遺跡第5次発掘調査概要』  
 東大阪市教育委員会 2001.9 『西ノ辻遺跡第42次発掘調査報告』  
 東大阪市教育委員会 2002.3 『段上遺跡第12次発掘調査概要報告』

円形に復元した場合、直径80mを測るものである。

溝内部から出土した多量の土器は後期前葉の一括資料として捉えることができるものである。完形のものも多く、生駒西麓産のものがほとんどを占めていることが特徴としてあげられる。器種は壺の量が格段に多く、日常生活での消費量の比率を示すものであろう。検出状況からみると土器を一度に捨てる必要があるような事があったのかもしれないし、さらに捨てる場所にこの溝が選ばれたことにも何らかの理由が存在するのかもしれない。

周辺では弥生時代後期の遺構は、縄土・段上・上六万寺の各遺跡において検出されている。3遺跡に偏っているのは調査の規模及び件数も影響していると思われるが、それぞれを別的小規模な集落と捉えるよりは一つの集落と捉える方が自然であろう。これまでに検出されている主要な遺構は溝、土器棺墓、竪穴住居跡などである。確認された遺構は散発的な状況であり、特に竪穴住居跡はこれまでのところ1棟が検出されたのみである。しかし出土した土器の量からしても多数の住居が存在したことは間違いないし、さらに墓も存在したであろう。それらを検出することで集落の状況が明らかになり、今回検出した溝100の性格も明らかになるものと思われる。

## 注

(1) これまで検出されているものは円形・方形を問わず直径10～15m程度のものが多い。時期は下がるが第3回で検出した古墳(3・4号墳)は一辺10m程度であること、また4世紀末とされるえのき塚古墳が直径30m程度とされていること、北・中河内最大の前

#### 4. 縄文時代貯蔵穴について

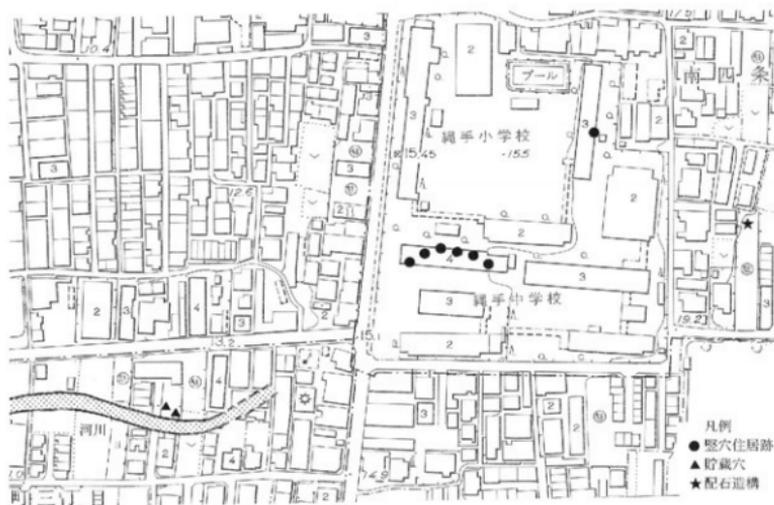
##### 1) はじめに

今回の段上遺跡第13次調査において第12面で縄文時代後期の河川及び貯蔵穴を検出した。周辺からは土坑が5基検出されているだけであり、また河川沿いであることから生活の場とは考えにくい。貯蔵穴から東方に約200m離れた位置で同時期の竪穴住居跡が検出されていることから(縄手遺跡第1・2・5次)、この集落と関わるものと思われる。この時期の様相を簡単にまとめておき、検出した貯蔵穴の位置付けを考えてみたい。

##### 2) 縄手遺跡におけるこれまでの成果<sup>(1)</sup>

縄手遺跡は縄文時代から中世にいたる遺跡である。特に1969年に行われた第1次調査で竪穴住居跡が検出されたことにより、近畿地方では検出例の少ない縄文時代の集落であることがわかり著名となった。周辺各遺跡の調査で縄文時代の遺構・遺物が出土しているのは主として縄手遺跡と段上遺跡である。

現在確認されている最も古い遺物は縄文時代中期の船元式である。ただし遺物が出土しているのみで遺構は確認されていない。後期中津式から北白川上層式2期にかけての時期が集落の最盛期であり、竪穴住居跡・土壇墓・石組遺構・配石遺構などの遺構が検出されている。その後の北白川上層式3期から晩期滋賀里Ⅲa式期までの間は遺物が確認されておらず集落は営まれていないようである。晩期篠原式古段階に再び遺物が出土するようになるが遺構は確認されておらず、集落があったとしても小規模な集落であったようである。<sup>(2)</sup>



第103図 縄文時代検出遺構位置図

第9表 貯蔵穴1種子類出土層位表

層位	ドングリ (コナラ属)	トチの実	オニグルミ	その他
1層	29	3	1	0
2層	1	1	0	0
3層	0	0	0	13
4・5層	55	7	0	13
6・7層	3	2	0	0
8層	248	0	0	6
底面	1242	0	0	0
計	1578	13	1	32

## 3) 貯蔵穴について

第12面の調査区西端で縄文時代後期の貯蔵穴を2基検出した。規模などについては第4章(p.31～33)において述べているが、特に貯蔵穴1は残存状況が良好なものである。

大阪府下の縄文時代の貯蔵穴は本例が5遺跡目で8・9例目(第10表)である。また府下での検出例はいずれも西日本で多く確認されている低湿地性とされているタイプのものである。低湿地性の貯蔵穴は従来その機能としてアク抜き水浸保存、防虫など様々な目的が考えられてきたようであるが、アク抜きについては、少なくとも殻をつけたままで水に浸しておくだけではアクが抜けないことが確認されており、ドングリを集めてからアク抜き処理を開始するまでの短期間の貯蔵を目的とするものとされている。

貯蔵穴1内部からは多数の堅果類が出土している。その種類については第5章において同定されているが、それを基に出土点致を含めて作成したものが第9表である。そのほとんどは土坑底面に接する状態で検出されたコナラ属ドングリであるが、若干のアカガシ亜属の幼果、トチの実、クルミ、ツツラフジ、ユズリハ?、ノブドウ、クスノキ科の種子なども検出されている。ツツラフジ以下の種子は埋土を洗浄した結果検出したもので掘削段階では認識していなかったものである。埋土の洗浄については半分しか行わなかったため全体量は不明であるが、コナラ属ドングリ以外のものはいずれも微量である。トチの実、クルミなどについては食用の可能性も存在するがそれ以外のものは実も小さく貯蔵するような性格のものではないので、自然の状態で貯蔵穴内に落ち込んだものと考えておきたい。その

第10表 大阪府下検出貯蔵穴一覧

遺跡名	所在地	時期	内容物	基数	遺跡名	規模	文献	備考
浪良川遺跡	奈良川市	中期末	クリ ドングリ	4	貯蔵穴1	直径2.1m 深さ1.3m	関西縄文時代の生業関係 遺構 関西縄文文化研究 会 2001.10 第9回近畿地方縄文文化 財研究会資料(出)大阪 文化財センター1991.9	セタンジミ・マガ キの堆積あり
					貯蔵穴2	直径1.9m 深さ0.7m		
					貯蔵穴3	直径2.3m 深さ0.6m		
					貯蔵穴4	直径3.4m 短径2.5m 深さ0.4m		
更良岡山遺跡	四条橋市	中期	ドングリ	1	貯蔵穴	直径0.7m 深さ0.3m	更良岡山遺跡発掘調査概 要報告書 大阪府教育委 員会 1992.3	
芥川遺跡	高槻市	後期	イチイガシ アラカシ	1	土庫101	直径1.1m 深さ0.35m	芥川遺跡発掘調査報告書 高槻市教育委員会 1995.3	
長原遺跡	大阪市	晩期	ナラガシワ	1	ピット101	直径0.4m 深さ0.52m	長原遺跡発掘調査報告書Ⅲ (財)大阪市文化財協会 1983.3	
段上遺跡	東大阪市	後期	ドングリ (コナラ属)	2	貯蔵穴1	直径0.77m 短径0.81m 深さ0.55m	本書	トチ・オニグルミ 他の種子も若干量 出土
			ドングリ (コナラ属)		貯蔵穴2	直径0.76m 短径0.69m 深さ0.18m		

場合周辺にこれらの植物が生えていたことが考えられる。コナラ属ドングリについても検出された量は、貯蔵穴の規模から考えるとかなり少ないので、利用せずに取り残されたものを検出したと考える方が良いように思われる。<sup>10)</sup>

#### 4) 小結

今回の調査でこれまで大阪府下では確認例の少ない縄文時代の貯蔵穴を確認できた。また縄文時代の段上遺跡は縄手遺跡集落の周辺部にあたると考えられる。縄手遺跡は縄文時代の遺構は縄手小学校・中学校を中心に住居跡などが検出されてきたが、更に広い範囲に今回検出した貯蔵穴のような生業関係の遺構が分布しているのであろう。特に今回のように河川沿いに貯蔵穴や水さらし場などが存在している可能性は高い。

ただ今回の貯蔵穴は現地地表3m付近で検出したものであり、また周辺は既に住宅地化していることから大規模な開発が行われない限り新たな検出は難しいであろう。その意味でも今回の調査で貯蔵穴の存在が確認できたことは縄文時代の縄手遺跡とその周辺の様相を知る上で大きな成果と考える。

#### 注

- (1) 縄手遺跡の調査に関する文献は第5表 (p.139~141) に載せている。その他『縄手遺跡』縄手遺跡調査会 1971.11、『図録・縄文時代の東大阪』東大阪市遺跡保護委員会 1976.8、『東大阪市文化財資料目録 第1集』『縄文土器—縄手遺跡1—』東大阪市立郷土博物館1991.3などがある。
- (2) 貯蔵穴住居跡はこれまでに重複しているものも含めると12棟が確認されている。住居の残存状況が悪く、遺物がほとんど出していないため時期決定が難しく厳密には中期末～後期中葉にかけての時期ということになるようである。(関西縄文文化研究会 1999)。
- (3) この集落の変遷は縄手遺跡に限られるものではなく生駒西麓の縄手遺跡以南の集落では同様の様相を示しているようである(大野1997)。
- (4) (関西縄文文化研究会 2001)、(宮路 2002)による
- (5) (安村2001) はどんぐりクッキー作りの体験イベントを実施するまでの記録であり、実際に経験したことが記されている。ただし水漬けには虫食いや腐ったドングリが水に浮くことで取り除けること、虫食いが他のドングリに広がることを防止できること、ドングリが腐ったり、芽が出たりするのを抑えること、ドングリの殻が割れるものが少なからずあることなどの効果があることが記されている。また(宮路2002)では柱内に実験を行いその結果低酸性の貯蔵穴にアク板きの機能がないことを確認したと記されている。
- (6) (関西縄文文化研究会 2001)において奈良県本郷大田下遺跡の事例で「取り残し」との解釈がなされている(岡林孝作「奈良県本郷大田下遺跡の発掘調査」)。今回の例では蓋と考えられる層があることからドングリの上にその他の種類のものを入っていたとも考えられるし、また更にドングリを入れていたとも考えることも可能である。

#### 参考文献

- 大野 薫 1997.10 「生駒山西麓域の縄紋集落」『河内古文化研究論集』柏原市古文化研究会編 和泉書院
- 水ノ江 和同 1999.3 「西日本の縄紋時代貯蔵穴—低地型貯蔵穴を中心に—」『同志社大学考古学シリーズⅦ 考古学に学ぶ』同志社大学考古学シリーズⅦ行会
- 安村俊史 2001.3 「どんぐりクッキーを作ってみよう!」『柏原市立歴史資料館館報 第12号』柏原市立歴史資料館
- 関西縄文文化研究会 1999.5 『関西の縄文住居』
- 関西縄文文化研究会 2001.10 『関西縄文時代の生業関係遺構—獲得・加工・貯蔵・廃棄の様相—』
- 宮路淳子 2002.3 「縄紋時代の貯蔵穴—社会組織との関わりから—」『古代文化 第54巻第3号』財団法人 古代学協会

## 第7章 まとめ

今回の調査では縄文時代後期から中世に至る遺構、遺物が検出された。調査で得られた成果を時代順に列記してまとめたい。

縄文時代後期(第10～12面) 後期前葉北白川上層式1～2期の遺物が出土している。遺構としては河川及び貯蔵穴が検出された。河川は第11・12面のものは東から西へ流れるもので、第10面のものは南北方向に流れるものである。

第12面において検出した貯蔵穴は大坂府下5遺跡目、8・9例目となるものであり、貯蔵穴1の内部からは多数の堅果類(コナラ属ドングリ・トチなど)が出土した。東方に接する縄手遺跡において検出されている同時期の集落と関連するものと考えられ、調査地は集落の周辺部として位置づけることができるものと思われる。

縄文時代晚期(第8・9面) 第8面では後期の第11・12面と同様に東から西へ流れる河川を検出した。第9面では遺構は検出されなかったが篠原式古段階の土器が集中して出土した。遺物は、篠原式～長原式にかけてのものが出土しているが第9面出土の篠原式以外は極少量である。

弥生時代中期(第5面) 竪穴住居跡を1棟検出した。第3・4次調査でも各1棟検出されており、今回検出されたもので3棟目である。他にも可能性のある溝も検出しているため、周辺には更に存在すると思われる。従来周辺では中期の遺構が希薄で集落の空白域とされてきたが住居を検出したことにより集落の存存が確認できた。

弥生時代後期(第4面) 第12次調査地から続く土器を大量に含む溝(溝100)を検出した。また平面形が弧を描いていることがはっきりし、円形とすると直径80mに復原できる。区画溝と考えられるが、溝の内側は調査範囲外になるため内側の状況は不明である。出土した土器のほとんどを牛駒西産の粘土を持つものが占め、非常に在地性の強い集落であったようである。また調査区西端では方形周溝墓の可能性のある溝(溝105)を検出した。

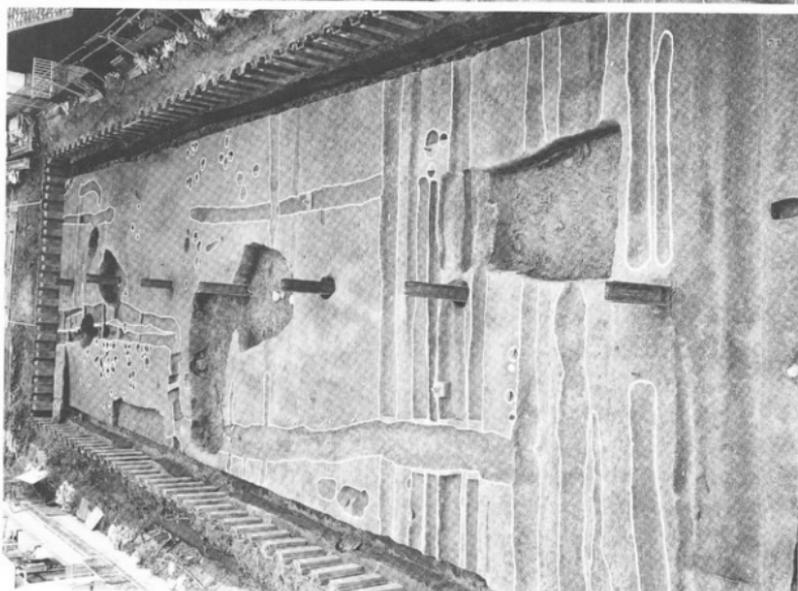
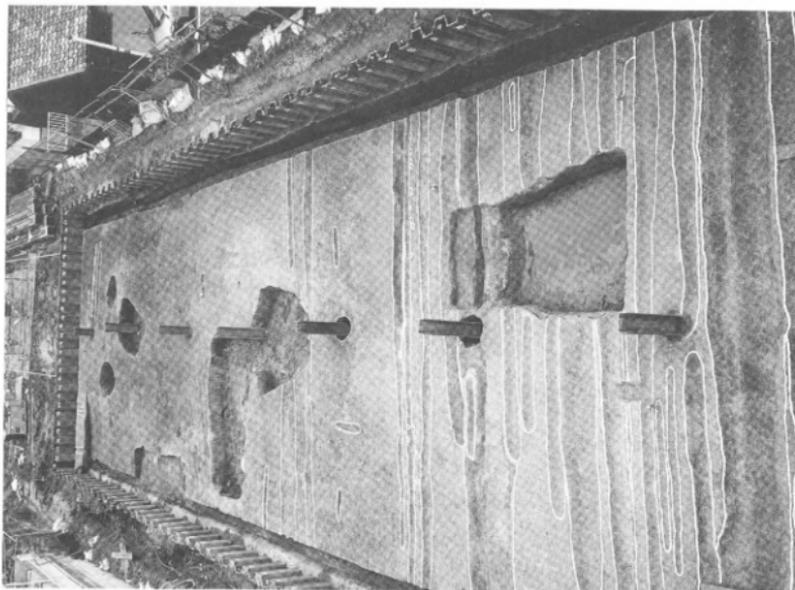
古墳時代前期(第4面) 溝1条(溝102)を検出し遺物が若干出土した。この時期については周辺の調査でも遺物が散在している程度で、遺構はほとんど確認されていない。

古墳時代中期(第3面) 古墳を2基検出した。第4次調査で2基検出されているため段上遺跡においては計4基が確認されたことになる。いずれの古墳も全体を検出できていないが一辺10m程度の方墳と推定される。調査区周辺には更に多数の古墳が存在するものと思われる。

古代(第2面) 溝や土坑を検出した。溝は古墳の周溝をつなぐかのように掘られており、古い遺構を利用したものと思われるが、遺構の性格は不明である。遺物の出土量からみて周辺には居住城が存在するものと思われる。

中世(第1面) 南北方向の多数の溝を検出した。耕作に伴う鵜溝と考えられ、以降は耕地化したものと考えられる。溝の幅や切り合い関係などから4～5時期に分けることができる。遺物の年代から12世紀末～13世紀初め頃のものと思われる。

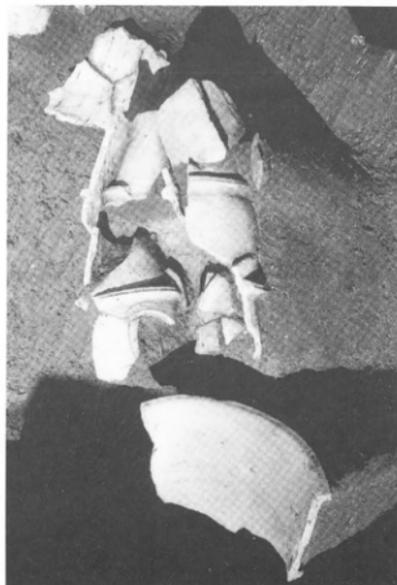
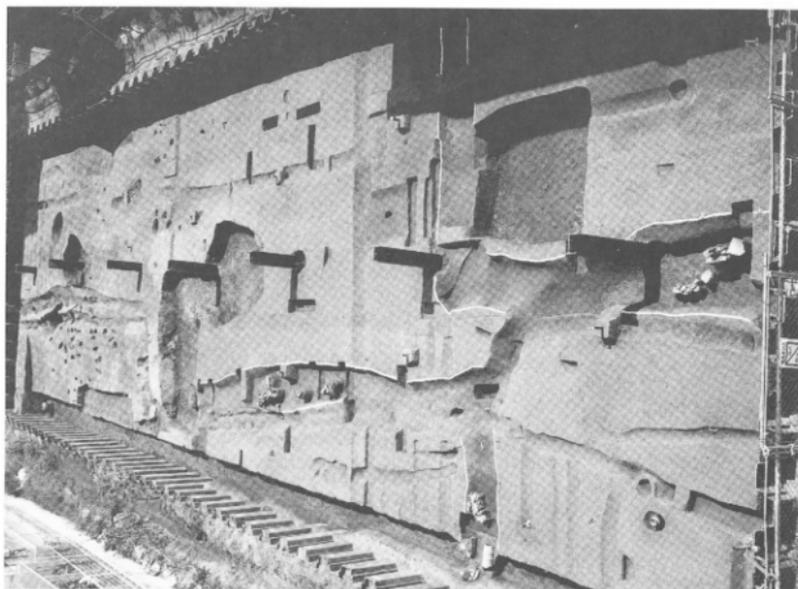
## 图 版



1. 第1面全景 (西から) 2. 第2面全景 (西から)



1. 第2面土坑1遺物出土状況（東から） 2. 第2面溝83内遺物出土状況（北から）  
3. 第2面溝83完備状況（西から）



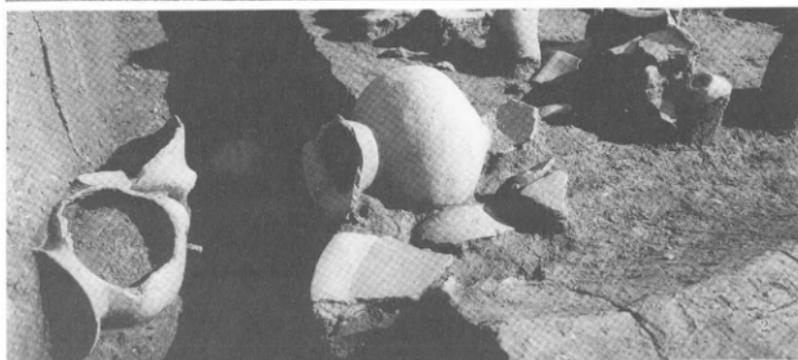
1. 第3面全景(西から) 2. 第3面4号墳埴輪出土状況(南から) 3. 第3面4号墳周溝断面(西から)



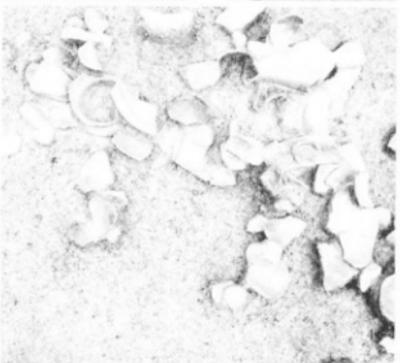
1. 第3面4号墳主体部（東から） 2. 第3面3号墳出土状況（南から） 3. 第3面3号墳出土状況（北から）  
4. 第3面3号墳出土状況（西から） 5. 第3面3号墳出土状況（西から）  
6. 第3面3号墳出土状況（南から） 7. 第3面須恵器出土状況（南から）



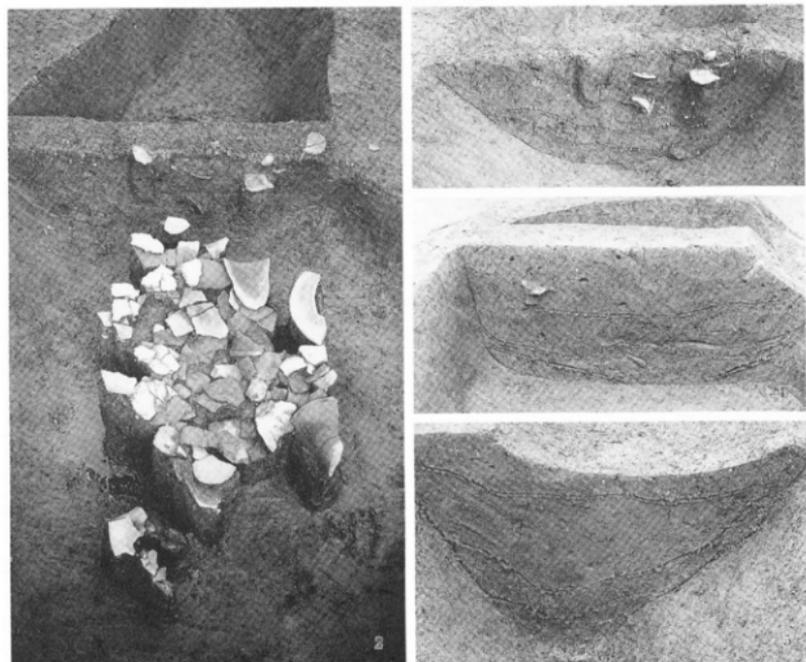
1. 第4面全景（真上から） 2. 第4面ビット22遺物出土状況（東から） 3. 第4面溝100断面（東から）



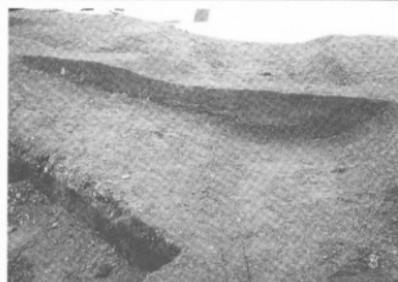
1. 第4面溝100上層遺物出土状況（南から） 2. 第4面溝100中層遺物出土状況（西から）  
3. 第4面溝100中層遺物出土状況（西から）



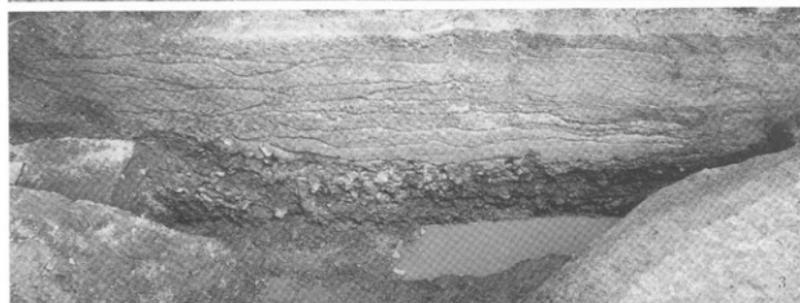
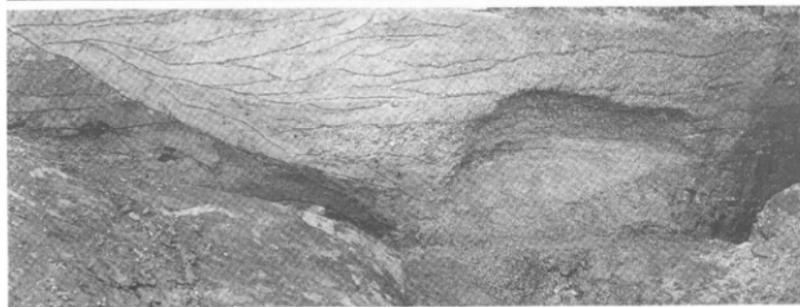
1. 第4面溝100上層遺物出土状況 (南から)
2. 第4面溝100上層遺物出土状況 (南から)
3. 第4面溝100上層遺物出土状況 (東から)
4. 第4面溝100中層遺物出土状況 (南から)
5. 第4面溝100中層遺物出土状況 (東から)



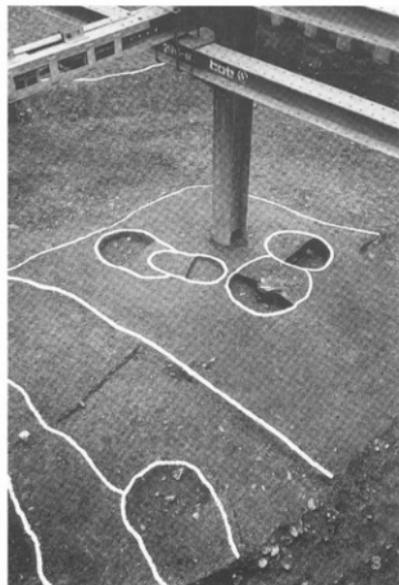
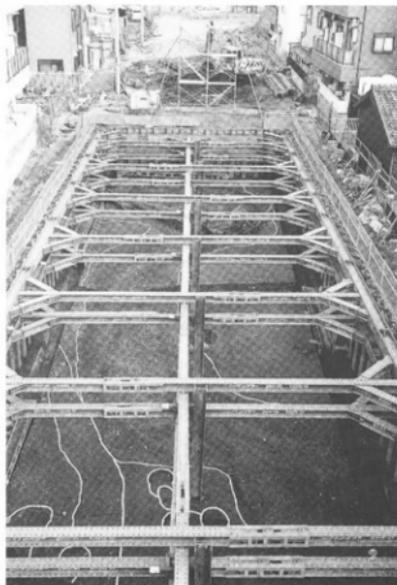
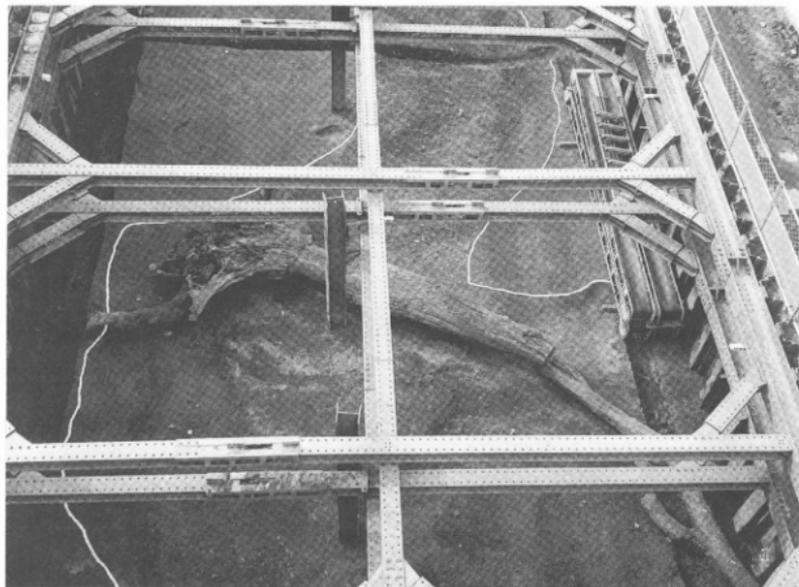
1. 第5面全景（真上から） 2. 第5面土坑14遺物出土状況（西から） 3. 第5面土坑14断面（西から）  
4. 第5面土坑20断面（西から） 5. 第5面溝110断面（北から）



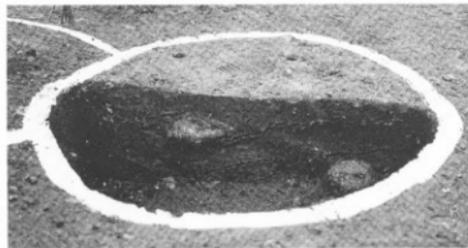
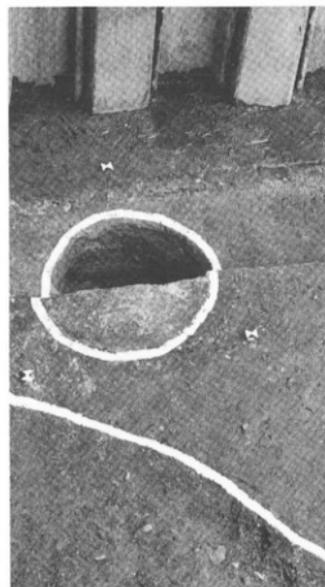
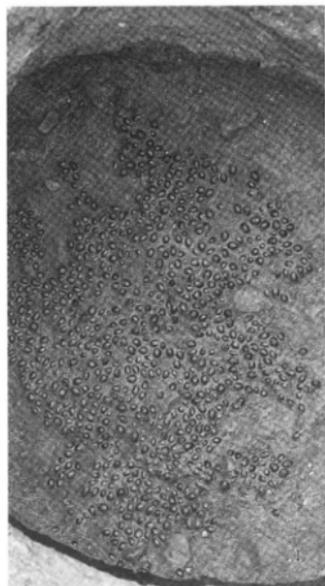
1. 第5面竪穴住居跡1完掘状況（西から）
2. 第8面自然流路完掘状況（南から）
3. 第8面自然流路断面（南から）
4. 第9面土器集中部上層（北から）
5. 第9面土器集中部下層（南から）



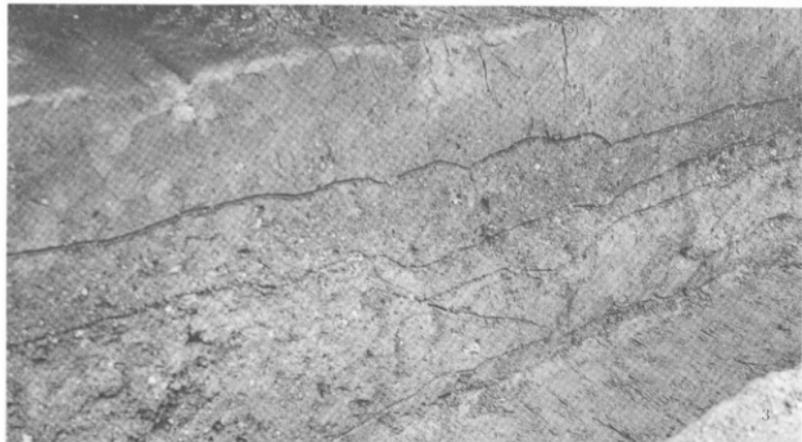
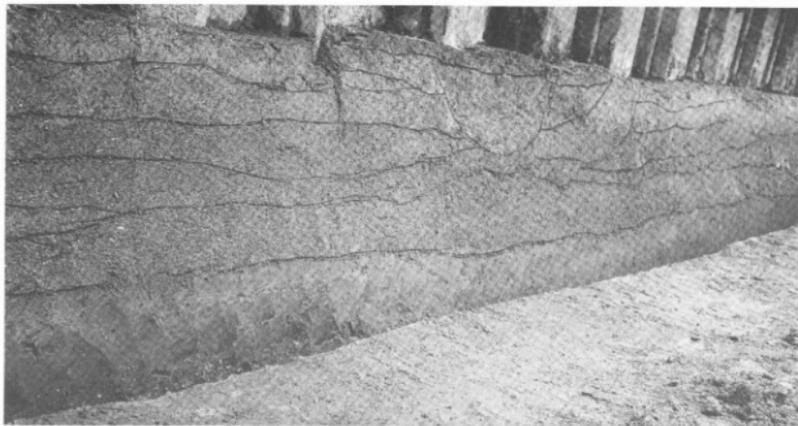
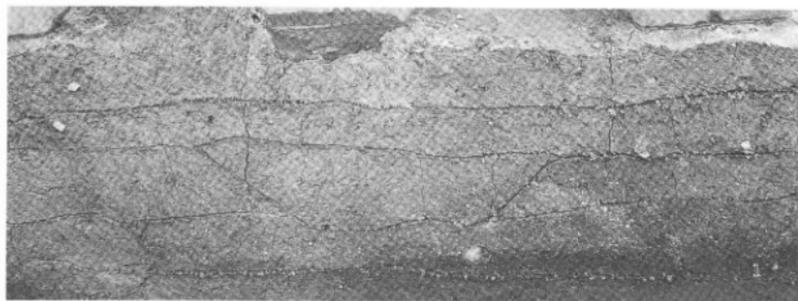
1. 第10面河川1完態状況（南から） 2. 第10面河川1南壁（北から） 3. 第10面河川1北壁（南から）



1. 第11面倒木検出状況（東から・第12面での状況） 2. 第12面全景（西から）  
3. 第12面土坑群・貯蔵穴2検出状況（北から）



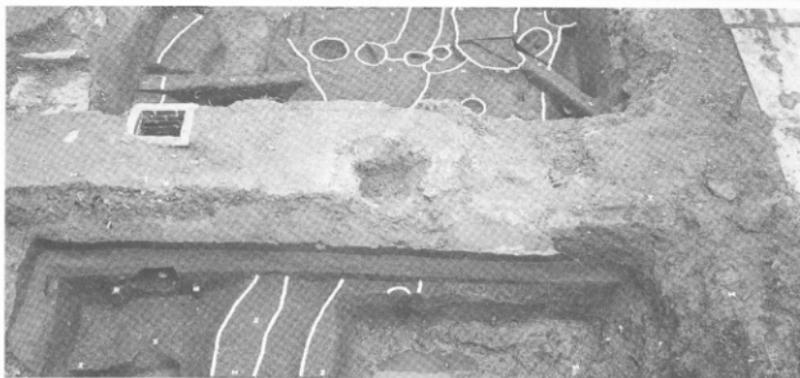
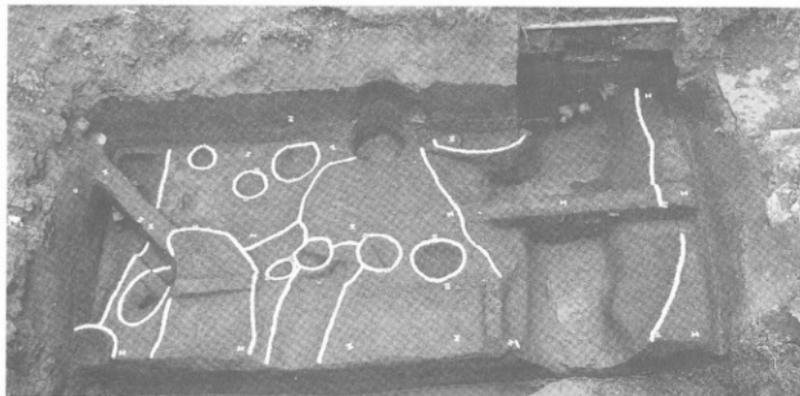
1. 第12面貯蔵穴1底面ドンダリ出土状況（北から） 2. 第12面貯蔵穴1完掘状況（北から）  
3. 第12面貯蔵穴1・河川5検出状況（南から） 4. 第12面貯蔵穴1断面（北から）  
5. 第12面貯蔵穴2断面（西から）



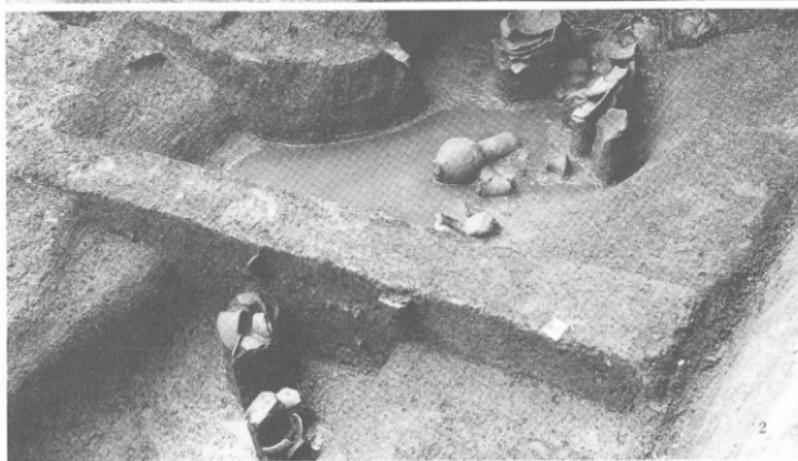
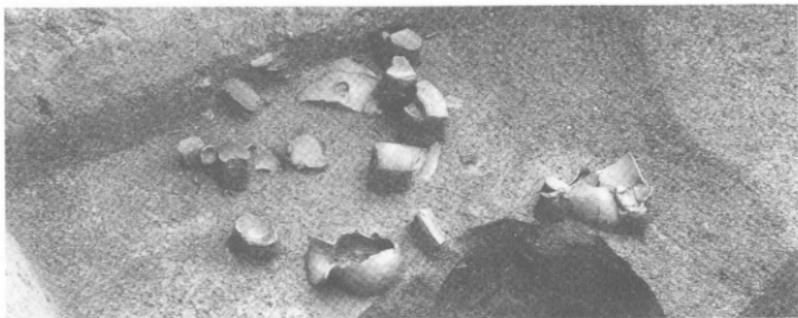
1. 西壁断面 1~5層 2. 西壁断面 6~11層 3. 西壁断面 11~13層



1. 南壁断面 11~13層 2. 南壁断面 河川2部分 3. 南壁断面 河川4部分



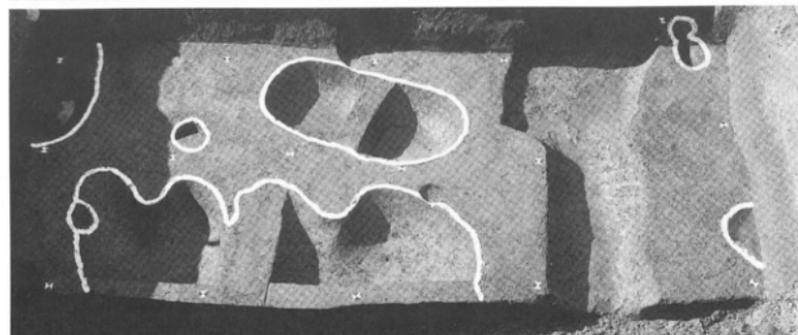
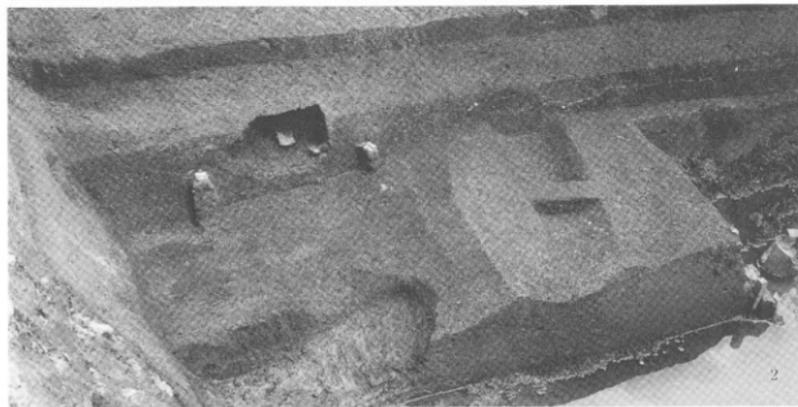
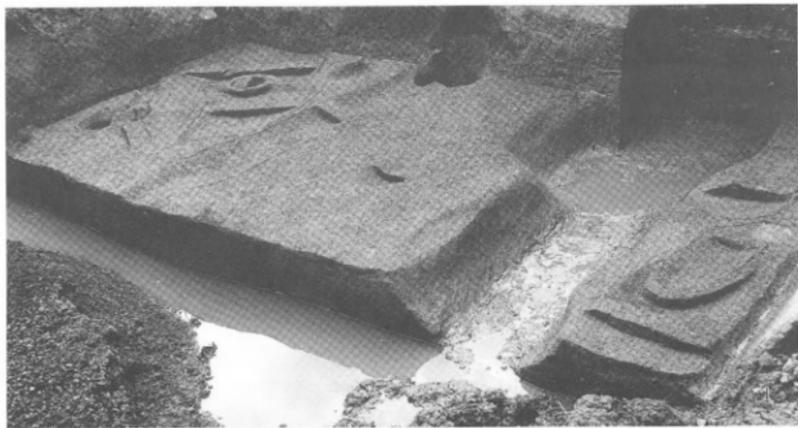
1. B区北側第1面東半全景（東から） 2. B区北側第1面西半全景（西から）  
3. B区第1面溝100上層遺物出土状況（北から）



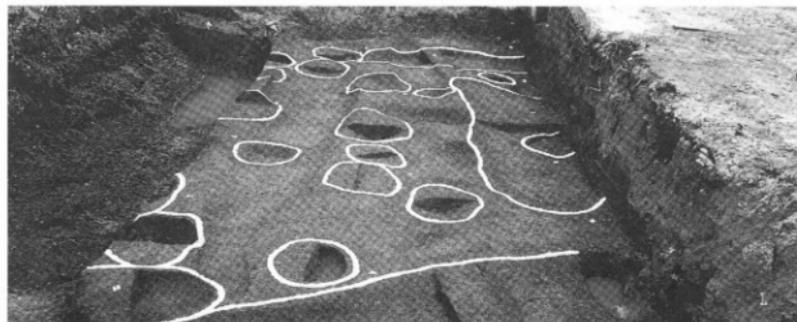
1. B区第1面溝100上層遺物出土状況（北から） 2. B区第1面溝100中層遺物出土状況（東から）  
3. B区第1面溝100中層遺物出土状況（北から）



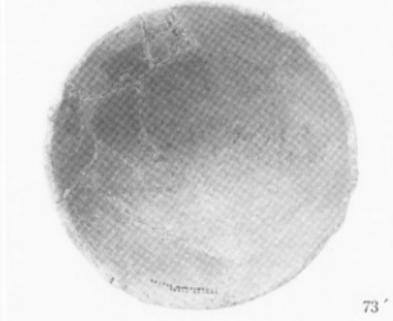
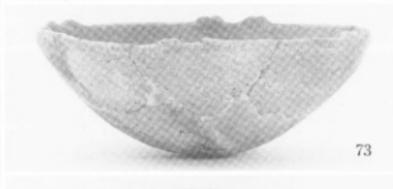
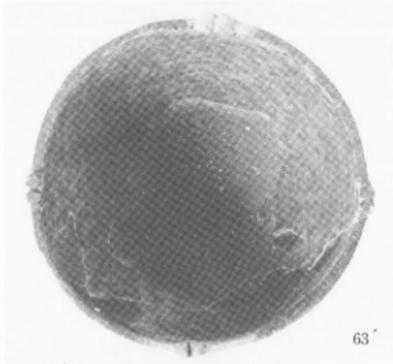
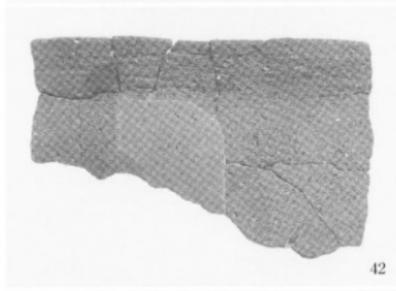
1. B区第1面溝100断面(東から) 2. B区第1面溝3遺物出土状況(東から) 3. B区第1面溝3断面(東から)



1. B区北側第2面東半全景（東から） 2. B区北側第2面西半全景（西から）  
3. B区北側第3面東半全景（東から）



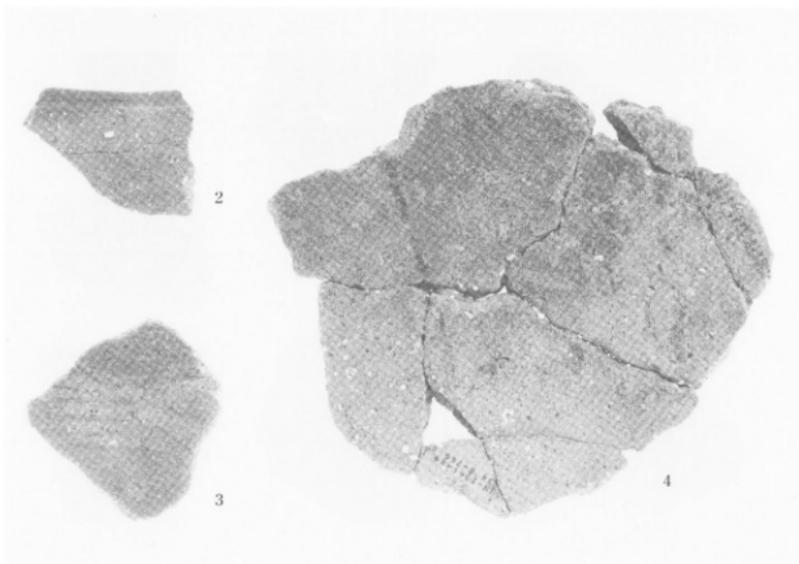
1. B区南側第1面全景（北から） 2. B区南側第2面全景（北から） 3. B区南側第3面全景（北から）



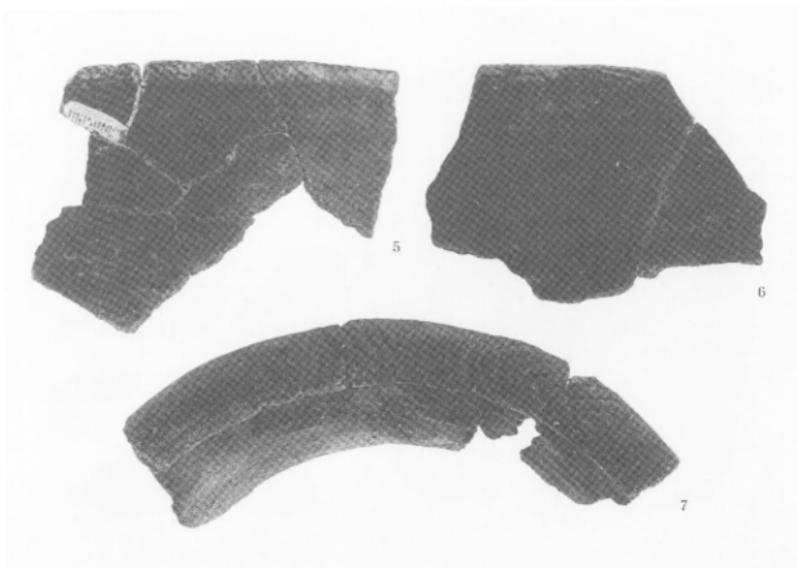
第12面河川4出土縄文土器 深鉢、第9面土器集中部出土縄文土器 深鉢・浅鉢



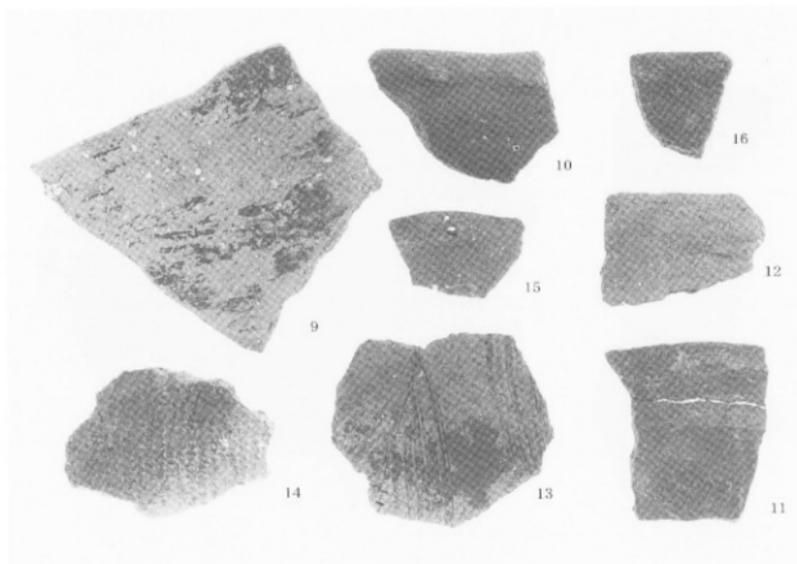
1. 第12面土坑30出土縄文土器 深鉢



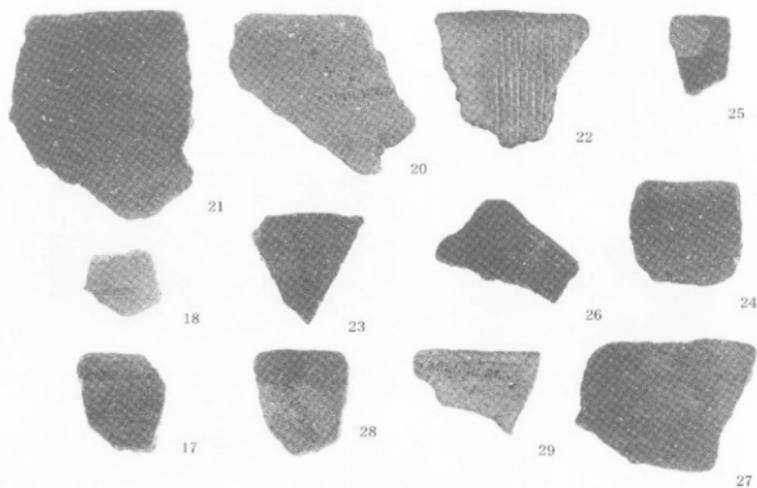
2. 第12面貯藏穴1出土縄文土器 浅鉢・深鉢、土坑34出土縄文土器 深鉢



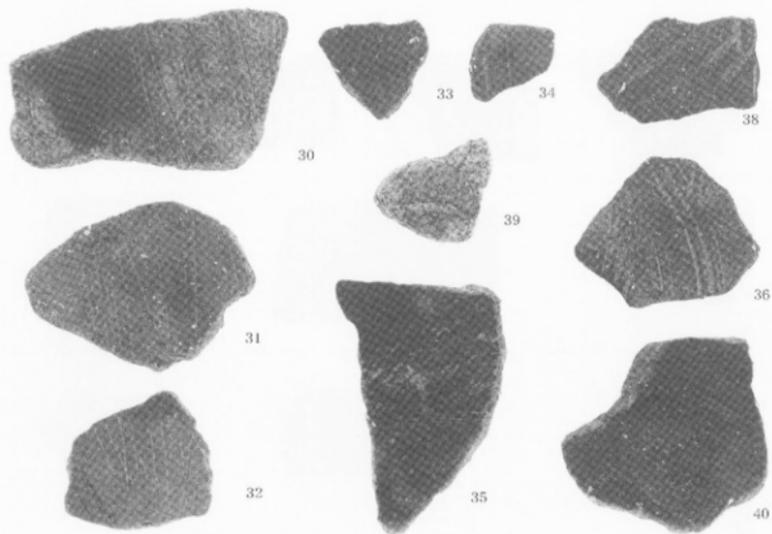
1. 第12面河川4出土縄文土器 深鉢



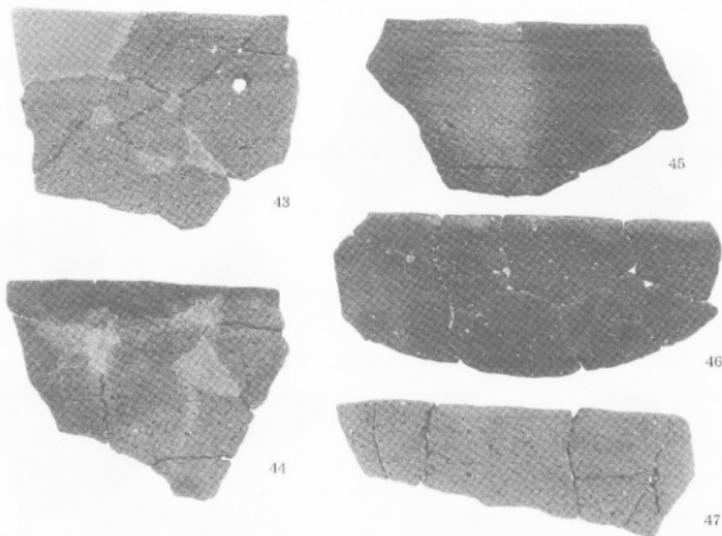
2. 第12面河川4出土縄文土器 深鉢・浅鉢



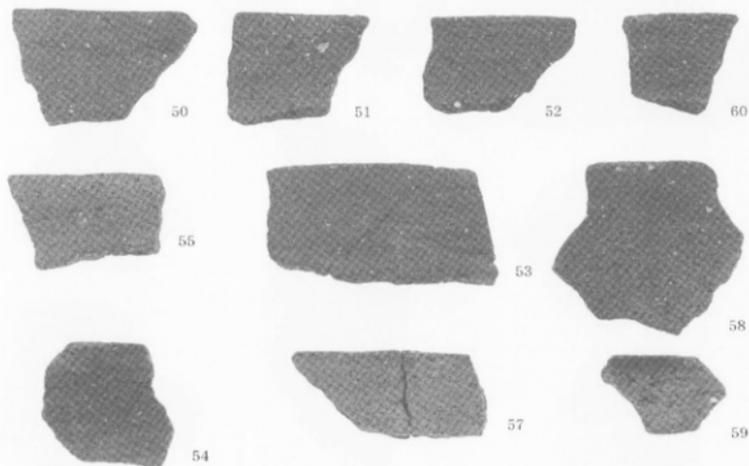
1. 第11面河川3出土縄文土器 深鉢、第10面河川1出土縄文土器 深鉢



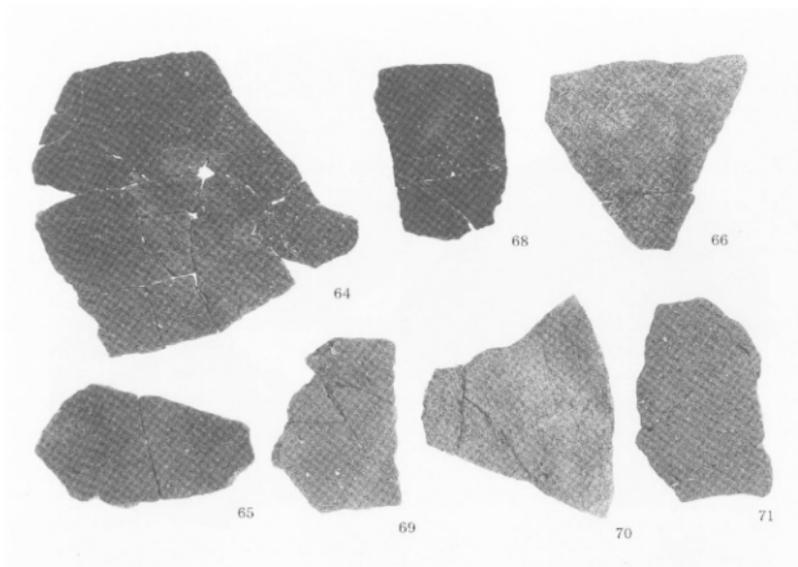
2. 第10面河川1出土縄文土器 深鉢



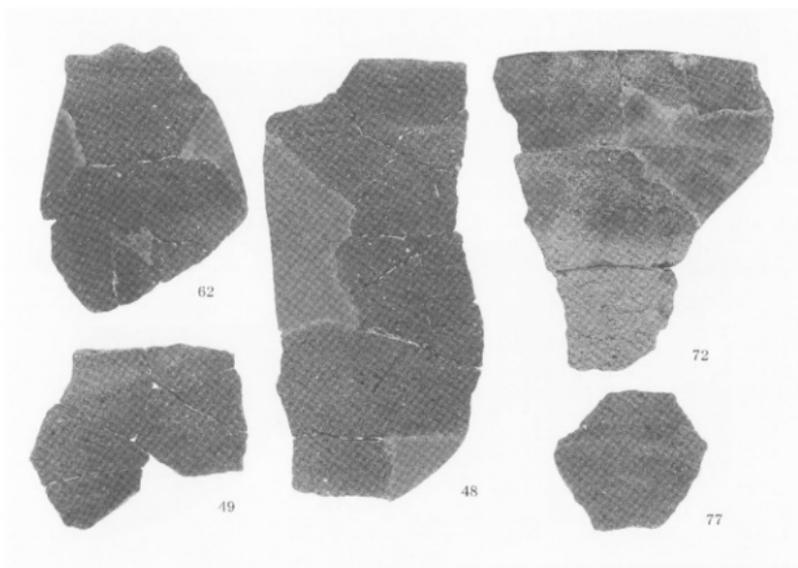
1. 第9面土器集中部出土縄文土器 深鉢



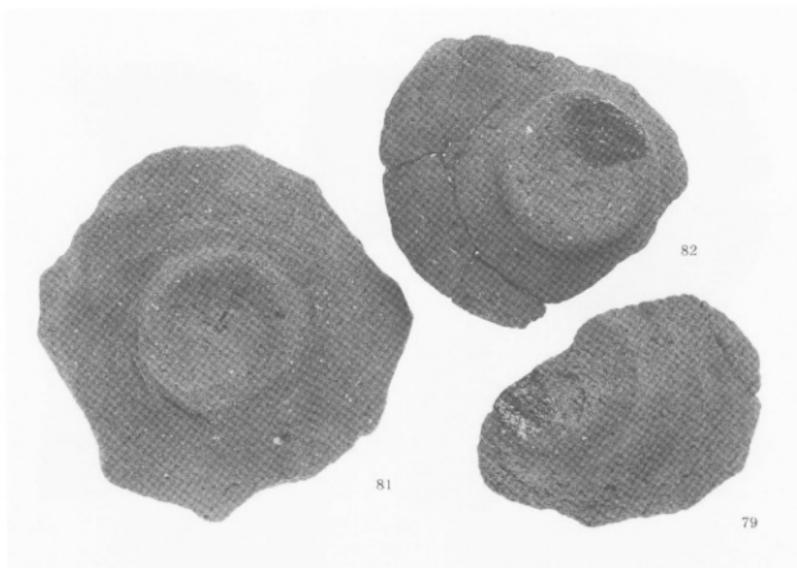
2. 第9面土器集中部出土縄文土器 深鉢



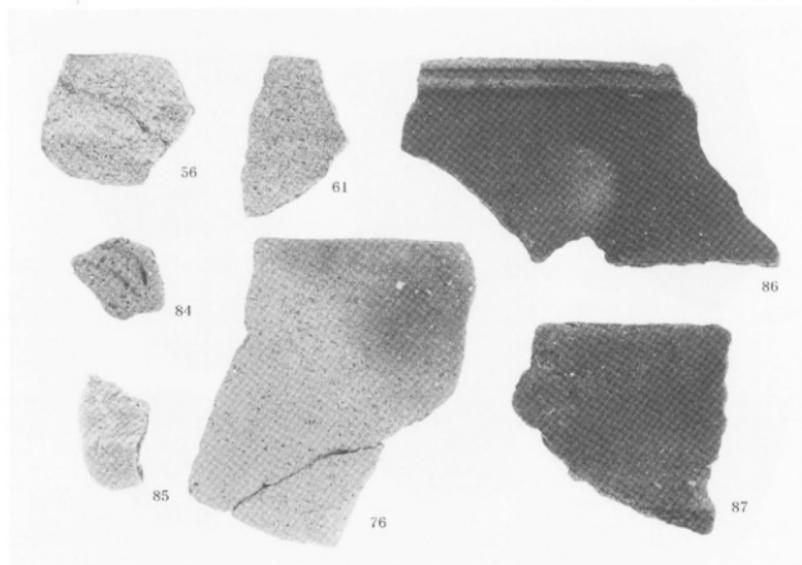
1. 第9面土器集中部出土縄文土器 深鉢



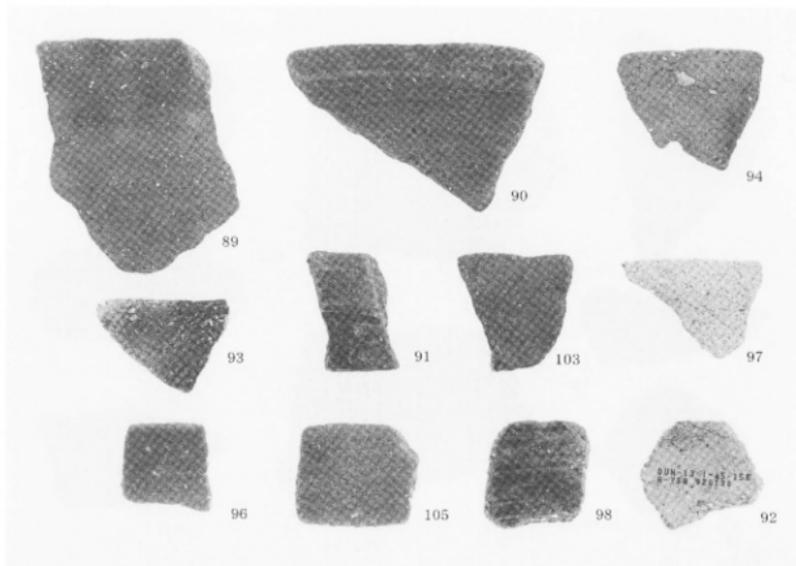
2. 第9面土器集中部出土縄文土器 深鉢・浅鉢



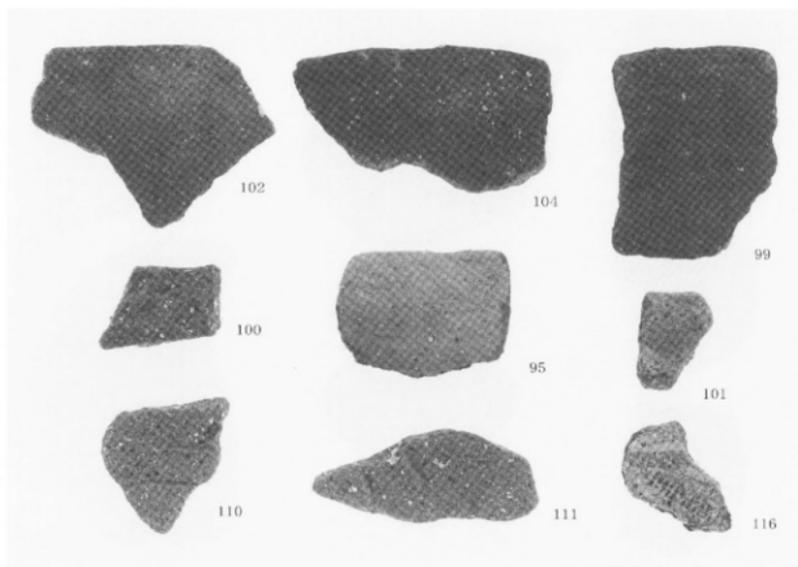
1. 第9面土器集中部出土縄文土器 底部



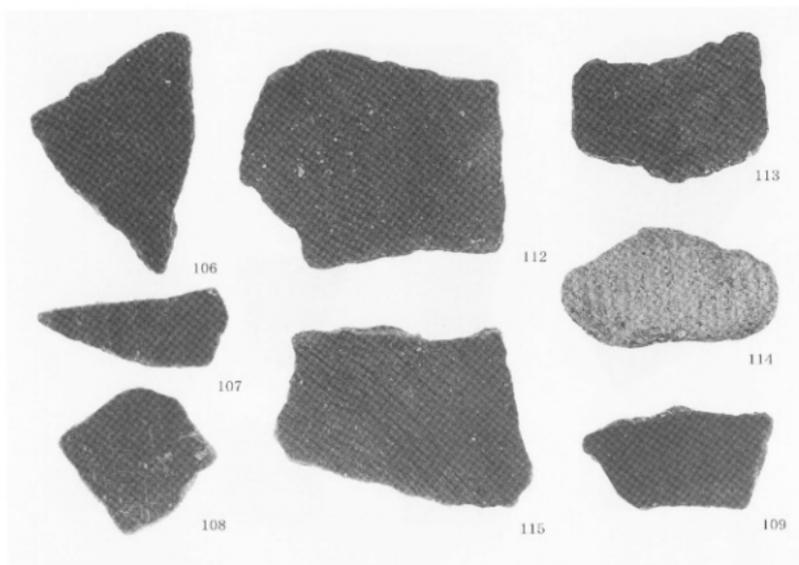
2. 第9面土器集中部出土縄文土器 深鉢・浅鉢、第8面自然流路出土縄文土器 深鉢



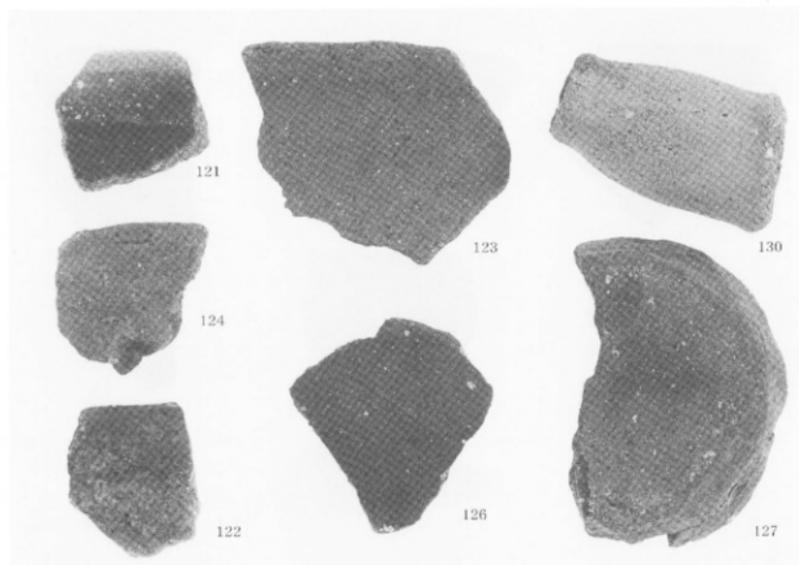
1. 第15層出土土器 深鉢・浅鉢



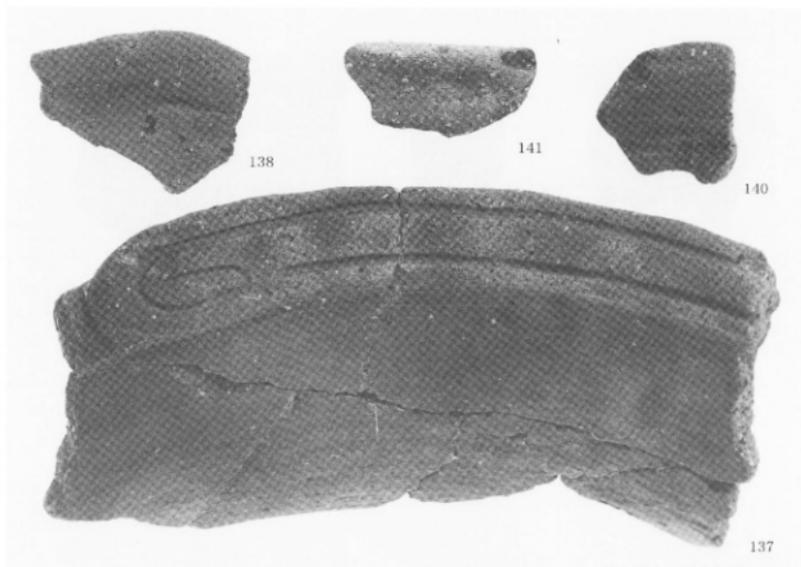
2. 第15層出土土器 深鉢・浅鉢



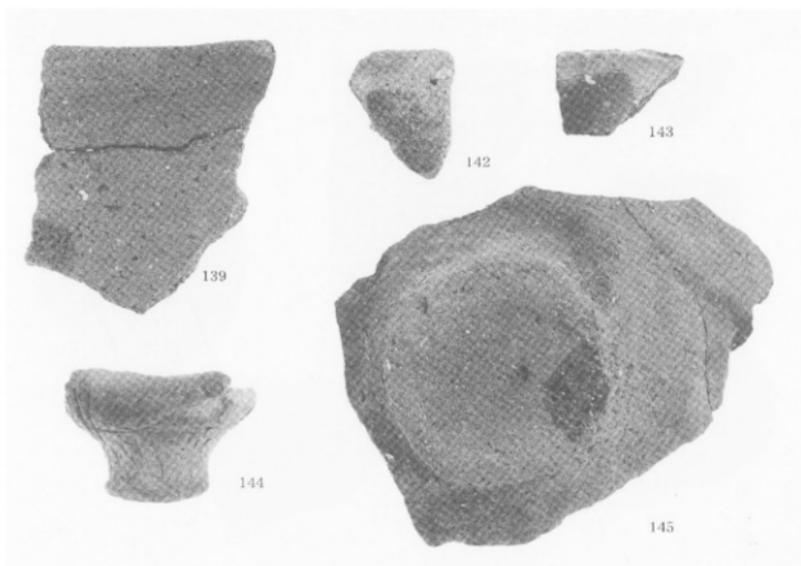
1. 第15層出土縄文土器 深鉢



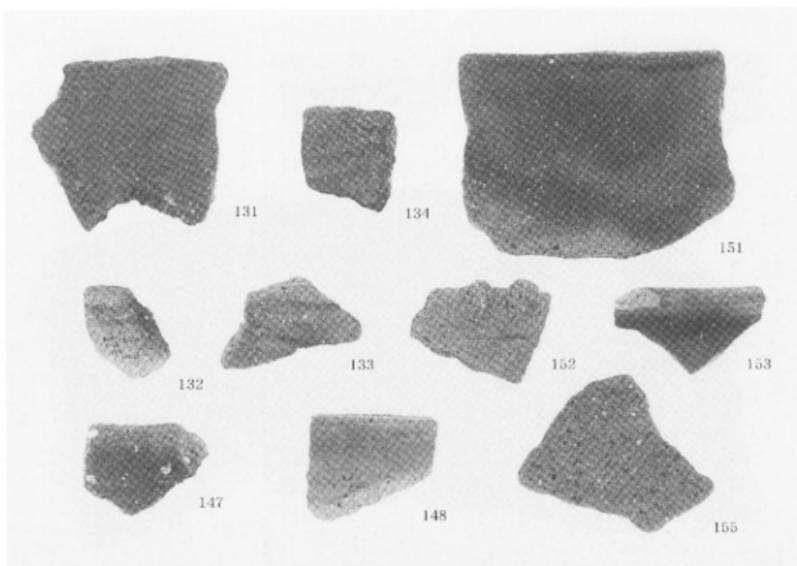
2. 第14層出土縄文土器 浅鉢・底部・注口土器



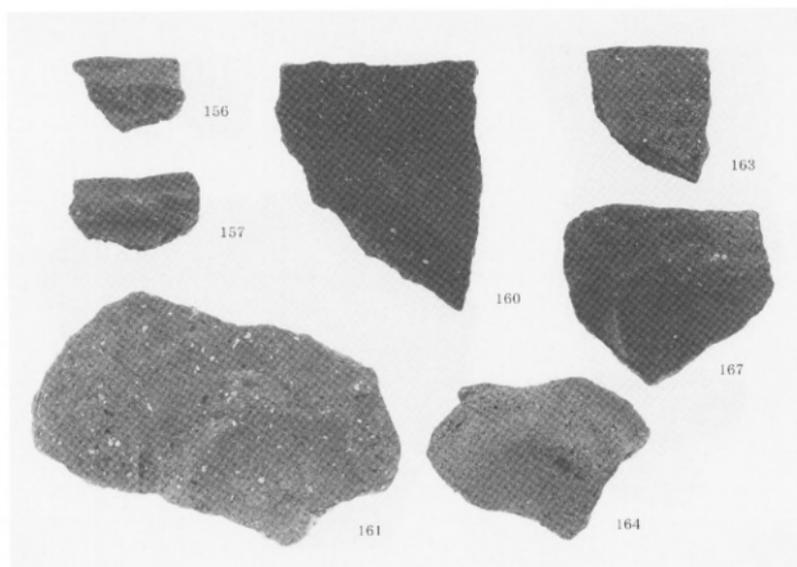
1. 第12層出土縄文土器 深鉢



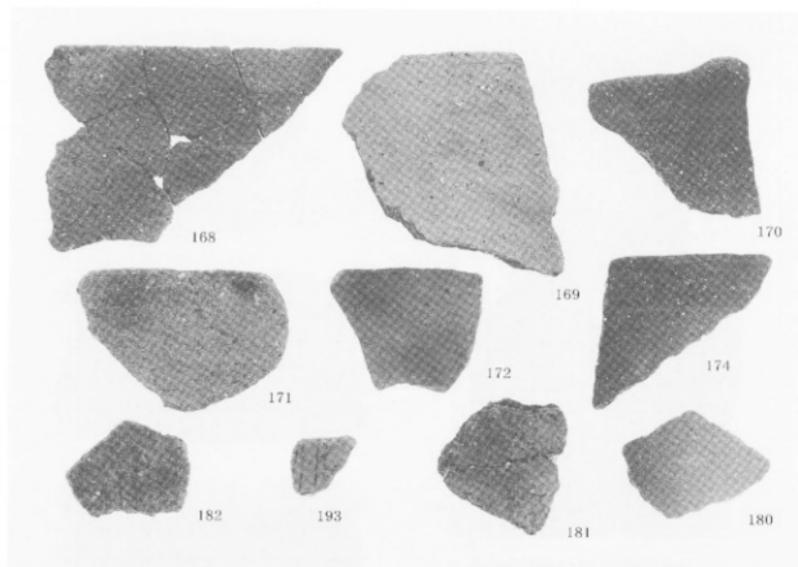
2. 第12層出土縄文土器 深鉢・ミニチュア土器・底部



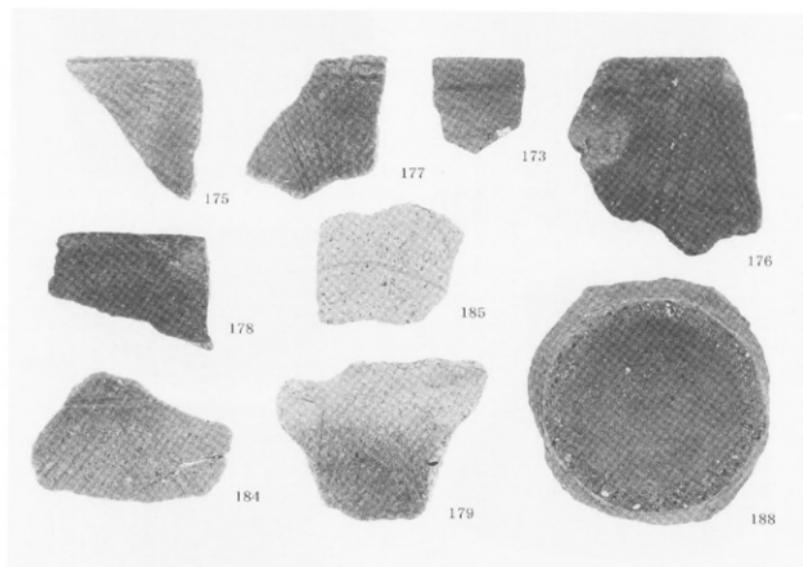
1. 第13層出土縄文土器 深鉢、第11層出土縄文土器 深鉢、第10層出土縄文土器 深鉢・浅鉢



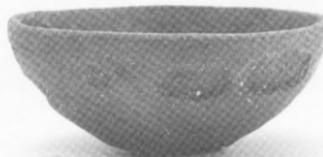
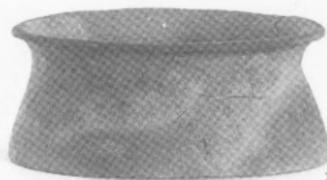
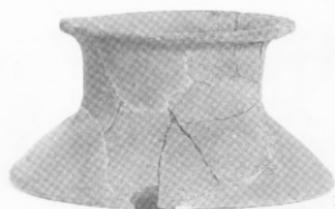
2. 第9層出土縄文土器 深鉢・底部、第8層出土縄文土器 深鉢・底部、第5面出土縄文土器 深鉢



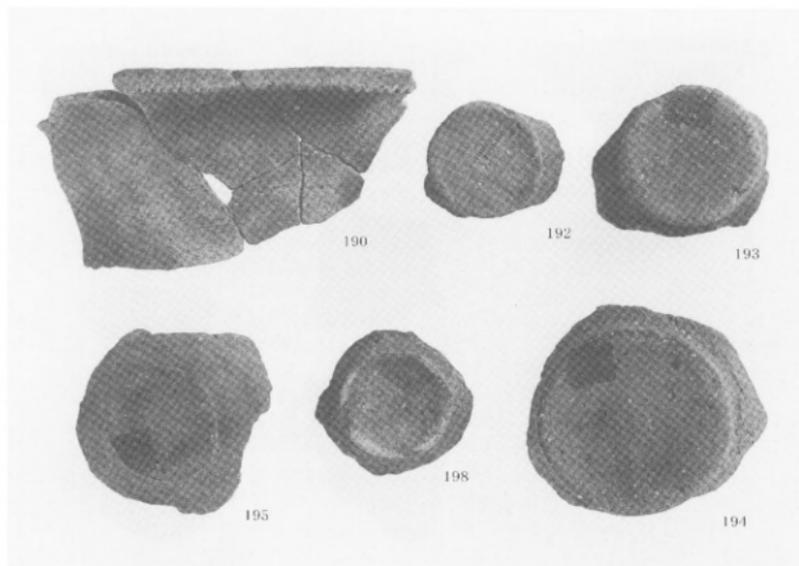
1. 側溝出土縄文土器 深鉢



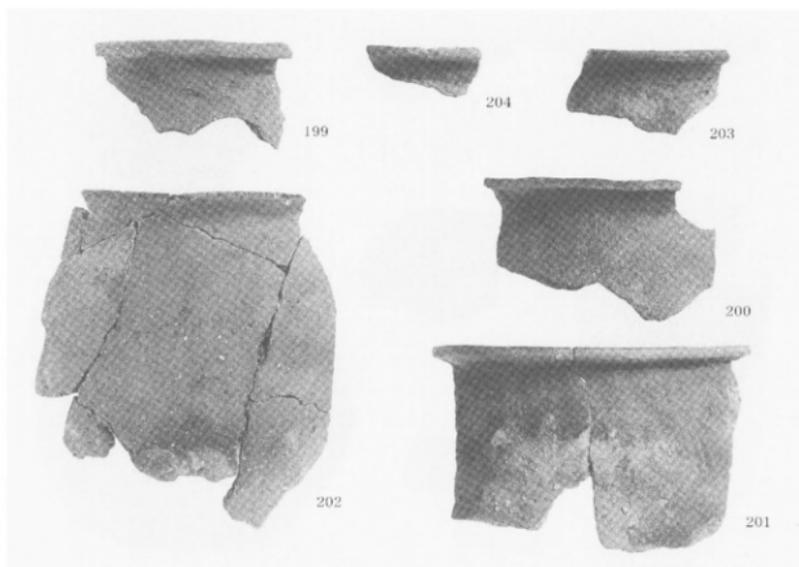
2. 側溝出土縄文土器 深鉢・底部



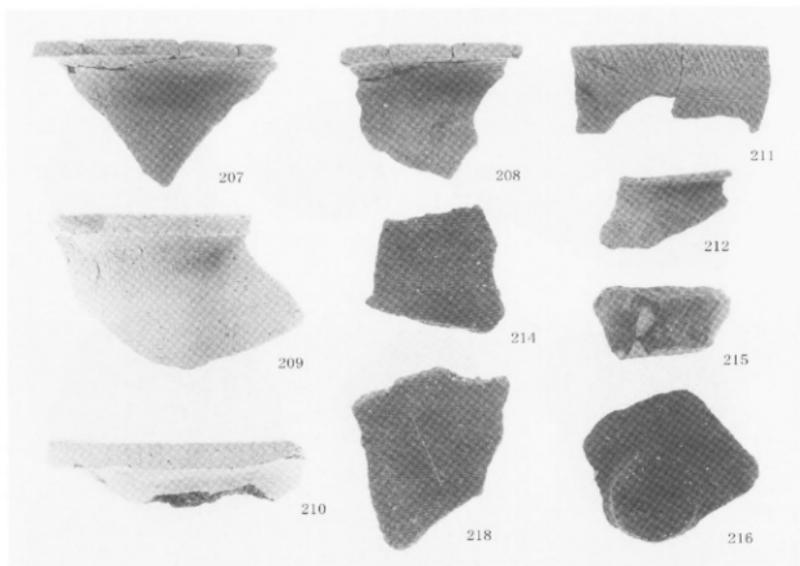
第5面土坑14出土弥生土器 甕、豎穴住居跡1出土弥生土器 高坏、溝110出土弥生土器 高坏



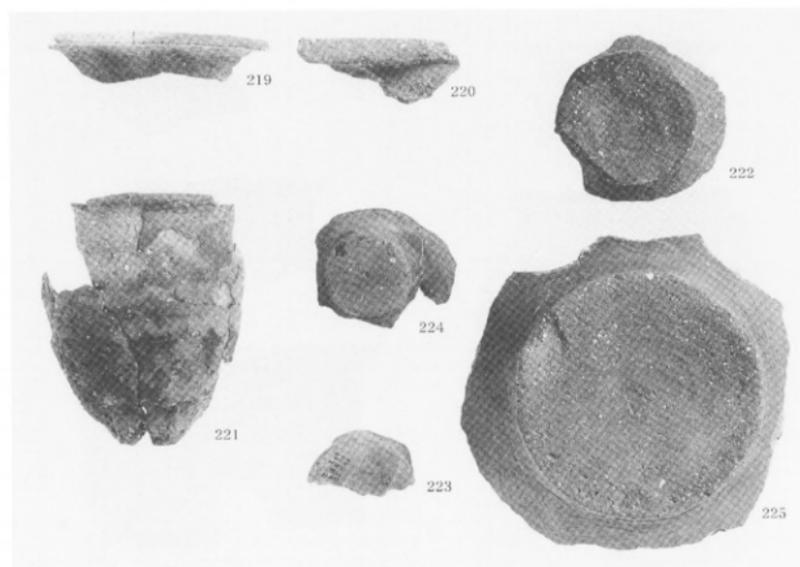
1. 第5面土坑14出土弥生土器 壺・甕底部・甕蓋



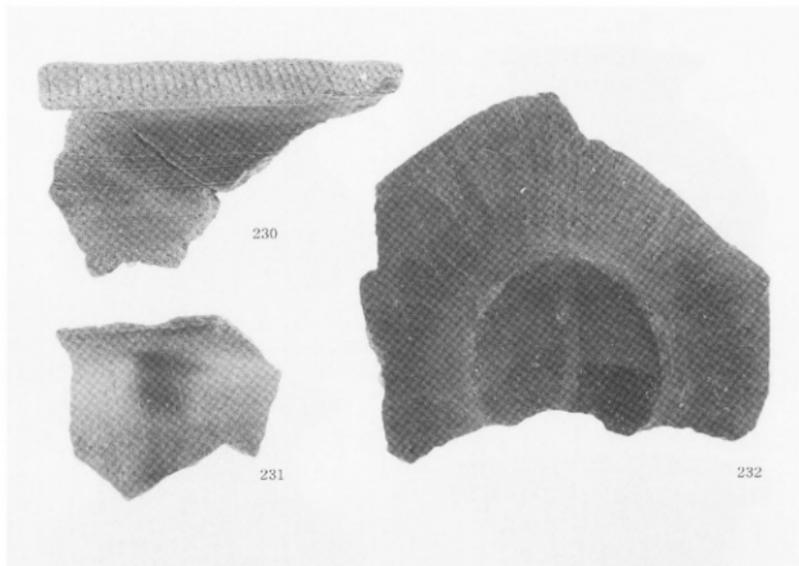
2. 第5面土坑14出土弥生土器 甕・甕



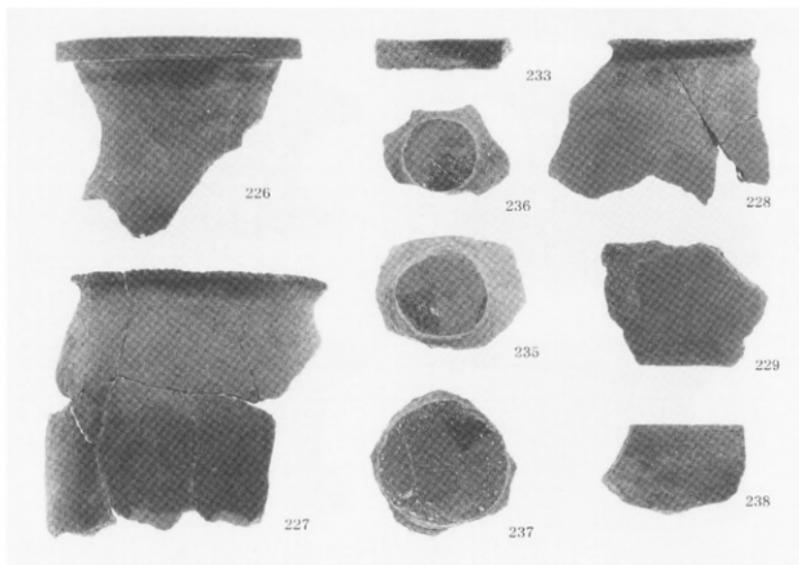
1. 第5面竖穴住居跡1出土弥生土器 壺・鉢・甕底部・甕底部



2. 第5面土坑20出土弥生土器 壺・甕・甕底部



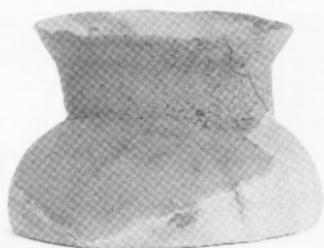
1. 第5面土坑4出土弥生土器 壺・甕



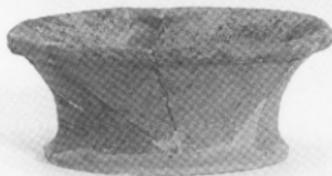
2. 第5面土坑3出土弥生土器 壺、土坑17出土弥生土器 甕、ビット132出土弥生土器 鉢、溝107出土弥生土器 甕、溝110出土弥生土器 甕底部



239



259



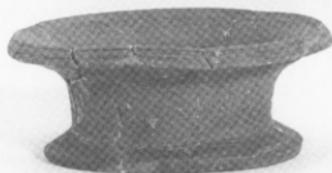
243



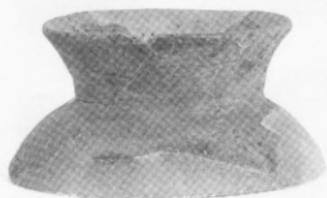
260



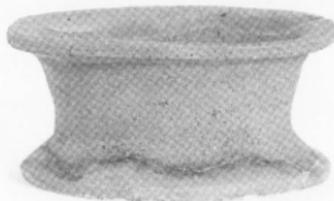
245



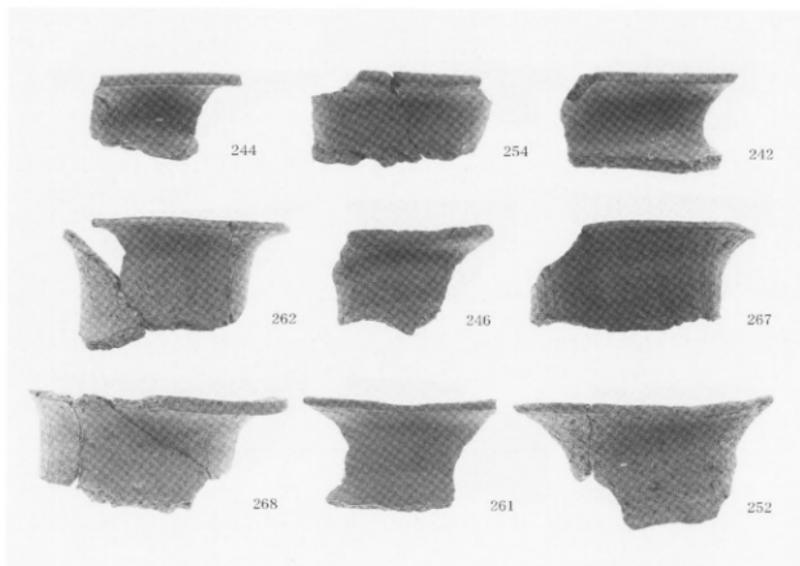
263



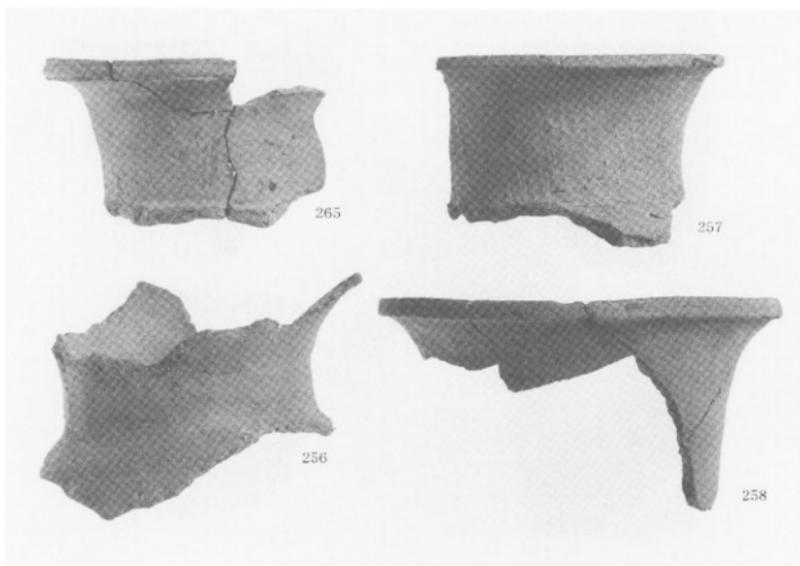
250



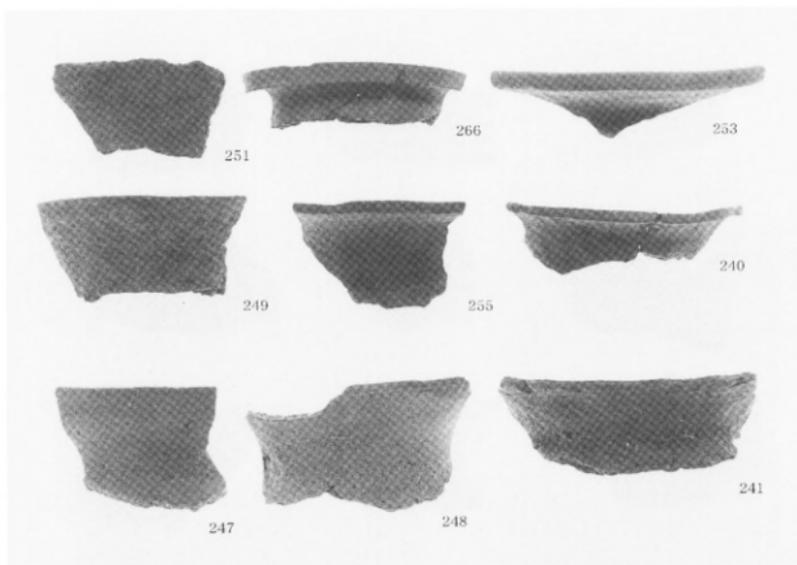
264



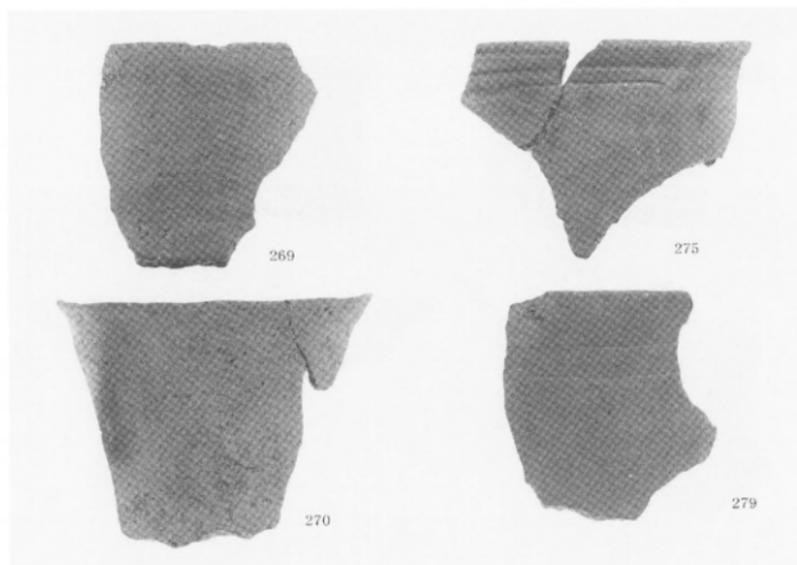
1. 第4面溝100出土弥生土器 広口壺



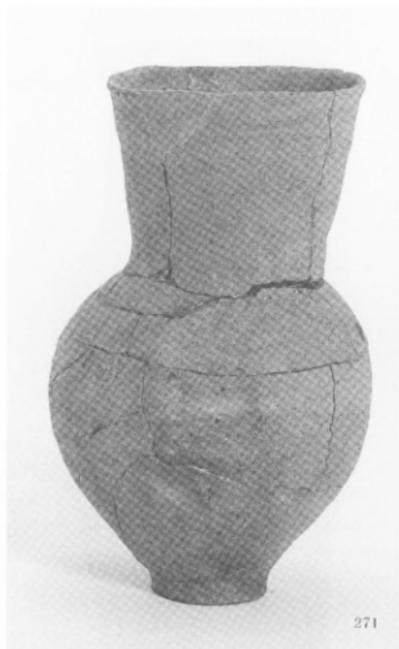
2. 第4面溝100出土弥生土器 広口壺



1. 第4面溝100出土弥生土器 広口壺

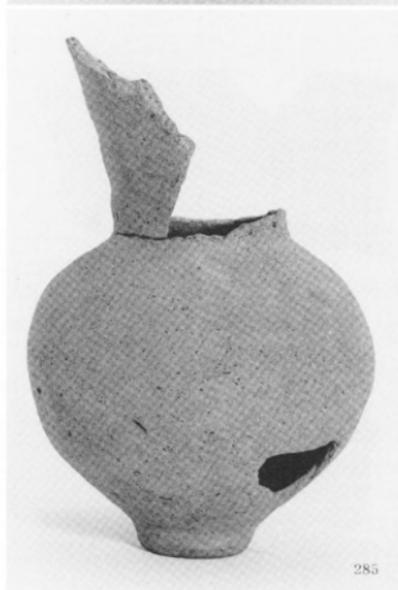
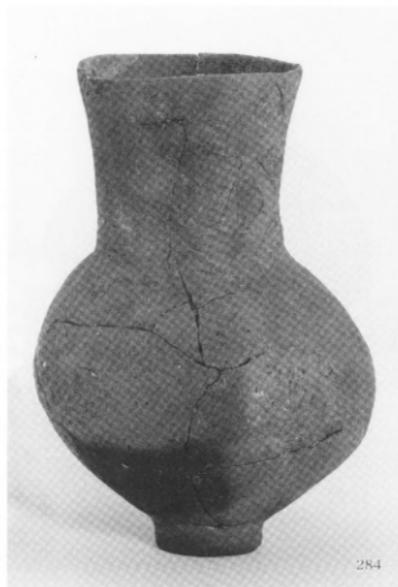


2. 第4面溝100出土弥生土器 長頸壺





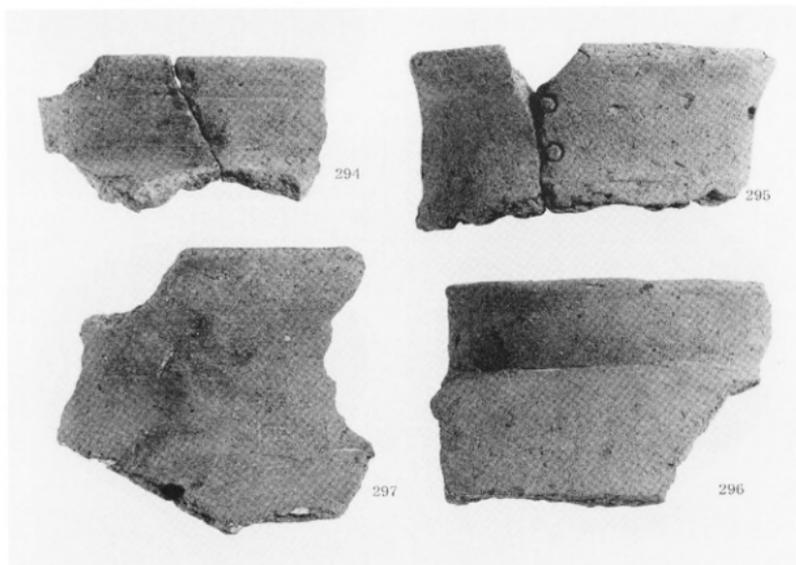
第4面溝100出土弥生土器 长颈壺



第4面溝100出土弥生土器 長頸壺 壺体部



1. 第4面溝100出土弥生土器 広口壺・台付短頸壺



2. 第4面溝100出土弥生土器 短頸壺